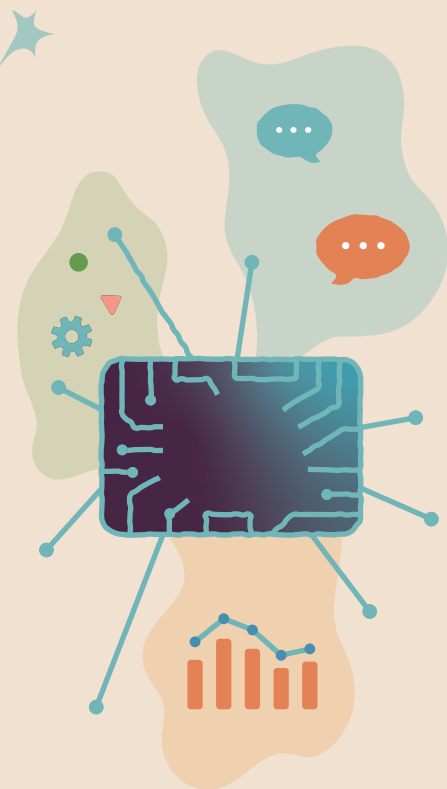


2040年の 京都の大学

「我々はどう教え、学び、働いていくのか」



目次

シンポジウム

AI 時代／少子化社会における大学（教育）のあり方を問う	1
総括文	3
発表資料	13

第1分科会

大学における教育評価の在り方再考～新学習指導要領導入後の教育評価～	35
総括文	37
発表資料	39

第2分科会

新たな学びを育むために～教職協働によるカリキュラムの構築と再編～	67
総括文	69
発表資料	70

第3分科会

大学危機の時代を生き抜く組織づくり～組織効力感の醸成～	83
総括文	85
発表資料	88

第4分科会

大学の授業における「所属感・居場所」づくり	93
総括文	95
発表資料	97

第5分科会

つなぐ広報、ひらく大学～教職協働で育む大学の魅力と未来～	105
総括文	107
発表資料	109

第6分科会

EdTech で推進する個別化教育	121
総括文	123
発表資料	126

第7分科会

京都地区における大学の防災対策	153
総括文	155
発表資料	157

第8分科会

産学連携の新たな可能性	173
総括文	175
発表資料	177

第9分科会

大学におけるアセスメントテスト（ジェネリックスキル測定テスト）の活用事例	189
総括文	191
発表資料	193

第10分科会

大学職員の高度化と流動性（職員の人材育成）	209
総括文	211
発表資料	213

第11分科会

高大連携をどう設計し、学生募集・入試・入学前／初年次教育等につなぐか ～連携・接続・移行の今とこれから～	231
総括文	233
発表資料	235

第12分科会

多様性配慮と障害学生支援	247
総括文	249
発表資料	251

ポスターセッション	267
-----------------	-----

第31回FD・SDフォーラム企画検討委員会	310
-----------------------------	-----

シンポジウム

AI時代／少子化社会における 大学(教育)のあり方を問う

報告者

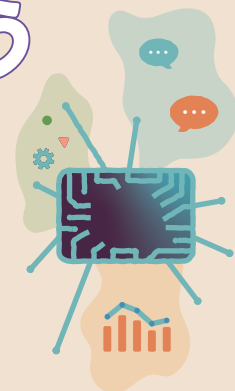
石井 力重 氏 アイデアプラント 代表／早稲田大学 非常勤講師

安松 健 氏 株式会社エボルブ Chief Assemblage Officer
／大阪教育大学 理数情報教育系 特任准教授

吉岡 太郎 氏 株式会社 HRD 研究所 主席研究員

コーディネーター

佐藤 賢一 氏 京都産業大学 生命科学部 教授／
教育支援研究開発センター長／
ハテナソン共創ラボ 代表理事



〈シンポジウム〉

FD・SD フォーラム シンポジウム総括： AI時代／少子化社会における大学（教育）のあり方を問う

コーディネーター

京都産業大学 生命科学部 教授／教育支援研究開発センター センター長／ハテナソノ共創ラボ 代表理事

佐藤 賢一

全体サマリー

1 プログラムのねらい

本シンポジウムは、「AI時代／少子化社会における大学（教育）のあり方を問う」というテーマのもと、生成 AI の急速な社会浸透と少子化による学習者人口の変化という二つの大きな構造変化の中で、大学教育の役割と設計をどのように再考すべきかを議論することを目的として企画された。

現在の大学教育は、知識の獲得や再生産を中心とした従来型の学習モデルから、問いの設定、価値判断、文脈理解、協働による知の創出へと重心が移りつつある。生成 AI の普及は、文章作成、要約、翻訳、プログラミングなど多くの知的生産活動を補助・代替する可能性を持つ一方で、人間に求められる能力の質的転換を促している。また、少子化は大学経営や高等教育システムの持続可能性に直接的な影響を与え、大学の存在意義そのものを問い直す契機となっている。

本シンポジウムでは、このような「二重の転換期」を前提に、

- AI と人間の役割分担の再定義
- 大学教育における創造性・思考力の位置づけ
- 社会との接続を踏まえた大学の存在理由

という観点から、三名の登壇者による講演とパネルディスカッションを通じて、大学教育の再設計の方向性を探ることを目的とした。

また、聴衆との双方向性を重視し、Slido を用いたリアルタイムの質問・意見投稿および投票を取り入れることで、会場参加者の問題意識や現場の課題を可視化しながら議論を進めることを試みた。

2 報告の概要

シンポジウム前半では、三名の登壇者がそれぞれの専門領域から、AI 時代における大学教育のあり方について講演を行った。

石井力重氏による第一の報告では、生成 AI の登場によって創造的活動のプロセスが大きく変化していることが指摘された。AI を単なる効率化ツールとしてではなく、思考の壁打ち相手や発想の拡張装置として活用することで、人間の創造性はむしろ拡張される可能性がある」と論じられた。そのうえで、大学教育においては「正解を再生産する課題」から「試行錯誤を伴う創造的課題」へと学習活動を転換する必要があることが提起された。

安松健氏による第二の報告では、生成 AI をめぐる技術的背景と社会的影響について解説がなされた。従来の AI と生成 AI の活用には大きな違いがあり、生成 AI 利用は AI エンジニアだけでなく、言語・編集・企画などの実践知を持つ人々の能力が非常に重要になっていることが示された。また、大学教育においては、AI は良いか悪いかという二項対立ではなく、AI の技術特性を踏まえながら状況に適した教育設計を行うことが重要であると指摘され、現在実践されている具体的な大学における授業プログラム例・活用例が紹介された。（参考情報：「NotebookLM があれば大学の講義なんて要らないんじゃない？」 https://note.com/dk_synthesis/n/ne668ab137094）

吉岡太郎氏による第三の報告では、学びの社会的意味と教育実践の観点から、大学教育における対話と関係性の重要性が論じられた。学生同士の対話や教員との相互作用を通じて知識が生成される「建設的相互作用」の視点から、AI 時代においても人と人との関係性が学びの基盤であることが強調された。また、大学は知識を伝達する場というよりも、学生が自らの興味や問いを起点に学びを深める環境として再設計される必要があることが提起された。

三つの講演を通じて共通して指摘されたのは、AI の進展によって大学教育の中心が「知識の伝達」から「問いの生成と価値創出」に移行しつつあるという点である。また、教育実践の観点からは、課題設計、評価

方法、学習支援のあり方を総合的に見直す必要性が示された。

3 報告に対する質疑ならびに全体討議の内容

後半のパネルディスカッションおよび質疑では、会場参加者から多数の質問や意見が寄せられ、大学教育の現場が直面している具体的課題が共有された。

まず、生成 AI の教育利用に関しては、「学生が AI に依存して思考停止に陥るのではないか」「AI の利用履歴をどのように確認するのか」といった評価に関する懸念が多く寄せられた。これに対して登壇者からは、AI の使用そのものを問題視するのではなく、AI との対話を通じた思考プロセスを可視化する課題設計や、AI を利用してもなお人間の判断が必要となる問いを設定することが重要であるとの見解が示された。

また、教員側の対応についても議論がなされた。AI 活用に関する知識や実践が教員間で大きく異なり、研究室や学部によって利用環境に格差が生じているという指摘があり、大学全体としての方針や支援体制の整備が必要であるという意見が多く共有された。

さらに、Slido による参加者投票では、AI 対応に関する現場の課題として

- 教員間での対応のばらつき
- 成果物の評価方法の不明確さ
- AI 利用範囲の線引きの難しさ

が多く挙げられ、AI 時代の教育設計において「評価」「支援」「ガイドライン」の整備が重要な論点であることが示された。

議論の後半では、大学の存在理由そのものについても多くの意見が寄せられた。参加者からは、

- 「安心して失敗できる場所」
- 「自分の問いを見つける場所」
- 「多様な人と対話し価値観を広げる場」

といった回答が多く見られ、AI 時代においても大学が果たすべき役割は、人間同士の関係性の中で学びを深める環境を提供することにあるという認識が共有された。

総じて、本シンポジウムの議論からは、AI の導入をめぐる技術的議論だけでなく、大学教育の目的や価値そのものを再考する必要性が浮き彫りになった。大学は知識を教える場であるだけでなく、問いを立て、試行錯誤し、他者と協働しながら学ぶ経験を提供する場として、その役割を再定義していくことが求められているといえる。

パネリストによる講演のサマリー

1 石井 力重 氏

1. AI 時代における創造性の再定義

創造性の定義「新しさ + 有用性」は変わらないが、AI が創造に参加することで情報量、概念加工（組み合わせ・削除・逆転など概念を多様に加工する思考作業）の歯車が大きくなる。人間の得意な「問いを立てる力」「着地（人が心地いいと思うところに落とす）」という能力の必要性が高まった。

2. 探索空間の劇的な拡大

かつては記憶と経験の範囲でしか組み合わせを試せなかった人間に対し、AI は瞬時に幾万通りもの組み合わせを提示できる。人の頭では普通繋がらない異質な要素（例：スポーツカーとクラゲ）も AI が組み合わせでヒントを提示し、人間はそれをさらに発想豊かに展開できる。

3. 大学の授業改革：「調べてまとめる」から「問いを見つけて磨く」へ

従来の「○○について調べてレポートせよ」は AI が一瞬で終わらせる時代に意味が薄い。これからは「あ

あなたが解きたい問いを設定して、その問いの質を吟味せよ」「AI が出した解決策を人の気持ちになって磨く」という教育へシフトすべき。

4. AI 併走による学習機会の平等化

従来は創造性が苦手な学生は、発散段階でアイデアが出ないため、収束（セレクション）や企画段階の教育まで到達できなかった。AI の力を使うことで、苦手な学生も発散・収束・企画の全プロセスを学べるようになり、「着地を磨く」教育が可能になる。

5. プロンプトによる思考過程の可視化と評価軸の転換

AI との対話ログ（プロンプト）を提出させることで、思考過程を可視化し、他人のレポートのまる写しを防げる。評価軸を「完成物の評価」から「プロセスの評価」へシフトさせ、「何回失敗したか」「どう方向転換したか」「AI の言いなりにならず自分の判断で進めたか」「失敗から何を学んだか」を評価すべき。

2 安松 健 氏

1. ノンプログラミング時代の AI リテラシー教育

プログラミング言語や統計学の知識、予算がなくても AI 技術を活用して社会課題を解決する能力が求められる時代。専門教育ではなく、一般教養・一般リテラシーとして AI を扱うこと、そのための大学教育が求められる。

2. 教育現場の AI 活用の先進性

企業と比較しても教育界の生成 AI 活用は進んでいる。他業界よりも相対的に、デジタル化が遅れたため、従来の IT 化の弊害が少ないこと、ツールの制限が少ないこと、教員は生成 AI 活用に求められる自然言語を元々駆使している職種であること、企画から実践までのサイクルを速くできる環境であることが理由。

3. Google ネイティブ世代の思考停止問題

現在の若い世代は Google ネイティブ・LINE ネイティブ（生成 AI 時代においては既に旧世代）であり、生成 AI をスタティック（静的）な情報検索ツールとして使おうとする傾向が相対的に強い。特に ChatGPT などが出した回答をそのまま鵜呑みにして思考停止する問題が深刻。クリティカルシンキング（批判的思考力）の育成とデータリテラシーが最大の課題。

4. 従来の AI と生成 AI の哲学的相違

ディープラーニングはブラックボックスであり、本質的にはプラグマティズムに基づいた技術といえる。伝統的なデータサイエンスや従来の AI とは理論レベル・哲学レベルで抜本的に異なり、それを混同すると活用は行き詰る。従来の AI の専門家は生成 AI の非専門家と考えるぐらいでちょうどよい。

5. AI の間違いを見抜く力の重要性

授業の中で、AI が生成した動画の間違いを見抜かせる演習を実施。中学生レベルの知識で回答できる問題だが、大学生でも気づくことが難しい。論理的思考力、知識、批判的思考力に加えて、AI に対する姿勢やマインドセットを学ぶ必要性が浮き彫りになっている。

3 吉岡 太郎 氏

1. 企業側が大学に求めるもの：疑う力とメタ認知

企業アンケートの結果、大学教育で鍛えてほしいのは「問う力＝疑う力」と「メタ認知（自分がどう考えているかを自分で理解する力）」。AI の使い方や活用方法を教えることよりも、人間の根本的な思考力を鍛えることが求められている。

2. 代行型 AI 活用の危険性

学生時代に「AI にレポートをまとめさせて提出する」という代行型活用をしていると、企業に入っても「上司から指示されたことを AI にまとめさせて提出する」だけの人材になってしまう。そのような人材は企業にとって不要。AI と人間が協働するケンタウルスモデルが重要。

3. 根源的能動性の重要性

教育工学者・佐伯胖の概念である「根源的能動性」が重要。「空を自由に飛びたい」のような根源的な興味・関心から、様々な問いが生まれる。根源的能動性があるからこそ、問いの焦点が定まり、その後の学びが生きてくる。

4. 自発的実践型人材の価値

企業が今求めているのは、「御社の事業に共感しました」という正解抽出型の優等生ではなく、「私は人体のツボに興味があり、たくさんの鍼灸院をまわって鍼灸師の資格も取りました」のような自発的実践型の人材。根源的能動性から実践へと繋がる学生が企業の発展を支える。

5. 大学という場の役割：多様な興味を許し合う場

大学は、様々な興味を持つ教員が「俺これ面白いと思ってるんだけど」と学生に語りかけ、学生も「興味ある」「興味ない」を許し合える場であるべき。教員自身が本源的能動性を持ち、情熱的に何かをやり込む姿勢が、学生への薫陶（感化）となる。

まとめ

前半部では、3名の講演者がそれぞれ異なる視点から AI 時代の大学教育について語りました：

- 石井氏：創造性の視点から、AI と人間の協働、プロセス評価の重要性
- 安松氏：教育 DX の実践者として、批判的思考力の育成、生成 AI の理論・哲学的背景の理解
- 吉岡氏：企業・社会人教育の視点から、本源的能動性、自発的実践型人材の育成

三氏に共通するメッセージは、AI に代替されない人間の力（問う力、疑う力、本源的な興味・関心、非言語コミュニケーション）を大学教育の中心に据えるべきという点です。

パネルディスカッションのサマリー

コーディネーターが統合した三つの論点：

1. 大学は何を学びの中心に据えるべきか
2. その学びをどのように設計・実装・評価していくのか
3. どのような形で社会に手渡していくのか

1 大学は何を学びの中心に据えるべきか

石井氏：SEND（人間性の高い仕事）の重要性

創造技法 300 種を AI で試した結果、できない 3 割に共通する要素を発見し「SEND」と命名：

- S (Sensitivity / 感受性)：傷つきやすさ、繊細さ。HSP（ハイパーセンシティブパーソン）のような気質が AI 時代にはエリートになる可能性
- E (Empathy / 共感)：認知的共感 AI が得意だが、情動的共感（つらさに寄り添う）は人間の強み
- N (Nortion / 言葉になっていない考え)：まだ言語化されていない考え、直感。AI は言葉になっていないものを扱えない
- D (Dedication / 献身・情熱)：好きなことに没頭し、暗黙知や身体知を獲得する。誰も知らなかった事実を発見する力

教員が情熱的に何かをやり込み、その薫陶（背中）を学生に見せることが大学教育の中心。

安松氏：批判的思考力と非言語コミュニケーション

- 大学院の授業実践例：生成 AI と議論する力
- 学部一般教養向けの授業実践例：生成 AI が出した情報を疑うデータリテラシー、論理的思考力
- 言葉と文字は別物：ChatGPT などは文字処理が得意だが、音声言語情報や非言語情報を含めた統合処理は人間の方が優れており、身体性（筋骨格系だけではなく消化器系・内分泌系なども含む）を含めた多種多様な情報処理を AI はできておらず、総合的な情報処理が人間の特徴
- 企業研修では実施されない教育環境：15 回の半期授業でゆっくり思考力を鍛えられるのは大学ならではの

吉岡氏：教育工学の基礎 + 教員の香り

- インストラクションデザインなど、教え方の工学的フォーマットを知った上で、教員自身の「香り（個性・情熱）」を乗せることが重要
- 教える技術を知らない教員が多すぎる

2 どのように設計・実装・評価していくか

吉岡氏：学習活動の評価へシフト

- 知識習得ではなく学習活動を評価：AI の方が知識を持っているため、15 回の学習活動の中で「何が起きたか」を評価すべき
- 報酬連動型学習方略：学生は「どう評価されるか」に基づいて学び方を決める。評価方法が学びの質を決定する
- 教員同士が「どんな学びが起きているか」を共有する時間が不足している

安松氏：生成 AI 前提の評価制度

- レポート評価の転換：2025 年春のバージョンアップ以降、AI で簡単に書ける内容のレポートは生成 AI 使用の有無を問わず減点するとしている。いわばリバースエンジニアリングで「採点者が AI を使って再現できるか」を試し、容易に作成できる内容は減点するということをしている。
- 生成 AI 利用は前提：使われることを前提として。ただし AI で簡単に書ける程度の内容では価値がないとしている。

安松氏：対話型 AI の活用授業例

「自分の未来（40 歳の自分）を考える with GPT」授業：

- 学生が自分の自己紹介文を入力し、生成 AI に「40 歳の自分」を生成させる
- 単に「どんな 40 歳？」と聞くのではなく、インタビュアーのスキルを応用したプロンプトで指示
- 出力された自身の 40 歳像を読むことで違和感が生まれ、自己内省が促進される（例：「コーヒーを妻が淹れてくれる」→「自分で淹れたい派」）
- 20～30 分の対話で、答えのない情報を生成 AI と「作り出す」協働体験を実感

石井氏：クリエイティブノイズとペアスタイル

- クリエイティブノイズの重要性：笑い、共感、ときの声などの非言語情報がないと、 prest の生産性は 7 割に落ちる
- ペアスタイルの推奨：AI を 1 人で使うのではなく、人間 2 人 + AI 1 台のペアで使う。AI の出力を「ヒント、たたき台」にして人間同士が対話し、クリエイティブノイズを発生させる

石井氏：失敗の数を競う時代

- AI を使えば失敗しない、タイパ最高で卒業できるが、そういう学生は最も使えない人材になる
- 大学は安心して失敗する場：失敗した数をカウントし、2000 回失敗した学生を表彰するような時代に
- AI という自転車で遠くまで冒険し、失敗して怪我をして帰ってくる。そのときに頼もしい大人（教員）がケアする

3 どのような形で社会に手渡していくか

吉岡氏：教員自身がモデルになる

- 真剣な眼差しで学ぶ教員自身がモデルであり、その姿勢を学生に見せることが重要
- ただし、教員と同じ人材ではなく、教員とは違う個性を持つ人材を社会に送り出すべき

安松氏：大学が生成 AI 社会をリード

- 「大学から社会へ手渡す」というよりは、大学が生成 AI 時代の社会をリードするという発想を持ってよいのではないか
- 企業は制約も多く、AI 活用は思うように進んでいない。大学側が生成 AI 活用をリードし、社会に開かれた場となるべき

石井氏：過去の教育手法への回帰

- 技術が進化しピークを迎えると「来た道に戻る」（例：某工場で全自動化後、一部を手作業に戻した）
- 寺子屋や師範学校時代の手間のかかる教育が、AI のサポートで再び可能に
- 過去に非合理的だと辞めた教育手法を、AI の力で復活させるチャンス

まとめ

共通メッセージ

1. AI に代替されない人間の力：感受性、共感、直感、情熱、非言語コミュニケーション
2. 評価軸の転換：知識習得 → 学習活動、完成物 → プロセス、成功 → 失敗の数
3. 教員の役割：知識を教える存在 → 情熱的に学ぶ背中を見せる存在、薫陶を与える存在
4. 大学の位置づけ：社会への準備の場 → 社会の中心、安心して失敗できる冒険の場
5. AI との付き合い方：代行型ではなくケンタウルスモデル（協働）、ペアスタイル

印象的なフレーズ

- 「安心して失敗するために大学がある」（石井氏）
- 「AI という自転車で爆速で冒険し、失敗して怪我をして帰ってくる」（石井氏）
- 「教員同士がどんな学びが起きているかを話す時間が少なすぎる」（吉岡氏）
- 「大学自体が生成 AI 社会をリード」（安松氏）
- 「来た道に戻る——過去の手間のかかる教育を AI でサポートする」（石井氏）

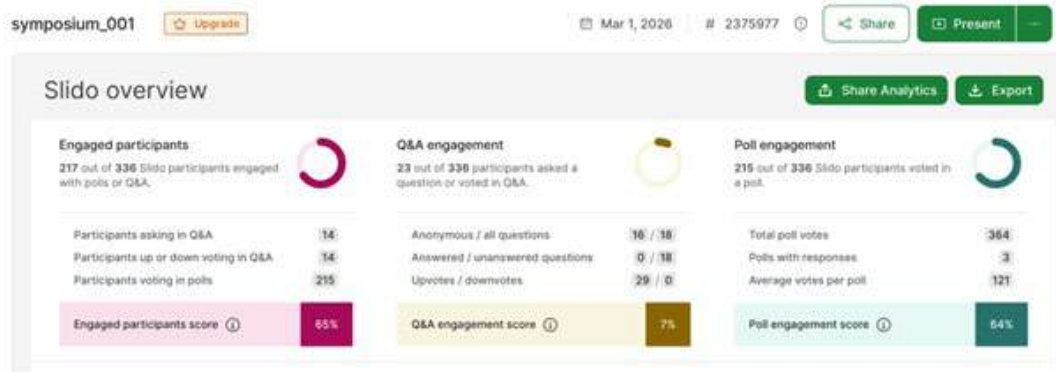
後半部では、前半の講演内容を踏まえつつ、より具体的な授業設計・評価方法、大学と社会の関係性について深い議論が展開されました。

聴衆からの声：Slido による参加者コメント

1. Q&A
2. 第1問（講演への自由コメント）
3. 第2問（選択問題の解説）
4. 第3問（大学の存在理由）
5. 全体分析

本シンポジウムでは、参加者の問題意識や現場の課題を可視化するため、Slido を用いてリアルタイムで質問・意見投稿および投票を受け付けた。投稿内容は大きく以下の三つのカテゴリーに整理できる。

1. 講演内容への質問（Q&A）
2. 講演を受けたコメント・感想（自由記述）



3. 現場課題の投票

4. 大学の存在理由に関する問いへの回答

これらの内容を分析すると、AI時代の大学教育に対する参加者の関心や不安、期待が立体的に浮かび上がってくる。

1 Q&A

Q&Aには、生成AIの教育利用、評価方法、学生支援、大学制度などに関する質問が多数寄せられた。特に多かったのは、AI利用と学習評価の関係に関する問いである。例えば、

- 学生が生成AIの回答をそのままレポートに使用する可能性への懸念
- AI使用履歴の開示をどのように担保するか
- AI利用を前提とした課題設計のあり方

といった実践的な質問が目立った。また、思考プロセスの評価についても議論が集中した。「試行錯誤の回数やプロセスを評価することは努力量の評価になってしまうのではないか」という疑問や、「AIと深く対話しなければ答えられない課題設計の必要性」といった意見が提示されており、AI時代の評価方法をめぐる教育現場の模索が読み取れる。

さらに、教員側の対応力についての質問も多く見られた。例えば、

- 教員自身がAIをどのように学ばよいか
- 学内で誰に相談すればよいか
- AI利用環境の研究室間格差

など、教員側のリテラシーや制度整備に関する課題が指摘された。これらの質問からは、AI活用の是非を問う段階から、「AIを前提とした教育設計をどう行うか」という実務段階へ議論が移行していることがうかがえる。

2 第1問：講演に対する自由コメント

講演を聞きながら投稿された自由コメントには、共感、疑問、違和感など多様な反応が寄せられた。コメント内容は大きく以下の五つのテーマに整理できる。

(1) 対話と関係性への共感

吉岡氏の講演で紹介された「教員や学生同士の対話を通じて学びが生まれる」という視点には強い共感が寄せられた。特に、

- 教員同士の語り合いの必要性
- 学びが関係性の中で立ち上がるという理解

などのコメントが多く見られ、大学教育におけるコミュニティ形成の重要性が改めて認識されていることがうかがえる。

(2) 評価方法への問題意識

AI時代の評価方法については、複数の参加者が強い関心を示した。例えば

- プロセス評価の妥当性

- 成果物による評価との関係
- AI利用を前提とした課題設計

など、評価の再設計を求める声が多かった。これは、AIが文章生成や要約を容易に行えるようになったことで、従来型のレポート課題や試験が成立しにくくなっているという現場の実感を反映していると考えられる。

(3) AIリテラシーと教員側の課題

複数のコメントで、教員自身のAI理解や教育方法の共有の必要性が指摘された。特に、

- 教員側の理解不足
- 実践例の共有不足
- グッドプラクティスの可視化

といった課題が挙げられている。これは、AI教育が個々の教員の努力に依存している現状を示している。

(4) 学生像の多様化

参加者の中には、大学進学者層の拡大に伴う教育課題にも言及する声があった。例えば、

- 学習習慣の弱い学生の増加
- 基礎学力や学習姿勢の問題
- 発達特性への対応

など、AI教育以前の教育課題との関係を指摘する意見も見られた。

(5) 大学の役割への再認識

コメントの中には、

- 大学は「思考停止した人間を社会に送り出さない最後の教育機会」
- 「問いを立てる力を育てる場所」

といった、大学教育の社会的役割を再認識する内容も多く見られた。

3 第2問：選択問題

参加者に対して「現場で最も困っている課題」を尋ねた投票では、

- 教員間で対応がバラバラ
- 成果物の評価方法が不明確
- AI利用範囲の線引きが難しい

という回答が多く選択された。この結果は、AI利用に関する教育現場の課題が、主に以下の三点に集約されることを示している。第一に、評価方法の問題である。AIが生成する文章や分析を学生が利用できる状況では、従来型のレポート評価が成立しにくくなっている。第二に、制度的整備の不足である。AI利用に関するガイドラインや教育方針が大学全体で共有されていない場合、教員ごとの対応のばらつきが大きくなる。第三に、教育設計の再構築の必要性である。AI利用を前提とした課題設計や評価方法を体系的に議論する必要があることが示唆されている。この結果からは、AI導入の課題が単なる技術問題ではなく、大学の教育制度全体に関わる設計課題であることが明確に読み取れる。

4 第3問：大学の存在理由に関する自由回答

参加者に対して「AI時代・少子化社会における大学の存在理由」を問うた自由回答には、多数のコメントが寄せられた。これらの回答を分析すると、次の四つのテーマが浮かび上がる。

(1) 失敗できる場所としての大学

最も多く見られたのは、

- 失敗できる場所
- 試行錯誤できる場所
- 社会に出る前の実験の場



slido

という回答である。大学は効率性や成果を強く求められる社会とは異なり、安全に試行錯誤できる環境であるべきだという認識が共有されている。

(2) 対話と出会いの場

次に多かったのは、

- 多様な人と出会う場所
- 人と人が対話する場所
- 価値観を広げる場

という回答である。AI が知識生成を支援する時代においても、人間同士の対話が大学の核心的価値であるという認識が示されている。

(3) 自分の問いを見つける場所

多くの回答で、

- 自分の問いを見つける場所
- 好きなことを見つける場所
- 自分を知る場所

といった表現が用いられていた。これは大学を職業準備機関としてだけでなく、自己探究の場として捉える視点を示している。

(4) 人間性を育てる場所

AI との対比の中で、

- 人間性
- 共感
- 対話力

といった概念が頻繁に言及されていた。これは AI が高度化するほど、人間固有の能力の重要性が再認識されるという意識を反映している。

まとめ

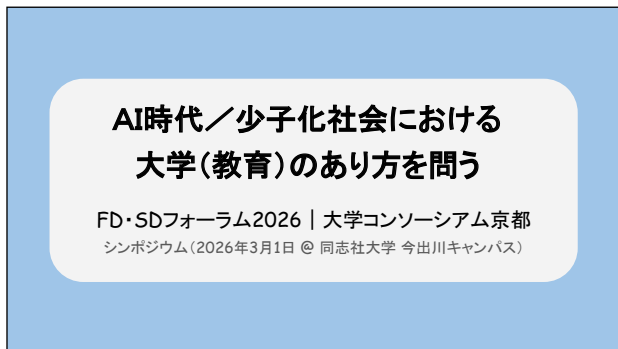
Slido 投稿全体を通じて浮かび上がった参加者の意識には、次の特徴が見られる。第一に、AI 教育の議論がすでに実務段階に入っていることである。投稿内容の多くは「AI を使うべきか」という段階ではなく、「どのように課題設計や評価を行うか」という具体的な教育実践の問題に集中していた。第二に、大学教育の役割への再認識である。多くの回答で、大学は知識伝達機関ではなく、

- 失敗できる場所
- 対話の場
- 問いを見つける場

として捉えられていた。第三に、現場の困難と同時に強い期待が存在することである。投稿には、教育設計の難しさへの戸惑いが見られる一方で、「大学教育を再設計するチャンス」という前向きな認識も多く見られた。

総じて、参加者の声からは、AI 時代の大学教育をめぐる不安と期待の双方が強く存在していることが明らかになった。そして同時に、大学が果たすべき役割は、AI によって縮小するのではなく、むしろ人間同士の学びを設計する場として再定義されつつあることが示唆されている。

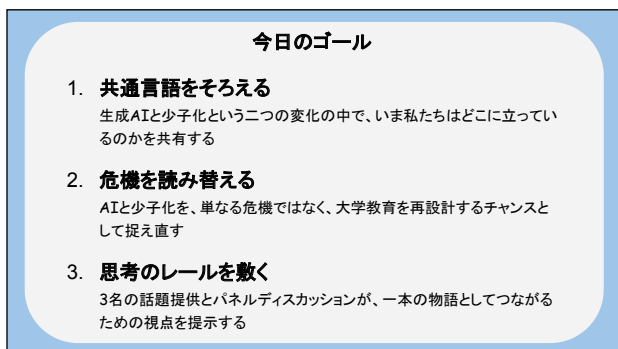
スライド1



スライド2



スライド3



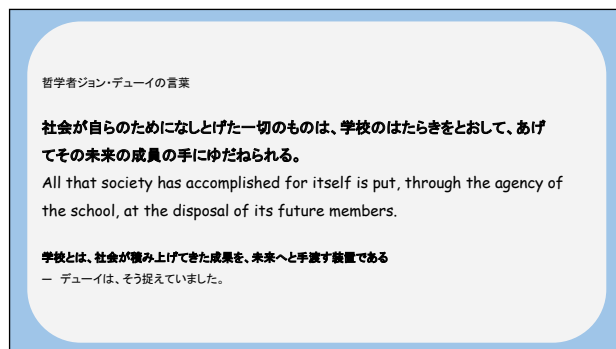
スライド4



スライド5



スライド6



スライド7

少子化によって「未来の成員」のかたちは大きく変わりつつあります。そして生成AIによって「社会が積み上げてきた成果＝知」をどう扱い、どう生み出し、どう伝えるかが根底から変わり始めています。

だからこそ、大学に問われているのは「何を教えるか」ではなく、

「何を未来に手渡すのか」そして「それを、どう手渡すのか」
この再設計こそが問われているのではないのでしょうか？

スライド8

現状俯瞰: 中等教育

活用
言語支援/要約/探究の伴走 など

懸念
評価の信頼性/教師の負担増
校務でのデータ管理

チャンス
探究型学習と個別最適化の加速



「禁止/野放し」ではなく
目的に沿った設計へ

スライド9

現状俯瞰: 高等教育

学生のAI利用は既成事実化
レポート/研究活動/就職活動の準備

課題
学修成果の評価/利用ガイドライン/データガバナンス

動向
科目設計の見直し/学則・シラバスへの明記/支援デスクの整備



運用は「方針 × 支援 × 評価」の三点セットで。

スライド10

学びの再定義: 役割分担と価値

AIが得意なこと
生成
要約
翻訳
試行錯誤の高速反復

人が担うこと
問いを立てる
価値判断
文脈理解
倫理感

学びの中心

知識伝達 経験設計へ

学習者体験
自己調整学習と伴走設計へ

教員実践
課題の再デザインへ
個別対応と個別最適化へ

大学価値
知の制作 (Knowledge-making) として再定義される

知識伝達 経験設計へ

スライド11

今日の焦点: 原則と設計課題

問い中心
課題は正解ではなく、仮説と選択を問う

透明性
AI利用の要求・出力の検証・評価基準の明確化

共創
学内外・世代横断の制作スタジオ化

4つの設計課題

カリキュラム
探究・制作・公開

評価
プロセス・リフレクション・共同制作

リテラシー
AIの扱い方ではなく、問いの扱い方

ガバナンス
データ/著作権/セキュリティ/管理

原則はシンプルに3つ。設計は4つの課題から考える。

スライド12

ご講演、そしてパネルディスカッションへ

創造性 石井さん

テクノロジー/データ 安松さん

社会接続 吉岡さん

今日の議論は、この「評価と支援」の設計に直結します。

スライド 13

講演1:石井 力重さん

スライド 14

■ 石井氏 (創造性・問い・学びの中核)

1. **AI時代の創造性は何が変わり、何が変わらない?**
→ 価値論・原理論 (創造性の再定義)
2. **大学の授業を1つ変えるなら、どこが最も利く?**
→ 実践論・設計論 (授業デザインのレバレッジ)
3. **AIと人間が共に発想する時、学びの中心はどこに置く?**
→ 学習観・教育観 (学びの重心)

石井氏は「学びの中心 (=問い・創造性) はどこにあるべきか」を担う

スライド 15

講演2:安松 健さん

スライド 16

■ 安松氏 (テクノロジー・運用・評価)

1. **生成AI活用において、よくある誤解は何か?**
→ 認識のズレの是正 (AIリテラシーの入口)
2. **生成AIをどのように授業に活用しているか?**
→ 実装・運用 (現場知)
3. **生成AI利用が見抜けない時代に、レポート採点をどうすべきか?**
→ 評価・ガバナンス (避けて通れない核心)

安松氏は「AIを前提に教育をどう回すか」を担う

スライド 17

講演3:吉岡 太郎さん

スライド 18

■ 吉岡氏 (社会接続・人材・大学の存在理由)

1. **AI時代に学生が身につけるべき「人間側の力」は何か?**
→ 人材像・学修成果
2. **社会/企業の側から見て、大学の学びに足りないものは?**
→ 外部視点からの欠落指摘
3. **社会接続の観点で、少子化時代の大学の存在理由とは?**
→ 大学論・公共性

吉岡氏は「大学は社会に何を手渡す装置なのか」を担う

スライド 19



休憩
～11:39

ご質問
コメントなどは
こちらへ

スライド 20

パネル・ディスカッション

スライド 21

**AI時代・少子化社会において、
大学は何を学びの中心に据え、
それをどのように設計・評価し、
どのようなかたちで社会に手渡すのか？**

スライド 22

コーディネーター 自己紹介

佐藤 賢一 Sato Kenichi

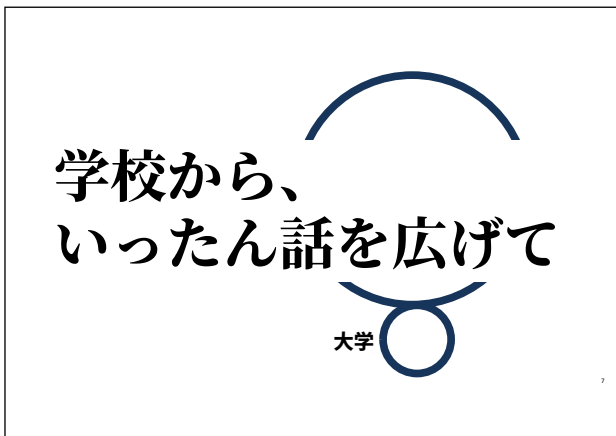
京都産業大学 (KSU 京都産業大学 KSD)
生命科学部 教育支援研究開発センター
ハテナソン共創ラボ

FD・SDフォーラム歴:
初参加は2012年度@立命館大学
7年ぶり8回目

最近の? : 大学生の頃から使ってたキャッシュカードが..



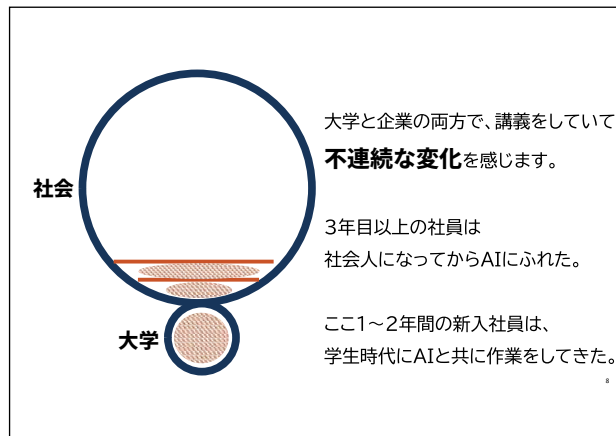
スライド1



学校から、
いったん話を広げて

大学

スライド2



社会

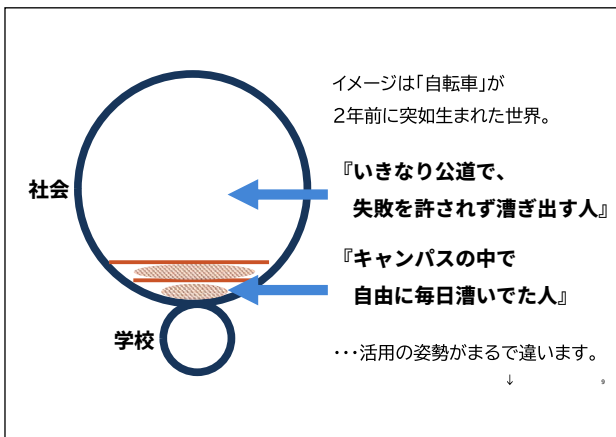
大学

大学と企業の両方で、講義をしていて
不連続な変化を感じます。

3年以上の社員は
社会人になってからAIにふれた。

ここ1~2年間の新入社員は、
学生時代にAIと共に作業をしてきた。

スライド3



社会

学校

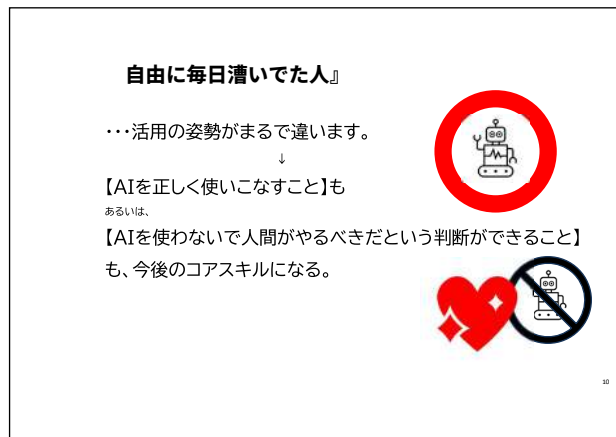
イメージは「自転車」が
2年前に突如生まれた世界。

『いきなり公道で、
失敗を許されず漕ぎ出す人』

『キャンパスの中で
自由に毎日漕いでた人』

…活用の姿勢がまるで違います。

スライド4



自由に毎日漕いでた人』

…活用の姿勢がまるで違います。

↓

【AIを正しく使いこなすこと】も
あるいは、
【AIを使わないで人間がやるべきだという判断ができること】
も、今後のコアスキルになる。

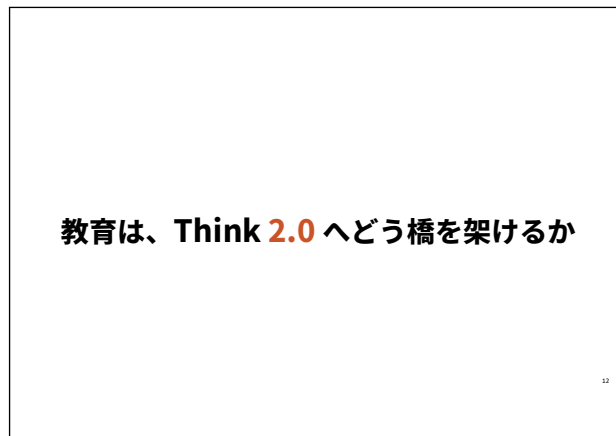
スライド5



これまでの **Think** が、
↓
Think 2.0

👤 & 📷、いわば…

スライド6



教育は、Think 2.0 へどう橋を架けるか

スライド7

1 AI時代の創造性

は何が変わり、何が変わらない？

(創造性の再定義)

13

スライド8

変わらないもの — 「問い」と「着地」は人間のもの

- **良いアイデアは、良い問いから生まれる。**AIは答えは出すが、問いは立てられない。(今しばらく)
- 「何を解決すべきか」「何が本当の課題か」を見極める力こそ、人間の創造性の核心。
- 創造のモデルは⇒【「連想」し、「想像」し、「創造」する。】
人にとって良いように具現化させる「着地」も、人間性の高い能力。

14

スライド9

変わったもの — 「探索空間」が爆発的に広がった

- かつて人は、記憶と経験の範囲でしか組み合わせを試せなかった。
- **AIは瞬時に数万通りの組み合わせを提示できる。**
- 人の頭だと普通は繋がらない、**異質な要素をつないで滑らかにすることも得意。**
人はそれをヒントにさらに発想を豊かにできる。
- ただし玉石混交。「**良い石を見抜く目**」が、より重要になった。

15

スライド10

新しく生まれたもの — 「想いを言葉にする力」

- AIとの対話は、曖昧だった自分の想いを文字として外に出す。
- **プロンプトを書く行為自体が**
「自分は何を考えているのか」の**メタ認知を鍛えている。**
- **Think 2.0 = 人間の想い × AIの概念加工。**この往復プロセス。

16

スライド11

創造性の再定義

● 創造的(Creative) = **新しい(New)** + **有用性(Useful)**

<p>◆ AIは学習から焼き直し。 ◆ 人は保持情報量が少ない。 ◆ AIの多様な出力にヒントを得て、人が新しいことを想いつくと、新しいものを広く出せる。</p>	<p>■ AIは多様な人を想定し、有用性を推定できる。(情報量の力) ■ 人は自分の心に照らし深い有用性を見出すことは得意。(主観の力) ■ 人とAIで議論することで、主観・客観の両面から見出せる。</p>
--	--

17

スライド12

創造性の再定義

● 創造的(Creative) = **新しい(New)** + **有用性(Useful)**

創造性の定義は変わらない。

しかし、AIが創造に参加することで
「**情報量**」「**概念加工**」という歯車を大きくでき、
人の得意なところ = 「**問い**」「**着地**」が大きく活きる
(「見抜く」「編集」「メタ認知」という力の必要性が高まった面はある)

18

スライド 13

ちなみに

創造性とは「よく知らないことを考えること」でもある

知識のないエリアも、人は直感的に考えられる。
AIは、情報のないことをさせると、かなりポンコツに。

19

スライド 14

2

大学の授業

を1つ変えるならどこが最も効く？
(授業デザインのレバレッジ)

20

スライド 15

「調べてまとめる」から「問いを見つけ磨く」へ

- 従来:「〇〇について調べてレポートせよ」
→ AIが一瞬で終わらせる時代に**意味が薄い**。
- これから:「**あなたが解きたい問いを設定し、その問いの質を吟味せよ**」が核心に。
- さらに:「**解決策を、人の気持ちになって、改良せよ**」
(従来は、解決策を出す、具体を詰める、まで到達できるのは、一部の学習者のみだったので、注力できなかった。これからは、そこまでの橋をAIが作れるので、着地を磨く学習ができる。)
- 授業の評価軸を「情報取得力」から「**起点力、共感力**」へシフトさせる。

21

スライド 16

「個人ワーク」から「AI併走ワーク」へ

- 学生がAIを使うのは止められない。ならば「**使わせない**」ではなく「**どう使うか**」を教える。
- 課題に「AI使用履歴の提出」を義務化。**プロンプトと出力を見せることで、思考過程を可視化**。
- こうすると、ずる(=他者の課題写し)は、しにくくなる。
- AIとの**対話ログが、そのまま「思考の成長記録」**になる。

22

スライド 17

「完成物の評価」から「プロセスの評価」へ

- AIが磨けば、誰でもそれなりの成果物ができる時代。完成度では差がつかない。
- 評価すべきは「**何回試行錯誤したか**」「**どう方向転換したか**」「**失敗から何を学んだか**」。
- 授業の最終課題:「**あなたの失敗の記録と、そこからの学びを語れ**」。

23

スライド 18

3

人間とAIが共に

発想するとき、学びの中心はどこにおく？
(学びの重心)

24

スライド 19

中心は「判断 (の芯である価値観)」に置く

- AIは選択肢を大量に出す。
人間は「どれを選ぶか」「なぜ選ぶか」を決める。
- この判断の繰り返し、学びの本質。判断には**価値観、文脈理解、倫理観が必要**。
- 学生に問う:「なぜその案を選んだ? 他の案ではダメな理由は?」

25

スライド 20

中心は「編集 (が引き起こす創造力)」に置く

- AIの出力は「素材」。そのまま使えることは稀。人間は編集する。
- 削る、足す、並べ替える、別の文脈と組み合わせる。ここに**人間の意図が宿る**。
- それらの作業をするうちに、**人の創造力は、新案も思いつかせる**。

26

スライド 21

中心は「対話 (のファシリ)」に置く

- AIは「反論してくれる相手」「極端な意見を言ってくれる相手」として使える。
- 学生が一人で考えていると気づかない**盲点を、AIが (意図的に) 突いてくる設計が可能**。
- 授業の新しい形: 学生 ⇄ AI ⇄ 教員、の三者対話。**教員はファシリテーターへ**。

27

スライド 22

メッセージ

創造的な成長に大事なもの

28

スライド 23

AI時代にこそ価値を持つ、人間ならではの「S/E/N/D」の力

創造性の観点から、これからの時代に人間が担うべき仕事をS/E/N/Dという頭文字で整理できます。これらの力を育むことが、これからの教育の核となります。

 <p>S: 感受性 感受性、直感さ、傷つきやすさ。「創造に伴う脆さ」は、AIに代替できない「資質」。生きにくさともつながる「HSP」は「才能」へ。</p>	 <p>E: (情動的) 共感 他者の感情を深く感じる力。「認知的共感」(文章から気持ちを察する)はAIのほうがかうまいが「情動的共感」(心でわかる)は人の方がずっと上。</p>	 <p>N: もやもや〜直観 まだうまく言葉にできない考え(Notion)や直感の力。AIは言語で記述された思考展開は実行できる。「N」はハシゴ(思考ステップ)がないので、実行できない。</p>	 <p>D: 熱狂的な没頭 Dedication、献身。何かに没頭してやりこむ。次第に、誰も知らない「暗黙知」が生まれ、他者もAIにも実行できないもの。</p>
--	---	---	--

学生時代や人生を通して、このS/E/N/Dを意図的に育んでいけるよう、導いてあげてください。 30

スライド 24



「私の未来に
明るいものがある」
と子供が思えるようにする
のが、教育である

(と、石井は思うのです)


31

安松 健 株式会社エボルブ Chief Assemblage Officer 大阪教育大学 理数情報教育系 特任准教授


スライド 1

生成AI時代の大学授業実践例
AIに振り回される人材と活用できる人材の分水嶺

株式会社エボルブ Chief Assemblage Officer
大阪教育大学 理数情報教育系 特任准教授
上智大学 応用データサイエンス学位プログラム / 神戸大学 非常勤講師
日本創造学会 理事
産総研 人工知能技術コンソーシアム データ・知識融合WGリーダー
安松 健



スライド 2



安松 健
株式会社エボルブ Chief Assemblage Officer
国立大学法人大阪教育大学 理数情報教育系 特任准教授


<略歴>


- ✓ 大手金融機関
ニューラルネットワークを活用した検知システムの運用・開発
顧客行動パターンへの調査・分析、業務システム開発による業務改革
- ✓ 人材開発事業会社
マーケティング、財務など問題解決型研修の企画運営、
ビジネスリーダー能力開発などの組織人事ソリューションに従事
- ✓ クラウドベンダー〜現職
調査・分析からコンセプトデザイン、機械学習モデリングまでを担当
新規事業・新商品開発、業務改革プロジェクトなどをファシリテート
大阪教育大学では、教育におけるAI・データ活用に取り組む

専攻： 社会学、サービス・イノベーション&デザイン領域 博士(経営科学)
日本創造学会 理事
産総研 AI技術コンソーシアム データ知識融合WG リーダー
上智大学 応用データサイエンス学位プログラム / 神戸大学 非常勤講師

EVOLVE, Inc. All Rights Reserved.

スライド 3

 人工知能学会誌にAIサービスシステム開発についての論文掲載



富山アプリ、久留米糖(かすり)アプリ、
プレミアムビールアプリなどの開発事例を紹介

5つのポイントとして

- \$1 「データ収集⇒モデリング」の考えを捨てる
- \$2 モデルもユーザーも同じアクターと捉える
- \$3 目的変数は活動の中にあればよい
- \$4 機械学習だけで学習や現象を捉えようとするしない
- \$5 サイバーフィジカル・フィールドワークをする

EVOLVE, Inc. All Rights Reserved.

スライド 4

 BayoLinkSで実践するベイジアンネットワーク



第4章思考力を拡張させるベイジアンネットワーク
私たちの知的能力とはなにかー自分の思考力を拡張させる一
人の思考力の特徴を理解する
データ活用の共通課題
思考力を拡張させる三つのポイント
無茶ぶりしない、自分の考えを押し付けない
単純構造で人を理解しようとする
じっくり話し合う、向き合う、学び合う
戦略的に右往左往する！

第12章ベイジアンネットワークによるモデリング
一人とベイジアンネットワークの協働に向けてー
リアルワールドデータを学習するために人の知識を使う
なぜ人の知識が重要なのか
人の知識を使うにはどうすればいいか

EVOLVE, Inc. All Rights Reserved.

スライド 5

 シナジーマーケティング「DAYS GRAPHY」

DAYS GRAPHYは、リサーチの顧客理解のノウハウ・スキルを詰め込み、
シナジーマーケティングが生成AI(LLM)を活用し開発したサービス




EVOLVE, Inc. All Rights Reserved.

スライド 6

 生成AIコミュニケーター@NTT西日本 QUINTBRIDGE

生成AIコミュニケーターをNTT西日本が運営する共創拠点「QUINTBRIDGE」の
施設内5か所の常設する実証実験




EVOLVE, Inc. All Rights Reserved.

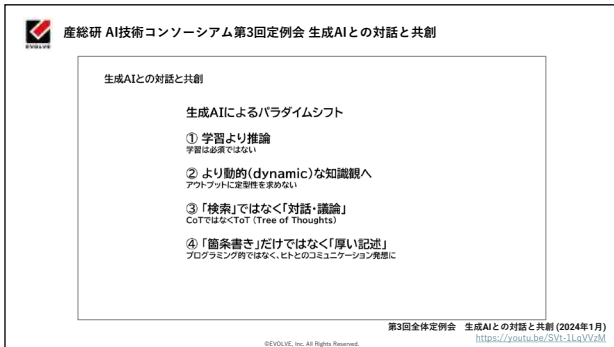
スライド7



スライド8



スライド9



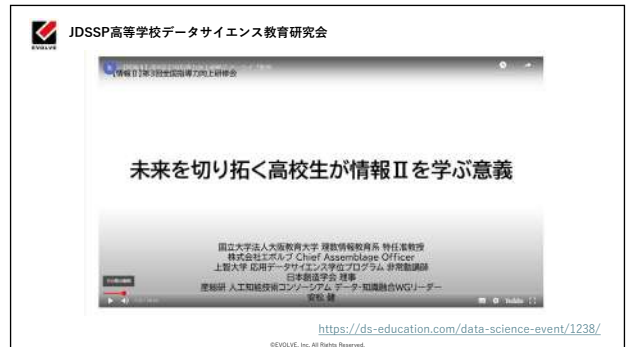
スライド10



スライド11



スライド12



スライド 13

はじめに — 生成AI活用について

スライド 14



スライド 15

生成AI時代に求められる能力

「ノーコード・ノンプログラミング」でAI技術が「無料」で利用できる時代、

プログラミング言語や統計学の知識や予算がなくとも、

AI技術を活用して社会課題を解決する能力がますます求められる

スライド 16

教育界の生成AI活用

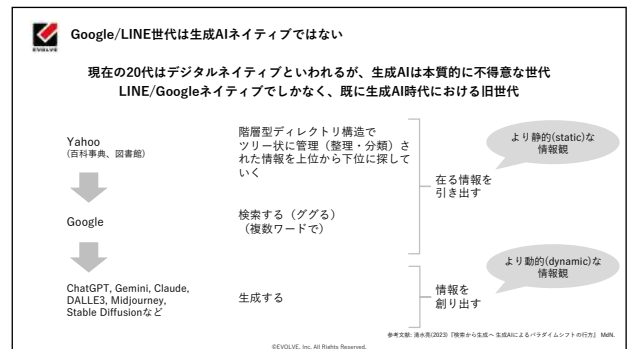
なぜ、教育界は生成AI活用が進んでいるのか

- ✓ 生成AIの新パラダイムで取り組むことができる
デジタル化に遅れたため、従来のデジタル化・IT化の弊害ない
- ✓ ツールの制限が少ない
組織の制限なく様々な最新の生成AIを活用することができる
- ✓ 教員は自然言語のプロ
自然言語の機能を活用するノウハウが共有知としてあり、LLMとの相乗効果が高い
- ✓ 教員に企画・実践の現場裁量がある
活動の核心である授業・学習活動の企画・実施をイニシアチブをもって推進・変革できる

スライド 17

① 生成AI活用において、よくある誤解は何か？

スライド 18



スライド 19

生成AIのリスクについての誤解

- ① データ漏洩**
- ② 著作権**
文化庁 著作権セミナー「AIと著作権」<https://yositu.be/eYwTKfuyG/>
「AIと著作権II」<https://yositu.be/NDKp5PPBo>
- ③ ハルシネーション**
正しくないこと（事実でない、論理矛盾など）を回答する
- ④ フレーム問題**
フレーム問題 <https://www.ai-sakkai.or.jp/sebatsu/Alznics1.html>
- ⑤ ポチヨムキン理解**
表面的な説明はできるが、理解しておらず実際にできない

著作権は一般的にいわれるほど単純な問題ではない

「対話AIは間違える」という表現自体が間違っている

生成AIは、辞書でも百科事典でも、巨大なデータベースでもない

EVOLVE, Inc. All Rights Reserved.

スライド 20

「学習」「推論」「参照」を混同しない

生成AIのよくある誤解についての注意

- ✓ モデル(LLM)は、巨大なデータベースではない
天気予報士が、未来の天気をデータベースを持って日時を検索して、回答していないのと同じ
- ✓ プロンプトは、DBに対するクエリ（Excelフィルター機能）のようなものではない
- ✓ RAG技術は、学習ではない
参照データは、学習データではない

モデルを構築する
インプットデータ

学習

AIモデル

推論

アウトプット

推論するための
インプットデータ

参照

参照データ

EVOLVE, Inc. All Rights Reserved.

スライド 21

生成AIの哲学・理論的背景について

生成AI活用において、実証・経験・頻度主義やデータ・モデル二元論の考え方をしていると理論矛盾なので話

伝統的なデータサイエンスや従来のAI活用と、生成AI活用は抜本的に異なる
従来のAI専門家、生成AIの非専門家と考えるぐらいでもよい

ディープラーニング・生成AI
プラグマティズム

⇒モデルの正しさよりも、より良い予測を与えてくれるか

推論統計
データとモデルの二元論
⇒モデルが自然の奇特性、世界の客観的構造となっているか

実証主義・経験主義、頻度主義
データ一元論
⇒データをいかに動かせるか

データ → 真実を
求めて学習 → モデル → 推論 → 推論結果を
利用した
実践・活動

EVOLVE, Inc. All Rights Reserved.

スライド 22

言葉と文字について

「言葉」と「文字」はイコールではない

言葉を話せることと、文字を読み書きするのは別の能力 (ex. ディスレクシア)

ヒトは音声言語も視覚言語（文字など）も統合的に処理できる
LLMは文字しか扱えない (ChatGPTは音声も文字に変換してから処理)
(ヒトは音声言語は音声言語のまま処理できる)

「大規模言語モデル」といっても、音声言語は処理できず
その点で、ヒトとはかなり異なることを理解し、混同してはならない
音声言語は文字よりも圧倒的に情報量が多く全体的情報 (文字は1文字たった2byte)

文字 → 大規模言語モデル LLM → 文字

EVOLVE, Inc. All Rights Reserved.

スライド 23

AIと身体性

身体とは単に手足があって動くものだけではない

AIは脳(神経系の一部)に例えられるが、神経系は脳だけではない
神経系は脳だけではなく全身に張り巡らされている
をして、ヒトの身体は、筋骨格系だけではない
筋骨格系、神経系、循環器系、呼吸器系、消化器系、
内分泌系、泌尿器系、生殖器等が少なくともある

マルチモーダル、文字・画像・動画・音声などのデータを対象にしたAIがある
これらはヒトであれば、視覚・聴覚情報になるが、ヒトは視覚・聴覚だけではなく、
臭覚・味覚、皮膚感覚、体性感覚、平衡感覚、内臓感覚などを
センシングして統合処理をしている

AIと身体性
ヒトの身体性とは、筋骨格系だけではなく、
視覚・聴覚だけではなく多種多様な情報処理しているもの

EVOLVE, Inc. All Rights Reserved.

スライド 24


② 生成AIをどのように授業に活用しているか？

スライド 25

生成AI時代の大学における課題

生成AI時代、Googleネイティブの思考停止問題が深刻
思考力をどう育成するかが最大の課題

先生、ChatGPTが
〇〇とっていました



EVOLVE, Inc. All Rights Reserved.

スライド 26

検索ではなく「ディスカッション」
大教大大学院における演習事例
生成AIを話し合いのメンバーとして加えてグループワークをする

スライド 27

グループディスカッション・発表

Netflixが破壊的イノベーションの事例に当てはまるか
グループ(ChatGPTも含め)で「議論」してください。

破壊的イノベーションにあてはまる理由をGoogleスライドに明記し、
Chat GPTとの議論URLもコピペしておいてください
https://docs.google.com/presentation/*****

スライド 28

Netflixは破壊的イノベーションかについて、「対話」する

(レポート作成)

様々なあります。

〇〇です。

時代で変遷して
もなからずです。

(レポート作成)

確かに矛盾していました

Netflixが
破壊的イノベーション事例であることを
説明するレポートを作成してください。

破壊的イノベーションの定義を
どのように認識していますか？

情報元は何でしょうか？
何と定義されていますか？

当初の定義と内容が矛盾しているのは、
なぜでしょうか。

それは、クリステンセンが「〇〇」で
定義した内容で、レポートを作成してください。

△△と説明しましたが、
それは、破壊的イノベーションの定義の
〇〇に矛盾していませんか。

では、××の時期について議論したいと思います。
その時期の〇〇を考慮し再度レポートしてください。

スライド 29

対話すること


“「対話AIは間違える」という表現自体が間違っている”
“的確なプロンプトを整形できるかどうか(…)回答の質を大きく左右する”
美濃智(2023)「知識の宿主は人からAIに移るのか？」人工知能学会誌 (38), 4, 542-548.

対話の当事者である私たちにも
「知識」と「思考力」が求められる

スライド 30

グループワークにおける知識・思考力・コミュニケーション力

対話の良し悪しは、どちらか一方の
力量(スペック)で決まるわけではない
良い回答を得るには、良い問いかけが必要



スライド 31

対話型生成AI活用における課題

- ✓ 対面コミュニケーションとオンラインテキストコミュニケーションは「異なる」スキル
- ✓ テキスト言語コミュニケーションスキル不足 (口頭と同様にしては、上手くいかない)
- ✓ 検索してしまう、CoTどまりになっていない、対話(ToT)スキルの理解・習得不足

▼

ChatGPTをそのまま利用するには考慮が必要
中高生の「テキスト対話力」に適した機能制限・専用アプリ化が重要

スライド 32

動画生成AIとクリティカルシンキング
NotebookLMの解説動画があれば講義は不要か？
生成AIの解説の誤りを見破れ！

スライド 33

NotebookLMの誤りを見破れ！

下記は、Day1の講義資料をNotebookLMに読み込ませて生成した動画です。
(私は動画制作技術はありませんが、PDFを読み込ませるだけでAIが10分程度で作成してくれました)

誤りがありますでしょうか。あるとしたら、どの内容でしょうか。
誤りがある場合は、誤っているポイントを指摘してください。

データリテラシー入門：そのグラフ、信じていい？



<https://youtu.be/MP-Tys4P2-BU>

スライド 34

平均=代表値か？ ChatGPT Plus model 5.2 (2026年1月)

広い意味ではいずれも「平均 (代表値)」の一種
統計学では「代表値 (平均)」というグループに含めて考える

番値と中央値と平均値は別のものか？
あるいは、いずれも平均の種類か？

統計学での定義 (英語)
median/modeも平均 (average) として扱われることがある
総務省統計局、中央値や最頻値を代表値として用いる

専門分野で、代表値の意味で平均と使われるという、
概観となる資料を提示してもらえますか？

総務省統計局「代表値 (中心傾向)」
中央値や最頻値を代表値として用いる、などなど

平均が代表値の意味という資料提示になっていない
日本語の語なので、日本語の文献を示すべき

ご指摘の通り、根拠不十分でした。
日本語での根拠は、文献上では確認できませんでした。
平均=代表値 ではないというのが標準的・学術的な整理
先の説明は言い過ぎ/不正確だったと訂正します。

代表値の説明になっていませんか？

英語のaverageが広義で代表値を指すので、日本語の文献を確認
する前に調査してしまった
日本語の文献を再三求めてくださったので、誤りを訂正できた

なぜ、平均=代表値と回答したのか説明してください。

英語の文献を挙げる


Averageがmedian, modeを含むことを示す英語の文献
を挙げてください。

<https://chatgpt.com/share/6950383-7eb0-8013-86f7-37452300d361>
<https://www.collinsdictionary.com/jp/dictionary/english/average>

スライド 35

生成AI授業を受けた学生の声

生成AI時代、自分たちの思考力や知識の重要性を体感



論理思考力、知識、
もっと学習しなければ!!

スライド 36

情報を「探す」から「創る」へ
大学・高校の生成AI活用授業
未来の自分を考える生成AIの対話による内省と創造

スライド 37

情報・知識を「探す」から「創る」へ

情報・知識を
探す

情報・知識は、
既に在るものという
考え・姿勢

- 正解を探す
- 問に対する解を求める
- 知識・理論を覚える
- 法律・契約を守る
- 教科書通り伝える(eラーニングなど)

➔

情報・知識を
創る

情報・知識は、
生み出すものという
考え・姿勢

- 正解をつくる
- 新たな問いを作り、解を作る
- 新しい知識・理論を作り出す
- 法律・契約の解釈をする・作る
- 相手に合わせて、授業をつくる

博士、研究者、コンサルタント、デザイナー、政治家、裁判官、弁護士など

EVOLVE, Inc. All Rights Reserved.

スライド 38

つまり、
フィクション

【演習】未来の自分の一日を考える with GPT

スライド 39

【演習】未来の自分の一日を考える with GPT

- 現在の自分についてメモを書く
- GPTで、未来の自分（フィクション）を生成してみる



EVOLVE, Inc. All Rights Reserved.

スライド 40

GPT(LLM)の能力を引き出す「言語対話力」

スライド 41

大規模言語モデル (LLM) を理解する

抽象的でもっともらしい文章は否定されないし、優秀に思えるかもしれない
あるいは、箇条書きでまとめていると知的に思えるかもしれない

しかし、
特徴・個性のない文章はおもしろくない（読む価値がない）、
あるいは、箇条書きでまとめられた小説・物語もない
プログラミング言語で簡潔に書かれた小説・物語、おもしろいだろうか

自然言語には、小説・物語を叙述できる豊かな表現力がある
GPTなどの大規模言語モデル(LLM)は、自然言語で小説や物語も生成可能
つまり、それだけ豊かな言語能力を持っているということ

**LLMの能力を引き出すには、自然言語が持つ
豊かな表現力で向き合うことが求められる**


EVOLVE, Inc. All Rights Reserved.

スライド 42

対話やファシリテーションのコミュニケーション


**プログラミング的発想のプロンプトではなく、
ヒト発想のコミュニケーション**

ヒトの会話は、重複も繰り返しもあり、
豊かな言語を扱う有効なコミュニケーション方法
対話（ダイアログ）には、ファシリテーターやリサーチャーが
実践するコミュニケーション方法を活用する



EVOLVE, Inc. All Rights Reserved.

スライド 43


 【演習】 未来の自分的一天を考える with GPT

1. 現在の自分についてメモを書く
2. GPTで、未来の自分（フィクション）を再度生成してみる

【例】
高校3年生男性、ラグビー部、好きな音楽はロック、読書は苦手だけれど小論文を書くのは嫌いじゃない、人間が環境について学ぶ学部を志望、将来の夢は特にな
この私が40歳になった時のある一日の日記をエピソードを叙述してください。

EVOLVE, Inc. All Rights Reserved.


スライド 44

 【演習】 未来の自分的一天を考える with GPT

1. 現在の自分についてメモを書く
2. GPTで、未来の自分（フィクション）を再度生成してみる
3. 生成した日記を読み、自分の将来を少し考えてみる
4. さらに設定を追加・変更して、日記を再作成する
5. 再度生成した日記を読み、自分の将来をさらに考えてみる


EVOLVE, Inc. All Rights Reserved.

スライド 45

 生成AI授業を受けた学生の声

生成AIを使っている方だと思っていたけれど、全然使えてなかった
検索的な使い方をしなかった
自分たちがGoogleネイティブで生成AI時代では旧世代だということを痛感した
もっと創造的な使い方ができるとわかった

検索的な使い方をしなかった・・・
生成AIは使えないと思っていたのは自分のスキル不足だった



EVOLVE, Inc. All Rights Reserved.

スライド 46


③ 生成AI利用が見抜けない時代に、レポート採点をどうすべきか？

スライド 47

レポート採点例

1. 生成AIを使っていなくても、生成AIで簡単に生成できる内容のレポートは減点することを事前に説明
2. 提出レポートのテーマを生成AIで作成してみる（リバースエンジニアリング）、再現容易であれば減点する

提出レポート → 生成AI → レポート再現



EVOLVE, Inc. All Rights Reserved.

スライド1

大学と社会をつなぐ学びの未来

2026年3月1日
株式会社エイチ・アール・ディー研究所 吉岡太郎



HRD Institute Co., Ltd. © All Rights Reserved.

スライド2

自己紹介に代えて



「ロジカル」と「エモーショナル」の両面で
ビジネスの成果につなげるサポート




HRD Institute Co., Ltd. © All Rights Reserved. Slide 2

スライド3

進め方（3つの問い）

1. AI時代に学生が身につけるべき「人間側の力」は何か？
2. 社会／企業の側から見て、大学の学びに足りないものは何か？
3. 社会接続の観点で、少子化時代の大学の存在理由とは何か？

みなさんへの問い



HRD Institute Co., Ltd. © All Rights Reserved. Slide 3

スライド4

何が描かれている絵か、記憶してください。



「思いがけなく」イリア・レービン




HRD Institute Co., Ltd. © All Rights Reserved. Slide 4

スライド5

どんな覚え方をしましたか？

- 1 描かれている状況を写真撮るように、そのまま映像として記憶しようとしていた
- 2 描かれている対象物を言葉で（右隅に男の子と女の子がいて・・・など）記憶しようとしていた
- 3 描かれている登場人物の感情や関係性をストーリーとして記憶しようとしていた




HRD Institute Co., Ltd. © All Rights Reserved. Slide 5


スライド6

VAK（優位性）モデル

- Alistair Smith を中心にイギリスの初等教育で広く取り入れられたモデル



Visual 視覚的 Auditory 聴覚的（言語的） Kinesthetic 体感的（感情的）

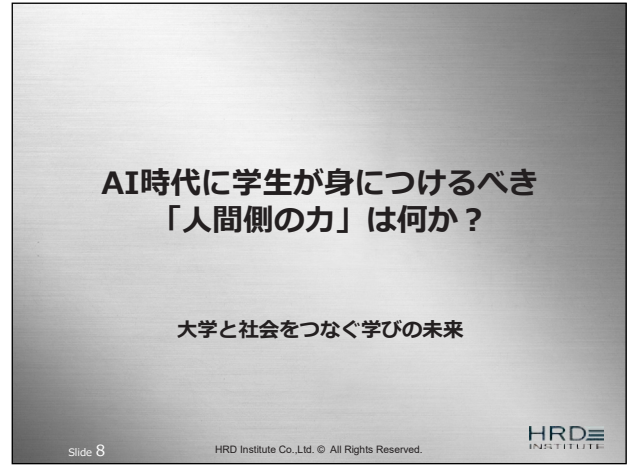


HRD Institute Co., Ltd. © All Rights Reserved. Slide 6

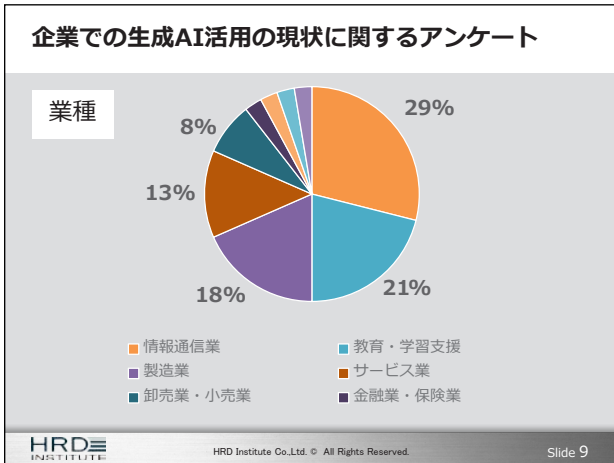
スライド7



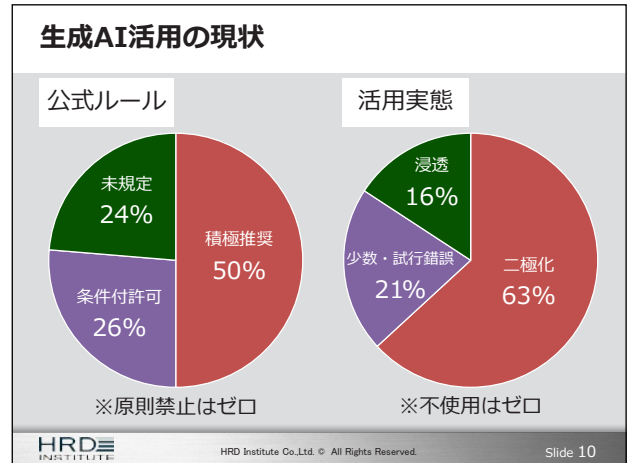
スライド8



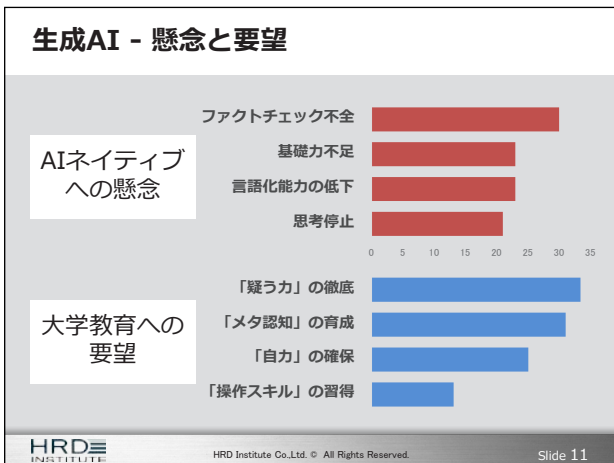
スライド9



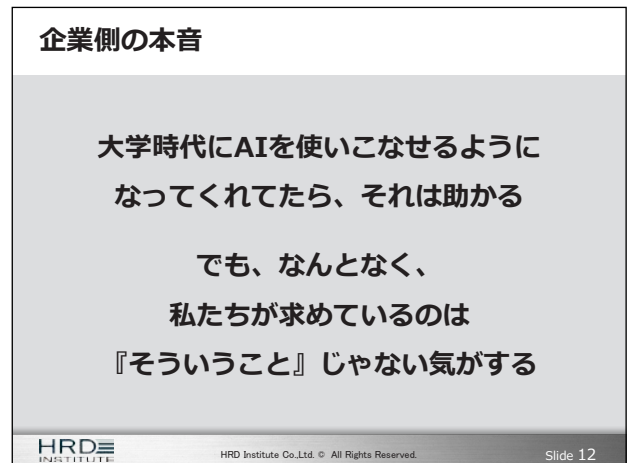
スライド10



スライド11



スライド12



スライド 13

学生（10代）の認識

■ セイコー時間白書2025 | 15~19歳のデータ

<p>AI</p> <p>63%</p> <p>AIによって 時間の幸福度が上がった 40~60代 : 51~55%</p>	×	<p>タイパ</p> <p>70%</p> <p>タイパによって 幸せ・満足を感じる 40~60代 : 55~57%</p>
---	---	---

HRD INSTITUTE HRD Institute Co.,Ltd. © All Rights Reserved. Slide 13

スライド 14

AIでタイパを求める人材の現状（代行型活用）

来週までにレポートをまとめて

これレポートにまとめて

お待たせしました

REPORT

来週までに報告書をまとめて

これ報告書にまとめて

お待たせしました

報告書

HRD INSTITUTE HRD Institute Co.,Ltd. © All Rights Reserved. Slide 14

スライド 15

今日のキーワード

根源的能動性

『イメージ化による知識と学習』佐伯胖(1989)

HRD INSTITUTE HRD Institute Co.,Ltd. © All Rights Reserved. Slide 15

スライド 16

根源的能動性からの「問いの焦点」

空を自由に飛びたいな

鳥はどうやって飛んでいるんだろう？（科学的探究）

なぜ、自分はこれほどまでに『自由に』飛びたいのんだろう？（メタ的内省）

自由に飛べる機械ができたとして、どうすれば事業として成立するだろう？（ビジネス的視点）

HRD INSTITUTE HRD Institute Co.,Ltd. © All Rights Reserved. Slide 16

スライド 17

社会・企業の側から見て、大学の学びに足りないものは何か？

大学と社会をつなぐ学びの未来

HRD INSTITUTE HRD Institute Co.,Ltd. © All Rights Reserved. Slide 17

スライド 18

これからの社会で必要とされるのは・・・

社会に貢献している御社の事業にとっても共感して・・・

私は人体の「ツボ」にたいへん興味があって鍼灸院巡りを・・・

「正解」に忠実型

自発的な実践型

HRD INSTITUTE HRD Institute Co.,Ltd. © All Rights Reserved. Slide 18

スライド 19

「教える | 教えられる」学びの行き着く先



HRD INSTITUTE HRD Institute Co.,Ltd. © All Rights Reserved. Slide 19

スライド 20

最新の学習方略に関するモデル

報酬連動型 学習方略選択モデル

どんな結果となったかの自分の経験に基づき、人は、どのように学ぶかを決めている

Feature-based reward learning shapes human social learning strategies
D. Schultner 他 (2024)

自分の興味から発想する ▼ 安直にAIに頼る

学びに対して学生がどんな方略を取るかに影響を与えているのは、結果を与える側である

HRD INSTITUTE HRD Institute Co.,Ltd. © All Rights Reserved. Slide 20

スライド 21

努力に対しての2つの検証結果

認知的なコスト

意義の感じられない努力を人は極力避ける

内発的な報酬

自分が面白いと感じられる努力は人はあえてそれを選択する

HRD INSTITUTE HRD Institute Co.,Ltd. © All Rights Reserved. Slide 21

スライド 22

社会人教育での挑戦

あなたの「源動力」を表している写真はどれですか？

同じでない / 正解がない / 不完全の面白さや魅力をどう感じてもらうとするのか

HRD INSTITUTE HRD Institute Co.,Ltd. © All Rights Reserved. Slide 22

スライド 23

社会接続の観点で、少子化時代の大学の存在理由とは何か？

大学と社会をつなぐ学びの未来

HRD INSTITUTE HRD Institute Co.,Ltd. © All Rights Reserved. Slide 23

スライド 24

「対等」から生まれる 建設（構成）的相互作用
三宅なほみ *Constructive Interaction and the Iterative Process of Understanding*

既学者 初学者

これは… わからないよ！

この説明ならどうか？ なるほど！

そういつことか！

抽象化して改めて理解する 新たな理解が得られる

HRD INSTITUTE HRD Institute Co.,Ltd. © All Rights Reserved. Slide 24

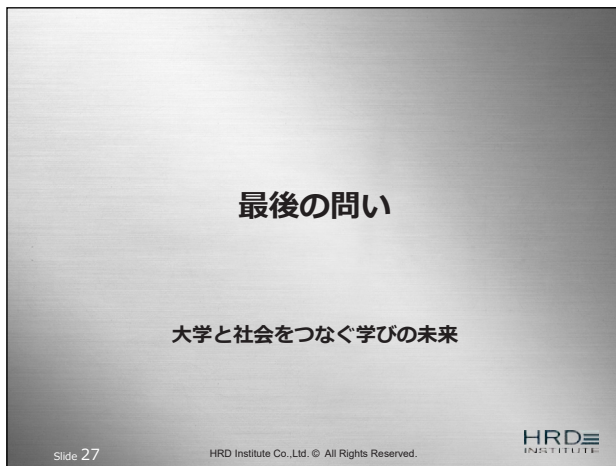
スライド 25



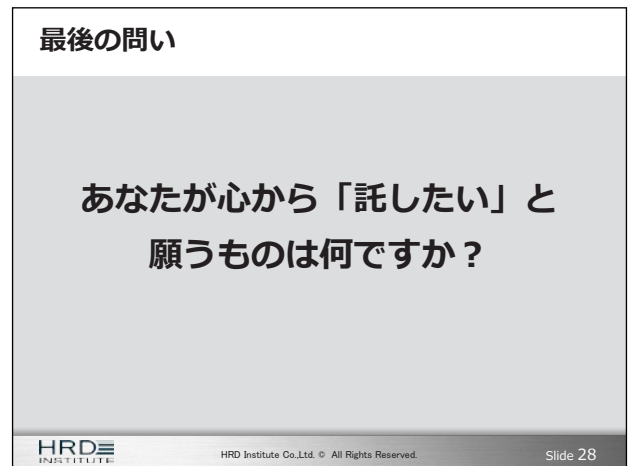
スライド 26



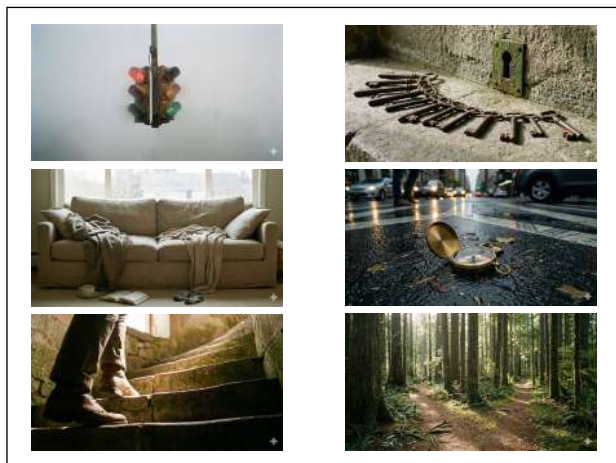
スライド 27



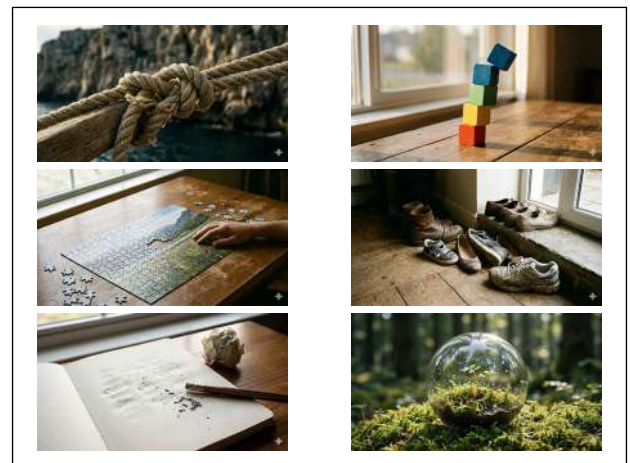
スライド 28



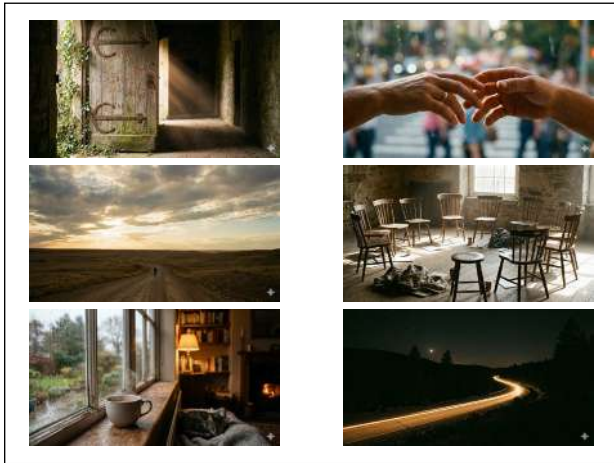
スライド 29



スライド 30



スライド 31



第1分科会

大学における教育評価の在り方再考 ～新学習指導要領導入後の教育評価～

報告者

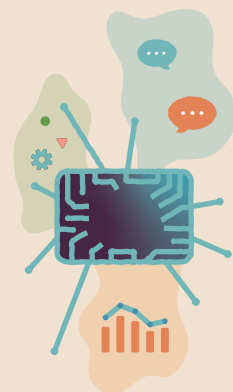
松下 佳代 氏 京都大学 大学院教育学研究科 教授

山下一夫 氏 慶応義塾大学 理工学部 教授

高橋 昌由 氏 大阪成蹊大学 教育学部 准教授

コーディネーター

岩崎 大輔 氏 京都薬科大学 薬学部 講師



〈第1分科会〉

大学における教育評価の在り方再考 ～新学習指導要領導入後の教育評価～

コーディネーター

京都薬科大学 薬学部 講師 岩崎 大輔

○本分科会のねらい

2022年度から高等学校で年次進行で実施されている（現行の）学習指導要領では、育成を目指す資質・能力の三つの柱（「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」）に沿って各教科の目標と内容を再整理し、「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善を図る、指導と評価の一体化を目指している。それに伴い様々な評価方法が導入され、25年度より入学した大学生もそうした評価方法に馴染んでいると思われる。高大接続改革の必要性が声高に叫ばれる今、大学教員は旧態依然の授業や「知識及び技能」のみを重視した評価方法を実施してよいのか、今後の大学の教育評価はいかにあるべきか、その課題と方法を検討したい。

○報告の概要

本分科会は、全体的な話から具体的な問題へという流れで3名の先生方より報告していただき、その後休憩をはさんで質疑応答を行う形式にて行われた。

初めに京都大学大学院教育学研究科教授の松下佳代先生より、「測りすぎの時代の学習評価のあり方を考える—高校と大学の場合—」というタイトルでご報告いただいた。松下先生の報告では、「測りすぎ」の時代といわれる現在において、評価を学ぶ側、教える側の双方にとって意味あるものにすることは可能なかという問いを投げかけた上で、学習評価のタイプ（量的評価と質的評価、直接評価と間接評価）の意味や役割の違いを混同せず使い分けが必要であること、評価に取り組むこと自体が学生・生徒にとって価値ある学習経験になるような「学習としての評価」が大切であることが、大学と高校での事例を示しながら語られた。

次に慶應義塾大学理工学部教授の山下一夫先生より、「新学習指導要領の課題と、大学の外国語授業における対応について」というタイトルでご報告いただいた。山下先生の報告では、現行の学習指導要領について、令和7（2025）年度以降に入学した大学生がこれにもとづく授業を受けてきたこと、また教育研究の最新の成果が反映されパッケージ化されたという側面があることを挙げ、大学側の教員もその内容について検討すべきであることが説かれ、大学で行われている英語以外の外国語の授業においては「主体的・対話的で深い学び」を考えた設計を行う必要があることが語られた。

最後に大阪成蹊大学教育学部准教授の高橋昌由先生より、「『主体的・対話的で深い学び』の実践における課題と対策」というタイトルでご報告いただいた。高橋先生の報告では、「主体的・対話的で深い学び」を実現する大学の英語授業について、その授業実践と評価のあり方が説明された。その説明では、文部科学省の「令和5年度大学入学後の総合的な英語力の育成・評価に関する好事例について」を踏まえ、聞くこと・読むこと・話すこと・書くことの4技能を統合した言語活動を中心とする授業を目指すべきであるという方向性が示された。その上で、英語の授業において重要となる授業運営の基礎・基本、授業デザインの基礎・基本、さらに「教科書で教える」という原則の担保を確認したうえで、市販教科書を用いた英語指導に際して留意すべき点が整理された。具体的には、活動の順序、ストラテジー、スキーマ、語彙指導、文法指導、4技能指導などにおいて陥りやすい盲点が指摘されるとともに、評価活動において注目すべき視点についても示された。

○報告に対する質疑ならびに全体討議の内容

3名の先生方の報告を踏まえ、会場より質問を受け付け、3名の登壇者の先生方が答えるという形式で質疑応答を行った。会場よりいくつかの質問が提出されたが、報告者の方々の経験や立場、個人的信条からの真摯な回答と、回答に対する追加の質問などもあり、非常に有意義な質疑応答となった。

初めにパフォーマンス評価について、例えばルーブリックなどは誰が作成し、評価の場ではどのように

評価を行っているのかについて、先生方がどのように実践しているのか具体例を紹介しつつ教えてほしいとの質問があった。登壇者の立場によって回答は異なり、大学として授業の評価基準が規定されているためそれに則って評価するというものや、ルーブリック自体は教員が作成した上で、パフォーマンス実演時に被評価者（学生）と共有した上で学生自身による自己評価、ピア評価を行うというものもあった。この場合形成的評価に関するものには被評価者が関与してもよいが、最終的な成績評価にかかわる総括的評価は教員が行うということであった。いずれにしてもルーブリック評価に際しては事前にルーブリックの内容、評価方法等を伝え、被評価者と共有することの重要性が説かれ、学生自身が評価を行う際は評価方法に関する練習を行ったうえで評価を行うという手順が示された。また同一科目名で複数開講されている科目を評価する際は教員間でルーブリックの内容について共有、検討することが必要であることも説かれた。その際、専任教員が中心となり活動が行われ、非常勤講師等に対しても事前に入念な説明が必要ということであった。

次に、各報告でなされた評価にかかわる留意点や実践方法は個別の授業運営にかかわることと思われるが、大学ではその上位概念としてカリキュラムや3つのポリシー（AP、CP、DP）、シラバス（到達目標や共通シラバス等）といったものがあるため、それらとはどのように関連付ければよいかとの質問がなされた。これに対して、学部をこえた統一的な基準や評価方法を策定するのは非常に困難であるため、3つのポリシー内にそれらに関係する文言を入れておき、個別に対応すればよいとの回答がなされた。例えばカリキュラムマップ内には各科目が位置づけられているものの、評価の観点は含まれておらず、科目によって何を重視するかで評価項目が変わってくるため、大学としては統一的な目標や理念を掲げておき、各教員がそれぞれの科目に合わせた評価基準を考慮する必要があるとのことである。また同じ質問者より学習指導要領は実施、運用に際して罰則がないため、果たして高等学校の現場でどれほど順守されているか分からないとのコメントもあった。

先の報告内で、直接評価と間接評価と間にずれや乖離が生じる例として、1年次のレポートに関する自己評価では教員の評価以上に自分の能力を高く見積もるとの結果がみられたのに対し、2年次でレポートの構造やルーブリックの理解を深めた結果、教員の評価とのずれが少なくなるとの報告が松下先生よりなされた。この報告内容に関して、どのようにしてこうしたずれの減少がみられたのかという質問がなされた。この点について、2年次まで学習、指導を継続することによって、評価項目の対象の理解とライティング能力の向上によって自己評価能力が向上したのではないかという回答があった。

最後に、分科会のテーマとは直接的には関連しないものの、3つの報告のうち2つが外国語教育に関連する内容であったことから、外国語教育における生成AIの利用についてどのように考え対応していけばよいのかとの質問がなされた。これに対しては山下先生より、かつて電卓が出現した際の議論と同様に生成AIの使用に関してはある程度仕方がないとはいえ、それを（特に外国語として）発信する際には使用している本人の口を介してでないことと表現（発出）できないため、やはり発音等を含めて学習する意義があることや、AIで生成されたものに対するチェックは（現時点では）必ずしなければならないので、それを誰がやるのが問題だという発言がなされた。高橋先生からは、生成AI使用の注意点として、生成されたものに対しては責任を持たず、利用者各自の責任で使用するということという断り書きがある点が挙げられ、AIの限界を知っておくことの重要性が説明された。いずれも学ぶ目的自身は変わらないため、使用の可否ではなくいかにして使用するのか、また使用上の注意点を教員が明確に説明することの必要性が説かれた。これらの返答に対して松下先生より、生成物をただチェックするためだけに英語を何年も勉強しなければならないというのは学習者からして納得できるのかどうか、という問いがなされたが、この問いを含め生成AIの問題について会場では統一的な明確な答えは見いだせず、外国語教育に限らず教育に携わる者みな今後の検討課題として考え続けることの重要性を共有して質疑応答は終了した。

本分科会の狙い通り、教員が自身の授業や評価について絶えず見直しを行い、常に反省と改善とを心掛けなければならないことを強く感じさせられる分科会となった。登壇していただいた3名の先生方と本分科会に御参加いただいた方々に厚く御礼を申し上げる。

スライド 1

2025年度 第31回FD・SDフォーラム
 第1分科会「大学における教育評価の在り方再考—新学習指導要領導入後の教育評価—」
 2026.2.28@同志社大学今出川キャンパス

**測りすぎの時代の学習評価のあり方を考える
 —高校と大学の場合—**

松下 佳代
 京都大学大学院教育学研究科
 matsushita.kayo.7r@kyoto-u.ac.jp

スライド 2

自己紹介

- 専門分野
 - 教育方法学(能力、学習、評価が主テーマ)
 - 大学や中学校・高校をフィールドに
研究と実践支援を行っています
- 実践・研究のフィールド
 - 京都大学、新潟大学歯学部、藍野大学、岡山大学医学部、
東京都市大学、京都芸術大学
 - 高槻中学校・高等学校、初芝富田林中学校高等学校、
関西学院高等部、福島県立安積高等学校 など
- 社会的活動
 - 大学教育学会会長、日本カリキュラム学会代表理事
 - 中央教育審議会大学分科会臨時委員
 - 日本学術会議連携会員 など

(投影のみ)

スライド 3

OUTLINE

- 現代は、「測りすぎ」の時代といわれます。教育の世界でも、とくに2000年代に入ってから、「エビデンスに基づく政策・実践」や「説明責任」の名の下に、教育成果や学習成果の測定・評価が強く要請されるようになってきました。この時代において、評価を、学ぶ側、教える側の双方にとって意味あるものにする事は果たして可能なのでしょうか。
- 本報告では、学習評価のタイプ(量的評価と質的評価、直接評価と間接評価の違いと関係)、パフォーマンス評価やポートフォリオ評価などについて、さまざまな大学と高校での事例を引き合いに出しながらお話しします。

スライド 4

CONTENTS

- 測りすぎの時代
- 学習評価のタイプ
- 測りすぎ・測りまちがい
- パフォーマンス評価とポートフォリオ評価
—「学習としての評価」の考え方—
- まとめ

スライド 5

測りすぎの時代

スライド 6

「測りすぎ」の時代

- ジェリー・ミュラー『測りすぎ—なぜパフォーマンス評価は失敗するのか?—』(副題は誤訳)
→ Jerry Z. Muller: *The Tyranny of Metrics* (メトリクスの暴政)
- メトリクス=測定・測定法・測定基準・測定値といった意味を併せもつ
- メトリクスの暴政=メトリクスが、大学・学校、医療、警察、軍、ビジネス・金融、慈善事業・対外援助といった社会のあらゆる領域に入りこんで、さまざまな悪影響をもたらしていること
- 「メトリクスの暴政」をもたらしている「メトリクスへの執着(metric fixation)」、「測りすぎ」(過剰な測定)だけでなく「測りまちがい」(不適切な測定)を批判

2. 情報はどのくらい有益なのか? [中略]測定のしやすさは測定されるものの重要性とは反比例しているかもしれない。言い換えれば、本当に知りたいことの代用として何を測定しているのかを自問するべきだ。その情報が測定の狙いにとってあまり有益でなかったり、代用としてあまりよくなかったりするのなら、そもそも測定しないほうがよい。(ミュラー, 2019, p.180 *チェックリストの10項目より)

□ ミュラー, J. Z. (2019) 『測りすぎ—なぜパフォーマンス評価は失敗するのか?—』(松本裕訳) みすず書房.

スライド7

測りすぎの時代の学習評価論

- 私の問題意識
 - 測りすぎの時代に、教える側、学ぶ側の双方にとって学習評価を意味あるものにする事は可能か？

「測りすぎの時代の学習評価論」(仮題のみ)

松下佳代(2025)『測りすぎの時代の学習評価論』勁草書房

スライド8

学習評価のタイプ

スライド9

学習評価への要請

- 教員が「何を教えたか」から、学生・生徒が「何を学び、身に付けることができたか」への転換
- 高校:「資質・能力の3つの柱」
- 大学:(例)「学士力」

学士力(文科省, 2008)

知識・理解	<ul style="list-style-type: none"> 多文化・異文化に関する知識の理解 人間の文化、社会と自然に関する知識の理解
汎用的技能	<ul style="list-style-type: none"> コミュニケーションスキル 数量的スキル 情報リテラシー 論理的思考力 問題解決力
態度・志向性	<ul style="list-style-type: none"> 自己管理能力 チームワーク リーダーシップ 倫理観 市民としての社会的責任 生涯学習力
統合的な学習経験と創造的思考力	

資質・能力の3つの柱(現行学習指導要領)

学びの姿勢、人権尊重
どのように社会・世界と関わり、よびよい人生を生きるか

「誰か(自分)と関わりながら」「誰か(他人)と協力しながら」
「誰か(自分)と関わりながら」
「誰か(他人)と協力しながら」

何を理解しているか
何ができるか
知識・技能

理解していること、できること
思考力、判断力、表現力

スライド10

- では、それをどう把握するか → 学習評価の重要性
- 大学の場合
 - 大学設置基準第25条二の2
 - 2 大学は、学修の成果に係る評価及び卒業の認定に当たっては、客観性及び厳格性を確保するため、学生に対してその基準をあらかじめ明示するとともに、当該基準にしたがって適切に行うものとする。
 - 3つのポリシー(特に、カリキュラム・ポリシーのアセスメントプラン)
- 高校の場合
 - 「資質・能力の3つの柱」にそって、
 - 「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の評価(3段階)と、
 - それにもとづく評定(5段階)が求められる

スライド11

学習評価の枠組み

観察可能

パフォーマンス(遂行)

観察不可能

コンピテンス(能力)

可視化

評価課題

評価基準

解釈

- どんな能力(コンピテンス)も、それ自体は観察不可能
- そこで、能力を、何らかの評価課題を通して可視化させ、観察可能なパフォーマンスにする
- そして、そのパフォーマンスを、評価基準を介して解釈することで、パフォーマンスの背後にある能力を推論する

スライド12

学習評価の4つのタイプ

量的評価

質的評価

間接評価

直接評価

II 質問紙調査
自分の学習行動、学習観、興味・関心、学力・能力などに関する質問紙

I 学習者による自分の学びについての記述
感想文、振り返りシート

III 客観テスト
(例)多肢選択問題、正誤問題、順序問題、求積式問題

IV パフォーマンス評価
作品や発表の録音、観察や応答による評価、ポートフォリオ評価

スライド 13

量的評価と質的評価

	量的評価	質的評価
学問的基盤	心理測定学	解釈学、構成主義的学習論など
評価データ	量的データ	質的データ
評価対象	集団または個人	個人
評価目的	選抜、組織的な教育改善、アカウンタビリティ/成績評価	学習や指導の改善/成績評価
評価課題	細かく分割された問題 文脈独立的	複合的な課題 文脈依存性
評価基準	客観性を重視	主観性を重視
評価結果	数値	文章や数値
評価機能	主に総括的評価	主に形成的評価
評価方法	客観テスト、標準テスト、質問紙調査など	パフォーマンス評価・ポートフォリオ評価、ミニッツペーパーなど

13

スライド 14

間接評価と直接評価

- 間接評価
 - 学生の学習行動や学習についての自己報告を通じて、学習成果を間接的に評価
 - 質問紙やミニッツペーパーなど

何ができているか?

- 直接評価
 - 学生の知識や能力の表出を通じて、学習成果を直接的に評価
 - 客観テストやパフォーマンス評価など

何ができるか?

14

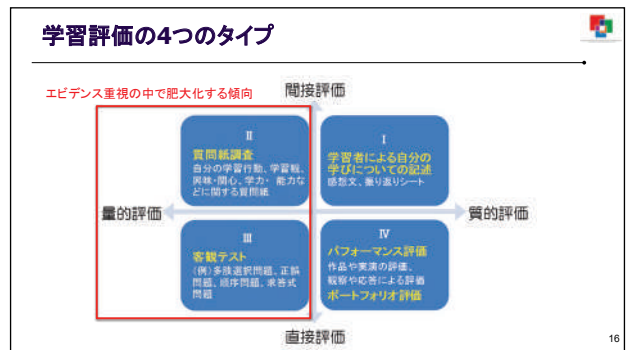
スライド 15

直接評価と間接評価の関係

1. 学習成果の評価のメインは直接評価
2. 直接評価を間接評価によって代替することは困難
 ←「ダニング=クルーガー効果」(Kruger & Dunning, 1999)
 …能力が低い者は能力を過大評価し、高い者は控えめに評価する傾向がある
3. ただし、価値観、興味・関心、成長実感などの学生自身の認知や、学習成果に至る学習行動(学習時間、学習方略など)については、**学生の自己報告が必要**
4. 直接評価vs.間接評価 ≠ 教員による評価vs.学生の自己評価

15

スライド 16



16

スライド 17

測りすぎ・測りまちがい

スライド 18

直接評価を間接評価で代替する「測りまちがい」

- 直接評価と間接評価の関係 (n=59)
- ライティング能力の直接評価 (教員によるパフォーマンス評価)と間接評価(質問紙)の関連項目(2, 4, 12など)の間: **正の相関なし**
- 直接評価を間接評価で代替するのは困難
- 教員評価と学生の自己評価の関係 (n=59)
 - (初年次では) 正の相関なし

変数名	平均値	SD	A[能力]と教員評価との相関係数	A[能力]と自己評価との相関係数
アカデミックライティング能力(教員評価)	1.32	0.29		
アカデミックライティング能力(自己評価)	2.17	0.38	-.076	-.050
1. 一般的な書写	3.14	0.80	-.050	-.122
2. 分析や問題解決能力	2.87	0.85	-.001	-.614 **
3. 専門分野や学級の知識	2.12	0.90	-.111	-.101
4. 学業的に必要な能力	3.09	1.00	-.070	-.387 **
5. 異文化の人々に関する知識	2.66	0.89	-.110	-.270 *
6. リーダーシップの能力	2.78	1.14	-.107	-.541 **
7. 人間関係を構築する能力	2.48	0.96	-.070	-.552 **
8. 他人と協力して物事を遂行する能力	3.87	0.85	-.149	-.328 *
9. 異文化の人々と協力する能力	2.86	0.93	-.049	-.259
10. 地域社会が直面する問題の理解	2.90	0.83	-.057	-.341 **
11. 関心が直面する問題の理解	3.03	0.79	-.092	-.327 *
12. 文章表現の能力	2.88	1.08	-.130	-.338 **
13. フォンネーションの能力	2.76	1.12	-.027	-.348 **
14. 数理的な能力	2.02	0.85	-.103	-.486 **
15. コンピュータの操作能力	2.97	1.14	-.084	-.203
16. 卒業後に就職するための準備の程度	2.62	1.06	-.049	-.104
17. コミュニケーションの能力	3.48	1.01	-.058	-.344 **
18. 時間を効率的に利用する能力	3.03	0.92	-.138	-.241
19. グローバルな問題の理解	2.78	0.88	-.186	-.378 **
20. 読解の能力	2.72	0.91	-.231	-.379 **

**p < .01. *p < .05

18

スライド 19

間接評価の独自の意味

- 「10年トランジション調査」における「資質・能力」の経年変化(溝上・河合誌, 2023)
- 間接評価の意味
 - 価値観、興味・関心、成長実感などの学生自身の認知や学習成果に至る学習行動などは、学生の自己報告に依拠するしかない
 - 学生の心理的現実を物語る：学びと成長の「実態」というよりは「実感」の把握

(投影のみ)

直接評価と間接評価、それぞれの意味と役割を混同せず、使い分け、組み合わせることが必要

溝上 慎一(責任編集)・河合 益(編) (2023)『高校・大学・社会 学びと成長のリアル―「学校と社会をつなぐ調査」10年の軌跡―』学事出版。 19

スライド 20

パフォーマンス評価とポートフォリオ評価 ―「学習としての評価」の考え方―

スライド 21

学習としての評価

- 学習と評価の関係―of, for, as―

アプローチ	目的	参照点	主たる評価者	主な機能
学習の評価 (assessment of learning)	クラス分け、進級・進学、資格認定などに関する判断	他の生徒、スタンダードや期待	教師	総括的評価
学習のための評価 (assessment for learning)	教師の指導上の決定のための情報	外部のスタンダードや期待	教師	形成的評価
学習としての評価 (assessment as learning)	自己モニタリングと自己修正・調整	個人的な目標や外部のスタンダード	生徒・学生	形成的評価

(出典)Earl (2013, p. 31)を訳出し、「主な機能」の列を加筆。

・タイプIVの評価は、「学習の評価」より以上に、「学習のための評価」「学習としての評価」として機能する
・評価に取り組むこと自体が、学生・生徒にとって価値ある学習経験になる →タイプIVの評価

Earl, L. M. (2013). *Assessment as learning: Using classroom assessment to maximize student learning* (2nd ed.). Corwin. 22

スライド 22

タイプIVの評価方法

- パフォーマンス評価 (performance assessment)
 - 一定の意味ある文脈(課題や場面など)の中で行われる学習者のパフォーマンス(作品や実演など)を手がかりに、概念理解の深さや知識・スキルを総合的に活用する能力を評価する方法
- 真正の評価 (authentic assessment)
 - 学習者が、知識や技能などを使って、仕事場や市民生活など現実世界の課題と類似した、本物らしさ(三真正性)をもった課題に取り組ませる評価の方法
- ポートフォリオ評価 (portfolio assessment)
 - ポートフォリオに収められた資料にもとづいて、学習者の成長のプロセスを評価する方法

23

スライド 23

- 3つの評価方法の関係

24

スライド 24

パフォーマンス評価のポイント

【ポイント】

- 目標としてどんな能力をめざすか →コンピテンシ(コンピテンシー)
- どんなパフォーマンスを求めるか →パフォーマンス課題
- どんな評価課題を使うか →パフォーマンス課題
- どんな評価基準で評価するか →ルーブリック
- どこで評価を行うか(診断的・形成的・総括的評価)
- 誰が評価するか(教師、ピア、学生自身、その他)
- 評価結果をどう用いるか(フィードバック、教育・学習改善)

観察不可能

25

スライド 25

ポートフォリオ評価

- 学びの履歴(ストーリー)と成果(エビデンス)を可視化し、共有する
 - 例:京都市立美術工芸高
 - 生徒のポートフォリオ
 - 「四者面談(生徒、担任教師1名、美術工芸教科教員1名、保護者):その学期の学びを振り返る機会

学習としての評価

(投影のみ)

(投影のみ)

図3. カスタマイズされた表紙例 図4. 記録の方法 写真3. 四者面談の様子
(松下他編, 2025, p. 114- 小柳至孝執筆)

スライド 26

- デジタル・ポートフォリオ

京大松下チームでは、デジタル・ポートフォリオを開発し、中・高・大で試行中

ロギンの方法 Googleアカウント、もしくは、Microsoft アカウント

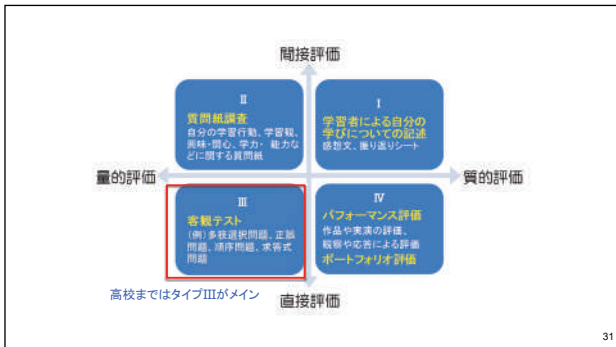
© SIP AICANサイト (<https://e-forum.educ.kyoto-u.ac.jp/sip/teams/5/>)

スライド 27

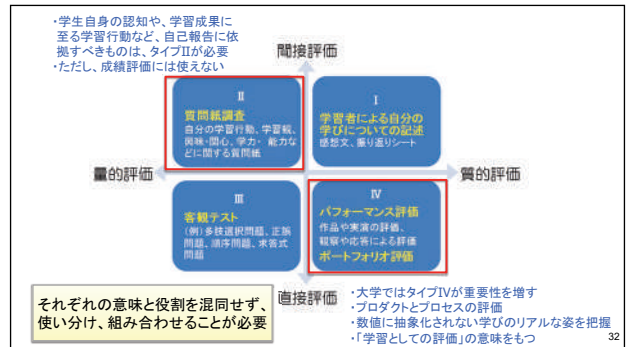
スライド 28

まとめ

スライド 29



スライド 30



スライド 31

- 現在の大学教育における「学修成果の可視化」
 - 数値化、標準化、縮約化 [= 第一次、第二次の可視化]
 - 学生の学習の姿を捉えられているか？
 - 測りすぎ、測りまちがいにっていないか？
 - 教員、学生にとって意味のあるものになっているか？
- ⇕
- 「第0次の可視化」の重要性
 - パフォーマンス評価においては、(パフォーマンスとして表出されているが数値化はされていない可視化の状態) [= 第0次の可視化] が重要。
 - * 評価に対して開かれた状態
 - 多様な人々の多様な観点で解釈・評価される
 - 学習者自身も繰り返し再解釈・評価できる
 - 「その時は分からなくても、あとから振り返ったら、あの経験のあの資料が大事だったと気づいた。」



スライド 32

ご清聴ありがとうございました



松下 佳代
matsushita.kayo.7r@kyoto-u.ac.jp

スライド1

新学習指導要領の課題と、
大学の外国語授業における対応について

山下 一夫

慶應義塾大学外国語教育研究センター所長
理工学部外国語総合教育教室教授

2025年度 第31回FD・SDフォーラム 第1分科会
大学における教育評価の在り方再考～新学習指導要領導入後の教育評価～
2026年2月28日10:40～11:10 同志社大学今出川キャンパス良心館

スライド2

はじめに

スライド3

現行の学習指導要領は、
小学校が令和2（2020）年度、
中学校が令和3（2021）年度から完全実施され、
高等学校は令和4（2022）年度の第1学年から
学年進行で実施されました。

現役で大学に入学した学生の場合、
令和7（2025）年度の1年生は、
現行の学習指導要領の最初の世代です。

スライド4

学習指導要領と言うと、
大学教員は自分には関係ないと思い、
反発を覚えたりするかも知れません。

①平成10（1998）年版の「ゆとり教育」の記憶で、
「ロクなものではない」という印象を持っている。

スライド5

②大学は研究をする所だから、
小中高の学習指導要領など考える必要はない、
と思っている。

③大学行政で文部科学省に反感があったり、
スタンスとして「反権力」なので、
「お上」にアレルギー反応がある。

スライド6

もちろん現行の学習指導要領にも、
様々な問題があります。

外国語教科だと、最大の問題は、
英語で学習すべき単語数の大幅な増加です。

以前のは計3000語（中学1200語+高校1800語）でしたが、
現行版は計4000語～5000語（小学600語～700語+中学1600語
～1800語+高校1800語～2500語）です。

スライド7

「英語力を高める」つもりでしょうが、
こんなに増やすと「落ちこぼれる」生徒が出ます。

それを承知でやったということは、
「一部の英語エリートを養成できれば、それで良い」
と思ってるのではと、勘ぐりたくなります。

スライド8

しかし問題があるからといって、
大学教員は「見ないで良い」わけではありません。

①大学の教室でいま目の前にいるのは、
学習指導要領の改訂で、
教員自身が過去に高等学校で受けたのとは異なる
外国語教育を受けた学生です。
大学は今後、これを念頭に授業を行う必要があります。

スライド9

②学習指導要領の策定には研究者も多数参与し、
教育研究の最新の成果が反映され、それらが
組み合わされたパッケージという側面もあります。

特に、いわゆる「アクティブラーニング」について
はかなり議論が深化しており、
大学側も参考にすべき内容になっています。

スライド10

学習指導要領で批判すべき部分は批判し
(またそれは現在進行中の改訂作業に反映させつつ)、

上記の2点については、
大学教員もきちんと検討する必要があります。

本講演は、「新学習指導要領の課題と、
大学の外国語授業における対応について」と題し、
大学の外国語科目について考えたいと思います。

スライド11

なお、大学の外国語授業は様々な種類があります。

ほぼ必修となっている英語もあれば、
古典ギリシア語やサンスクリット語のように
口語としては死語の古典語もあり、
また留学生を対象にした日本語もあります。

そしてドイツ語・フランス語・中国語・スペイン語・
朝鮮語・ロシア語のような、
いわゆる「第2外国語」もあります。

スライド12

「第2外国語」も、
国外にルーツを持つ「ニアネイティブ」には、
「継承語教育」を行う必要もあります。

しかし今回は小・中・高の英語と相似形を成す、
「第2外国語初修クラス」、それも、
文学部・外国語学部で当該言語を専攻するのではなく、
数の上では最も多い、
他の学部で選択必修として学ぶ学生を対象にします。

スライド 13

知識及び技能

スライド 14

高等学校学習指導要領 第2章第8節外国語第1款

(1) 外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの理解を深めるとともに、これらの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて、目的や場面、状況などに応じて適切に活用できる技能を身に付けるようにする。

スライド 15

高等学校学習指導要領 (平成30年告示) 解説 外国語編 英語編

(1)は、外国語科における「何を理解しているか、何ができるか」という「知識及び技能」の習得に関わる目標として掲げたものである。本目標は、「外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの理解を深める」という「知識」の面と、その知識を「聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて、目的や場面、状況などに応じて適切に活用できる」という「技能」の面とで構成されている。平成28年12月の中央教育審議会答申にもあるとおり、ここでは「生きて働く『知識・技能』の習得」を重視している。

スライド 16

今までは「知識」を多く詰め込むことが優先でした。外国語も、語彙・文法という「知識」を、網羅的に、1つでも多く、細かく教えて「お終い」でした。

「知識」を100個教え、答えられたのが100個なら100点、80個なら80点、60個なら60点で、これで成績、そして学力のランク付けをしていました。

しかし「知識」を使って何ができるようになるかは、疎かにされてきた側面があります。

スライド 17

しかも今は、覚えていなくても、スマホやAIで調べれば「知識」は出てきます。そのため「知識」を使って何ができるようになるかが、今まで以上に大事になります。

だからこれからは、語彙・文法という「知識」は、実際のコミュニケーションで活用できる「技能」とセットで、「生きて働く」よう教えようと言うのです。

スライド 18

教員が学生に一方向的に「知識」を伝達する授業や、無目的に細かい文法知識の注入を行う授業はダメで、実際のコミュニケーション場面での言語運用を重視した授業が推奨されることとなります。

もちろん、授業をしているのは同じ人ですから、学習指導要領でいきなり全部は変わりません。しかし中・高ではそこに向けた努力が始まっていて、そうした授業を受けた学生が大学に入学します。

スライド 19

大学の「第2外国語初修クラス」はどうでしょうか。

「大学は研究」を言い訳に、「知識」の注入という、旧来的な授業が少なくないように思います。

それでも文学部・外国語学部なら「次」があります。講読や会話の授業があり、場合によっては留学します。

そこでは、実際のコミュニケーションで活用できる「技能」とセットで「生きて働く」かも知れません。

スライド 20

「第2外国語初修クラス」担当教員もほとんどは、それで成功体験がある外国語学部・文学部出身者で、そのため「初級は知識の注入」に疑問を持ちません。

しかしそれ以外の学部はどうでしょうか。

多くの場合、上級生での講読や会話の授業は無く、留学もしません。

スライド 21

そうすると、実際のコミュニケーションで活用できる「技能」とセットで「生きて働く」ことはありません。

ならば、大学の「第2外国語初修クラス」も、実際のコミュニケーションで活用できる「技能」とセットで「生きて働く」よう、授業設計をしても良いのではないのでしょうか。

スライド 22

思考力・判断力・表現力等

スライド 23

高等学校学習指導要領 第2章第8節外国語第1款

(2) コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、外国語で情報や考えなどの概要や要点、詳細、話し手や書き手の意図などを的確に理解したり、これらを活用して適切に表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。

スライド 24

高等学校学習指導要領 (平成30年告示) 解説 外国語編 英語編

(2) は、外国語科における「理解していること・できることをどう使うか」という「思考力、判断力、表現力等」の育成に関わる目標として掲げたものである。…平成28年12月の中央教育審議会答申においても、「未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』の育成」のため、思考・判断・表現の過程として「精査した情報を基に自分の考えを形成し、文章や発話によって表現したり、目的や場面、状況等に応じて互いの考えを適切に伝え合い、多様な考えを理解したり、集団としての考えを形成したりしていく過程」などに言及している。

スライド 25

文法という「知識」を学び、
それを実際のコミュニケーションで活用できる
「技能」を学んでお終い、ではありません。

さらにその先があります。

スライド 26

実際のコミュニケーションでは、
習った文法の単純な置換では済まず、
目的・場面・状況に応じた対応が必要になります。

そうした「未知の状況にも対応できる」ような
「思考力・判断力・表現力等」を養成しましょう、
ということです。

スライド 27

生徒が「未知の状況にも対応できる」には、
自分で考えさせる必要があります。

そうすると必要になるのは、
「教員が一方向的に学生に知識を教える授業」ではなく、
「教員が学生の能力の養成をサポートする授業」です。

中・高の英語はそこに向けて動き出していることを、
大学の語学教員は認識する必要があります。

スライド 28

学びに向かう力・人間性等

スライド 29

高等学校学習指導要領 第2章第8節外国語第1款

(3) 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、
聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主
体的、自律的に外国語を用いてコミュニケーションを
図ろうとする態度を養う。

スライド 30

高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 外国語編 英語編

(3) は、外国語科における「どのように社会や世界と関わり、
よりよい人生を送るか」という「学びに向かう力、人間性
等」の涵養に関わる目標として掲げたものである。
…平成28年12月の中央教育審議会答申では、この「学びを人
生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』の
涵養」は、(1)「知識及び技能」や(2)「思考力、判断力、
表現力等」の資質・能力をどのような方向性で働かせていく
かを決定付ける重要な要素とされている。

スライド 31

文法や語彙などの「知識・技能」を、
「未知の状況にも対応できる」よう、
「実際のコミュニケーションにおいて活用」とセット
で教えるだけでは終わりません。

さらにもう一つ先があります。

スライド 32

「学びを人生や社会に生かそうとする
『学びに向かう力・人間性等』の涵養」です。

そしてそれは外国語科目の場合、「外国語を用いてコ
ミュニケーションを図ろうとする態度の養成」です。

これが最終的なゴールです。

スライド 33

もちろんこうした理念が、すべての中・高で、
急に実現できているわけではありません。

成績も「三観点別評価」が導入されましたが、
例えば「学びに向かう力・人間性等」の「態度」
という言葉に囚われ、

「授業態度が悪いから減点」といった、
趣旨を理解していない教員もいるかも知れません。

スライド 34

また中・高は「3年生の受験」という現実もあります。
しかしだからといって、教員が近視眼的な入試対策
ばかり行うのは良くないでしょう。

「外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする
態度」を養成することで、外国語を勉強する意欲や、
学習ストラテジーを獲得すれば、自分で勉強を続けて
いけますし、それは他分野にも応用できます。

スライド 35

大学の「第2外国語」で言えば――

上級生で講読などの専門科目がなく、留学にも行かず、
初級だけで終わってその後外国語を使わないとしても、
そこで獲得した「態度」は「人生や社会に生」きます。

それは、「何のために第2外国語をやっているのか」
という問いへの回答の1つにもなります。

スライド 36

いわゆる「アクティブラーニング」

スライド 37

高等学校学習指導要領 第1章第3款

単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うこと。
特に、各教科・科目等において身に付けた知識及び技能を活用したり、思考力、判断力、表現力等や学びに向かう力、人間性等を発揮させたりして、学習の対象となる物事を捉え思考することにより…（以下略）

スライド 38

「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」がセットになって「主体的・対話的で深い学び」を実現します。

「主体的・対話的で深い学び」とは、中教審答申の段階では「アクティブラーニング」と言っていたもので、議論の深まりとともにリネームされました。

スライド 39

しかし大学業界では、中教審段階の「アクティブラーニング」という言葉が独り歩きしました。

もちろんきちんと検討し応用した大学教員もいますが、一方で定義や理論付けもせず喧伝した大学では、「座学をやめて、アクティブなラーニングをやれば、それがアクティブラーニング」と言わんばかりです。

スライド 40

学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」は、もちろん「アクティブラーニング」の唯一のあり方ではありません。

しかし、もし何も考えず「アクティブ」などと言っている場合は、これが「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」がセットではじめて実現するという思想と、少なくともきちんと格闘すべきでしょう。

スライド 41

CEFRとパフォーマンス課題

スライド 42

高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 外国語編 英語編

国際的な基準であるCEFRを参考に、五つの領域で外国語科の各科目の目標を設定している。…今回の改訂では、小学校中学年に新たに外国語活動を導入し、三つの資質・能力の下で、英語の目標を「聞くこと」、「話すこと[やり取り]」、「話すこと[発表]」の領域において設定し、音声面を中心とした外国語を用いたコミュニケーションを図る素地を育成した上で、高学年において「読むこと」、「書くこと」を加えた教科として外国語を導入し、五つの領域の言語活動を通してコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成することとしている。

スライド 43

外国語学習指導要領では、従来の「聞く」「読む」「書く」「話す」の4技能だけでなく、CEFR (Common European Framework of Reference for Languages) の、「聞く」「読む」「書く」「話す [やり取り]」「話す [発表]」の5領域が採用されています。

日本でCEFRと言うと、A1～C2の「共通参照レベル」を語学検定の級にあてはめ、「上に行くほどエライ」と勘違いされますが、本来の狙いは違います。

スライド 44

数学で言えば、大学の理系に進学するための数学Ⅲを全ての人間が学ぶ必要はなく、ちょっとした大工仕事での計算なら中学数学で足り、街で買い物するだけなら小学校の算数で充分です。

これと同じく、外国の大学で専門の研究をする人ならC1ですが、店で買い物するだけならA2というように、「場面」「状況」「目的」に応じたレベル設定です。

スライド 45

外国語学習指導要領ではCEFRに基づいて、「場面」「状況」「目的」に応じた、「話す [やり取り]」「話す [発表]」の学習を推奨しています。

これは単純なペーパーテストだけでは難しく、そのため高等学校の英語教育の現場では、「パフォーマンス課題」等の導入も始まっています。

スライド 46

「パフォーマンス課題」は、単元で学習した語彙・文法の「知識」を使い、実際のコミュニケーション場面を想定して、場面・状況・目的を設定したテーマで「話す [発表]」をし、質疑応答で「話す [やり取り]」をします。

大学の「第2外国語初修クラス」に応用すると、次のようなものです（少し単純な例を挙げます）。

スライド 47

大学に中国から留学生がやってきました（場面）。キャンパスは広く、どこでどの授業を受けるのか、どこで食事が取れるのか分からず、戸惑っています（状況）。そこで、中国語を使ってその留学生に、キャンパスを案内してみましょう（目的）。

スライド 48

教科書第10課では、方位詞（～の右・左・中・外・側・前）、「…在～」（…は～にある）、「～有…」（～に…がある）といった文法や、建物に関する単語が出てきます。

「学んだこれらの知識・技能を使って課題」ではなく、「課題のためにはこうした知識・技能が必要」として、一般に言われる両者の関係性を逆転させます。

スライド 49

第10課の本文は「大学のキャンパスの案内」なので、学生がこれをモデル文に組み替えることで、オーセンティシティを獲得するとともに、主体的・自律的に外国語を使う態度を養成できます。

スライド 50

ここでは少し単純な例のみを挙げましたが、パフォーマンス課題は様々なやり方があります。

また、自動翻訳やAIなどICTをどう活用するか、ルーブリックやふり返しシート等でどう評価するか、PBL (Project Based Learning) でどう行うか等、詳細については関連の書籍や論文が幾つもあります。

スライド 51

高橋昌由先生が優れた書籍を出版されていますし、講演者が作成に関わった以下のマニュアルもあります。

『外国語教育を変えるために』（境一三、山下一夫、吉川龍生、縣由衣子、三修社、2022年）

『外国語の授業づくりの手引きVer.1』（2025年）
<https://user.keio.ac.jp/~yamashita/gaikokugokyo-ten/tebiki1.pdf>

スライド 52

おわりに・最大の課題は「同僚の説得」

スライド 53

「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業は、方法論が確立してきているので、自分でゼロから開発しなくても、すでに幾つも発表されているマニュアルや、これに対応した教科書などを使えば、授業での導入は決して難しいことはありません。

スライド 54

問題はむしろ、教員側の意識改革です。

特に、自分自身が「主体的・対話的で深い学び」の重要性を理解し、そこに進もうとしても、同僚はそうではありません。前時代的な文法講義授業に固執し、カリキュラムもそれで設定してきたりします。

実際、長年それでやってきた教員は、今さら授業を変えることはできなくなっています。

スライド 55

「パフォーマンス課題って大事ですよ」と言っても、
「そんなものでは成績の公平性が担保できない」
「文法の枠組を与えることが大事だ」
「会話したければ留学に行け」
「CEFRなんぞ知らん」と抵抗します。

それが専任の「ボス」である場合、
非常勤講師などは言うとおりにするほかありません。
そうした「同僚の説得」が、
実は最大の課題であると言えるでしょう。

スライド1

大学コンソーシアム京都2025年度第31回FD・SDフォーラム
2026年2月28日同志社大学今出川キャンパス良心館

「主体的・対話的で深い学び」の 実践における課題と対策

大阪成蹊大学
高橋昌由

1

スライド2

発表の趣旨

- 「主体的・対話的で深い学び」に関する英語指導に特化した一連の編著書刊行の経験ももに、学習指導要領に基づく教育の実践から、大学教育においてどのような授業・評価が求められる（かもしれない）のかを、高次接録の観点も含めて、提案します。
- 「主体的・対話的で深い学び」は中等教育までのテーマですが、そのような授業を受けてきた高校生が、大学進学後に戸惑うことなどはないのかを端緒に、学生がスムーズに授業・評価等に対応するために、大学教員が、知っておかねばならない（かもしれない）こと、意識を変えなければならない（かもしれない）こと、考えておかねばならない（かもしれない）ことなどを、私の守備範囲から発表します。

2

スライド3

contents

- はじめに（自己紹介、「主体的・対話的で深い学び」のシリーズ、発表の限界）
- 「主体的・対話的で深い学び」の授業：中学校・高校の授業
- 大学のあるべき？英語授業
- 大学のあるべき英語授業！
- 大学のあるべき英語授業！：主対深の授業の言語活動と評価
 - 大学のあるべき英語の授業！：主対深の授業の言語活動
 - 大学のあるべき英語の授業！：主対深の授業の評価
- おわりに

3

スライド4


はじめに

4

スライド5

自己紹介

- 経歴
大阪成蹊大学教育学部英語教育コース准教授
⇔ 大阪府立高校教諭・指導教諭・首席、津山高専教授
- 担当科目
英語科指導法、学校体験活動、教育実習、教職実践演習
- 研究
学習英文法、宿題、多読、CLIL



5

スライド6

拙著「主体的・対話的で深い学び」のシリーズ



6

スライド7

本発表の“前提”

- 現行学習指導要領に基づく。よって、次期学習指導要領や話題のAIも扱わない。*2017年学習指導要領告示、2019年12月GIGAスクール構想発表、2020年3月11日WHOパンデミック宣言、ChatGPT公開2022年11月30日。ちなみにGIGAスクール構想：2019年12月発表、2020年度コロナの影響で前倒し実施、2021年度初めまでほぼ全国で「1人1台端末」整備完了。
- 大学1年次生の「一般教養の英語」、A2・B1レベル、通常教室での対面での授業実施、クラスサイズ50人程度を想定している。
- 応用言語学などには深入りしない。

* 文献の提示は簡略している場合もあります。

7

スライド8

「主体的・対話的で深い学び」の授業：中学校・高校の授業

8

スライド9

「主体的・対話的で深い学び」の授業

「主体的・対話的で深い学び」の授業はコミュニケーション能力の育成の授業！

→「主体的・対話的で深い学び」の授業とは？

- 『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説』
 - 第3節外国語目標（p.12）
 - 第3章第1節指導計画作成上の配慮事項（p.123）

proactive, interactive and authentic learning

* 高校学習指導要領（解説）は以降ページのみ。

9

スライド10

「主体的・対話的で深い学び」の授業 “「主体的・対話的で深い学び」の実現”

（「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善）について（イメージ）

「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を行うことで、学校現場における深い学びを実現し、学習意欲を高め、知識・能力を身に付け、主体的に学び続けるようすること。

【主体的な学び】
 学習者自身が主体的に学び、自ら考え、自ら表現し、自ら行動し、自ら学び続けること。主体的な学びは、学習者自身が主体的に学び、自ら考え、自ら表現し、自ら行動し、自ら学び続けること。

【対話的な学び】
 学習者同士が対話を通じて学び、互いに学び合い、互いに学びを深めること。対話的な学びは、学習者同士が対話を通じて学び、互いに学び合い、互いに学びを深めること。

【深い学び】
 学習者が深い理解を達成し、知識・技能を応用し、自ら考え、自ら表現し、自ら行動し、自ら学び続けること。深い学びは、学習者が深い理解を達成し、知識・技能を応用し、自ら考え、自ら表現し、自ら行動し、自ら学び続けること。

10

スライド11

「主体的な学び、対話的な学び、深い学び」

【主体的な学び】 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、**見通し**を持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」

【対話的な学び】 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、**先哲の考え**方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」

【深い学び】 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「**見方・考え**方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだし解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」

* Remember（記憶）、Understand（理解）、Apply（応用）、Analyze（分析）、Evaluate（評価）、Create（創造）

11

スライド12

「主体的・対話的で深い学び」の授業 統合的な言語活動の授業

「主体的・対話的で深い学び」の授業及びコミュニケーション能力の育成の授業は**統合的な（統合した）言語活動の授業！**

→**統合的な（統合した）言語活動の授業とは？**

- 統合的な言語活動：「複数の領域を結び付けた」（例 p.8）「複数の領域を関連付けた」（例 p.11）
- 「高等学校においては、中学校における五つの領域を有機的に関連させた活動を通じた指導を踏まえ、複数の領域を結び付けた統合的な言語活動の二層の充実を図ることが重要である」（p.123）
 - * 五つの領域：聞くこと、読むこと、話すこと【やり取り】、話すこと【発表】、書くこと
- 「五つの領域を統合的な言語活動を通して総合的に指導するとともに、中学校における学習内容の確実な定着と更なる能力の強化を図る」（p.8）
- 「中学校における学習を踏まえ、五つの領域別の言語活動及び複数の領域を結び付けた統合的な言語活動を通して、五つの領域を総合的に扱うことを一層重視する必修科目として『英語コミュニケーションⅠ』を認定し、更なる総合的な英語力の向上を図るための選修科目として『英語コミュニケーションⅡ』及び『英語コミュニケーションⅢ』を設定した。」（p.8）

integrated skills activities

12

スライド 13

「主体的・対話的で深い学び」の授業 **統合的な言語活動**

- 統合的な言語活動：「複数の領域を結び付けた」（例 p.8）、「複数の領域を関連付けた」（例 p.11）
- 「統合的な言語活動とは、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと〔やり取り〕」、「話すこと〔発表〕」、「書くこと」の複数の領域を結び付けて統合した言語活動のことであり、中学校の外国語科においても、複数の領域を関連付ける統合的な言語活動を視野に入れた目標が設定されているが、高等学校では、こうした統合的な言語活動を一層重視した目標設定がなされている。」（p.13）
- 一つの領域を他の領域と結び付けた統合的な言語活動（p.21）
「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと〔やり取り〕」、「話すこと〔発表〕」、「書くこと」の言語活動やこれらと結び付けた統合的な言語活動」（「英語科」p.151）
- integrated skills activities（□□30年改訂高等学校学習指導要領英訳版（仮訳）外国語PDF）

13

スライド 14

「主体的・対話的で深い学び」の授業 **統合的な言語活動の授業**

学習指導要領における「4技能」の考え方

例

14

スライド 15

「主体的・対話的で深い学び」の授業 **高校の授業 英コミュI 聞くこと Aに関連した言語活動の展開**

聞くこと
A 日常的な話題について、話される速さや、使用される語句や文、情報量などにおいて、多くの支援を活用すれば、必要な情報を聞き取り、話し手の意図を把握することができるようにする。

- ある日常的な話題について、生徒の興味や理解を促すために、教師とALTが行う対話を聞いたり、短い動画を視聴したりする。
- ①で聞いたり観たりした内容について、生徒間で意見を交換し合う。
- 聞いている間に、または聞いた後に聞き取った内容をメモに取ったり表にまとめる。その際、教師が例えば「誰が、どこで、何をやるか」等の実際に聞き取る必要のある情報を事前に提示することなども考えられる。
- ペアやグループになって、聞き取ったメモを基に、聞いた内容を口頭で要約する。
- 教師と生徒のやり取りを通して聞き取った内容について確認する。（p.43）

15

スライド 16

「主体的・対話的で深い学び」の授業 **高校の授業(外国語・英語)**

※下線は必修科目

平成 21 年告示学習指導要領	平成 30 年告示学習指導要領
コミュニケーション英語基礎(2単位)	英語コミュニケーションⅠ(3単位)
コミュニケーション英語Ⅰ(3単位)	英語コミュニケーションⅡ(4単位)
コミュニケーション英語Ⅱ(4単位)	英語コミュニケーションⅢ(4単位)
コミュニケーション英語Ⅲ(4単位)	論理・表現Ⅰ(2単位)
英語表現Ⅰ(2単位)	論理・表現Ⅱ(2単位)
英語表現Ⅱ(4単位)	論理・表現Ⅲ(2単位)
英語会話(2単位)	

どの科目でも統合的な言語活動!

16

スライド 17

「主体的・対話的で深い学び」の授業 **高校の授業 科目構成**

小中高で一貫した目標を実現するためにCEFRを参考に五領域で外国語科の各科目の目標を設定して、五領域を**統合的な言語活動**を通して総合的に指導する科目構成

* CEFR : Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment 外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠

- 「小学校及び中学校、高等学校で一貫した目標を実現するため、そこに至る段階を示すものとして国際的な基準であるCEFRを参考に、五つの領域で外国語科の各科目の目標を設定している。」（p.7）
- 「五つの領域を統合的な言語活動を通して総合的に指導するとともに、中学校における学習内容の確実な定着と更なる発信力の強化を図る観点から、科目の構成を改善した。」（p.8）

17

スライド 18

「主体的・対話的で深い学び」の授業 **高校の授業 授業は英語で**

「生徒が英語に触れる機会を充実させるとともに、授業を**実際のコミュニケーションの場面**とするため、**授業は英語で行うことを基本とする**。その際、生徒の理解の程度に応じた英語を用いるようにすること。」（p.126）

「教師が授業中に積極的に英語を使用することで、生徒の豊富な英語使用を促すことと併せて、英語による言語活動を行うことを授業の中心とすることを示している。」（p.127）

「『授業は英語で授業を受ける』という考え方は、英語の学習に『授業は英語で授業を受ける』という考え方を基本とする。』（p.127）

「授業を実際のコミュニケーションの場面とする」ことを主眼として、教師の積極的な英語使用が求められるのである。（p.127）

画/『授業は英語で授業を受ける』という考え方は、必要に応じて積極的に日本語を用いるべきである。（中野氏、p.87）

「もしもこれまで日本語での文法説明や本文の訳語などに偏った授業を行っていたならば、そうした授業の在り方を再見し、必要な意味内容をいかに英語で伝えることができるかを考え授業工夫改善していかねばならない。」（中野氏、p.87）

18

スライド 19

大学のあるべき?英語授業

SORRY!

19

スライド 20

大学のあるべき?英語授業 高校の定番から離れて **SORRY!**

- 6つの改善策
 - 中学までの学びを活かした「適切な教材」×「繰り返し」×「使う」の6つの改善策 (金谷他, 2023)
- four strands
 - 言語学習を4つの等しく重要な学習領域にバランスよく配分 (Nation, 2024)
- TBLT×CLIL×主対深
 - TBLTを土台にCLILの4Csを反映させた主対深の授業 (高橋, 2023)

20

スライド 21

大学のあるべき?英語授業 高校の定番から離れて「6つの改善策」

中学までの学びを活かして、高校でさらに力を伸ばすために、「適切な教材」×「繰り返し」×「使う」×「使わせる」ことを実施可能な6つの改善策提案

- 捨てる: TANABU Model
- 易しくする: 三本木メソッド
- 繰り返す: 山形スピークアウト方式
- ラウンドで繰り返す: 5ラウンドシステム
- 併せる: KitaCom
- 特別プログラムを作る: コアラ (コアラニング)
 - 中高ギャップ解消のカリキュラムとして提案された「ミラカリ」 (金谷, 2024)

SORRY!

21

スライド 22

大学のあるべき?英語授業 高校の定番から離れて「6つの改善策」

TANABU Model

コース	授業の流れ	時間数
超こってり	概要把握→詳細理解→語彙&表現活動→音読活動 →パフォーマンステスト	15時間
こってり	概要把握→詳細理解→語彙&表現活動→音読活動 →ディクテーション→リプロダクション	12時間
あっさり+	概要把握(リスニング) → 語彙&表現活動 → 音読活動 → ディクテーション → リプロダクション	6時間

18!

SORRY!

22

スライド 23

大学のあるべき?英語授業 高校の定番から離れて **four strands**

four strands	techniques
意味重視のインプット (meaning-focused input)	多読、多聴・視聴、*情報変換活動 (information transfer)、技能統合活動、プロジェクト学習
意味重視のアウトプット (meaning-focused output)	スピーキング、インフォーマルな会話活動、スピーチ、多書、情報変換活動、プロジェクト学習
言語形式重視の学習 (language-focused learning)	ディクテーション、おぼろげな発音練習、精読、ライティングへの代替ライティング、置換表 (substitution)、語彙フラッシュカード、学習者トレーニング
流暢さの育成 (fluency development)	easy listening、4/3/2、速読、10分間ライティング、技能統合活動、プロジェクト学習

The principle:

- バランスの取れた言語コースは、次の4つの等しいストランドを通して学習の機会を提供する。
- 理想的には、各ストランドで用いられる教材は互いに類似していることが望ましい。我々の言語的特徴がほぼ共通となり、十分な反復が確保される。
- 4つのストランドは必ずしも毎回の授業で全て扱われる必要はないが、1か月以上の期間で見た場合には、各ストランドにほぼ等しい時間が配分されているべきである。 (Nation, 2024, p. 6)

SORRY!

23

スライド 24

大学のあるべき?英語授業 高校の定番を離れてTBLT×CLIL×主対深

『英語授業「主体的・対話的で深い学び」を高めるために』 (高橋, 2023)

TBLT: Task Based Language Teaching CLIL (内容言語統合学習)

Pre-task

Task cycle
Task | Planning | Report

Language focus
Analysis | Practice

TBL (Willis, 1996)

『南藤英二先生の『授業の10の原則』 (南藤, 1996)

- やさしいものをむずかしく教えるな
- 学んだものを使わせよ
- 英語についての説明はできるだけ避けよ
- 生徒を動かせ
- ゲーム化を考えよ
- 教師がやってみせよ
- 絵を使え
- 相訳をできるだけ避けよ
- 生徒の相互活動を考えよ
- 教師はできるだけ英語を使え

SORRY!

24

スライド 25

大学のあるべき英語授業！

25

スライド 26

大学のあるべき英語授業

「令和5年度大学入学後の総合的な英語力の育成・評価に関する好事例について」
https://www.mext.go.jp/content/20240529_mxt_daigaku01-00000144_01.pdf

- ・ 令和5年度は学部段階における総合的な英語力の育成・評価に関する好事例について取りまとめる
- ・ 英語力が伸びていない実態の改善は喫緊の課題
 - 1 年次後半と比較して2~4 年次で英語運用能力が低下している可能性
 - 「大学教育が外国語を使う力の育成に役に立っている」と考える大学生の割合が30.6%
 - ・ ・ ・ TOEFL・IELTS のテストで平均スコアが低い現状は、大学での英語教育がうまく機能していない可能性
- ・ 英語の能力について必ずしも十分な位置付けがなされていない実態
 - 卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）への記載が「学部全体の方針に記載有り」又は「学部内のすべての学科・コース等の方針に記載有り」が全学部の25.0%
 - 同様に教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）への記載が35.2%
 - 入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）への記載が37.3%となっているなど

26

スライド 27

大学のあるべき英語授業！ 文科省が示す4つの好事例！

・ 「令和5年度大学入学後の総合的な英語力の育成・評価に関する好事例について」

27

スライド 28

大学のあるべき英語授業！ 文科省が示す4つの好事例！ ポイント

<p>東京外国語大学</p> <p>－ 入試及び授業等で使用する4技能の教材を独自に開発</p>	<p>京都工芸繊維大学</p> <p>－ 外国語習得を促すインプット及びアウトプット量を増やすことを目指し、多読多聴を主眼に置いたプログラム</p>
<p>明治大学</p> <p>－ 実践的な4技能をバランスよく身につけながら、教養や専門知識を英語により学ぶ</p>	<p>東京都市大学</p> <p>－ 東京都市大学オーストラリアプログラム（TAP）</p>

28

スライド 29

大学のあるべき英語授業！

- ・ 「令和5年度大学入学後の総合的な英語力の育成・評価に関する好事例について」から最大公約的に
 - － 4 技能の統合！
 - － 統合的な言語活動！
- ・ (本発表では) これを「大学のあるべき英語授業！」として位置付けて、「主体的・対話的で深い学び」の実践における課題と対策へ

○ 慶應義塾大学『外国語の授業づくりの手引き Ver.1』（2025年）
<https://user.keio.ac.jp/~yamashita/gaikokugokoyoten/tebiki1.pdf>

29

スライド 30

**大学のあるべき英語授業！：
主対深の授業の言語活動と評価**

30

スライド 31

1. 大学のあるべき英語授業！：
主対深の授業の言語活動

31

スライド 32

主対深の授業の言語活動の視点 **主対深の授業の言語活動**

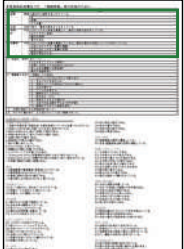
- 主対深の授業の言語活動の視点：授業の基礎・基本とID
- 教科書：frameworkと活動
- FFT (Food for Thought：考える材料)

(統一的な)言語活動を
失敗に導く落とし穴！

32

スライド 33

主対深の授業の言語活動の視点 **そもそも論：授業の基礎・基本、その一端**



1. 姿勢
授業の基本的な姿勢を身に付けている。声、表情、立ち位置
2. 内容
生徒の関心・意欲を高める工夫
3. 発問・指示
生徒にわかりやすい表現を意識して、適切に発問や指示。わかりやすい表現、適切な発問、適切な指示
4. 板書等
生徒にわかりやすい板書を意識。
5. 超基本：開始にあたって！
大きな声で！びしっと挨拶！、目標、目的からのbackward design！、常に生徒を観察！机間指導！、適切な英語使用！
6. 齋藤栄二先生の「授業の10の原則」
7. 目標が達成される授業実践であった。
8. わくわく感があり、また受けたい！と思う授業であった。

要求水準の設定と徹底！ モニタリング 机間指導・支援

33

スライド 34

主対深の授業の言語活動の視点 **ID(instructional design)の基礎基本**

- あまりにも失礼ですが・・・
 - その活動を是とする根拠は？
 - その活動の目的・目標は？
 - 目的・目標からのbackward designに成功している？
 - 目的・目標を暗示的/明示的に学生は理解している？
 - その活動の合格ラインは？
 - その合格ラインを学生は理解している？
 - 学生の変容のmonitoringは十分ですか？
 - 授業進行が易から難のsmall stepsですか？
 - 活動が常にワクワク感ありますか？
 - 「曖昧さへの耐性」(tolerance of ambiguity)を担保していますか？
 - 「教科書を」ではなく「教科書で」教えていますか？ ...etc.?

34

スライド 35

教科書

✓「教科書を教える」ではなく
「教科書で教える」を視座に

- 「総合英語」の「教科書」にみる授業
- 教科書の構成

35

スライド 36

教科書「総合英語」の「教科書」にみる授業

- 4技能型授業を重視
- 学習指導要領の4技能五領域を統合したコミュニケーション能力の育成をめざす授業形式
- 学習指導要領の統合的な言語活動の授業が含まれ、「主体的・対話的で深い学び」の授業
- 教科書使用は教育上の慣行・大学や教員の判断
 - 「教科書を使用する場合は、学生が入手しやすいように、書名、著者名、出版社、出版年、価格（もしくは入手方法）を明記します。」（「大阪大学シラバス作成のためのハンドブック」）
- 4技能型の“総合英語”の英語授業で扱われる教科書は「総合教材」「4技能型」等と出版社の命名

SORRY!

36

教科書 教科書の構成

•テキスト 1

- ①語彙
- ②会話：聞くこと/話すこと
- ③文法
- ④読むこと
- ⑤書くこと

•テキスト 2

- ①動機づけ (内容スキーマの活性化 →ビデオ視聴 1)
- ②内容理解と意味のより深い理解 (語彙 → 読むこと・要約)
- ③ビデオ視聴 2
- ④アウトプット (内容の質問への回答 → パートナーへの質問 → プレゼンテーション)

統合的な言語活動に見えるが個別および統合的な言語活動が必要！
そのためには・・・(FfT)

37

FfT(food for thought):主対深の授業での言語活動のために

- 活動
- 活動の順序
- 語彙指導
- 聞くことは視覚あり?・なし?
- ストラテジー..... ORAL COMMUNICATION STRATEGIESも扱いたいのですが.....
- スキーマ
- interaction (やり取り)
- これだけは！speaking
- これだけは！writing

38

FfT: 活動

- (そもそも) その活動の目的は? Backward design? etc.
- 語彙
- 文法・・・基礎 (-s, -ed, -ing) は?、後の活動で活用?
- 読むこと
- (仮) Speak Out/Say What You think・・・文や文章を完成させるだけ。また、話すも多くの条件が求められていて、productionが目的ではなく、記憶や語彙、文法のを試しているように見える。また、話してそれをどのようにフィードバックや評価をするのが不明?
- 書くこと・・・書いた後、フィードバックや評価は? ..etc.

39

FfT: 活動の順序

学習指導要領の「聞くこと、読むこと、話すこと、書くこと」の順の授業進行は適切か。

• 5.4.1 理解やOutput → Intake → Output (引：Gass, 2003)

• 学習指導要領の「外国語教育における学習過程」での「目的に応じて情報や意見などを発信するまでの方向性を決定し、コミュニケーションの発達を促す」の「発信するまでの方向性」は、その前に発信できない状態が前提となる。

• 英語コミュニケーションで「聞く」が導入段階に於ける重要な要素を目的に設定し、基礎的知識やスキルを構築する。聴きながら話し合ったり読み聞かせたり、読解に活用して話し合ったりして伝える又は伝え合うことなどができるようにすること」(p. 66)

• 「英語コミュニケーション」では「聞く」が導入段階に於ける重要な要素を目的に設定し、基礎的知識やスキルを構築する。聴きながら話し合ったり読み聞かせたり、読解に活用して話し合ったりして伝える又は伝え合うことなどができるようにすること」(p. 66)

• 学習指導要領では、L1-R1、L2-R1、L3-R1の順に「読む」に、L4-R1、L5-R1、L6-R1、L7-R1、L8-R1の順に「書く」が記載されている。

• 「外国語教育における学習過程」としては、①設定されたコミュニケーションの目的や場面、状況等を理解する。②目的に応じて情報や意見などを発信するまでの方向性を決定し、コミュニケーションの発達を促す。③目的達成のため、具体的なコミュニケーションを行う。④言語知識・内容知識で自ら学習の成果を振り返りを行う。ふたつは互いの中で、学びたいことの発信を受けたり、読解の知識や読解力、読んだ書かれた知識を言語活動で活用したりすることで、「思考力、判断力、表現力等」を高めていくことが大切になる。」(中学校、pp. 13-14: p. 15)

40

FfT: 語彙指導 “語彙指導”していますか？

• 語彙知識の要素 What is involved in knowing a word (Nation, 2001, p. 27)

→ 語彙指導の対象

形態	発音
	つづり
	語構成要素
意味	語形と意味
	概念と指示物
	連想
使用	文法的機能
	コロケーション
	用法上の制約

→ 優先すべき授業課題としては、「発音」と「概念と指示物」、その次に「つづり」?

• 語彙指導対象語の選定

受容語彙	発信語彙
高頻度	高頻度
中頻度	中頻度
低頻度	低頻度

→ 受容語彙、発信語彙
 「[「1600～1800語程度」の全てを生徒が発信できるようにすることが求められているわけではない」
 「一般的に、学習語彙は導入時には受容語彙としてまず提示され、その一部が段階を経て発信語彙として習得されていく」
 (中学校、pp. 33-35)

41

FfT: 語彙指導 語彙の問題例

Vocabulary Match the words with their definitions.

Words

1. ambiguous
2. inevitable
3. advocate
4. coherent
5. implement

5 語? /250 words

Definitions

- a. logically connected and easy to understand as a whole
- b. to support or argue publicly for a particular idea or plan
- c. unavoidable; certain to happen
- d. having more than one possible meaning
- e. to put a plan, system, or decision into action

発音
つづり
語構成要素
語形と意味
概念と指示物
連想
文法的機能
コロケーション
用法上の制約

42

スライド 43

FFT: 聞くことには 視覚 あり?・なし?

聞くことはビデオか音声のみか?

- 聞くことの素材として、ビデオを用いている教材は以前からあった。ビデオ (音声 + 動画) が音声のみかのどちらを選ぶかという選択は、前提条件によるであろう。
- video (視覚あり) 群と audio-only (視覚なし) 群を比較した研究が示すところでは、video (視覚あり) 群が有意に伸びる。よって、技能伸長を第一の目的とすればビデオ (音声 + 動画) を選択すべきとなる。

スライド 44

FFT: ストラテジー ストラテジーの指導はしていますか?

- Rubin (1975), Stern (1975)・・・約50周年!
- 学習ストラテジー (learning strategy)
- Oxford (1990)
Language learning strategies are specific actions taken by the learner to make learning easier, faster, more enjoyable, more self-directed, more effective, and more transferable to new situations. (p. 8) 言語学習ストラテジーとは、学習者が学習をより容易にし、より速く、より楽しく、より自己主導的に、より効果的に、さらに新しい状況へと応用・転移しやすくなるために取る具体的な行動
- O'Malley & Chamot (1990)
Learning strategies are the special thoughts or behaviors that individuals use to help them comprehend, learn, or retain new information.(p. 1) 学習ストラテジーとは、学習者が新しい情報を理解し、学習し、あるいは記憶に保持することを助けるために用いる特有の思考や行動
- Oxford (1994)
Actions, behaviors, steps, or techniques students use, often unconsciously, to improve their progress in apprehending, internalizing, and using the L2 (p.1) 学習者が第二言語 (L2) を理解し、内在化し、使用できるようにする過程を促進するために、しばしば無意識のうちに用いる行動・ふるまい・手順・技法

スライド 45

FFT: ストラテジー リスニングストラテジー

『英語のリスニングストラテジー: コミュニケーションのための実践演習』 (ACET関西支部リスニングテスト, 2002)

- Perceiving English sounds / Sound perception 英語の音を聞き取る
- Recognizing word and phrase stress 単語・句の強勢に慣れる
- Recognizing sentence stress and rhythm 文の強勢とリズムに慣れる
- Recognizing elision 音声変化→消える音に慣れる
- Recognizing linking / Connected speech (linking) 音声変化→つながる音に慣れる
- Recognizing assimilation 音声変化→変化する音に慣れる
- Listening for numbers 数字を聞き取る
- Understanding meaning groups / Chunking meaning 意味グループ単位で理解する
- Identifying main ideas 話の要点を理解する
- Listening for specific information 必要な情報のみを聞き取る
- Identifying the situation, setting, and relationships 会話の状況・場所・人間関係を探る
- Identifying key words キーワードを把握する
- Inferring the speaker's intention 話者の意図を推測する
- Predicting the flow of discourse 話の展開を予測する
- Understanding logical development 論理の展開を把握する
- Using visual information to aid listening 視覚情報を介して聞き取る

スライド 46

FFT: ストラテジー リーディングストラテジー

『Reader's Ark: 英初級英語リーディングの冒険: 入門編』 (伊藤他, 2012)

- Vocabulary Strategy <1> 未知語を推測する
- Vocabulary Strategy <2> おかしいな、と思ったら辞書をひく
- Vocabulary Strategy <3> 辞書を効率的に使う
- Experience Pre-reading Activities タイトルやイラストから内容を予測して読む
- Understanding Reference Words <1> 代名詞が指すのは誰?
- Understanding Reference Words <2> one や that って何を指すの?
- Understanding Reference Words <3> 代動詞が示すのはどんな動作や状態?
- Using Signal Words to Predict Ideas <1> andなどのシグナルワードから流れを理解する
- Using Signal Words to Predict Ideas <2> butなどのシグナルワードから流れを理解する
- Using Signal Words to Predict Ideas <3> becauseやthereforeなどのシグナルワードから流れを理解する
- Identifying the Main Idea <1> メインアイデアを把握する 1
- Identifying the Main Idea <2> メインアイデアを把握する 2
- Identifying the Main Idea <3> メインアイデアを把握する 3
- Searching for Information <1> 情報を素早く効果的に読み取る (スキヤニング) 1
- Searching for Information <2> 情報を素早く効果的に読み取る (スキヤニング) 2
- Searching for Information <3> 情報を素早く効果的に読み取る (スキヤニング) 3
- Connecting Ideas 複数の情報を結び付ける
- Reading for Pleasure 予測しながら楽しく読む

スライド 47

FFT: ストラテジー 読むこと目的: 全国学力調査・共通テスト風B2レベル「読むこと」問題

Shohei Ohtani (大谷翔平) is widely known as one of the most remarkable athletes in modern sports history. Born in Japan, he showed exceptional talent in baseball from a very young age. Unlike most professional players, Ohtani developed his skills both as a pitcher and as a batter, a rare combination in contemporary baseball. This dual ability has drawn attention not only from fans but also from analysts who study athletic performance.

After joining Major League Baseball, Ohtani faced numerous challenges, including adapting to a different language, culture, and style of play. Despite these difficulties, he quickly demonstrated his versatility. On the mound, he throws fastballs at extraordinary speed, while at the plate, he consistently hits powerful home runs. This combination has led many to compare him with legendary figures from the early history of baseball.

Beyond statistics and records, Ohtani is often praised for his discipline and work ethic. He is known to follow strict routines related to training, diet, and rest. Teammates and coaches frequently describe him as calm and focused, even under intense pressure. Such mental strength is considered a key factor in his continued success.

Ohtani's influence extends beyond the field. He has become a cultural bridge between Japan and the United States, inspiring young athletes around the world. Many children now believe that it is possible to pursue multiple goals at the highest level, rather than specializing in only one role. In this sense, Ohtani represents not only athletic excellence but also a new way of thinking about potential and possibility in sports.

問1 (主旨理解)
What is the main idea of the passage?
A. Ohtani's childhood memories in Japan
B. The rules of modern baseball
C. Ohtani's unique abilities and influence
D. Differences between Japanese and American sports

問2 (情報理解)
According to the passage, what was difficult for Ohtani after joining MLB?
A. Learning new baseball rules
B. Adjusting to language and culture
C. Finding a team to join
D. Becoming physically stronger

問3 (語句理解)
The word "versatility" in the second paragraph is closest in meaning to:
A. popularity
B. flexibility
C. speed
D. confidence

他に未知語推測、1文追加、タイトル作成、graphic organizerの完成なども

問4 (因果関係) **問7 (内容一致)**
問6 (段落要約) **問9 (筆者の態度)**
問8 (抽象理解) **問10 (全文要約)**

スライド 48

FFT: ストラテジー 読むこと目的: 全国学力調査・共通テスト風B2レベル「読むこと」問題

Shohei Ohtani (大谷翔平) is widely known as one of the most remarkable athletes in modern sports history. Born in Japan, he showed exceptional talent in baseball from a very young age. Unlike most professional players, Ohtani developed his skills both as a pitcher and as a batter, a rare combination in contemporary baseball. This dual ability has drawn attention not only from fans but also from analysts who study athletic performance.

After joining Major League Baseball, Ohtani faced numerous challenges, including adapting to a different language, culture, and style of play. Despite these difficulties, he quickly demonstrated his versatility. On the mound, he throws fastballs at extraordinary speed, while at the plate, he consistently hits powerful home runs. This combination has led many to compare him with legendary figures from the early history of baseball.

Beyond statistics and records, Ohtani is often praised for his discipline and work ethic. He is known to follow strict routines related to training, diet, and rest. Teammates and coaches frequently describe him as calm and focused, even under intense pressure. Such mental strength is considered a key factor in his continued success.

Ohtani's influence extends beyond the field. He has become a cultural bridge between Japan and the United States, inspiring young athletes around the world. Many children now believe that it is possible to pursue multiple goals at the highest level, rather than specializing in only one role. In this sense, Ohtani represents not only athletic excellence but also a new way of thinking about potential and possibility in sports.

I. Scanning (情報検索)
Q1 Where was Shohei Ohtani born?
A. The United States
B. Japan
C. Canada
D. Australia
Q2 Which two roles does Ohtani perform in baseball?
A. Catcher and runner
B. Coach and player
C. Pitcher and batter
D. Fielder and umpire
Q3 Which of the following is mentioned as a challenge Ohtani faced in MLB?
A. Learning new rules
B. Adapting to language and culture
C. Changing his position
D. Training with new equipment

II. Skimming (大意把握)
Q4 What is the main focus of the passage?
A. The history of Major League Baseball
B. Ohtani's childhood in Japan
C. Ohtani's unique abilities and influence
D. Differences between Japanese and American culture

Q5 Which paragraph mainly describes Ohtani's discipline and mental strength?
A. Paragraph 1
B. Paragraph 2
C. Paragraph 3
D. Paragraph 4

Q6 How does the author feel about Ohtani overall?
A. Critical
B. Neutral
C. Admiring
D. Doubtful

III. Detailed Reading (精読)
Q7 Why are analysts particularly interested in Ohtani?
A. He plays for a famous team
B. He follows strict routines
C. He has both pitching and hitting abilities
D. He is popular among fans
Q8 What does the passage suggest about specialization in sports?
A. Specializing early is always necessary
B. One role is better than many
C. Multiple abilities can be valuable
D. Specialization leads to success

FfT: スキーマ schemaの扱いは大丈夫ですか？

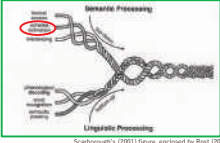
・スキーマ：
学習者が既にもっている知識構造、英語の「理解」を支える土台

・種類：
内容スキーマ：社会全体の知識
形式スキーマ：言語的知識（文字、綴り、文法、パラグラフ構成、談話）
(高梨・卯城、2000)

・授業での対応：
- 活性化させる schema activation
- 構築する schema building

・教科書の扱い

種類	頻度
内容	○
テキスト構造	▽
語彙	○
文法	○



49

FfT: interaction interactionの指導はうまくいっていますか？

- ・「CEFRでは、人間が言語を用いて行うタスク（CEFRでは人間の行為全般をいう）は reception（受容）、interaction（やり取り）、production（産出）の3つに分かれており、それらが総合的に「コミュニケーション活動（communicative activities）」と呼ばれている。」 (p.7)
- ・「話すこと」のやり取り（interaction）では、少なくとも2人以上の個人が言葉のやり取りをし、その際、産出的活動と受容的活動が交互に行われ、口頭のコミュニケーションの場合は同時に行われることもある。対話者が同時に話し、聞くだけではなく、聞き手は話し手の話を先回りして予測し、その間に答えを準備するなど、やり取りは言語使用と言語学習の中でも大きな重要性が認められることから、コミュニケーションにおける中核的役割を果たしていると考えられている。」 (p.7)

50

FfT: interaction 授業での“成功”

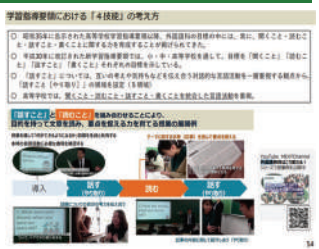
・相手の「やり取り」で “Work in pairs and discuss.” と指示したら学生の反応は？

↓

- ① すぐにペアで話し始める “Okay, what should we talk about?”
- ② 相手を探して周囲を見回す “Who should I work with?”
- ③ 内容が分からず確認する “What are we supposed to discuss?”
- ④ 日本語で話し始めてしまう 「スーと、日本語でエエ？」
- ⑤ 消極的で動かない/沈黙する 「（笑って）ま、相手を見る。」、微笑も場合もあり

! “Discuss this for two minutes in English.”

51

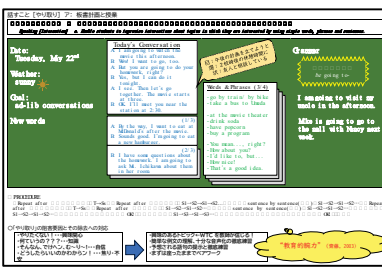


FfT: interaction fluency重視の指導

- ・Accuracyとfluencyはtrade-off! という前提でのfluency重視のinteractionの指導
- ・「英語で会話ができる」とは、正しい文を作れることではなく、やり取りを止めずに“関係を維持できる”
- ・「やり取り」の成功：
 - 相手の発話を理解しようとしている
 - 自分の意図が部分的でも相手に伝わっている
 - 会話が途中で止まらず、つながっている
 - 誤解があっても修復（repair）できている など

52

FfT: interaction accuracy重視の指導



ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で伝えることができるようになる。

- 関心のある事柄
 - ・ ・ ・ それって何？
- 簡単な語句
 - ・ ・ ・ それって何？
- 簡単な文
 - ・ ・ ・ それって何？
- 即興で伝え合う
 - ・ ・ ・ それってどうしたらそのようにしようとする？

例文は “授課さへ!”

例文は “WTO!” 英語で話そうとする気持ち!

53


FfT: speaking、これだけは! (“production”を例に)

Phase 1. 暗示的? 指導

“Good morning, everyone. How are you today? Today, you are going to do three activities in this lesson. Here are today’s three activities. First, you will start with a listening activity. Please listen carefully to a short conversation and try to catch the main idea. Second, you will work in pairs and talk about the topic. You will ask and answer questions using the expressions we learned last time. Finally, you will do a short writing activity. You will write a few sentences to summarize your ideas. Let’s begin with the first activity. Open your textbooks to page 24.”

Phase 2. 明示的指導

→ Cohesion
Coherence
Transitional sentences



54

FfT: writing, これだけは! (paragraph writingに向けて)

- OREO (意見)
 - Opinion (意見)
 - ↓
 - Reason (理由)
 - ↓
 - Example (例)
 - ↓
 - Opinion (意見)
- PREP (結論)
 - Point (結論)
 - Reason (理由)
 - Example (例)
 - Point (結論)

55

**2. 大学のあるべき英語授業！：
主対深の授業の評価**

56

主対深の授業の評価【やり取り】を例に

- 『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【高等学校 外国語】』（国立教育政策研究所教育課程研究センター, 2021）
- 「今回の学習指導要領では、各教科等の目標及び内容が、育成を目指す資質・能力の三つの柱（「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」）に沿って再整理され、各教科等ごとのような資質・能力の育成を目指すのが明確化されました。これにより、教師が「子供たちにどのような力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉え、主体的・対話的で深い学びの観点からの授業改善を図る。いわゆる「指導と評価の一体化」が実現されやすくなることを期待されます。」（はしがき）
- 「各学校においては、本資料や各教育委員会等が示す学習評価に関する資料などを参考としながら、学習評価を含むカリキュラム・マネジメントを円滑に進めていただくことで、「指導と評価の一体化」を実現し、子供たちに未来の創り手となるために必要な資質・能力が育まれることを期待します。」（はしがき）

57

主対深の授業の評価 目標と評価規準・中学校「話すこと【やり取り】」

目標：「話すこと【やり取り】」

評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<p>＜知識＞</p> <p>英語の文法・語法に関する知識を、日常会話や簡単な文法指導に活用し、英語のコミュニケーション能力を高める。</p> <p>＜技能＞</p> <p>英語の発音・聴き取り・読解・書き取りの技能を、日常会話や簡単な文法指導に活用し、英語のコミュニケーション能力を高める。</p>	<p>＜思考＞</p> <p>英語の文法・語法に関する知識を、日常会話や簡単な文法指導に活用し、英語のコミュニケーション能力を高める。</p> <p>＜表現＞</p> <p>英語の発音・聴き取り・読解・書き取りの技能を、日常会話や簡単な文法指導に活用し、英語のコミュニケーション能力を高める。</p>	<p>＜態度＞</p> <p>英語の文法・語法に関する知識を、日常会話や簡単な文法指導に活用し、英語のコミュニケーション能力を高める。</p> <p>＜態度＞</p> <p>英語の発音・聴き取り・読解・書き取りの技能を、日常会話や簡単な文法指導に活用し、英語のコミュニケーション能力を高める。</p>

58

パフォーマンステスト・中学校「話すこと【やり取り】」

採点の基準

「思考・判断・表現」について、単元を通して指導したことを踏まえて以下の3つの条件を全て満たしていれば「b」として評価する。なお、生徒の実態や指導の状況踏まえ、全ての条件を満たしていれば「a」、2個なら「b」、1個以下なら「c」とすることも考えられる。

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
a	自分の考えを詳しく述べたり、効果的に引用したりしながら、3つの条件を満たしてやり取りしている。	自分の考えを詳しく述べたり、効果的に引用したりしながら、3つの条件を満たしてやり取りし、主体的に取り組んでいる。
b	3つの条件を満たしてやり取りしている。	3つの条件を満たしてやり取りしている。
c	3つの条件を満たしていない。	3つの条件を満たしていない。

59

パフォーマンステスト・中学校「話すこと【やり取り】」

採点の結果

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
a	b	b

観点別学習状況の評価の進め方

1課から3課の単元終末における活動の観察の結果が以下であった場合、1学期の観点別評価の総括の考え方（3学期制の場合）

1課の結果	2課の結果	3課の結果	パフォーマンステストの結果	話すこと【やり取り】の評価結果	他の領域の評価結果	1学期の観点別評価
加	b	b	a	a	(b-c)	(A-C)
加	c	c	b	b	(b-c)	(A-C)
加	c	c	b	b	(b-c)	(A-C)

60

スライド 61

主対深の授業の評価 speakingとwritingの指導と評価

「指導と評価の一体化」に向けた高等学校外国語科におけるパフォーマンステスト参考資料（指導者用資料）
https://www.mext.go.jp/content/20220715_mxt_kyokuisu01_000021347_1.pdf

事例7: 書くこと（目的別課題「電子メール」）(pp. 38-59)

1 単元の目標 2 評価基準 3 テストについて (1) 場面 (2) 内容 (3) 準備物 (4) 方法 (5) 採点の基準
 4 テストまでの指導について (1) 目標設定と共有 (2) 授業での活動 (3) 熟読指導の留意点 (4) 書く機会を確保する (5) 振り返り・評価の留意点 (6) フィードバック

【場面】 海外の友人への挨拶状

【目的】 海外の友人への挨拶状を書くこと

【内容】 海外の友人への挨拶状を書くこと

【準備物】 海外の友人への挨拶状を書くこと

【方法】 海外の友人への挨拶状を書くこと

【採点の基準】 海外の友人への挨拶状を書くこと

【評価】 海外の友人への挨拶状を書くこと

【評価の留意点】 海外の友人への挨拶状を書くこと

【評価の留意点】 海外の友人への挨拶状を書くこと

【評価の留意点】 海外の友人への挨拶状を書くこと

【評価の留意点】 海外の友人への挨拶状を書くこと

61

スライド 62

主対深の授業の評価 「指導と評価の一体化」に向けた高等学校外国語科におけるパフォーマンステスト参考資料（指導者用資料）事例7: 書くこと

・単元の目標：日常的な話題（高校生のアルバイト）について、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して文章を書いて伝えることができる。

・テストについて：20分で実施。外国の高校生からのメールに返信。

・課題：オーストラリアの高校生のDavidから、あなたにメールが来た。自分の意見や考えを明らかに書いて返信してあげよう。

・採点の基準：次の採点の基準によって評価する。「思考・判断・表現」については、二つの条件どちらも満たしていれば「B」。

評価の観点	評価の基準
思考・判断	自分の意見や考えを明らかにしている。
表現	文法や語彙の誤りがない。

62

スライド 63

主対深の授業の評価 speakingとwritingの指導と評価

「指導と評価の一体化」に向けた高等学校外国語科におけるパフォーマンステスト参考資料（指導者用資料）
https://www.mext.go.jp/content/20220715_mxt_kyokuisu01_000021347_1.pdf

・評価に対する「評価」

- 助井(2024) 観点別評価は言語活動の評価デザインとして適切か。全国英語教育学会第49回総会研究大会発表プログラム集, p. 98。パフォーマンステストを視座に、言語活動の評価デザインとして観点別評価を論じた。
- 助井(2025a) 評価基準は評価基準の達成度を測るための指標たりえているか。中部地区英語教育学会誌, 54, 49-54。
 「参考資料」の評価基準（ルーブリック）の考察、産出領域の言語活動やパフォーマンステストの評価基準の質を分析した。
- 助井(2025b) パフォーマンス評価科のための評価基準設定と実践。関東甲信越英語教育学会誌, 58, 295-308。
 パフォーマンス評価の設計や実施に際し、二重構造の中でも目標と指導、評価に一貫性を担保するための理論的枠組みを提示した。
 ・二重構造：（パフォーマンス評価は）中間的な「目標」はCEFRを参照したCAN DOリストの形で設定する一方で、その単元の達成度の「評価」は（三観点）を規範とした規準を基に行う

・「測りすぎの時代の学習評価論」（松下、2025、p. 223）
 「どうすれば測りすぎに陥らず、教育や学習のために評価を活かすことができるのか？」

63

スライド 64

おわりに

64

スライド 65

蛇足？

英語を教えることが生業ならず、教えることが必要であると思います。

教えるということ自体は時代により変わりますが、？に対して！が必要ですね。

！は今風には説明責任でしょうね。

何かの縁で出会った学生、がっつり力をつけて自信もつけて欲しいものです。

私はまだまだ頑張ろうと思う今日この頃です。

ありがとうございました。

65

スライド 66

References

佐々木真樹(2022) 「日本語を教える、海外の英語教師の意識」, 外国語教育, 2022(1), 1-10.

佐々木真樹(2023) 「外国語の授業づくりの考え」, https://www.mext.go.jp/content/20230715_mxt_kyokuisu01_000021347_1.pdf

佐々木真樹(2024) 海外の英語教師の意識を測るための指標たりえているか。中部地区英語教育学会誌, 54, 49-54.

佐々木真樹(2025a) パフォーマンス評価科のための評価基準設定と実践。関東甲信越英語教育学会誌, 58, 295-308.

佐々木真樹(2025b) 「参考資料」の評価基準（ルーブリック）の考察、産出領域の言語活動やパフォーマンステストの評価基準の質を分析した。

佐々木真樹(2026) 「英語を教える、海外の英語教師の意識」, 外国語教育, 2026(1), 1-10.

佐々木真樹(2027) 「英語を教える、海外の英語教師の意識」, 外国語教育, 2027(1), 1-10.

佐々木真樹(2028) 「英語を教える、海外の英語教師の意識」, 外国語教育, 2028(1), 1-10.

佐々木真樹(2029) 「英語を教える、海外の英語教師の意識」, 外国語教育, 2029(1), 1-10.

佐々木真樹(2030) 「英語を教える、海外の英語教師の意識」, 外国語教育, 2030(1), 1-10.

66

第2分科会

新たな学びを育むために ～教職協働によるカリキュラムの構築と再編～

報告者

- 菊池 誠氏 神戸大学 教養教育 院長／システム情報学研究科 教授
西野 毅朗氏 京都橘大学 経営学部 准教授
君島 菜菜氏 大正大学 教務部長／学修支援センター 特命准教授

コーディネーター

- 多田 泰紘氏 京都橘大学 経営学部 准教授



〈第2分科会〉

新たな学びを育むために ～教職協働によるカリキュラムの構築と再編～

コーディネーター

京都橘大学 経営学部 准教授

多田 泰紘

○本分科会のねらい

18歳人口の減少やVUCA社会の到来に対し、教職員は丸となって教育目標や中長期計画にもとづくカリキュラムの構築と再編に取り組んでいる。特に共通教育、教養教育の改革や自校の長所を生かした特色ある教育プログラムの展開が盛んに行われている。

そこで、本分科会では、神戸大学、京都橘大学、大正大学でのカリキュラム改革について3名の登壇者にご講演いただき、参加者の皆さまの大学で行われている取り組みや成果、今後へ向けた課題について議論を行った。

○報告の概要

分科会の司会進行は京都橘大学の多田が務めた。分科会の前半では、上記3大学の取り組み事例を全体で共有した。最初に神戸大学教養教育院長／システム情報学研究科教授の菊池誠氏から、神戸大学における教養教育改革の事例をご共有いただいた。長年に渡る改革のなかで、現場の教職員や履修する学生の状況を把握し、適した体制を構築してこられたその知見をご紹介いただいた。次に京都橘大学経営学部准教授の西野毅朗氏から、京都橘大学における共通教育科目の開発と実践についてご報告いただいた。特に1年生全学必修科目「たちばなBasis」において、開発に教職員が関わり、さらに運営には学生（ラーニングアシスタント）や外部業者も加わり、それぞれの視点でより良い授業づくりが展開されていた。最後に、大正大学教務部長／学修支援センター特命准教授の君島菜菜氏から、大正大学における全学必修の共通教育カリキュラムの改革と多様な人材によるカリキュラムの運営体制についてご講演いただいた。教育ビジョンを各科目のテーマに落とし込み、実現してきた工夫や、受講生の学びを支える学修支援体制について情報をご提供いただいた。

○報告に対する質疑ならびに全体討議の内容

分科会の後半では、参加者の所属大学における教養・共通教育の現状と課題についてペアで共有いただいたのち、3名の登壇者とフロアとで質疑応答が行われた。

質疑応答では、各大学での共通教育、教養教育の開発・実践における具体的な取り組みや工夫、そして各登壇者のカリキュラムマネジメントに対する考え方にまで質問がおよんだ。特に本分科会のテーマでもある“協働”についてフロアと登壇者との間で深い議論が展開された。

スライド1

2026年2月28日(土) 10:00-12:30 大学コンソーシアム京都 第31回FD・SDフォーラム
「2040年の京都の大学—我々はどう教え、学び、働いていくのか—」


第2分科会
新たな学びを育むために
～教職協働によるカリキュラムの構築と再編～

コーディネーター
多田 泰紘

スライド2

自己紹介

多田泰紘 ただ やすひろ



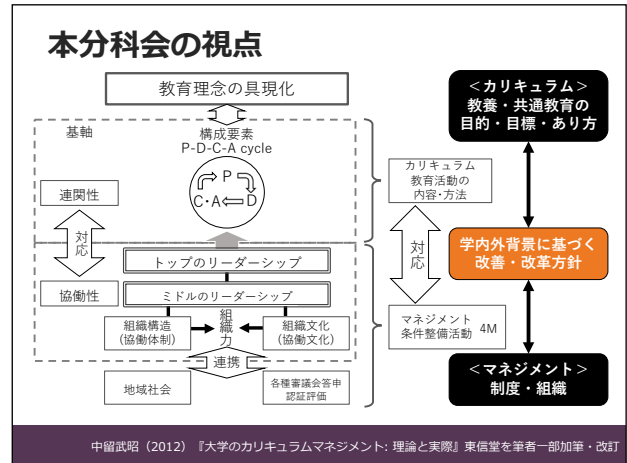
- 所属
京都橋大学 経営学部
教育開発・学習支援室
- 専門
大学教育、学習環境、学習支援
- 教育活動
学習支援と学部教育の接続、授業連携、
ラーニングcommonsの企画・運営など

スライド3

本分科会の目的

教養・共通教育カリキュラムの再編と実施の実際について、教職協働の視点をふまえつつ、登壇者ならびに参加者各位の大学での取り組みや成果を共有し、各大学の課題や今後の方向性を検討するための知見を得る。

スライド4



スライド5

本分科会のプログラム

10:00 趣旨説明
京都橋大学 経営学部 准教授 多田 泰紘

10:20 講演1.「神戸大学における教養教育改革」
神戸大学 教養教育 院長/システム情報学研究所 教授 菊池 誠

10:45 講演2.「教・職・学・外協働による全学必修共通教育科目の開発
と実践～たちばなBasisの事例報告～」
京都橋大学 経営学部 准教授 西野 毅朗

11:10 講演3.「全学必修の前期共通教育を支える教職・学修支援者の
協働～多様な人材と共に推進した大正大学の運営実践報
告～」
大正大学 教務部長/学修支援センター 特命准教授 君島 菜菜

11:35 休憩

11:45 全体議論・質疑応答

12:30 終了

スライド6

休憩

- 休憩終了後、お近くの方同士でお話しいただきます。
- 以下について、お考えいただければ幸いです。
 - ①3名の報告を聞いた上でのコメントや質問
 - ②自身の所属大学における教養・共通教育の現状と課題
* 大学に所属しておられない方や、教養・共通教育の現状を把握しておられない場合は、カリキュラムや教職協働について広くご意見いただければ幸いです。

全体議論・質疑応答

- **テーブルが近い人同士、2・3名で組んでください。**
(同じ所属でない方がよいかと思えます)
- **以下について、お話しください。**
 - ① ご所属、氏名、お立場
 - ① 3名の報告を聞いた上でのコメントや質問
 - ② 自身の所属大学における教養・共通教育の現状と課題
 - * 大学に所属しておられない方や、教養・共通教育の現状を把握しておられない場合は、カリキュラムや教職協働について広くご意見いただければ幸いです。
- **終了後、全体で質問やコメントを受け付けます。**

スライド1

神戸大学における教養教育改革

2025年度 第31回FD・SDフォーラム 第2分科会

新たな学びを育むために
～教職協働によるカリキュラムの構築と再編～

同志社大学・今出川キャンパス良心館
2026年2月28日

菊池誠
神戸大学 大学院システム情報学研究所 (専門: 数学、特に数理論理学)
教養教育院長

スライド2

神戸大学の概要

神戸大学の全体

- 学生16,000人 (学部11,500人、大学院 4,500人)
- 11学部15研究科
- 4地区 (六甲台、深江、楠、名谷) 7キャンパス (六甲台は4キャンパス) に展開
- 教員1,600人 (承継内1,200人)
- 事務系職員数1,000人 (うち病院を含む医学系 400人)

共通教育の実施体制

- 1年生は、1学年2,600人全員が、月曜日～木曜日は全学共通授業科目を履修、金曜日は専門科目を履修
- 2年生以降は、各キャンパスで専門科目を履修
- 大学教育推進機構教養教育院: 全学共通授業科目を実施
 - すべて六甲台地区・鶴甲第1キャンパスで実施
 - 教養教育院長 (1名)
 - 教育部会 (22) 構成員は各部局に所属する数十名程度
 - 教養教育委員会 (全学委員会)、教務・事業・評価FD専門委員会
 - 教務担当事務: 学務部学務課共通教育グループ7名 (非常勤職員を含む)
 - 開講コマ数: セメスター換算で約1,100コマ (非常勤講師500コマ)
 - 毎年約80,000件の成績評価

スライド3

教養教育改革の流れ

神戸大学 教養教育改革

- 1902年 神戸高等商業学校設立
- 1923年 旧制姫路高等学校設立
- 1954年 (新制) 神戸大学設立、神戸教養課程・姫路分校を設置
- 1963年 教養部を設置
- 1992年 教養部解体、大学教育研究センターを設置 (大学設置基準大綱化)
- 2004年 神戸大学と神戸商船大学が統合 (国立大学法人化)
- 2005年 大学教育研究センターを改組、大学教育推進機構・全学共通教育部を設置
- 2015年 全学共通教育部を改組、国際教養教育院を設置
- 2016年 教養教育改革、「神戸スタンダード」の導入
- 2022年 大学教育推進機構を改革、国際教養教育院を教養教育院に改組
- 2025年 教養教育改革 (第一段: 枠組みの修正)
- 2028年 教養教育改革 (第二段: 検討中: 中身の改訂)

(1992年以降、概ね12年毎に改革)

スライド4

92年改革

92年改革: 枠組み

- 全学共通授業科目 = 教養原論 + 外国語 + 健康・スポーツ科学 + 専門基礎科目
- 当時は国際がキーワード、国際文化学部・大学院国際協力研究科を92年に設置。

教養原論

- 教養原論 (人文)
 - 人間思想と文化: 人間と世界、行為と規範、心と行動、発達と教育
 - 文学と芸術: 日本の言語文化、世界の文学、芸術の思想と表現
 - 歴史と社会: 伝統と社会変動、近代日本の政治と社会、近代アジアと日本、人の移動と世界史
- 教養原論 (社会)
 - 人間と社会: 人間と環境、人間と文化、人間と社会集団、社会理論と思想
 - 現代社会と法・政治: 法と社会、法と国家、政治と社会
 - 現代社会と経済: 現代と経済、経済と社会、現代社会の発展
- 教養原論 (自然)
 - 自然と環境: 科学の発達と社会、環境と生物、地球と環境、環境とエネルギー
 - 自然の構造: 素粒子と宇宙、物質の組み立て、分子の世界、生命の科学
 - 数の世界: 数理構造と社会、情報と数理、数理解析と社会

92年改革: 問題

- 教養教育は国際化に失敗、強い危機感のもと教養教育改革へ。

スライド5

16年改革

16年改革: 枠組み

- 教養原論 (人文・社会・自然) を基礎教養科目・総合教養科目・高度教養科目に

神戸スタンダード (教養教育のDP)

- 複眼的に思考する能力: 専門分野以外の学問分野について基本的なものの考え方を学ぶことを通して複眼的なものの見方を身につける
- 多様性と地球的課題を理解する能力: 多様な文化、思想、価値観を受容するとともに、地球的課題を理解する能力を身につける
- 協働して実践する能力: 専門性や価値観を異にする人々と協働して課題解決にあたるチームワーク力と、困難を乗り越え目標を追求し続ける力を身につける

教養科目の3区分

- 基礎教養科目 (1～2年次配当、全学共通) 自分が所属する専門分野以外の主要な学問分野について基本的な知識及び「ものの見方」を学び、理解する
- 総合教養科目 (1～2年次配当、全学共通) 多文化に対する理解を深め、多分野にまたがる課題を考え、対話型の講義を取り入れるなどの工夫により、複眼的なものの見方、課題発見力を養成する
- 高度教養科目 (3～4年次配当、全学対象に各学部が実施) 専門の異なる学生が共通の課題について協働して解決方法を探ることにより、「分野融合」「文理融合」の意義、協働の大切さを学ぶ

スライド6

16年改革

16年改革: 高度教養科目の問題

- 学部間の調整がなく、独自に授業科目を開講し抽選登録等を実施するため、抽選結果次第で卒業単位が揃えられなくなる。
- 他学部向けは「基礎教養科目」と大した違いはなく、自学部向けは実質的に専門科目であり、いずれも「高度教養科目」の教育目標に対応していない。
- 大規模学部の学生が、小規模学部で開講される「高度教養科目」を履修するため、小規模学部の教育負担が大きい。

16年改革: 全体の問題

- 制度の矛盾への現場対応 (煩雑な履修制限等) が多く、事務作業量が膨大。
- 限られた配当授業科目からの抽選登録のため、希望する授業科目を履修できない。
- 遠隔地キャンパスの学生は2年生以降に履修が困難。
- 授業科目の多様化・細分化が進み、留学生・配慮学生への対応が困難。
- 他大学生・社会人等との共修が困難。
- 実際の授業科目の構成は必ずしも神戸スタンダードに対応していない。
- 学生も事務も教員も大変なだけで、神戸スタンダードの理念は実現されていない。(そもそも、神戸スタンダードに掲げられた素晴らしい能力など、数科目を履修しただけで身につけはくはない。)

スライド7

理想の追求と不備の改善

16年改革：制度の硬直化

- 「理念先行」で、理念を実現するために制度が作り込まれているため、**理念と制度が互いの制約となり、理念も制度も修正が困難。**
- 「共通教育の教育負担の均衡化」という積年の問題の解決も目指したため、**制約条件が極めて複雑になり、制度の修正はほぼ不可能に。**
- **現場（特に事務）は（改革にも、改革の後始末にも）疲弊。**

なぜ改革するのか

- 改革がうまくいかないのは「理念は良いのに、現場が働かない」からなのか？
- **二種類の改革：新しい大学像の描出 vs 制度の不備の改善**
- 確かに、新しい大学像は必要
 - 11世紀（ボローニャ・パリ）権威による**知識伝達の場**
 - 19世紀（フンボルト理念）学生と教師がラボで共に研究する**研究中心主義**（20世紀アメリカの「大学院の発明」へ）
 - 21世紀（欧米中）**外貨獲得の手段**（新しい経済成長分野：観光・医療・教育）
大学ランキングによる商品価値の向上
 - 今後（？）
- ただし、制度で「新しい大学像」を描くと、組織は硬直化する。
- **「制度による理想の追求」ではなく、「制度の不備の改善」を目指すべき。**

スライド8

25年改革

教育改革は必ず失敗する

- 社会問題・経済停滞は全て「教育の失敗」の結果とされ、教育改革が強要される。
- そもそも教育への要求は矛盾している。（例えば、自主性の賞賛 & 従順さの強要）
- 「完璧な教育制度などといったものは存在しない。」教育改革は必ず失敗する。
- 教育改革は永遠に続く。**大事なものは、理想の追求ではなく、改革コストの削減。**

25年改革：方針

- 学生の自主性を最大限に尊重し、学びたいものを学べる制度とする。
- 履修ミスを防ぎ事務作業を削減するため、極力例外を持たない単純な制度とする。
- 原則として現行の授業内容を修正せずに対応可能な改革とする。
- **現時点での完成度よりも、将来の変更の容易さを優先する。**

25年改革：新しい枠組み

- **基礎系**：教養の意義や目的・情報基礎・授業科目構成を紹介・全学必修
- **人文系・社会系・自然系**：各学問領域の基礎的内容
- **総合系（社会と環境・価値と創造・科学と技術・世界と日本）**：既存の学問領域には収まらない最近の話題（SDGs、価値創造、多文化間共修など）
- **外国語系**：英語 + 中国語・フランス語・ドイツ語・ロシア語から1言語
- **健康・スポーツ科学系**：心身の健康維持のための知識や技能
- **一番の特徴：新しくない。変わり映えない。（助成金は取れない。）**

スライド9

28年改革に向けて

システム情報学カレッジ（学部25年設置・大学院併設）の挑戦：共通教育から離脱

- 早期博士取得：学部学生150名、10%を3年で修士進学、2%を6年で博士取得へ
 - 短期専門基礎：通常1年の数学・物理学等を半年で修了、専門を前倒し
 - 反転教養教育：まず専門を学び、教養は3年次以降
 - 理数専門英語：高校理数科目を英語で、早期に海外学会派遣へ

教養教育・基礎教育・共通教育の違い

- 基礎教育：学問の基礎を育成
- 教養教育：世界観や価値観を涵養
- 共通教育：教育リソースを集約（人的・経済的コストの削減）

28年改革：方針（案）

- 基礎教育と教養教育を区別して共通教育で実施。**理念や内容に踏み込まない。**
 - **基礎教育**：高校文理別教育の弊害を補正、大学1年次に実施。授業科目を集約、授業科目の多様性から、開講形態の多様性へ。同一教育目標で大人数遠隔授業と少人数ゼミ等を展開、留学生・配慮学生対応のコストを削減。
 - **教養教育**：履修学年の制約を外し、大学院でも履修可能に。
学部生・大学院生・社会人の共修の効果も期待。
 - **共通教育**：コスト削減に繋がらないものは専門科目へ。

スライド10

おわりに

教職協働の教育改革

- **問題は現場（事務・教員）に集積、現場は改革のアイデアの宝庫。**
- しかし現場は、改革を嫌がる。「案をしたい」からなのか？
 - 改革ではなく不毛な仕事が嫌。理念先行だと「アリバイ作り」になりがち。
 - 成熟には時間が必要、制度改革は（一時的に）教育の質を確実に下げる。
- **改革は出発点ではなく、万策尽きた後の最終手段。**

二項対立の描く世界の限界

- **教養 vs 専門**
 - 大学はレジャーランド化、教養は無駄、「早期に専門教育」を。
 - 92年教養部解体を先導
- **知識 vs 能力**
 - 知識偏重の学問ではなく社会問題、「主体的、対話的で深い学び」を。
 - 16年改革を先導
- 二項対立のどちらを選んでも、二項対立を入れ替えても、うまくいかない。
 - そもそも「教養と専門」「知識と能力」は対立しない。
 - **二項対立で描かれる世界は真相。**

そもそも大学とは？教育とは？（真理の守護者？理想の実現？）

スライド1

**教・職・学・外協働による
全学必修共通教育科目の開発と実践
--たちばなBasisの事例報告--**

京都橘大学
西野 毅朗

スライド2

報告内容

- 報告者・大学の紹介
- 京都橘大学における共通教育改革の全体像
- 「たちばなBasis」の実態
- 今後の課題と展望

2

スライド3

報告者紹介 2026年1月20日発行

西野 毅朗 (Nishino Takero)

- ・ 京都橘大学 経営学部 経営学科 准教授
教育開発・学習支援室 教育開発担当 専門教員
- ・ 同志社大学大学院社会学研究科教育文化学専攻博士後期課程修了。
博士(教育文化学)。
- ・ 専門：高等教育、高等教育開発
- ・ 学外委員：日本高等教育開発協会副会長、日本私立大学連盟研修委員会委員長
- ・ 連絡先：nishino-ta@tachibana-u.ac.jp










3

スライド4

大学紹介

- ・ 名称：京都橘大学
- ・ 所在地：京都府京都市山科区
- ・ 学生数：約7000人（男女比：約1：1）
- ・ 専任教員数：約240人
- ・ 専任職員数：約170人
- ・ 沿革：
 - ・ 1902年：学園創立
 - ・ 1967年：大学設立
 - ・ 2005年：共学化
 - ・ 2026年：1学部3学科を新設し、10学部18学科に。




4

スライド5

**京都橘大学における
共通教育改革の全体像**

スライド6

教養（共通）教育改善・改革の流れ

- ・ **【改善】教養教育カリキュラム（2021～2024）**
 - ・ 2019年に改革に向けた号令
 - ・ 2021年の新3学部（経済・経営・工）開設に向けて
 - ・ 企画（職員）が原案を提案し、教員が修正・具体化する教職協働
 - ・ 全学的な既存枠組みは変えられず（準備期間の短さ）
- ・ **【改革】共通教育カリキュラム（2025～）**
 - ・ 2022年に改革に向けた号令
 - ・ 副学長をトップとしたプロジェクトチーム→WGで具体化→共通教育推進室で承認
 - ・ 共通教育の目標、共通教育課程の枠組み・コンセプト等、ゼロから見直し
 - ・ 東京工業大学（現：東京科学大学）のヒアリング、東北大学の視察
 - ・ 原案作りから教職協働、科目運営の都合から学生・外部企業との連携前提

6

スライド7

共通教育の目標を再設定

旧：教養教育目標 → 新：共通教育目標

- ① 市民や社会人として必要とされる知識や教養の獲得
- ② 知的関心をもって学修していく態度や心構えの獲得
- ③ 市民や社会人として必要とされる倫理観や人間性の獲得
- ④ 異なる考え方や異なる文化を持つ人々を理解する能力の獲得
- ⑤ 自分自身や社会が直面するさまざまな問題を理解し解決する能力の獲得
- ⑥ 物事を論理的に分析する能力の獲得
- ⑦ 読む力や書く力、話す力や聞く力の獲得

- ① 【自立】物事を多角的な視点から客観的に理解するとともに、論理的・批判的に思考し、自ら自ら判断し主体的に行動することができる能力
- ② 【共生】ひろく世界に目を向け、他者の価値観や世界のあり方を尊重しつつ、相互に理解しながら協力して物事に取り組む能力
- ③ 【臨床の知】理論と実践を往還する中で知識を実践的に理解するとともに、課題の解決に取り組む中から新たな知を発見する能力

スライド8

共通教育課程の枠組みを再設計

旧：教養教育目標 → 新：共通教育目標

- コア科目群 → たちばな Seeds (京都橋基盤科目群)
- 教養教育科目群 → 教養教育科目群
- キャリア教育科目群 → キャリア形成科目群

たちばな Seeds (京都橋基盤科目群)

- 教養教育科目群
 - ・人間を理解する
 - ・社会を生きる
 - ・自然科学に触れる
- 多文化交流科目群
 - ・外国語科目
 - ・多文化交流実践科目
- スポーツ・健康科目群
- キャリア形成科目群
 - ・キャリアデザイン科目
 - ・産学公連携科目
 - ・資格取得支援科目

スライド9

スライド10

たちばなSeeds (京都橋基盤科目群)

- 「たちばなBasis I・II」 (全学1年次必修科目) → 詳細後述
- たちばなAI・データサイエンスプログラム
 - ・「ITリテラシー」
 - ・「データサイエンス基礎」
 - ・「データサイエンス応用」 + α
- 思考力・表現力育成科目
 - ・「シンキングスキル」
 - ・「プレゼンテーションスキル」
 - ・「ライティング基礎」

スライド11

教養教育科目群 学び方で選びやすく 47科目→63科目に増強

テーマ型	テーマ型	概論型	ゼミ型
人間を理解する	現代日本の思想 日本人と宗教 文字から人生を考える 多文化と文化 現代のメディアと表現 都市の歴史・文化Ⅰ 都市の歴史・文化Ⅱ 多言語コミュニケーション論 オンラインデザインハンディ	哲学概論 倫理学概論 宗教学概論 長崎学概論 長崎文化論 文化人類学 歴史学概論 異文化コミュニケーション論	人間を考える
	日本国憲法 民法 行政法と法 情報技術の歴史と未来 地方自治のしくみと行政 時事問題にふれる 暮らしと経済 東洋の機械に生きる心のほたるか ビジネスの心算 食と農から社会を考える	法哲学概論Ⅰ・Ⅱ 政治学概論Ⅰ・Ⅱ 倫理学概論 国際関係入門 経済学概論Ⅰ・Ⅱ 経営学概論 社会学概論Ⅰ・Ⅱ 社会学入門	社会を考える
自然科学にふれる	数学的思考を身につける 生物の進化と自然 日本の伝統的知識と発展 くすりのサイエンス くすりの科学 子どもの発達とこころの健康 生活実用技術と社会参加 子どもの身体と発展の科学	数学基礎Ⅰ 数学基礎Ⅱ 物理学基礎 化学基礎 生物学基礎 生命多様性概論 地質学概論 AI概論 歴史学概論	自然科学で考える

スライド12

多文化交流科目群 交流の実践科目へ

外国語科目	英語ⅠA・英語ⅠB・英語ⅡA・英語ⅡB 英語ⅢA・英語ⅢB・英語ⅣA・英語ⅣB 中国語入門Ⅰ・中国語入門Ⅱ 中国語会話Ⅰ・中国語会話Ⅱ 韓国語入門Ⅰ・韓国語入門Ⅱ 韓国語会話Ⅰ・韓国語会話Ⅱ フランス語入門Ⅰ・フランス語入門Ⅱ ドイツ語入門Ⅰ・ドイツ語入門Ⅱ 日本語Ⅰ・日本語Ⅱ・日本語Ⅲ・日本語Ⅳ	*科目名に変更はないが、英会話に比重を置いた内容に大幅改定
多文化交流実践科目	・異文化交流演習Ⅰ ・異文化交流演習Ⅱ ・外国語圏地演習Ⅰ ・外国語圏地演習Ⅱ ・多文化協働ワークショップⅠ ・多文化協働ワークショップⅡ ・日本事情Ⅰ ・日本事情Ⅱ ・日本事情Ⅲ ・日本事情Ⅳ	

スライド 13

キャリア形成科目群

コンセプトを明確にして再構築
実践系科目を拡充

キャリア形成科目群の構成は、基礎から実践まで段階的に進みます。中心には「キャリア開発演習（キャリア教育）」があり、その周囲には「キャリア開発演習Ⅰ～Ⅳ」や「就業体験実習Ⅰ～Ⅱ」が配置されています。また、「クロスオーバー型課題解決プロジェクト」や「海外就業体験実習Ⅰ～Ⅱ」も含まれています。

スライド 14

たちばなBasisの実態

スライド 15

たちばなBasis I・IIの特徴

- ほぼ全学科|年次、前・後期、必修科目、学科混合クラス
・2025年度受講者数：1667名（約32名×52クラス）※月曜1・2時間目
・8学部14学科（完成年度を迎えていない総合心理学部を除く全学科）
- 全学共通目標（教学理念）をテーマに設定
・たちばなBasis I：「自立・共生・臨床の知を考える」
・たちばなBasis II：「自立・共生・臨床の知を实践する」
- 遠隔の対面のハイブリッド型授業
・遠隔：議論するための知識を得る、問いについて考える（オンデマンド）
・対面：問いについて意見を共有・議論・発表する
- 遠隔授業は専任教員、対面授業は外部教員が担当
- 全クラスIAを1～2名配置し、主にグループディスカッションを支援
・2年次生～大学院生まで
・毎対面授業後に30分間のミーティング
- 多面的評価
・小テスト（24%）、レポート（20%）、授業中課題（36%）、授業中発表等（6%）、参加度（14%）
※クラス間格差を減らすため、具体的な評価基準も全て設定

13教室・13人の教員で回す工夫

A1(期)	第1回	第2回	第3回
C1(期)	(対面)	(対面)	(遠隔)
B1(期)	—	第1回	第2回
D2(期)	—	(遠隔)	(対面)

スライド 16

授業計画

たちばなBasis I			たちばなBasis II		
第1回	遠隔	オリエンテーション1	第1回	遠隔	オリエンテーション1
第2回	対面	オリエンテーション2	第2回	対面	オリエンテーション2
第3回	遠隔	自立A多角的・客観的・論理的に考える1	第3回	遠隔	臨床問題との向き合い方を考える1
第4回	対面	自立A多角的・客観的・論理的に考える2	第4回	対面	臨床問題との向き合い方を考える2
第5回	遠隔	自立B思考し、判断し、表現する1	第5回	遠隔	教育問題との向き合い方を考える1
第6回	対面	自立B思考し、判断し、表現する2	第6回	対面	教育問題との向き合い方を考える2
第7回	遠隔	共生A他者の価値観を理解する1	第7回	遠隔	環境問題との向き合い方を考える1
第8回	対面	共生A他者の価値観を理解する2	第8回	対面	環境問題との向き合い方を考える2
第9回	遠隔	共生B他者と協力し、協調する1	第9回	遠隔	地域問題との向き合い方を考える1
第10回	対面	共生B他者と協力し、協調する2	第10回	対面	地域問題との向き合い方を考える2
第11回	遠隔	臨床の知知識を实践につなげる1	第11回	遠隔	平和問題との向き合い方を考える1
第12回	対面	臨床の知知識を实践につなげる2	第12回	対面	平和問題との向き合い方を考える2
第13回	遠隔	まとめ1	第13回	遠隔	まとめ1
第14回	対面	まとめ2	第14回	対面	まとめ2

スライド 17

たちばなBasis IIで自己評価に用いているルーブリック

具体的観点	5	4	3	2	1
多角的思考と表現	様々な問題について、多様な切り口を用いて、自分の言葉で説明できる。	問	様々な問題について、自分の言葉で説明できる。	問	自分の言葉で説明することは難しいが、様々な問題について考えている。
批判的思考と表現	信頼性の高い根拠を用いて考え、説得力を持たせて説明できる。	問	根拠を用いて考え、説明できる。	問	根拠を用いて考えることは難しいが、自分の考えは持っている。
論理的思考と表現	What、Why、Howといった問いを通じて、筋道だてて思考し、わかりやすく表現できる。	問	問いを立て、筋道だてて考えることができる。	問	筋道だてて考えたり、自分の考えは持っている。
傾聴力	聞きや相違などで他者が話しやすい雰囲気をつくりつつ、質問を通じて相手の考えを引き出し、理解できる。	問	聞きや相違などで他者が話しやすい雰囲気をつくることできる。	問	聞きや相違などで他者の考えを引き出すことは難しいが、他所事をせずに耳を傾けることができる。
発信力	他者の意見を尊重してより良い考えを提案できるだけでなく、グループの考えをまとめて教養全体に発信できる。	問	他者の意見を尊重してより良い考えを提案することができる。	問	自分の意見は伝えられない。
協働能力	自身の役割を果たすことはもちろん、状況に応じて必要な事務を判断し、臨機応変に行動してグループに貢献できる。	問	自分の役割を積極的に担い、その責任を上手に果たすことができる。	問	与えられた役割を自覚し、その責任を果たすことができる。
知の理解	授業に起こっている問題に強い関心を持ち、学問の視点を用いて理解することができる。	問	授業に起こっている問題に関心を持ち、理解することができる。	問	授業に起こっている問題に関心は持っている。
知の応用	授業を繰り返していく中で、自分自身の知識・技能・態度をより深く、より高度なものへと発展させていくことができる。	問	授業を繰り返していく中で、自分自身の成長を実感することができる。	問	授業を通じて得た知識や考え方を、他の知識や自身の経験と結び付けて理解を深めることができる。
知の発見	授業を繰り返していく中で、自分だけでなく他者にとっても有益な新たな知を発見し、それを表現することができる。	問	授業を繰り返していく中で、自分にとっての新たな知を発見し、それを表現することができる。	問	授業を繰り返していく中で、自分にとっての新たな知を発見できる。

スライド 18

たちばなBasis I・IIの教職外協働—それぞれの視点

教育者、学生、外部のそれぞれが、授業の質向上のために協力しています。教育者からは「教育視点による関わり」、経営者からは「経営視点による関わり」、学生からは「学習者視点による関わり」、外部からは「運営視点による関わり」が期待されています。授業後MTG（よりよい授業づくり）を通じて、これらの視点を統合し、授業の改善を図ります。

たちばなBasis I・IIの教職学外協働

①教員

- WG教員 (5名)
 - ・本科目のデザインメンバー
 - ・人文、社会、工学、医療の4者(教務部長を含む)+統括担当
 - ・WG解散後も、振り返りミーティングを実施
- 全体統括担当教員 (1名)
 - ・本科目のデザイン原案作成、シラバスの策定、教育に関する各種調整
 - ・LAの育成、LAとの協働による科目開発
 - ・本科目の最終責任者(不正行為のチェック、成績確定)
- 遠隔授業担当教員 (20名)
 - ・WGメンバー(教職員)が声かけ
 - ・1名あたり40分動画を、テーマ×自身の専門で作成
 - ・小テストおよび記述課題も作成

19

たちばなBasis I・IIの教職学外協働

②職員

- WG職員 (2名)
 - ・本科目のデザインメンバー
 - ・教務課長、教務課長補佐
 - ・各学部の開講調整、予算調整、クラス分け、教室確保、外部業者選定・調整、広報推進、LAの募集・採用手続きなど
- 全体調整担当職員 (1名)
 - ・教務課長補佐
 - ・科目“経営”に必要な事務仕事全体を担う(予算、広報、人材関係等)
 - ・LAの学内窓口/外部業者との教育面以外の調整
- 運営補助職員 (適宜)
 - ・全体調整担当職員の手が回らないところを適宜サポート

20

たちばなBasis I・IIの教職学外協働

③学生: Learning Assistant

- 遠隔授業の受講/課題提出
 - ・自分たちも経験しなければ支援はできない
- 授業支援
 - ・受講生への声かけ
 - ・アイスペイク
 - ・ディスカッションへの介入
 - ・対面授業担当教員との連携(受講生の様子の共有など)
- 授業後ミーティング(毎授業回30分)
 - ・Keep(良かった点)、Problem(改善点)、Try(次どうするか)
 - ・相談や提案の収集と対応(クラスというより科目全体での要対応事項)
 - ・受講生や教員、他LAとの関わり方の検討など

21

たちばなBasis I・IIの教職学外協働

④外部業者

- 対面授業の講師派遣・統括
 - ・13名+1名(緊急対応)の講師派遣と統括
 - ・講師との連絡窓口
- 全クラスのLMSの統括
 - ・遠隔授業、課題、諸連絡の配信
- LAの勤怠管理
 - ・職員と連携
 - ・給与支払いも委託(勤怠管理が複雑なため)
- 最終成績の集約
 - ・各評価基準に基づく評価結果のリスト化
 - ・クラス間に大きなGAPがないかの確認

22

1年目のたちばなBasis I・IIの振り返り

—学生インタビューにみる学修成果

今までだったら、1つの問いに対して1つの答えが出せたら満足していた。でも、この科目で様々な問いや複数のアイデアがあり得ることを学べた。たとえば「イノベーションで経営者が多く持っている」ということに対して「どこで?」と考えると、増えている場所と増えていない場所があるとかある。ではがないところは「どうすれば?」増やせるかと考えると、移動手段や広域を工夫するなどアイデアがいろいろ出てくる。(工学部1回生)

“伝える”力が高まった。私が発言しても反応がなかったりする。伝え方がまずかったのかなと思う。他の人の発言やプレゼンを見て、具体例を交えたりするなど、伝え方を工夫して、自分以外の人がわかってもらえるよう意識するようになった。(工学部1回生)

自分はコミュニケーションに苦手意識を持っていたが、ディスカッションを通じて、むしろ得意な方ではないかと気づき、自信になった。いろいろな人と関わることもとても面白いと感じられるようになった。そこから、清水寺近くのカフェでのアルバイトにも挑戦できた。特別支援学級の児童がボランティアにも関心が高かったので、ボランティアも始めている。(健康科学部1回生)

“書く”力が高まった。高校生までは、人の話も無反応で聞き流していることが多かった。この科目で、積極的に反応すれば相手もより多く話してくれることが分かった。相手の意見と異なることも、思い切って言ってみると受け入れてもらえるし、よりよい議論につながるかと考えられるようになった。(文学部1回生)

1年間の科目であること、知識を修得しつつ学科横断でディスカッションできることの価値の確保

23

今後の課題と展望

- 共通教育全体としての課題
 - ・成績評価や授業アンケートによるアセスメントは半期に1回実施中
 - ・共通教育目標の到達度の測定が不十分
 - 専門教育課程も含めたカリキュラム全体としての評価と改善
 - *卒業時調査の項目改訂や、学修評価システムの改修が必要
 - 担当事務が異なるため、教職・職連携が重要
- たちばなBasisの課題
 - ・学生間の能力・意欲格差への対応
 - 対面授業の改善(教外連携による授業づくりの推進)
 - =標準スライドの改訂

基盤としての「たちばなBasis」と、総体としての教育課程の、不断の評価・改善を展望

24

スライド1

2025年度 第31回FD-SDフォーラム
 第2分科会 新たな学びを育むために～教職協働によるカリキュラムの構築と再編～

MAKE YOUR UNIVERSE 大正大学

全学必修の前期共通教育を支える教職・学修支援者の協働
 ～多様な人材と共に推進した大正大学の運営実践報告～

大正大学 教務部/学修支援センター
 君島菜菜

2026年2月28日

スライド2

MAKE YOUR UNIVERSE 大正大学

自己紹介

- 大正大学 教務部長
 教学マネジメント推進機構 学修支援センター 特命准教授
 FD副委員長
- 職歴: 社団法人エイジング総合研究センター 調査研究部門 研究員
 大正大学 全学副専攻 インストラクター・教員,
 教育開発推進センター所管教育支援課長,
 学修支援センター所管総合学修支援部長/FD委員
- 学歴: 筑波大学大学院 人間総合科学研究科 学修支援科学専攻 博士課程満退
- 日本高等教育開発協会(JAED) 正会員
- 愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室 プロジェクトフェロー
- 日本私立大学連盟 研修委員

2

スライド3

MAKE YOUR UNIVERSE 大正大学

大学紹介

- 大正15年(1926)の創立 ※2026年は創立100周年!
 建学の理念「智慧と慈悲の実践」
- 東京都豊島区西巣鴨 ※池袋からバスで8分
- 学部生数:4,783名 ※令和7年5月1日現在
 本務教員数:155名, 本務職員数:184名
- 7学部13学科 ※令和8年度より情報科学部を新設
 仏教学部(仏教学科), 文学部(日本文学科, 人文学科, 歴史学科),
 人間学部(人間科学科, 社会福祉学科), 臨床心理学部(臨床心理学科),
 表現学部(表現文化学科, メディア表現学科), 地域創生学部(地域創生学科, 公共政策学科),
 情報科学部(グリーンデジタル情報学科, デジタル文化情報学科)
- 2014年 教育開発推進センター 開設
- 2019年 総合学修支援機構DAC に改組
 2023年 教学マネジメント推進機構 学修支援センター に改組

3

スライド4

MAKE YOUR UNIVERSE 大正大学

全学必修の前期共通教育カリキュラムの変遷

- 2014年 教育開発推進センター 開設
 → 前期共通教育担当の専任教員(教科科目に精通)が所属しTAを活用
 → 学修スキル(主にライティング)と学修基礎形成に重点を置いた全学共通カリキュラム編成
- 2019年 総合学修支援機構DAC に改組
 → 全学部を2つに分け、社会創造系学部群において前期共通教育のカリキュラムを改編
 → 探究, データサイエンス, リーダーシップをキーとしたカリキュラム編成
 → 探究科目において、教養と探究・学修スキルを旨とする統合型教養教育を実施
 → チューター(専任教員・臨時職員)を活用し、大教室にて教員2名体制のゲームデイニングによる学修支援に重点を置いた、チュートリアル教育を実施
- 2020年 知識集約型社会を支える人材育成事業 採択
 → 社会創造系学部群の前期共通教育を全学共通カリキュラムに拡大して実施
 → 総合学修支援部を教務部から独立させ全学横断的な教育改革の実現に向けた組織改革、教職協働体制を確立
- 2023年 教学マネジメント推進機構 学修支援センター に改組
 → 改革期を経過し全カリキュラムを対象としたマネジメント機構の下部組織に位置づく

4

スライド5

MAKE YOUR UNIVERSE 大正大学

1.大正大学の全学必修の前期共通教育カリキュラム

スライド6

MAKE YOUR UNIVERSE 大正大学

現日全学必修の前期共通教育カリキュラム

	1年次		2年次	
目	トランジション1 (基礎から学ぶ)	トランジション2 (次世代入門)	トランジション3 (社会と学ぶ)	トランジション4 (大学から社会へ)
知の加工	知の加工権1 (基礎的読解)	知の加工権3 (基礎的読解)	知の加工権4 (基礎的読解)	知の加工権5 (基礎的読解)
問いの探究	問いの探究1 (IBE-1 Inquiry-based English)	問いの探究2 (IBE-2 Inquiry-based English)	問いの探究3 (IBE-3 Inquiry-based English)	問いの探究4 (IBE-4 Inquiry-based English)
現	※26単位必修から30単位必修へ ※セメスター制からクォーター制へ ※第3QTは専門科目の充て、実習系科目を実施			
人間の探究I (人文学の探究)	人間の探究II (人文学の探究)	人間の探究III (人文学の探究)	人間の探究IV (人文学の探究)	人間の探究V (人文学の探究)
社会の探究I (社会の探究)	社会の探究II (社会の探究)	社会の探究III (社会の探究)	社会の探究IV (社会の探究)	社会の探究V (社会の探究)
自然の探究I (自然の探究)	自然の探究II (自然の探究)	自然の探究III (自然の探究)	自然の探究IV (自然の探究)	自然の探究V (自然の探究)
データサイエンスI (データサイエンス)	データサイエンスII (データサイエンス)	データサイエンスIII (データサイエンス)	データサイエンスIV (データサイエンス)	データサイエンスV (データサイエンス)
総合英語I (総合英語)	総合英語II (総合英語)	総合英語III (総合英語)	総合英語IV (総合英語)	総合英語V (総合英語)

6

スライド7

前期共通教育と全学的教育ビジョンとの関係

MAKE YOUR UNIVERSITY 大正大学

大正大学では、教育ビジョン「4つの人となる」ために現代社会に求められる「10の力」を定めている。

	他者に共感する力	他者の本質を洞察する力	自己目標を理解する力	自分事として課題を捉える力	他者に惹かれて思考する力	自分らしい方法で表現する力	みずからの志を貫く力	多様な意見を尊重する力	新たな価値を創造する力	他者と協働し、課題を解決する力
人間の探究		○	○	○			○			○
社会の探究	○		○	○						○
自然の探究			○	○	○					○
リーダーシップ										
データサイエンス										
総合英語										

スライド8

前期共通教育の教育内容(テーマと汎用的技能)

MAKE YOUR UNIVERSITY 大正大学

「10の力」の主な関連 科目とテーマ

初年度教育として学ぶ内容・汎用的技能

- 自己自身を理解する力 → 人間の探究 (大学教育入門/単位教育 (履修から大学への学びの移行)、キャリア教育 (自ら学ぶ力、大抵にない経験、職業意識の醸成))
- 他者と協働し課題を解決する力 → 社会の探究 (メタ認知能力の養成 (1/F:フロンティア、2/F:FOCAL))
- 自己事として関わりを持つ力 → 自然の探究 (プレゼンテーション (PowerPoint)の活用(目標設定と計画)、シンキングスキル (PBL:テーマ・探究))
- 他者に惹かれて思考する力 → データサイエンス (資料検索・活用 (Excel)の活用(データ分析)、データベース活用 (Web)の活用(文書検索による検索))
- 多様な意見を尊重する力 → 総合英語 (英語コミュニケーション(情報検索、翻訳)、Excel/ Tableauなど)、e-learningによる自律的学習
- みずからの志を貫く力 → リーダーシップ (リーダーシップの養成、協働的学習)、総合英語 (リーディングの養成、協働的学習、自己啓発)

スライド9

前期共通教育の各科目の授業目的

MAKE YOUR UNIVERSITY 大正大学

●探究科目(人間・社会・自然) I～III 各探究6単位 選択必修

授業は2名の教員によるチームティーチング【共通パート】と【専門パート】で構成

【共通パート】
大学での学びや社会で活躍する上で土台となるスキル・能力を学び、専門パートの学びに活かす
◎ソシエタリクススキル(汎用的能力)を教える教員(共通パート担当)が主担当

【専門パート】
科目ごとに設定されたテーマの学習をつうじて、共通パートでの学びをより深め、統合される
◎「科目ごとの専門テーマ」を教える教員(専門パート担当)が主担当

科目名	授業目的
人間の探究 I	科目の「テーマ」に即して、人類が蓄積してきた「文化」について学びながら、世界や日本・地域、そして他者・自己を捉える視点を養うことで、大学での学びや将来の生き方を見定めるための「自分自身を理解する力」を身につけていきます。
人間の探究 II	
人間の探究 III	
社会の探究 I	科目の「テーマ」に即して、変動の激しい現代社会をさまざまな視点から理解するとともに、私たちがどのように生きていくか、多様な他者と協働していくかに社会を作っていくかについて学びます。
社会の探究 II	
社会の探究 III	
自然の探究 I	科目の「テーマ」に即して「自然」をめぐるさまざまな問題について学ぶとともに、大学で求められるレポート・ライティングのスキルについて学ぶ。それぞれの学期末にはこれら2つの学びを統合させ、科目テーマに即するエッセイを書くことに取り組みます。
自然の探究 II	
自然の探究 III	

スライド10

前期共通教育の各科目の授業目的

MAKE YOUR UNIVERSITY 大正大学

●データサイエンス I～VI 6単位 必修

授業は2名の教員によるチームティーチング

実際の社会現場でTableauやExcelを活用してデータドリブンの意思決定に基づき業務遂行する実務家教員や統計分析等の実証研究を主な手法とする専門教員が2名体制で担当

情報リテラシーと統計の基礎を学びながら、論理的思考力を高め、データを用いて社会の課題を解決する力を育成します。

科目名	授業目的
データサイエンス I	自らとデータサイエンスをつなぐ道を開くために、データとは何なのか、データを活用するとはどういうことなのか、統計の基礎をベースにExcelでの情報処理、Tableauでの可視化を通じて学ぶとともに、PCやデータ利活用の際に必要となる情報リテラシーも同時並行で学びます。
データサイエンス II	
データサイエンス III	
データサイエンス IV	データサイエンスVI終了時にはデータをもとに意思決定を行うデータドリブンの思考を高め、社会の課題を解決し、価値を創造していく基本的な力がつくよう、統計分析や論理的な思考スキルを身に付け、課題の発見や解決、社会への価値創造につながる仮説の構築を、実データを使った演習を通じて習得します。
データサイエンス V	
データサイエンス VI	

スライド11

前期共通教育の各科目の授業目的

MAKE YOUR UNIVERSITY 大正大学

●総合英語 I～III 3単位必修

国内外で多様な文化および価値観をもった人々とのコミュニケーションに対応できる力を涵養します。

科目名	授業目的
総合英語 I	多様なトピックの中から、英語の語彙や表現を学び、英語を使った活動を通じてコミュニケーションに必要な英語力を身につけます。また、e-learningを活用して、主体的な自学自習による語学学習の学習習慣の養成を目指します。
総合英語 II	
総合英語 III	

●リーダーシップ I～III 3単位必修

リーダーシップの多様性を理解し、自らの目指すリーダーシップ像を再構築した上で、自己理解を深めて、卒業後の進路を熟考、検討しながら社会への移行に向けて準備をおこないます。

科目名	授業目的
リーダーシップ I	リーダーシップの多様性を理解し、自らの目指すリーダー像に向けて「人間の探究」科目で取り組んだ「自分自身を理解する力」をさらに深め、卒業後の進路について早期から検討することで、卒業後のキャリアプランと行動計画を立て、より自律的な3年次の学習につなげることを目指します。
リーダーシップ II	
リーダーシップ III	

スライド12

MAKE YOUR UNIVERSITY 大正大学

2.多様な人材による前期共通教育カリキュラムの運営体制

スライド 13

知識集約型社会を支える人材育成の採択事業と科目の関係
～新時代の地域のあり方を構想する地域戦略人材育成事業～

MAKE YOUR UNIVERSE. 大正大学

本学の目指す新時代の人材像を「地域戦略人材」＝「多面的な性質をもつ地域の課題解決に向けて具体的な専門分野の多様な人材を育成し、活躍する新しいリーダー」(定義)し、その育成のため、第Ⅰ類指定教科科目、第Ⅱ類科目学融合教育、第Ⅲ類科目アントレプレナーシップ育成教育を推進する。

第Ⅰ類科目	第Ⅱ類科目	第Ⅲ類科目
第Ⅰ類科目(チュートリアル教育・チームティーチング) 27単位必修 探究科目、データサイエンス、リーダーシップ	第Ⅱ類科目(学融合教育) 4単位必修 学融合セミナーⅠ・Ⅱ	第Ⅲ類科目(アントレプレナーシップ育成教育) 24単位必修 起業人材コース、企業内リーダーシップコース、パブリックコース

「地域戦略人材」へ

※ 大正大学では、前期共通教育科目を第Ⅰ類科目と称し、全学必修としている。

スライド 14

教員組織と事務組織の関係

MAKE YOUR UNIVERSE. 大正大学

教員組織

- アントレプレナーシップ教育チーム
- クロスディシプリン教育チーム
- トランジション教育チーム

事務組織

- 学修支援センター(通称: DAC)
- 事務所管
- 教務部(旧 総合学修支援部)
- 教職協働
- 共通教育課

Ⅲ類の共通教育(選択必修)の運営
対象: 主に3・4年生
※共通教育課・事業課・キャリア支援課と協働

Ⅱ類の共通教育(選択必修)の運営
対象: 2・3年生
※学科の専任教員・教務課と協働

Ⅰ類の共通教育(必修)の運営
対象: 1・2年生
※学修支援に重点を置いたチュートリアル教育を実施
※チューター・SAと協働
※共通教育課と協働

スライド 15

大正大学のチュートリアル教育

MAKE YOUR UNIVERSE. 大正大学

【定義】 学生が生涯主体的に学び続けるために、自律的に学ぶ姿勢を身につけることを目標として、学生一人ひとりの学びを総合的に支援する教育体制

※ チューターとは
定義: 一人ひとりの学びと成長を支える総合的学修支援者
目的: 学生が自律した学修者として成長するための支援
役割: 教員・職員と協働して支援する「第3の人材」
種別: コアチューター(任期制専任職員)、クラスチューター(臨時職員)
※一人ひとりの学びと成長の伴走者としてのチューターを独自に育成・採用・研修

【対象】 主な対象は前期共通教育受講の1・2年次の全学部生(留学生を含む)

前期共通教育 学修支援

Learning

教員 学生 支援 チューター 職員

スライド 16

大正大学のチュートリアル教育の全体像

MAKE YOUR UNIVERSE. 大正大学

正課の学修支援

- 授業内支援
 - 授業準備、遅刻/欠席者対応
 - グループワーク支援、個人ワーク支援
 - 質問対応(PC、ICTアプリ操作など)
- 授業関連支援
 - 学修相談コーナー/学修に関する不定期相談
 - リレーションへのフィードバック
 - スタディスキルイベント/権威の企画運営

UR-note LMSに学修情報一元化

- 出欠情報
- 課題提出情報
- 学修成果物(リフレクション等)
- 自己分析、学修目標の設定、心算りを書き加えていく
- 面談者が面談記録を記入する

正課外の学修支援

- 学生全員面談(夏期・冬期)
 - 面談者: 教員とチューター 対象: 1年生全員
 - 学修の振り返りと目標設定を支援することで学生のモチベーションをあげ、キャリア意識の醸成を促し、主体的な学びへの転換を促す
- 定期ミーティング(秋期・春期)
 - Ⅰ類科目の受講状況や出席面談などをとくに
 - 学生の学修状況や学科教職員と意見交換

学修支援

- 学修相談
- 学生
- チューター
- SA

学科との連携

- 随時の情報共有
- 学修支援の緊急性の高い場々の学生の学修状況など(学科教職員・オンライン)で共有
- 学科ごとの情報整理
- 学修状況共有

スライド 17

教員と学修支援者の主な役割分担

MAKE YOUR UNIVERSE. 大正大学

学修支援内容	教員	チューター/SA	職員
・学修スキルの習得支援	◎(教育内容の一部)	○(学修支援として)	
・レポート・論文作成支援	◎(教育内容の一部)	○(学修支援として)	
・授業内容に関する学修支援	○	◎(ワークの支援)	
・資格取得(データサイエンス科目関連)	◎	○(企画運営)	
・学生相談 ※学修面以外の相談は学生支援担当		◎	
・履修指導オリエンテーション ※履修指導は学務職員	○	○	◎
・学修環境の整備		○	◎

形態

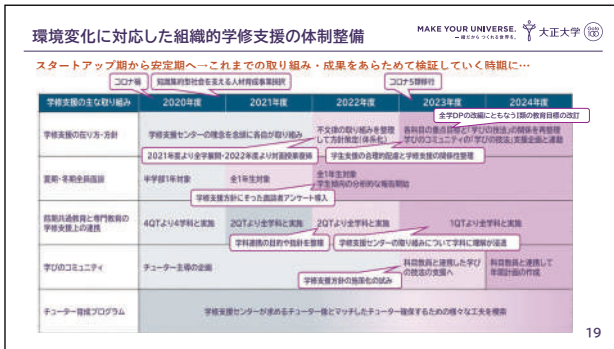
- ・集団を対象とした指導 → 教育課程(学修スキル、ライティングスキルなど)と課外の補習など
- ・個別面談・個別指導 → 定期・不定期面談、学修相談コーナー、PCカフェ等
- ・集団を対象としたガイダンスやオリエンテーション
- ・SNS等を利用した情報提供 → LMSやMicrosoft Teamsの活用、大正大学アプリなど

スライド 18

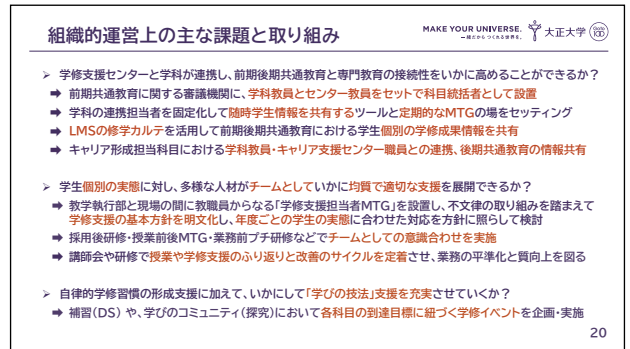
3. 組織的支援の発展(運営課題とその取り組み)

MAKE YOUR UNIVERSE. 大正大学

スライド 19



スライド 20



第3分科会

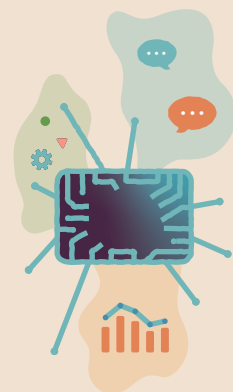
大学危機の時代を生き抜く組織づくり ～組織効力感の醸成～

報告者

坂井 風太 氏 株式会社 Momentor 代表取締役

コーディネーター

前川 雄太 氏 京都女子大学 大学改革推進室 室長



〈第3分科会〉

大学危機の時代を生き抜く組織づくり ～組織効力感の醸成～

コーディネーター

京都女子大学 大学改革推進室 室長 前川 雄太

○本分科会のねらい

急速な人口減を背景に、募集停止や廃止が相次ぐ大学危機の時代が現実のものとなった。今後さらに厳しさを増していくことが確実な将来を前に、多くの大学において一人ひとりの構成員は、このままの組織ではいけないと不安を募らせつつも、しかしどうすればいいのか、試行錯誤、苦闘している。組織の変革・活性化には、現場の構成員レベルが「自分たちならできる、やれる」という感覚＝組織効力感を持つことが重要である。本分科会では、組織効力感の理論的背景と具体的な事例を交えた実践的アプローチ（理論と実践の架橋）を共有し、危機の時代を生き抜くための組織づくりを考えることを目的とした。

○報告の概要

講師：坂井 風太 氏（株式会社 Momentor 代表取締役）

坂井氏は株式会社 DeNA 入社後、複数の事業責任者を経て子会社の代表取締役社長に就任し、経営改革や M&A 等を経験した。並行して、DeNA の人材育成責任者として、事業リーダー経験と学術的理論をベースに独自の人材育成・組織マネジメント基盤プログラムを構築し、現在は、人材育成・組織強化をサポートする株式会社 Momentor を設立し、大企業・スタートアップ・大学（北海道大学、沖縄科学技術大学院大学等）・官公庁など、300 を超える組織にプログラムを提供している。

分科会では、組織を活性化し、変革を成し遂げていくために、「組織効力感」をいかに醸成するかをテーマに、坂井氏より講演いただいた。概要は以下の通り。

1. 大学組織が抱える課題と生存者バイアス

大学組織特有の課題として、高度な専門性ゆえの「縦割り構造」、伝統があるがゆえの「変化への抵抗」、そして事務職において顕著な「成果の見えにくさ」が挙げられる。特に深刻なのは、組織内に蔓延する「言っても無駄」という空気感。これは、自身の成功を過信し他者の苦境を軽視する「生存者バイアス」に起因する。自身の経験のみを根拠にする「自論」はあっても学術的な「理論」に基づかないマネジメントが、心理的安全性を損ない、組織の硬直化を招いている。

2. 組織改革のエンジン：組織効力感

組織改革には「変わった方がいい感（危機感）」だけでなく、「変われそう感（効力感）」が不可欠。

- 定義：最小単位は「この人となら行けそう」という感覚であり、それが組織全体に広がることで、難局を乗り越える力となる。
- 醸成方法：過去に成し遂げてきたことを共有する「集団的達成経験」や、仲間の良い噂を流す「ポジティブ・ゴシップ」が有効。

3. 組織文化を変える「口癖」と「ダブルループ学習」

組織文化の最小単位は口癖。日常的な口癖を変えることが、組織の新陳代謝を促す。

- ダブルループ学習：単にルールを守るのではなく、前提や目的から見直す学習形態。
- 実践的な口癖：異論が出た時に「一理あるかも」と一旦考えたり、組織の危機を知らせる「炭鉱のカナリア」として面白い姿勢が、リーダーに必要。
- 推奨される言葉：「おかげで」「一緒に」「私たち」という言葉を多用することで、協着力関係が強化される。

4. 個人のマインドセット：自己効力感・GRIT・インテグリティ

組織を構成する個人の変容も不可欠。

- 自己効力感:「やればできる」ではなく、失敗も含めて経験から学ぶ「やれば分かる」という精神（成長マインドセット）が重要。
- GRIT（やり抜く力）:長期的な目標を追求する姿勢。自分との小さな約束を守る習慣が、困難に直面した際の粘り強さを育てる。また、「やらなかったことへの後悔」を重く見る「非行為の後悔」の視点を持つことが、一步踏み出す動機となる。
- インテグリティ（誠実さ）:誰も見ていない時でも正しいことをする姿勢。ハラスメント未満の不法な言動である「インシビリティ（礼節の欠如）」を防ぐ土台となる。

5. 実践事例：北海道大学

- ボトムアップの動き:DX推進室が中心となり、「マインド・トランスフォーメーション」研修を数年にわたり実施。
- 歴史への感謝:改革の熱量は、先人たちが築いた歴史への「感謝」から、次世代への「責任感」へと変換されている。
- 波及効果:特定の部署から始まった「種火」を、理事や部長を巻き込むことで組織全体へと広げている。
- 仲間集めのコツ:熱量の高い人から、興味を持ちそうな人を次々と紹介してもらい「数珠繋ぎ（リクルート）」の手法が、熱量の密度を維持する鍵。

6. 総括

組織を変えるのは制度ではなく人間。組織文化の変革は共通言語が浸透していくプロセスで、これには2～3年の歳月を要する。まずは自分自身が「圧倒的に誠実」かつ「楽しそうに目標を語る」人間となり、周囲に「おかげで」と感謝し、「一緒にやろう」と伝えていくことから、組織の新しい渦が生まれる。

○報告に対する質疑ならびに全体討議の内容

Q1:北海道大学の事例では「熱量の高い個人」と「理解あるリーダー」のどちらが先に動いたのか？（鶏が先か、卵が先か）

A1:改革は「種と水やり」のような関係。北海道大学や OIST の事例でも、中心となって動く推進者（種）と、それを「やってみればいい」と後押しする管理職（水やり）のセットが重要だった。最初から120%の熱量がある必要はなく、60%程度の熱量を持つ者同士が会うことで組織は動き始める。

Q2:地方の私立大学など、厳しい環境にある大学でもこれらの理論は適用できるか？

A2:トヨタのような大企業から小規模の動物病院、あるいは国立大学まで、組織の規模や種類を問わず人間が集まる場所であれば、組織効力感やインシビリティ（礼節の欠如）の理論は共通して有効。

Q3:権限のない若手や中堅が組織を変えるためのコツはあるか？

A3:2つのステップがある。まず、若手の層で成功事例を作り、アンケートなどで高い評価を得ること。その結果（「上層部もこの概念を知るべきだ」という若手の声など）を根拠として本部長や理事に報告し、テクニカルに上層部を巻き込んでいく手法が効果的。

Q4:プロジェクトに協力せず、斜に構えている（冷笑的な）層をどう巻き込めばよいか？

A4:全員を高い熱量に引き上げるのは現実的に難しいため、まずはインシビリティ（ハラスメント未満の不法な言動）を明確にNG行為として定義し、少なくとも「冷水を浴びせない」というラインを守ってもらうことが先決。また、「どうせやらなければならない仕事なら、楽しくやろう」という「どうせなら」の精神で視点を変えてもらうアプローチも有効。

Q5:教員組織を巻き込むのが難しいと感じているが、何かヒントはあるか？

A5:教員に対しては、無理に「巻き込む」というよりも、まずは「リテラシーとして知ってもらう」というスタンスが推奨される。研修報告会などの場で「インシビリティ」などの概念を共有し、共通言語として持ってもらうことから始める。

Q6：「自分にはできない」と不安を感じている職員に、どう声掛けすればよいか？

A6：「成長マインドセット」と「やれば分かる」という言葉が有効。最初から完璧を求めず、「まだできていないだけ」と考え、失敗のリスクを正しく計算させることで一歩踏み出しやすくなる。

Q7：組織効力感を測定する良い方法はあるか？

A7：サーベイ（アンケート）を実施する。その際、「結果期待（目標達成できそうか）」と「効力期待（自分たちのチームは強いかな）」を分けて測るのがコツ。また、数値そのものよりも、前月からの変化や、自由記述欄のコメントから原因を分析することが重要。

Q8：インシビリティを防ぐ「ガイドライン」はどう作ればよいか？

A8：難しく考える必要はない。「会議中の内職」や「チャットの無視」など、具体的なNG例を3～5個挙げるだけでも十分に効果がある。大切なのは、何が不作法な行為なのかを組織内で言語化すること。

Q9：仲間集めの効果的な方法はありますか？

A9：「数珠繋ぎ」の紹介制がおすすめ。一人の熱心な参加者から、興味がありそうな人を2～3人紹介してもらう形式で進めると、熱量の高い仲間が自然と集まりやすくなる。

Q10：新卒や若手職員が心がけるべきことは何か？

A10：「鉄は熱いうちに打て」という言葉通り、1年目からこれらの理論（ポジティブ・ゴシップングなど）を知っておくことが最大の武器になる。権限がなくても、周囲の「おかげ」に気づき、それを伝えることで組織の雰囲気（組織効力感）を向上させることは可能。

I. 講義の目的と構成

本講義では、大学組織が抱える構造的課題を理解し、「組織効力感」という概念を軸に、停滞した組織を活性化させるための理論と実践手法を学ぶ。

講義の流れ:

- 企業・自己紹介
- 大学組織の課題と組織効力感の重要性
- 北海道大学の取り組みの分析
- 【休憩】
- 土台理論(自己効力感・GRIT・インテグリティ)
- 組織効力感理論
- 質疑応答

II. 大学組織が抱える構造的課題

1. 大学組織の3つの特性

特性	内容
①分断されやすい	高い専門性が「縦割り構造」を強固にし、部署間の壁が高くサイロ化しやすい
②動きにくい	合意形成重視で意思決定が遅く、伝統があるため変革への抵抗が生まれやすい
③成果が見えにくい	教育・研究の成果は長期的で、「誰が何を頑張っているか」が分かりにくい

2. 組織硬直化のメカニズム

生存者バイアスの問題:

- 「自分はこう育った"おかげで"と「こう育った"にも関わらず"」の履き違い
- 「持論はあるが、理論はない」状態の蔓延
- 心理的安全性の欠如、「言っても無駄」という雰囲気

シングルループ学習の罫:

- 「XXをやる理由」が「XXをやってきたから」という論理の循環
- 前提条件を疑わない組織文化
- 「形式遵守の免責」「権威による沈黙の強制」

⇒ 結果: 改革勇者の疲弊、自己献身者の限界、人材の離脱

3. 健全な組織文化とは:ダブルループ学習

項目	シングルループ	ダブルループ
特徴	前提条件を疑わない	前提・当たり前を疑うことが当たり前
思考	「ルールを守る」	「ルールが守ろうとしている価値を守る」
文化	「言っても無駄」	「異論」を面白がる

推奨する口癖:

- 「一理ある」 → 相手の視点を理解する姿勢
- 「炭鉱のカナリア」 → 耳が痛い意見こそシグナル

4. 組織効力感の必要性

結論: 「私たちならできるという共通信念(組織効力感)」が、大学組織の本来の価値を最大限に発揮させるキーコンセプトとなる

III. 北海道大学の実践事例分析

1. 取り組みの概要

- 推進主体: DX推進室(人事部ではない)
- 対象: 事務職員200名を目標(50名実施済)
- プログラム名: MX(マインドトランスフォーメーション)研修
- 参加条件: 組織に伝搬してくれること

推進の動機:

- 北海道大学の未来のため
- 将来、自分が後悔しないため

2. 成功の3つのポイント

①リーダーの覚悟

NGケース	OKケース
「誰かがやってくれるでしょ…」 「うちは人事チームではないし…」	「退職する時に後悔しそうなことは?」 「人事チームしか起案してはいけないって誰が決めた?」

ポイント: 未来への責任感を持ち、「他人事」ではなく「自分事」として推進

②波及効果の創出

NGケース	OKケース
「とりあえず1回セミナーを受けたからいい」 「徐々に周りを巻き込めばいいでしょ(誰も巻き込まない)」	「大学職員の200名に受講してもらおう」 「1期目の人に2期目の支援に入ってもらおう」 「合同の復習会も実施しよう」

ポイント: 長期的施策として、1期目⇒2期目⇒3期目と継続。先輩が後輩をフォローする仕組み

③小さな成功の共有+可視化

NGケース	OKケース
「まあ施策をやり続けていればきっと広がっていくはずだ」	「成果や取り組みの発表を行おう!」 「興味のあるようなあの人にも声を掛けてみよう!」

ポイント: 物事は勝手に広まらない。「組織効力感の渦」を自分から育てる

3. 事例から学ぶこと

キーマッセージ:

「最初から大きいムーブメントなどはない。本気の仕掛け人が組織効力感の渦を大きくしている」

IV. 土台理論①: 自己効力感(Self-Efficacy)

1. 自己効力感とは

定義: 「自分ならば達成できる/できるようになる」という自信

※自己肯定感(be good)とは異なる概念。自己効力感は「to be good」

2. 自己効力感の獲得方法

要素	定義	実践のコツ
①達成経験	客観的ではなく「主観的な達成経験」の認識	「成功体験を積ませる」より「成功体験を自覚してもらう」 例: 「以前よりも上手くできていたけど、 どういう点に気をつけていたの?」
②社会的説得	信頼している人からの「能力・姿勢・強み」の伝達	再現すると成果が上がる行動(コツ)を分析して伝える
③代理体験	「自分と近い人の成功」の観察	「逆代理体験」をしない(失敗例ばかり見せない)
④感情的状態	「心身のコンディション」の良好さ	休む重要性を理解し、休んでもらう

3. 自己効力感を踏まえた成長支援

重要: 厳しいことを言うのがNGではない。「変わった方がいい感」「変われそう感」セットで伝える
実践話法

①ポテンシャル話法:

「前より〇〇できるようになってるね!ただ、本来のポテンシャルからするとここまでできるのでは?」

②もったいない話法:

「〇〇さんはXXが強みだけど、この部分を調整しないとせっかくの才能・熱量がもったいない!」

ポイント: 人は「自分のポテンシャル」を信じてくれている人の言葉を信じる

4. 主体性の3要素

人が主体的に動くには以下の3つが必要:

要素	定義	伝達方法
①自己決定感(やりたい)	自分で決定している感覚	「私よりも既に詳しいと思うのですが、 〇〇さんはどう思いますか?」
②自己効力感(やれそう)	自分ならできそうと思える	「〇〇の領域について、前よりも詳しく なっていますね!」
③組織支援感(仲間がいる)	周囲が後押ししてくれる	「周りの人も応援していたよ!」

注意: 「やる気がない!」で片付けず、3要素(やりたい×やれそう×仲間がいる)を分解して考える

V. 土台理論②:GRIT(やり抜く力)

1. GRITとは

定義: 長期的な目標を断固として追求する姿勢

2. GRITの2因子

因子	内容
努力の粘り強さ	困難に直面しても諦めずに続ける力
興味の一貫性	長期的に同じ目標に集中し続ける力

3. コスパの谷

成果が出るまでの停滞期。この時期を乗り越えるためにGRITが不可欠
組織におけるGRIT:

- 短期的な成果だけでなく、長期的な組織変革を信じて継続する力
- 「すぐに結果が出ない」からといって諦めない文化

VI. 土台理論③:インテグリティ(誠実さ・高潔さ)

1. インテグリティとは

定義: 「誰も見ていないときでも正しいことをする姿勢」

2. コンプライアンスとの違い

概念	内容
コンプライアンス	法令を守る(消極的な善)
インテグリティ	より良い組織を作る(積極的な善)

3. インテグリティ浸透の3つのポイント

ポイント	内容
①重要性	なぜインテグリティが大事なのかを全員に周知
②具体性	具体的に何をすればいいのかを自社流のガイドラインとして明確化
③率先垂範	経営層・リーダー層が「インテグリティの鏡」として実践

4. インシビリティ(礼節の欠如)の抑止

インテグリティがない組織では、小さな不誠実さが積み重なり、組織が腐敗する

VII. 組織効力感理論

1. 組織効力感とは

定義: 「自分たちならば、成し遂げられそう」という組織感情

自己効力感(個人)⇒組織効力感(チーム・組織)への拡張

2. 組織効力感の獲得方法

要素	定義	ポイント
①達成経験	以前無理だと思っていたXXが成し遂げられた	「成し遂げてきたこと」をチームメンバーに共有する
②社会的説得	他のチームメンバーの強み・貢献の理解	ネガティブゴシップ<ポジティブゴシップ
③代理体験	成功している組織も分解してみると変わらない	「近しい組織・チーム」の成功を観察し自分に当てはめる
④感情的状態	チームの関係性の良好さ	セキュアベースがない組織では無理

3. 組織効力感の構造

組織効力感 = 結果期待(ゴールを信じる力) × 効力期待(仲間を信じる力)

4. なぜ組織効力感が大切なのか

高い壁に遭遇した時こそ「この人たちと一緒にやれば突破できそう感」が必要

組織効力感がある組織:

- 「こういう状況だけど、この会社/この仲間ならまだまだ行ける気がする」→しぶとい企業

組織効力感がない組織:

- 「こういう状況だし、この仲間では無理な気がする」→人材が離脱していく

5. 実践手法

ポジティブゴッシング

他人の強みや貢献を「裏で褒める」ことで、組織文化を活性化

小さな能力、大きな主役

メンバー独自の専門領域や「必殺技」を見つけ、貢献可能性を自覚させる

VIII. まとめ:組織変革のための行動指針

北海道大学の事例から学ぶ3つのポイント

①リーダーの覚悟

- 「誰かがやってくれるでしょ」という受け身の姿勢ではない
- 「人事チーム」ではなく「DX推進室」が枠外の業務として推進
- 未来への責任感を持ち、「他人事」ではなく「自分事」として力強く推進

②波及効果の創出

- 「何かが変わればいいな」という受け身の姿勢ではない
- 「変わるまでやり切る」という覚悟で波及効果の創出をしつこく実行
- 長期的施策として継続し、先輩が後輩をフォローする仕組みを構築

③小さな成功の共有

- 「周りが興味を持ってくれればいいな」という受け身の姿勢ではない
- 「興味を持ってもらえるように動く」で組織効力感の渦を拡大する
- 成果や取り組みを可視化し、積極的に発信・共有

第4分科会

大学の授業における 「所属感・居場所」づくり

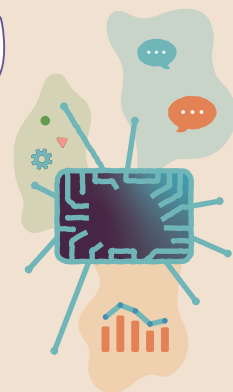
報告者

土居 洋平 氏 跡見学園女子大学 観光コミュニティ学部 教授

中尾 覚 氏 龍谷大学 心理学部教務課 職員

コーディネーター

小正 浩徳 氏 龍谷大学 心理学部 准教授



〈第4分科会〉

大学の授業における「所属感・居場所」づくり

コーディネーター

龍谷大学 心理学部 心理学科 准教授 小正 浩徳

○本分科会のねらい

本ワークショップの大きなねらいは、授業をはじめとした学生たちの大学生活における「所属感・居場所」について参加者同士でアイデア・イメージを集約し、学生の中退予防について考え、今後の学生への教育につなげることである。

そこで、学生が自ら大学に来たい、講義や課外活動に続けて参加したい、そう思えるような大学としての工夫ということテーマとした。このテーマをふまえたワークとして、参加者のアイデアを付箋紙に書き出し、それを模造紙に張りまとめることでアイデア・イメージの集約を行いつつ、参加者同士で考えられたことから討議するものとした。

○報告の概要

参加者同士のワークに先立ち、コーディネーターである小正がまず趣旨説明を行った。その中で、学生の中退予防につながる可能性のある要因として、「大学帰属感」があり、この「大学帰属感」に影響を与える3つの要因として「友人関係満足感」、「教員サポート感」、「学び満足感」があることなどを報告した。

続けて、中尾覚氏（龍谷大学心理学部教務課 課員）が、龍谷大学心理学部の学生有志によるチーム作りを報告した。このチームは「team 彩」と学生により命名された。また、コンセプトは「学生同士の学年の垣根を超えた交流学生主体の活動団体」としてそこには「たて×よこ」のつながりを創出であった。こうしたなかで、学生にとって「いつものメンツがいる」という安心感の中、team 彩が学生の居場所としての機能を果たしていることが話された。中尾氏は、大学側がチーム作りを先導し学生がそれを居場所としてより発展させていくことの有用性が示す一方で、学生が、自身の「自己責任」のもと自ら主体的に学び成長していく場所として、大学を活用し居場所へとすることができるような力を備え、それを発揮できているのかどうかということについて指摘した。

そして、土居洋平氏（跡見学園女子大学観光コミュニティ学部 教授）が、授業や地域との連携を通じた「居場所」作りの実践・研究を報告した。その中で、「居場所」作りにおいて「関わりの機会を増やす／一つ一つの関わりを太くする」ことを通じて学生が「ここに居たい」と思えるような取り組みを念頭に置いていること、具体的には授業の中で「機会の量・質の向上」として学生と教員そして学生同士のコミュニケーションに意識を置き、そこで生じるコンフリクトもまた教育の一環としての対応を行っている。また、大学の構内に学生が溜まることができる場所（物理的な居場所）を作る工夫や、大学外つまりは地域の中に学生が溜まることができる場所（物理的かつ心理的な居場所）につなぐ工夫についても報告された。この地域における「居場所」に学生が赴き、地域の人々との関わりの中から、学生自身の自己有用感を育み、学問的な探求心を育てることができた事例も報告され、居場所の教育的な効果が示された。

土居氏は、学生の居場所につながる「関係機会を増やす・関係性を太くする」ことの取り組みにおける課題として、学生にその機会を提供したとしてもそこに呼応する学生と、呼応しない学生という二極化があることが示された。また、その呼応しない学生がいるからといって機会の提供を広くアナウンスしなくなることは、学生に対する関わりが少なくなり、結果、学生が寂しさをより募らせることにもなりかねないことを指摘した。このバランスの難しさをどう教員側が理解し、アプローチするのがポイントになるとの見解を示した。

○報告に対する質疑ならびに全体討議の内容

上記のように大学による実践報告がなされた後、参加者同士によるワークが行われた。ここでは、大学教員と事務員によるグループが6つ、学生によるグループが1つ作られ、次の課題のもと、検討を行った。

課題は、『「学生が所属意識をもてる場所・団体」、「大学における「居場所」』という2つの事柄からイメージされたことを各自が付箋紙に書きだし、それをグループ内でまとめ、「大学における「居場所」』について検討すること、である。

約1時間ほどのグループワークを行い、最後に、学生グループと、大学教員と事務員グループから1グループより検討結果の報告が行われ、全体でシェアされた。

なお、ワークショップ後、各グループでまとめられたものを確認したところ、「場所としての居場所」、「対人関係からみた居場所」、「居場所の心理的効果」といった3つに大きく分類できるよう考えられた。このようにしてみると、学生にとって「居場所」となりうる安全・安心な場所があり、そこに学生や教員、またその場所に関わる人々との関係性がうまれる状況がある中で、学生自身が「居場所とそこにある対人関係」から安らぎや喜びなどを感じられる機会の提供を「大学の授業」が担うことができれば、そこに意義がでてくるように思われる。

今回は、「大学側が「居場所」を作る・提供すること」ということからの検討であったが、学生の主体性ということを考えた時、今後は大学側と学生側の双方向から居場所が生まれるような可能性やあり方について検討してみたい。

スライド1

第31回FD・SDフォーラム 第4分科会 You, Unlimited

Ryukoku University

大学の授業における「所属感・居場所」づくり (趣旨説明)

龍谷大学 心理学部 小正 浩徳
 跡見学園女子大学 観光コミュニティ学部 土居 洋平
 龍谷大学 心理学部教務課 中尾 覚

スライド2

本分科会(ワークショップ)について

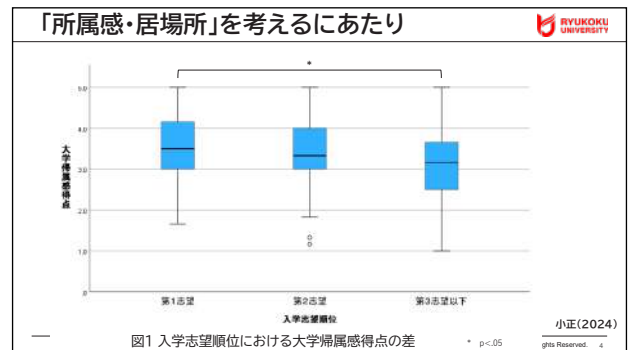
「中退予防」を考えたい(この大学に来たい気持ち)
 「所属感・居場所」を考える(大学に「居場所」がある)
 大学側が提供できる「モノ」があるのでは?
「集合知」を!

スライド3

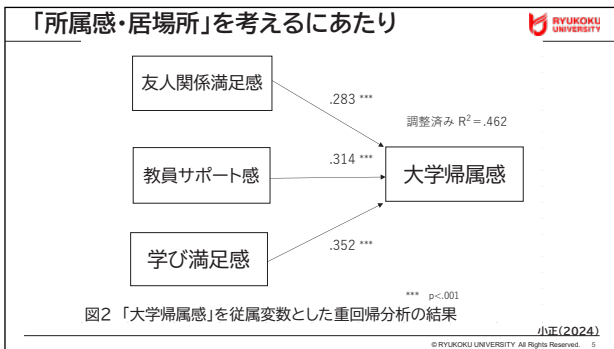
本分科会(ワークショップ)について

これまでの実践・研究のなかで
 臨床心理士・公認心理師として
 不登校・特別支援 → 社会(学校)で生活するための「こころ」を育てる
 大学教員であり研究者として
 大学生が次の「ステージ」に参加するための支援
 → **「中途退学」の『予防』、「(この)大学に来たい」**
 (この(龍谷)大学で成長できた、と思ってもらえる「関わり」)

スライド4



スライド5




スライド6

「所属感・居場所」を考えたい

「所属感・居場所」を考える(大学に「居場所」がある)
 大学(側)が提供できる「モノ」があるのでは?
 ◎ 『人間関係(教員・友人)構築機会』の「提供」
 ☆ 『「学び」たい気持ちが育つ機会』の「提供」

スライド7

「所属感・居場所」を考えたい 

「居場所」って？


個人的居場所: 1人でのときの「居場所」

社会的居場所: 誰かと一緒にいるときの「居場所」

社会的居場所の確保と精神的健康とは有意な正の相関 石本(2010)

© RYUKOKU UNIVERSITY All Rights Reserved. 7

スライド8

「所属感・居場所」を考えたい 


大学生を見ていると

1人でのときの「居場所」も

誰かと一緒にいるときの「居場所」も

© RYUKOKU UNIVERSITY All Rights Reserved. 8

スライド9

文献 

石本雄真(2010) こころの居場所としての個人的居場所と社会的居場所
カウンセリング研究 43 (1) 72-78

小正浩徳(2024) 中途退学の予防に向けた大学適応感質問紙の活用Ⅲ
2023年度自己応募研究・指定研究プロジェクト報告書 5-6

© RYUKOKU UNIVERSITY All Rights Reserved. 9

スライド1


関係機会を増やす・関係性を太くする
 —跡見学園女子大学での取組み事例から—

2026（令和8）年2月28日（土）10:00-12:30
 第31回FD-SDフォーラム 第4分科会
 大学の授業における「所属感・居場所」づくり 報告
 担当 土居洋平（跡見学園女子大観光コミュニティ学部／地域交流センター）

1

スライド2

0. 自己紹介

氏名	土居 洋平（どいようへい）	
所属・職位	跡見学園女子大学観光コミュニティ学部教授 同 地域交流センター長 京都芸術大学大学院芸術研究科（通信） 特任教授	
専門	都市社会学・農村社会学・地域社会学 （地域の居場所形成・農村移住等を研究しています）	
所属学会	日本都市学会（理事）・関東都市学会（会長） 日本村落研究学会（年報編集委員）・地域社会学会等	

2


スライド3

1. 本題の前に(1)：「居場所」とは？

「居場所」と「居所」との決定的な違いは、居場所には価値が与えられているという点である。居ることが心地いい（快適）、居ることが許されている（承認）、居ることを求めている（願望）といった場合に、そこは居場所となりうる。」

祐成保志、「第8章 居場所の条件 コモンズとしての住まい」武田・祐成編、2023『コミュニティの社会学』有斐閣、p.187より

快適である場所
居て良いと感じられる場所
そこに居たいと思える場所



HONG022515

3

スライド4

2. 本題の前に(2)：居場所を作る方法

①（物理的にも精神的にも）快適な場の形成



物理的：実際に、快適に過ごせる空間の形成
精神的：脅威・恐怖・不安を感じさせない場づくり

② ここに居て良いというメッセージの発信

物理的：「居ること」についての肯定的な表示
精神的：存在承認・尊重・役割期待と遂行・・・

③ そうした関わりの機会を増やす／一つ一つの関わりを太くする

➡ ここに居たいと思うようになる

4

スライド5

3. 授業での取組み(1) 講義科目にて


- ① 快適な場の形成
 - ・集中または分散しすぎない工夫（教室サイズ・座席配置）
- ② ここに居て良いというメッセージの発信
 - ・口頭で出席確認
 - ・リアクションペーパーに対するコメントの工夫
- ③ 機会の量・質の向上
 - ・講義科目でも、双方向のやりとりができる機会を設ける
 - 例：毎回ミニ課題を授業内で実施・机上巡回でコミュニケーション
 - ミニ課題作成は「相談しながらやってよい」という形に
 - 課題を10人ぐらいで回し読みして相互評価をする・・・等

5

スライド6

3. 授業での取組み(2) 演習科目にて

- ① 快適な場の形成（省略）
- ② ここに居て良いというメッセージの発信
 - ・個人々への役割の付与
- ③ 機会の量・質の向上
 - ・PBL的な共通の解決すべき課題の設定・克服に向けた検討・実践
 - 共同で同一の課題に取り組むことで、関係機会の量増加・質向上
 - 共同の場をつくることで、共同性・共同意識・所属感情は向上する
 - ・例：社会調査実習：同一対象地域について事前に調べる・議論する・調査を設計・交渉・実施・分析・・・所属感情は向上
 - ※ 但し、コンフリクトとその調整が必ず発生する




6

スライド7

3. 授業での取組み(3) 演習(ゼミ)にて

- ① 快適な場の形成
 - ・文系であっても、溜まれる物理的な場は大事
 - 学生グループ研究室の設置/教員研究室の開放
- ② ここに居て良いというメッセージの発信
 - ・制度的な保証の表示・茶菓子等の提供
- ③ 機会の量・質の向上
 - ・共通のテーマでの議論・PBL的取組(演習科目に同じ)
 - ・課外活動等での共同実践・移動時間も含めた場の共有

※ 授業時間以外の拘束は年々困難に/希望制で活動を編成するなどの工夫が必要




7

スライド8

3. 授業での取組み(4) 補足

- ③ 関係性の量と所属感・居場所について
 - ・前任校(東北文科大学短期大学部(旧 山形短期大学))
 - ・学科80名定員×2学年(大学全体でも在学1000人以下の小規模校)
 - ・専任教員の持ちコマ:15(通年)
 - ・授業での他学科との履修者の重なりがほぼない
 - ・教室と同一建物・同一階に研究室を配置・指導教員の研究室が溜まり場
 - 所属学科の学生・教員が顔を合わせる機会が多い
 - ∴ 学生の感じる所属感・居場所感も高い
 - ※ ただし、人間関係が濃密な分コンフリクトも多い



8

スライド9

4. 大学・地域交流センターの取組み(1)

溜まれる場所を物理的につくる(大学)



スライド10

4. 大学・地域交流センターの取組み(2)

外部の溜まれる場所につなぐ(地域交流センター)



10

スライド11

4. 大学・地域交流センターの取組み(3)

所属感のある居場所となる既存学生団体を支援する(地域交流センター)

背景:コロナ禍前後での学生団体の活動停滞・弱体化(ノウハウの断絶)

課題:活動機会減少→所属感・居場所感の減少

対策:活動機会増大に向けた支援

→ 自治体・外部団体からの問合せ・相談 → 地域交流センターへ

センター内で対応できる学部・学科・学生団体を検討・調整・実施

事例:まちづくり学科ゼミナールが遠隔地自治体の地域振興プロジェクトに協力

観光デザイン学科ゼミナールがキャンパス近隣の観光振興イベントに協力

学生ボランティア団体がパラアスリート講演会を学内で実施

大学祭実行委員会がキャンパス移転を見据えて移転先でイベントに協力 11

スライド12

4. 大学・地域交流センターの取組み(4)

所属感のある居場所となる既存学生団体を立ち上げる(地域交流センター)

背景:コロナ禍前後での学生団体数の減少

課題:活動機会減少→所属感・居場所感の減少

対策:活動機会増大に向けた支援=活動団体を新たに立ち上げる

→ 地域関連の学園資源を活用したプロジェクト設立・学生募集

外部団体・他大学と連携したプロジェクト設立・学生募集

事例:跡見「学芸員」in 菊坂(学園所有の文化施設(旧伊勢屋買店)を拠点に資料調査・地域貢献活動プロジェクトで学生を募集→学生団体化)

行こうよ!文京浴場〜学生プロジェクト〜(文京浴場組合・拓殖大学と連携して区内銭湯を盛り上げるプロジェクトで学生を募集→学生団体化) 12

スライド 13

4. 大学・地域交流センターの取組み(5)

所属感のある居場所となる学生団体の発表の場をつくる(地域交流センター)
 背景・課題(省略)
 対策:学生団体の発表の場を用意する・評価する
 → 学生団体の共同作業・活動振り返り・モチベーション向上の契機として
 学内外で発表の場を用意する・表彰する
 事例:文京区学生支援担当者連絡会主催・学生地域活動報告会
 (区内大学の地域関連担当者の会議で企画・区内8大学参加)
 本学独自の地域活動成果報告会
 (学内のゼミ・部活・各種団体に呼びかけ実施・学長賞等賞金有)

13

スライド 14

5. 課題

学内に広く募集する・…といっても、結局顔ぶれはいつも同じ?
 二極化問題:特定の多く参加する学生/全く参加しない学生
 → 多種多様な活動機会の提供で、ある程度は多様な顔ぶれになる?
 個人差のある「ちょうどよい距離」「居心地の良い場」の感覚
 深い関わりは必ずしも求められていない/しかし、関わりがないと寂しい
 機会を提供しても、強制されたものと捉えられると「居心地の良い場」になりにくい
 → 常にほどよい距離感形成について調整する意識を持つ
 機会は提供しても、希望する人が参加するという形式を保つ必要は...
 大学の外で学生の安全をどのように担保するのか?
 外部でのハラスメント対策・人足のあるいは消費的な使われたかをどう防ぐか?

14

スライド 15

参考文献

跡見学園女子大学地域交流センター、2022、『跡見学園女子大学地域交流センターブックレット2 コロナ禍における大学の地域交流活動の展開可能性』跡見学園女子大学地域交流センター
 跡見学園女子大学地域交流センター、2024、『跡見学園女子大学地域交流センター 年次報告書ゆかり 5号』跡見学園女子大学地域交流センター
 跡見学園女子大学地域交流センター、2025、『跡見学園女子大学地域交流センター 年次報告書ゆかり 6号』跡見学園女子大学地域交流センター
 ささちゃんち運営委員会、2024、『文京 まちの居場所案内』ささちゃんち運営委員会
 祐成保志・武田俊輔編、2023、『コミュニティの社会学』有斐閣
 土居洋平編、2018、『平成29年度 跡見学園女子大学観光コミュニティ学部 社会調査実習報告書 山形県西村山郡西川町大井沢の暮らし一介選:交通・農業・女性・移住・地域づくりについて』跡見学園女子大学
 文京建築会ユース、2019、『ニュー・井戸端 ご近所のまち聞きスポットを探せ! in 文京』文京建築会ユース

15

中尾 覚 龍谷大学 心理学部 教務課 兼 文学部 教務課 職員

スライド1

大学コンソーシアム京都 FD・SDフォーラム You, Unlimited

Ryukoku University

学生による学生のための「居場所」づくり
学生コミュニティの立ち上げ・運営をととして

2026年2月28日
龍谷大学心理学部教務課 中尾 覚

スライド2

自己紹介

中尾 覚 (なかお さとる)
龍谷大学 心理学部教務課 兼 文学部教務課

2023年～
教授会、入試、広報、学生生活、障がい学生、教務、電算…

© RYUKOKU UNIVERSITY All Rights Reserved. 3

スライド3

龍谷大学心理学部の概要

学部名称	学科名称	学位	入学定員	編入学定員 <3年次>	収容定員
心理学部	心理学科	学士 (心理学)	255名	10名	1,040名

※1・2年次：深草キャンパス / 3・4年次：大宮キャンパス

文学部臨床心理学科を前身として、2023年度に新設。
公認心理師受験資格課程を設置。
データサイエンス、キャリア教育にも注力。

※2025年度には文学研究科臨床心理学専攻を前身として、
心理学研究科臨床心理学専攻を新設。

© RYUKOKU UNIVERSITY All Rights Reserved. 4

スライド4

学生コミュニティ立ち上げの経緯

心理学部は新設学部で1期生しか先輩がない(2024年度時点)。
これからの専門的な授業や学びのことを開ける関係性が希薄。
→サークルではなく、心理学部の中で先輩・後輩のつながりを作ってもらいたい。
これから入ってくる後輩にも心理学部の楽しさを伝えてもらいたい。
(新入生歓迎イベントやオープンキャンパスを手伝ってもらいたい…)

↓

学生同士の**学年の垣根を超えた交流**を目的とした
学生主体の活動団体

学生主体で活動内容を企画、立案、運営し、
学年の垣根を越えてコミュニケーションを図り、
「たて×よこ」のつながりを創出する

© RYUKOKU UNIVERSITY All Rights Reserved. 5

スライド5

学生コミュニティ立ち上げの経緯 (学生向け)

心理学部を盛り上げていきたい！でも学生が楽しくなければ盛り上がりがない！
その中心は？学生でしょ！！

学生が持つポテンシャルを発揮してもらえらる場を作ろう！

心理学部学生コミュニティ「team彩」とは
一つのコミュニティ・プラットフォーム。
学生同士が自由に交流し、自由にプロジェクトを企画・立案し運営することのできる場所。
大学行事等における企画・立案・運営もありますが、それだけを行う集まりではなく、心理学部の
学年の垣根を越えた交流を目的として「こんなことする/したいけど、参加する人この指とまれ」の
活動を創造する場所です。
team彩から様々なものが創造され、team彩の内・外に広がっていく。
そのような活動の場になればと願ひ、立ち上げました。

© RYUKOKU UNIVERSITY All Rights Reserved. 6

スライド6

team彩について

心理学部

team彩

4年生
3年生
2年生
1年生

心理学部生

サポート
コーディネーター

教職員

1～3年生合計で約100名が所属しているが、
実際に活動に参加できているのは
60～70名ほど・・・
→それでもOK！

教員：学生生活主任、学生生活
担当の教員を中心に
職員：教務課(私)

© RYUKOKU UNIVERSITY All Rights Reserved. 7

スライド7

参考：他の学生団体

文学部：学生支援サークル

経済学部：ピア・サポーター


法学部：学生広報団体、クラスサポーター

政策学部：学生広報団体、クラスサポーター、正課外活動

入試部：アドミッション・サポーター

キャリアセンター：キャリア・サポーター

オープンキャンパスでの企画や運営を職員とともに担っている。深草・大宮・瀬田で活動。代表や副代表、各活動班が充実。



© RYUKOKU UNIVERSITY All Rights Reserved. 8

スライド8

team彩の活動

年間行事
企画活動

新入生歓迎会/相談会
夏のオープンキャンパス
履修相談会
team彩交流会
心理学会企画運営サポート
(新入生交流会、学会講演会)
team彩メンバー募集企画
など

全員参加型


↔

ボトムアップ
自由企画活動

やりたい企画を自由に立案・企画・運営する活動

例)
心理学勉強会
バーベキューなど交流会企画
ボランティア企画
心理学部を盛り上げる企画
心理学研究プロジェクト企画
など

自由参加型




© RYUKOKU UNIVERSITY All Rights Reserved. 9

スライド9

活動のルール

- ①メンバー間での積極的なコミュニケーション。
- ②互いを認め合い、多様なアイデアが出せる環境づくり。
- ③学年の垣根を超えて互いを支え合い、心理学部全体を盛り上げる。
- ④交流の場であるミーティングには積極的に参加する。



© RYUKOKU UNIVERSITY All Rights Reserved. 10

スライド10


1年間の活動成果と今後の展望・期待

【活動成果】

- 3年生、2年生を中心に新入生交流会や相談会を実施できた
- 学年の垣根を超えた学生の「たて」のつながりができた
- 同学年でもこれまで交流のなかった学生の「よこ」のつながりができた
- オープンキャンパスでは受験生に向けて心理学部の学びをリアルに伝えることができた
- 1年生は新入生交流会での先輩の姿を見て「team彩に入りたい！」(先輩の姿を見て意欲・憧れを持ってくれる循環)

【展望・期待】

- 就職活動や大学院進学など、心理学部生ならではの悩みや相談ができる企画を考えて欲しい
- 1期生卒業後は同窓会の中心メンバーを担ってもらいたい
- 社会人になってもteam彩や現役の心理学部の学生とつながりを持ってほしい



© RYUKOKU UNIVERSITY All Rights Reserved. 12

スライド11

心理学部独自の取り組み



○学生支援報告シート

ゼミなどで欠席が続く学生、一定のフォローが必要な学生について、ゼミとりまとめ教員や学生生活主任へ情報を共有し、教務課も一体的に学生を支援していくフローを構築。

→ゼミ担当教員が面談等を通じて、当該学生の学生生活や困りごとを把握する。

※報告シートにおいて、当該学生の状況を集約している。

適宜、こころの相談室や障がい学生支援室へつなげることなど、学生の修学が継続できるよう教員・職員が連携している。

© RYUKOKU UNIVERSITY All Rights Reserved. 13


スライド12

team彩は学生の居場所・・・？

大前提：大学の中に居場所はさまざま。1人でも過ごせる。


team彩の活動を通じて感じること・・・

- 学生同士のつながりがあると、そのつながりが居場所に
→いつものメンツがいる安心感
- チームとして動いていれば、組織が居場所に
このチームの中で、このメンバーと「なにかやりたい、なにか始めたい」



© RYUKOKU UNIVERSITY All Rights Reserved. 14

スライド 13

学生の居場所について 

個人の意見としては・・・
大学は“義務教育”ではない＝自主的に学び、成長していく場所
「自己責任」のもとで学生は学んでいくべき

ただ・・・
学生が大学に来ることができない、大学に来て「居場所（≠物理的）」がない
と感じている学生が多い？
→学生がいかに安心できる場を作るのが課題
※相談できる教員、相談できる職員・・・

© RYUKOKU UNIVERSITY All Rights Reserved. 15

スライド 14



第5分科会

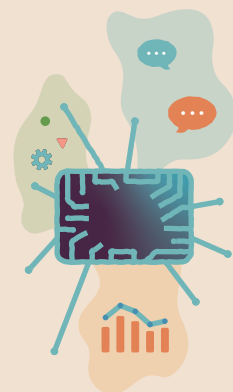
つなぐ広報、ひらく大学 ～教職協働で育む大学の魅力と未来～

報告者

- 木原 考晃 氏 京都芸術大学 広報課 課長
- 勝屋 藍太 氏 立命館大学 広報課 課長
- 岡 堅太 氏 大阪大学 広報・ブランド戦略本部 副本部長
／クリエイティブユニット 准教授

コーディネーター

- 木村 修平 氏 立命館大学 生命科学部 教授



〈第5分科会〉

つなぐ広報、ひらく大学 ～教職協働で育む大学の魅力と未来～

コーディネーター

立命館大学 生命科学部 教授 木村 修平

○本分科会のねらい

本分科会では、大学広報の多様なあり方と可能性を共有する。京都芸術大学・立命館大学・大阪大学の広報担当者が登壇し、大学公式サイトやSNS、YouTubeチャンネル、パンフレットなど多様なチャンネルを通じた広報活動を紹介する。教員の研究成果や学生生活の実際、クラブや団体の活躍、新設備や施設の紹介といった事例に加え、ブランディングや入試広報との関わりなどについても紹介される。また、教員と職員が協働しながら受験生・在学生・卒業生・地域社会といった幅広いステークホルダーに大学の魅力を伝える多様な実践が紹介される。パネルディスカッションを通じて、教職協働で育む大学広報の現在と未来を展望する機会としたい。

○報告の概要

冒頭、コーディネーターの木村が開催の趣旨を説明し、タイムテーブルを確認した。あわせて、登壇者の講演中に質問やコメントを受け付けるWebフォームのQRコードを提示し、参加者に対して随時投稿できることを案内した。

1人目の登壇者である京都芸術大学・広報課長の木原考晃氏からは、同大学における広報戦略と具体的な実践について報告があった。まず、大学広報を「認知→関心→資料請求→イベント→志願」といった流れで捉える広報ファネルの考え方が示され、特に大学広報では「認知がなくても資料請求が起こる」という特有の構造があることが説明された。芸術系の進路を考える受験生の割合はこの10年間、ほぼ3%で推移しているというデータに基づき、その3%に確実に刺さるための工夫として、現役学生を中心とした「尖った」パンフレット制作などの取り組みが紹介された。

2人目の登壇者である学校法人立命館・総合企画部・広報課長の勝屋藍太氏からは、学園広報の体制と具体的な取り組みについて報告があった。まず、学園の広報体制が紹介され、大学や附属校など学園全体から情報を集約し、メディア対応やWeb・SNS発信などを通じて学園ブランドの向上を図っていることが説明された。広報活動では、学園の理念や教育・研究の成果、学生の活動などを多角的に発信し、幅広いステークホルダーに学園の魅力を伝えることを重視している点が示された。次世代研究大学を中期目標に掲げる立命館大学では特に研究成果の発信に力を入れており、研究内容を記者に向けてわかりやすい言葉でプレスリリースすることを心がけていることなどが紹介された。

最後の登壇者である大阪大学広報・ブランド戦略本部クリエイティブユニット・准教授の岡堅太氏からは、大学広報におけるブランディングの重要性と組織体制の改革について報告があった。従来の縦割り型の広報体制ではブランド戦略の実行が困難であることから、大阪大学では広報課とクリエイティブ機能を統合した「広報・ブランド戦略本部」を設置し、部門横断的な体制の構築を進めたことが説明された。この体制により、大学内の情報共有の速度が向上し、たとえば2025年の坂口志文・大阪大学特任教授のノーベル生理学・医学賞受賞時には、短時間で広報物の制作や受賞記念グッズの商品化を行うなど、迅速な対応が可能になった事例が紹介された。また、広報部門に教員が着任することで、ブランディングに研究者目線を取り入れられることや研究者とコンタクトを取りやすくなることなどの利点があり、教職協働による広報体制の意義が紹介された。

○報告に対する質疑ならびに全体討議の内容

3名の登壇者による講演に続き、休憩を挟んで、登壇者全員によるパネルディスカッションが行われた。司会はコーディネーターの木村が務めた。

京都芸術大学の木原氏からは、大学広報においてはジョブローテーションや人事異動の影響により、知識や経験が組織に蓄積されにくい課題があることが指摘された。さらに、芸術系大学の広報においてはター

ゲットを徹底的に絞り込み、その層に強く響く表現を行うことの重要性が改めて強調された。

また、大学における新しい取り組みをいかに社会に伝えるかという観点から、立命館大学における2026年度のデザイン・アート学部開設についても話題となった。同学部に着任予定の木村から、デザインという概念が広報やブランディングにどのように通じるのかについて岡氏に質問が寄せられた。これに対し、デザインとは単なる装飾性を指すものではなく、課題発見や問題解決につながる思考として位置づけられるものであるとの説明がなされた。これを受け、勝屋氏も交えながら、学校法人立命館が目指す小中高段階の探究学習と大学・大学院における課題解決・社会実装との接続という観点から意見交換が行われた。あわせて、大学組織内にクリエイティブ機能を持つことの重要性についても意見が交わされ、目的意識の共有や信頼関係の形成につながる可能性が指摘された。

さらに、会場からは大学広報の具体的な実務に関する質問も寄せられた。京都芸術大学の木原氏には、学生主体のパンフレット制作やブログ記事執筆など、特徴的な広報活動について教員の合意をどのように得ているのかという質問があったほか、同大学の通信教育部と広報の関係についても議論が行われた。木原氏は、通信制教育の運営にはIT基盤が不可欠であり、DXと広報は教育プラットフォームの構築や学習環境の整備とも密接に関係していると説明した。

立命館大学の勝屋氏には、大学広報の多様な業務をどの程度の体制で担っているのか、また外部との連携をどのように進めているのかという質問が寄せられた。さらに大阪大学の岡氏には、インハウスのデザインチームを持つ体制について質問があり、学内の情報をどのように収集しているのかについても議論が行われた。岡氏は、チャットツールなどのデジタル手段だけでは十分ではなく、研究者や関係者と直接顔を合わせる機会を意識的に作り、取材や現場への立ち会いなどを通じて情報を得ることが重要であると述べた。

大学広報の実践や課題について多角的な議論が展開され、本分科会は盛況のうちに終了した。

スライド1

スライド2

概要

本分科会では、大学広報の多様なあり方と可能性を共有する。
 京都芸術大学・立命館大学・大阪大学の広報担当者が登壇し、大学公式サイトやSNS、YouTubeチャンネル、パンフレットなど多様なチャンネルを通じた広報活動を紹介する。

教員の研究成果や学生生活の実際、クラブや団体の活躍、新設備や施設の紹介といった事例に加え、ブランディングや入試広報との関わりなどについても紹介される。

また、教員と職員が協働しながら受験生・在学生・卒業生・地域社会といった幅広いステークホルダーに大学の魅力を伝える多様な実践が紹介される。

パネルディスカッションを通じて、教職協働で育む大学広報の現在と未来を展望する機会としたい。

スライド3

ご質問をお寄せください

- パネルディスカッションで取り上げる質問をお寄せください
- 上記URLより匿名でご質問いただけます
- いただいたご質問すべてに回答できるとは限りませんのでご了承ください

スライド4

第5分科会のプログラム(敬称略)

- 14:30-14:35
 - 開会挨拶・趣旨説明：立命館大学 生命科学部 教授：木村修平
- 14:35-15:00
 - 京都芸術大学 広報課 課長：木原考晃 氏
- 15:00-15:25
 - 立命館大学 広報課 課長：勝屋藍太 氏
- 15:25-15:50
 - 大阪大学 広報・ブランド戦略本部 准教授：岡堅太 氏
- 15:50-16:00
 - 休憩・質問整理
- 16:00-17:00
 - 3大学合同パネルディスカッション+質疑応答

スライド5

開会挨拶・趣旨説明

- 立命館大学の学部横断型英語教育=プロジェクト発信型英語プログラム(PEP)
- PEPでは教育・研究サイクルに広報が組み込まれている

NTTのAI自律走行型ロボット「temi」を英語ポスター発表大会に導入した際の例(2023年)

スライド6

ご発表

京都芸術大学 広報課 課長：

木原 考晃 氏

ご質問・コメントをお寄せください 🍌

スライド7

ご発表

立命館大学 広報課 課長：

勝屋 藍太 氏

ご質問・コメントをお寄せください 🍵

スライド8

ご発表

大阪大学 広報・ブランド戦略本部 准教授：



岡 堅太 氏

ご質問・コメントをお寄せください 🍵

スライド9

休憩

16:05に再開します

ご質問・コメントをお寄せください 🍵

スライド10

パネルディスカッション

スライド1

学校法人立命館
学園広報展開

学校法人立命館 総合企画部 広報課
課長 勝屋 藍太

RITSUMEIKAN

スライド2

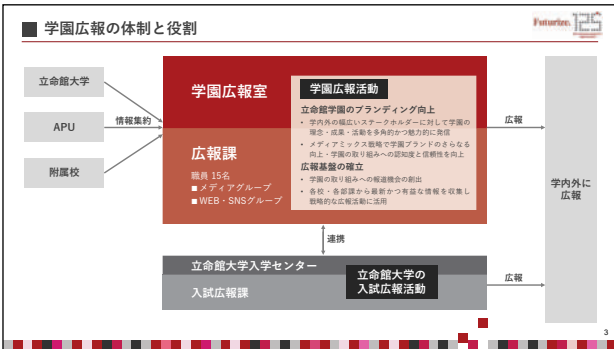
自己紹介

勝屋 藍太 Aita KATSUYA

学校法人立命館
総合企画部 広報課

兵庫県出身。大学卒業後、新卒でシステム会社に入社し、システムエンジニアとして株式会社設備検査管理システムやインフラ関連会社の石油バルブシステムに関する業務に従事。2009年に学校法人立命館に入職し、教員として教員教育、インベメンション教育、キャリア教育、大学院キャリアパス支援に関する業務を担当。その後、文部科学省に出向し、若手研究者・博士課程後期課程の支援や初等中等教育における科学技術政策に関する業務を担当。2024年より現職。

スライド3



スライド4

INDEX

- 立命館学園の紹介
- 立命館の広報戦略
- 広報アクション事例
 - 研究広報
 - 学園政策
 - 学生活動

スライド5

■ 立命館学園の概要

立命館学園は、2025年に創始155年・学園創立125周年を迎えた、長い歴史と伝統を持つ私立総合学園のひとつ
北海道、滋賀、京都、大阪、大分にキャンパスをもち、2大学、4附属高等学校、4附属中学校、1附属小学校、学生・生徒・児童総数約5万人を擁する、個性と国際性の豊かな総合学園

立命館学園のネットワーク

2つの大学
4つの高等学校
4つの中学校
1つの小学校

2025年
創始155周年
創立125周年

卒業生
立命館大学 446,000名
APU 25,000名

学生・生徒・児童 約50,000名

スライド6

■ 立命館大学の概要

立命館大学 1900年

学生数 34,883名

大学院生 4,380名

学部・研究科 16学部 21研究科

京都 衣笠キャンパス

滋賀 びわこ・くさつキャンパス

大阪 大阪いばらきキャンパス

法学部 産業社会学部 国際関係学部
文学部 理工学部 生命科学部 薬学部
経済学部 スポート健康科学部 食マネジメント学部
経営学部 経営科学部 経営学部
グローバル教養学部 総合心理学部 情報理工学部

スライド7

INDEX

- 立命館学園の紹介
- 立命館の広報戦略
- 広報アクション事例
 - 研究広報
 - 学園政策
 - 学生活動

スライド8

立命館学園の目指す姿

MISSION (組織が社会で果たすべき役割) 建学の精神：自由と清新 / 教育理念：平和と民主主義 / 立命館憲章

VISION (組織が目指すべき理想の未来) **R2030** (次世代研究大学になる 創発性人材を輩出する)

VALUE (組織で共有すべき価値観、行動原則) **Futurize.** きみの意志が、未来。

125周年期間 (2023～2026年度)の学園の目指す姿

「ソーシャルインパクト」を創出する総合学園
Ritsumeikan for Social Impact

「次世代研究大学」の実現
研究活動とその社会実装を核に 新たな社会共生関係を構築することによって「ソーシャルインパクト」を生み出す大学

スライド9

2025年度 (125周年)の広報展開

目指すべき理想の状態

- 125周年を記念事業期間 (2023～2026年度)に立命館が目指す姿「ソーシャルインパクトを創出する学園」がステークホルダーにしっかりと伝わっている (目指す姿、各種取り組みに対する認知)
- 理解・共感を通じ、立命館の「社会価値」(「立命館はなぜいいか・立命館を選ぶ理由は何か」)が、各ステークホルダーの中で自分ごと化されている

そのために実施すること

- 125周年期間の全ての組織を立命館の「ソーシャルインパクトを創出する学園」という文脈にのせて発信 (ストーリー化、交流から本流に含込)
- 教員や学生の盛り起こし・発信も含め、広報起点での戦略的なファクトづくりを行う。教育、研究、学生生活をはじめ、学園の主要な取り組みに広報が後付段階から参加 (広報は単なる情報発信ではなく戦略的なファクトづくりを扱う)
- 2025年度前半期はデザイン・アート、後半期は宇宙地球研究展開を軸とし、関連部門と連携しながら重点的に広報を行う

次世代研究大学

125周年事業期間中の個別事業1つ1つをブランドコンセプトの核となる要素としてストーリー化。

スライド10

多様な発信方法による多様なステークホルダーへの訴求

インテリナル: 学生・生徒・児童, 教職員, 父母, 校友(卒業生), 高校生・受験生, 社会人一般

エクステリナル: 大学HP, テレビ, 新聞, 学内報, HOT NEWS, 教職員ポータルUNITAS, 校務向けサイト, 校務向け広報誌「りつめい」, 入学サイト, 説明会, 展示会, 共創パートナー(企業・自治体等), 首都圏ビジネス圏メディア関係者

発信方法: オウンドメディア, SNS (Twitter, Facebook), 動画 (YouTube等), リアルイベント

- 大学を取り巻くステークホルダーは多様。
- 多様なステークホルダーへの訴求は、それぞれに適した広報発信方法が必要

スライド11

情報収集・共有・発信のイメージ

情報共有・収集: 他部署・学園からの依頼, 各キャンパスや附属校の情報を効率的かつスピーディーに収集し、全体共有

編集会議: 情報発信の実施計画、適切な広報アクション、スケジュールや具体的な作業について検討・決定、集まった情報を広報課全員で共有し8つの観点に基づいて、PR視点でどのように発信すべきかを全体的な視点で検討

発信: 「ソーシャルインパクト」を創出する総合学園として、学内外での認知度向上やブランドイメージの一貫性の確立を目指す、法人全体の広報活動を包括的に強化し、定量的評価に基づいたブランディング戦略を策定・実行、広報経験が浅いスタッフが多く、かつ定額制の人事異動がある中で、メディアリレーション構築を1-2年かけ体系化し組織としてナレッジを蓄積

スライド12

メディアに取り上げてもらうために重視する要素

メディアに情報を取り上げてもらうために、
メディアが関心を持てる・報道価値に値する要素=PR視点を盛り込むことが重要

一般的にメディアに取ってほしい要素	<ul style="list-style-type: none"> 特殊性 「日本初」「大学初」などこれまでになかったもの、「偉大業」など顕著なものであるものやユニークなポイント、それが伝わる数字やデータ 時節・世相 季節性や記念日・周年 (例: 花開祭、国際女性デー) その時の世の中の情報やトレンド (例: 大版・関西万博) 地域性 本学・団体が関わりのある地域に根付いたもの (立命館大学であれば、京都・草津・茨木・梅田 など) 社会貢献 社会が抱える課題に対し、解決に貢献するもの (例: 少子高齢化、地域過疎) ストーリー 人間味がある・感情に訴えかけるもの (例: 苦勞、努力、長年の研究の結果ようやく達成した) 産官学連携 大学が行政や民間企業と連携し技術の研究開発や、新事業の創出
メディアに大学に取ってほしい要素	<ul style="list-style-type: none"> 学生アクション 学生・生徒・児童を巻き込んだアクションや学生が主体的に取り組むもの 取材先 インタビューができる教授がいるのか、撮影できる画や体験があるのか (例: 実証実験の様子やプロダクト、イベントなど)

スライド 13

INDEX

- 立命館学園の紹介
- 立命館の広報戦略
- 広報アクション事例
 - 研究広報
 - 学園政策
 - 学生活動

スライド 14

研究の社会発信

メディア・個人それぞれに対し
様々な手法で大学教員の研究活動を社会発信

新聞/テレビ等の研究に関する取材依頼
年間**500**件超

メディア向けの発信

- プレスリリース**: 研究の最新ファクトをメディア向けに発信、PRする報道資料
- 記者向けプレスセミナー**: 記者らに向けて研究の内容を研究者の言葉でわかりやすく発信
- メディアキャラバン**: 関西、首都圏、北海道・九州にて五大紙含む新聞社、TV局、雑誌メディア等を訪問し、研究や研究センターなどを紹介
- WEBメディア**: 社会課題解決に資する研究活動を研究者らの対談などを通し関連性の高いWEBメディアで発信
- RADIANT**: テーマに即して多様な研究を紹介する活動報 (WEB 冊子)
- TanQ**: 小学生向けに大学の楽しさを伝える研究つなげ発信
- 学生・中高生向けセミナー**: 若手研究者が自身の研究を学部生や中高生に向けて発信
- イベント出展**: 地域の子供たちへ向けた手に取ってもらう「研究体験」

個人向けの発信

- ShiRUto**: 読者や社会の課題を研究の力で解き明かすサウンドメディア
- インナー向け広報 HOT NEWS**: 校内教職員向けにテレビ出演情報や研究成果などを毎週メルマガで配信

スライド 15

メディアへ向けた研究発信 | プレスリリース

研究の最新ファクトをメディアへ向けて発信・PR

- ニュース性のある報道資料。記者クラブでの資料配布・配信、報道機関への一斉配信、ワイヤーサービス配信などを行うほか、リレーションのある記者などにも投げ込み。
- メディアは“情報”を「報道価値があるか」「生活者にとって有益か」など各メディア(読者・視聴者)にとっての(報道)価値判断を行い、その結果で記事化・番組化して世の中に信頼感のある情報として露出

▶ 立命館が伝えたいメッセージを一方向的に伝えるだけでなく、メディアごとこのニーズを汲み必要がある。

研究系プレスリリースの例

- 「新発見」など最新ファクト
- 大型研究IPの採択など
- 研究者らの受賞
- 共同研究・連携協定など

スライド 16

プレスリリース掲載数の比較 (2025年4月-2026年1月累計)

項目	立命館 A大	関西大	近畿大	大阪大	京大	東大	慶大	京産大	京大	京大	京大	京大
1. 重要人事 (退任・学長/学部長/准学長) 入替育成・運動部を除く	2	0	2	2	3	0	3	0	0	0	0	0
2. 施設の新設/学部学科の新設/中長期計画/教育制度/学費	3	0	3	5	15	1	3	4	4			
3. 産学官連携関連 (事業/提携/新商品/新サービス/調査/研究) 大学関連	29	12	5	21	101	3	10	11	9			
4. 研究事業 (発表/開会/成果/検証)	27	8	7	8	38	12	3	9	17			
5. 教育活動/フィールドワーク/留学関連/大学間の提携	17	2	9	3	39	4	5	5	7			
6. 講演会/公開講座/シンポジウム/セミナー/フォーラム	17	11	4	6	30	0	4	6	10			
7. 大学関連施設 (ミュージアム/記念館/図書館) の紹介・展示告知	3	2	2	4	7	3	4	2	4			
8. SDGs/CSR/社会貢献/奉仕	1	1	3	1	9	1	2	2	0			
9. 主催イベント (コンサート/コンスト/学祭/創立記念関連)	9	2	18	10	44	3	5	6	5			
10. 協賛/共催/協力/委託イベント/方陣関連	14	2	3	12	18	1	2	0	0			
11. 自校企画 (調査 (オリジナル商品/サービス))	1	0	0	2	11	0	1	0	1			
12. 受賞関連/団体等への加担関連/証書取得/研究採択	3	0	1	1	3	1	2	1	4			
13. 危機管理広報関連	1	0	0	0	0	0	0	0	0			
14. 映画ドラマ等教育/書籍、レポートの発表/プロスポーツ (活動・入団)	2	2	1	4	7	1	1	6	4			
15. 法人関連/附属教育機関 (高校・中学・小学校)	4	0	2	3	5	0	0	0	0			
16. 社報/その他	0	0	2	2	0	0	0	0	0			
累計 (2025年4月-2026年1月)	133	42	62	84	330	30	43	52	65			

スライド 17

メディアへ向けた研究発信 | 記者向けオンラインプレスセミナー

記者らに向けて研究の内容を研究者の言葉でわかりやすく発信

メディア向けの勉強会。このセミナー自体がニュースとして報道される可能性は低いが、メディアに情報をインプットしておくことで今後関連の企画や取材があった場合に取材される可能性を高めることを目指す。

記者向けオンラインプレスセミナー 2024年度の実施例

日付	開催	講師	テーマ	参加人数
2024/04/12	オンライン	立命館大学 未来学研究所	未来学研究所の最新研究	10 (4名参加)
2024/05/30	オンライン	立命館大学 未来学研究所	「AI」に「AI」を対峙させる	20
2024/06/11	オンライン	立命館大学 未来学研究所	AIと「AI」を対峙させる	37 (1名参加、2名参加)
2024/07/25	オンライン	立命館大学 未来学研究所	AIと「AI」を対峙させる	27 (1名参加、2名参加)
2024/08/29	オンライン	立命館大学 未来学研究所	AIと「AI」を対峙させる	24 (1名参加、2名参加)
2024/10/16	オンライン	立命館大学 未来学研究所	AIと「AI」を対峙させる	12 (1名参加、2名参加)
2024/11/13	オンライン	立命館大学 未来学研究所	AIと「AI」を対峙させる	22 (1名参加、2名参加)
2024/12/04	オンライン	立命館大学 未来学研究所	AIと「AI」を対峙させる	16 (1名参加、2名参加)
2025/01/22	オンライン	立命館大学 未来学研究所	AIと「AI」を対峙させる	19 (1名参加、2名参加)
2025/03/19	オンライン	立命館大学 未来学研究所	AIと「AI」を対峙させる	16 (1名参加、2名参加)

■ 開催日程 月1回程度
■ 開催方法 オンライン
■ 対象 メディア全般 (メディアリストに一斉送信)
■ 目的 記者向け勉強会、紙面・WEB記事連携
■ チーム 次世代研究力の発信、社会動向、注目トピック

スライド 18

個人へ向けた研究発信 | WEBメディアなどを通じた広報

社会課題解決に資する研究活動を 研究者らの対談などで 関連性の高いWEBメディアで発信

WEBメディア・動画媒体・新聞・雑誌などでのタイアップ企画として研究者自ら出演し研究広報などを展開
→掲載されるのを待つ「能動的な広報」ではなく、「掲載先と連携する」積極的な広報を実施 (広告展開)
各メディアの記事や動画の1つのコンテンツとして掲載されることで、より広い層に情報を届けたい

PIVOT × 日本経済新聞

「宇宙ビジネス」 佐藤研士と語る

YouTube登録者数380万人を超えるビジネス系WEBメディア PIVOT と日本経済新聞の広告と連携し、研究者らの対談企画を展開。「宇宙ビジネス」(宇宙開発) / 宇宙人材育成」を特集。

朝日新聞GLOBE

「宇宙人材育成」をテーマに GLOBE で連載記事を掲載。研究者や有識者らと交えた対談形式で人材育成プログラムを紹介した。

Casa BRUTUS

建築やアートがテーマの月刊誌 Casa BRUTUS にて、立命館大学の研究、若手研究者と連携し、専攻の対談記事を掲載。デザイン・アート分野の関与へ向けた対談を行った。

スライド 19

■ 個人へ向けた研究発信 | オウンドメディア「shiRUto」

読者や社会の課題を研究の力で解き明かす

立命館への興味喚起・好意形成、社会における価値を高めることを目的に立ち上げたオウンドメディア。立命館が持つ幅広い「知」と社会課題をつなげ、読者が日々抱えている大小さまざまなレベルの課題解決の糸口のきっかけとなることを目指す。

設立 2018年11月

累計記事数 約380本

総PV数 約611万PV

4年連続 年間100万 PV達成

- 立命館大学を全面に出さず、研究への関心、興味喚起、社会価値の向上を目指す
- 比較的年齢層が高めのターゲット向け企画が特に流入数が多い
 - SmartNews等ニュースキュレーションサイトのコアターゲット層（30～50代）とも合致していると思われる
- ニュースで取り上げられそうなキーワードやテーマの企画も親和性は高い

人気記事の例

愛媛県が認められている国のいま	合流化から5年、カナダの現状を専門家が解説	先端総合学術研究所 奥島隆雄 教授
人間にはネット情報を感じてしまうクセがある	脳科学の最新研究を解説	総合心理学部 齊藤 寛 准教授
「ボジラ.1.0 (マイナスワン)」はなぜアメリカを熱狂させたのか	国際関係学部 澤田 浩子 教授	

スライド 20

■ 個人へ向けた研究発信 | 研究活動報「RADIANT」

研究者自身に焦点を当てながら、研究の最前線をお届け

立命館大学の多様な研究を紹介する研究活動報「RADIANT」は毎号のテーマに即して、選りすぐりの研究者を取材し記事を描く。注目する若手研究者にも焦点を当ててその研究活動を紹介。総合大学としての強みを生かし、人文・社会・自然科学各領域の多彩な研究内容を扱い、「京都」「サステイナブル」「宇宙」「ゲーム・遊び」等、幅広いテーマを冊子とWEBにて展開する。

設立 2015年11月

累計取材数 300名以上

総発行部数(冊子) 約159,500部

- 「立命館らしい」研究を企画・キュレーションし、研究者自身に焦点を当てながら、研究の最前線をお届け
- 毎号テーマを1つに絞り立命館大学の多様な研究を発信
- 産官学連携や共同研究へとつなげる取り組み

スライド 21

■ 学生や地域へ向けた研究発信 | ライスボールセミナー

若手研究者が自身の研究を学部生や中高生に向けて発信

若手研究者の研究発表を聞き意見交換をする企画として、立命館大学の各キャンパスにてお昼休みに「ライスボールセミナー」を実施。社会への成果発信の機会創出を行っている。

- 若手研究者が自身の研究分野を相対的・客観的に伝える機会
- 研究の意義や楽しさを、学部生を中心に世代を超えて多様な層に伝える
- 自身の研究分野以外の研究者等との交流・連携

附属校や提携校、地域へ向けた出前授業も実施

- 研究の魅力を伝え、これらの学びや探究への興味関心を高めてもらう機会に

2025年度 附属校・提携校向けライスボールセミナー

開催学校数	発表者	参加生徒数
13名	34名	1,039名

スライド 22

■ 個人へ向けた研究発信 | 小中学生向けWEBメディア「TanQ」

小中学生向けに探究や学びの楽しさを発信するWEBメディア

「TANQ(タンキュー)」は、日々のなかにある疑問と立命館大学で取り組んでいる研究をつなげ、探究することの面白さ、学ぶことの楽しさを発信するWEBメディア。小中学生をメインターゲットとし、動画と同一形式の記事でわかりやすく研究を紹介。「？」があるなら探究だ」をキーワードに、子どもたちの探究心を育てる。

動画の下の記事では、研究者と「？」を解き明かす

「なぜ、戦争はなくなるしない?」「宇宙はだれのもの?」など、

スライド 23

■ 学生や地域へ向けた研究発信 | イベントでの事例

地域の子供たちへ向けた「手に取ってもらう」研究体験

2025年度 主なイベントでの研究発信

5月18日	いばらき 立命館 DAY
8月9日	大阪・関西万博 (WASSEでの出展)
10月11日	BKCユメカムデー2025
10月18日	立命館創立125周年記念式典・イベント (TanQトーク)
11月2日	OIC Global Week
11月16日	立命館大学学術祭BKC祭典
11月23日	立命館大学学術祭OIC祭典

スライド 24

■ 学生や地域へ向けた研究発信 | 大学キャンパス内での事例

すべてのひもとかれたオープンラボで研究体験後のフィードバックを即座に研究に活かせる場に

SP LAB / SP LAB X

大学のキャンパス内でも「気軽に研究に触れられる環境」を目指し、大阪いばらきキャンパスに設置している「SP LAB / SP LAB X (スファオ/スファオクロス)」は、芽吹いたばかりの先端研究や最新技術を「見せる」「試せる」体験型の研究室エリア。ガラス張りのゆつろのラウンジ、地域の方などでも見学可能。ラボ内で研究成果をいち早く体験できる目もありません。体験談の感想や意見は、研究の進化や社会実装に向けた貴重なフィードバックとなり、立命館大学の研究・産学連携の紹介や体験「見せる、試せる場」の提供の一環として取り組んでいる。

スライド 25

INDEX

- 立命館学園の紹介
- 立命館の広報戦略
- 広報アクション事例
- 研究広報
- 学園政策
- 学生活動

スライド 26

2025年度の広報展開の柱

2025年度
4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月 1月 2月 3月

- 立命館学園 創立125周年**: 125周年事業期間に立命館が目指す未来を「ソーシャルインパクト」を軸とする「学風」として25周年の事業誌と合わせ、立命館の社会関係向上を目指す広報発信を行う。
- 2025年 大阪・関西万博**: 立命館が未来社会のあるべき姿を実現するために発信を続けていくことを社会に発信。2025年大阪・関西万博に参画し、発信する学生・生徒・児童・教職員の姿を広報から支援。
- デザイン・アート 構想**: デザイン・アート学部「研究科新設構想」の発表を機に、学風を社会と社会に向け発信する機会を捉え、広報面からサポートする。
- 「宇宙」研究展開**: 「宇宙」を中心とした新領域の教育・研究が新領域に注ぎ込まれる。研究を通じて次世代研究大学のイメージ形成を目指す。

スライド 27

125周年事業とその関連広報展開

2025年 1月: 新年に周年YEARのスタートを学内外に力強く宣言。トップメッセージをきっかけとし九校刊行体により周年発信の準備を行う。

2025年 4月: 新年度のタイミングで全キャンパスを周年モードに。キャンパスを飾るすべての人が意識的に周年を感じた状態を作り上げる。

2025年 5-6月: 5月19日創立記念日をピークとする広報コミュニケーション。社会向け発信の広場づくり。

2025年 10月: 周年記念イベントで立命館が目指す未来を社会に発信。R23300の先へ。

スライド 28

125周年事業とその関連広報展開

2025年 1月: 新年に周年YEARのスタートを学内外に力強く宣言。トップメッセージをきっかけとし九校刊行体により周年発信の準備を行う。

2025年 4月: 新年度のタイミングで全キャンパスを周年モードに。キャンパスを飾るすべての人が意識的に周年を感じた状態を作り上げる。

2025年 5-6月: 5月19日創立記念日をピークとする広報コミュニケーション。社会向け発信の広場づくり。

2025年 10月: 周年記念イベントで立命館が目指す未来を社会に発信。R23300の先へ。

スライド 29

INDEX

- 立命館学園の紹介
- 立命館の広報戦略
- 広報アクション事例
- 研究広報
- 学園政策
- 学生活動

スライド 30

WEBサイトのコンテンツ体系 | 学生活動発信のチャネル

立命館大学HP TOPページ

重要なお知らせ
緊急情報等

TOPICS
重要トピック提出

NEWS & TOPICS (ニュース等)

SPORTS & CULTURE

FEATURES
学生の活躍を特集

shIRUto
大人向け研究紹介

TanQ
中高生向け研究紹介

「読者の向こう側」
「大学風貌」
HPでも提出

「大学生の挑戦」
「+R女人」
HPでも提出

スライド 31

■ 学生活動の発信 | 学生主導の記者会見

立命館の多様な学生活動の発信の一環として「学生主導の記者会見」を実施

- 活動の当事者である学生自らが直接語る
 - 学生が自分の言葉で成果を伝える姿は、大学組織としての発表よりも深い共感を生み、メディアなどへの掲載を促す
- 学生にとっても、活動が地域課題の解決に役立つものであると認められる機会に
 - 自らの活動を自分の言葉で発信する機会に、学生らがプロジェクトを進めるうえで大きな自信につながる
- 学生の挑戦を支える大学の姿勢を社会に示し、地域との結びつきをより強固なものに

31

スライド 32

■ 学生活動の発信 | SNSを通じた発信

広報課では4つのプラットフォームでSNSを運用

特徴	写真・動画中心のビジュアルがSNS。ストーリーやリールで短尺動画も人気。	リアルタイム性が高く、短文投稿で情報拡散に強い。ハッシュタグで話題形成。	实名制で信頼性が高く、長文投稿やイベント告知に適したコミュニティ型SNS。	動画共有プラットフォーム。長尺・高品質動画で深い情報発信やライブ配信に強い。
注力して運用	注力して運用 コアターゲット 在学生・保護者・校友・一般	良くも悪くも拡散力に優れた コアターゲット 在学生・保護者・校友・一般	コアターゲット 校友・教職員 ※補完的役割	定期的・積極的な発信なし 「動画置き場」的な運用
フォロワー数	48,000+	34,300+	53,000+	登録者数 12,200+
投稿数	936	3,670	いいね数 52,000+	投稿数 785

32

スライド 33

■ 大学のSNS活用状況 (他大学比較)

※2026年1月末時点

	立命館	関西大	関西大	関西大	関西大	関西大	関西大	関西大	関西大
Instagram	4.8万	5449	1.6万	3.5万	3万	2.6万	2.2万	—	2.6万
・フォロワー数	936	163	344	1,267	1,967	295	956	—	740
・投稿数	—	—	—	—	—	—	—	—	—
X	3.4万	1.8万	2.3万	3.3万	5.6万	2.9万	2.5万	1.7万	2.9万
・フォロワー数	—	—	—	—	—	—	—	—	—
・投稿数	—	—	—	—	—	—	—	—	—
facebook	5.3万	8.1万	1.2万	5.2万	3.3万	2.3万	3.1万	2万	—
・フォロワー数	—	—	—	—	—	—	—	—	—
・投稿数	—	—	—	—	—	—	—	—	—
YouTube	1.2万	9790	6910	1.3万	9.6万	1.4万	5.5万	1.8万	9.5万
・登録者数	785	195	210	475	1026	284	284	925	200
・投稿数	—	—	—	—	—	—	—	—	—
TikTok	—	—	—	—	63.8万	1.8万	—	—	2.3万
・閲覧数	—	—	—	—	2万	2556	—	—	1950
・フォロワー数	—	—	—	—	—	—	—	—	—

33

スライド 34

■ 学生活動の発信 | Instagram戦略

次世代研究大学など学園政策のことを発信したいものの、在学生のスポーツ関連の活躍を紹介する投稿や、校友が学生時代を思い出すような風景投稿がエンゲージメントを獲得しやすい

投稿の例

- 学生の活躍**: 女子駅伝やアメフト関連の活躍を伝える投稿が伸びる
- Rの風景**: 大学内の美しい風景や新しい施設を紹介する投稿
- #りつめいだより**: 大学のイベントやトピックスを伝える情報系投稿

34

スライド 35

■ SNS | Instagram戦略

投稿カレンダー

時期や「〇〇の日」本学のイベント・スポーツなどを参考に年間計画（月次進次の運用で微調整）

コンサルティングによる助言の反映

エンゲージメント率を高める工夫
・文面で「いいね」やコメントを誘導
・「後で見返したい情報」を含める → 「保存」につなげる

投稿に際しての工夫
時間帯：11～12時頃（お昼休み前）→ ランチ時間に見られる
16～17時頃（夕方）→ 授業や仕事後に見られる

シリーズ・鉄板ネタ

「Rの風景」「りつめいだより」などのシリーズネタや、「〇〇の日」などの鉄板ネタはフォロワー獲得に直結

投稿カレンダーの例

日付	曜日	記念日	学外イベント	Instagram	ストーリー
11月6日	木			関西国際空港開港記念式典	関西国際空港開港記念式典
11月7日	金	立冬		【#りつめいだより】OIC Global Week	【#りつめいだより】OIC Global Week
11月8日	土				
11月9日	日	いい地球の日			
11月10日	月		アメフト開学結果		アメフト開学結果
11月11日	火	ポッキー＆ブリッパの日			ポッキー＆ブリッパの日
11月12日	水	【Rの風景】ズームアウトツイ		【Rの風景】ズームアウトツイ	【Rの風景】ズームアウトツイ
11月13日	木				
11月14日	金	アンチエイジングの日		【Rの風景】BKC発表	【Rの風景】BKC発表
11月15日	土	きもの日			
11月16日	日	いい地球の日	BKC学園祭		
11月17日	月	将棋の日		【#りつめいだより】BKC学園祭	【#りつめいだより】BKC学園祭

35

スライド 36

■ Instagram戦略 | 学生発信から学園政策・研究発信へ

マーケティングゴール

「社会共創価値を生み出す次世代研究大学」「イノベーション・創発性人材を生み出す大学」としての想起獲得

コミュニケーションゴール = SNS運用のKGI

立命館大学を好意的に感じるファンの創出（＝好意度向上）

KPI

フォロワー数・エンゲージメント率
*エンゲージメント率：いいね数・コメント数・動画保存数/ユーザーへのリーチ数と変換

重点キーワード

「125周年」「デザイン・アート学部」「次世代研究大学」「創発性人材を創出する大学」「社会共創価値を創出する大学」

36

スライド 37

新規SNSの開設 | TikTok

背景と現状課題

- 広報課で運用する既存アカウントはInstagramを主軸とし、主要フォロワー層は45～54歳および18～24歳、幅広いステークホルダーに向け、全方位的に情報発信。
- 広報課運用の既存アカウントは、オフィシャルであるがゆえに、発信コンテンツのトナリや取り上げる内容、表現に関して一定の制限に縛られる

より学生目線、学生にフォーカスした共感性の高いコンテンツを、カジュアルかつ「生っぽい」質感、エンターテインメント性のある表現でリアルタイムに発信できるチャンネルが必要

学生による公式TikTokアカウント立ち上げ&運用

Instagram
あくまで公式アカウントとして、大学としての情報を数値選択して対外的に発信する場
「中の人」として発信はせず、クリエイティブの感覚（インスタタビリティ）やトレンドを参考に、ブランドイメージの浸透を図る。

TikTok
高視聴率のアルゴリズムによってフォロワー数・知名度に関わらず「バズる」可能性がある。
→積極的に発信せずとも高認知率にリーチしやすいため、BGMなど、少しみずみずしいコンテンツや、ターゲティングが難しい内容でも、敷かず「生」の情報を発信。

- 公募・選定した「学生広報スタッフ（仮）」による、立命館大学公式TikTokアカウントの立ち上げと運用を行う。
- 学園広報やSNSに関する基礎的な知識・スキルのインプットや、運用方針の策定、デモンストラティブなトレーニングプログラムを通して、アカウントの立ち上げと本格運用を目指す。
- 活動を通して異なる学部・キャンパスの学生同士が協力・交流し、多様な価値観やPRに関する学びを共有することで、大学全体の一体感と学生コミュニティの活性化を図る。

スライド 38

学校法人立命館 2025年度 学園広報展開

学校法人立命館 総合企画部 広報課
課長 勝屋 藍太

RITSUKEIKAN

スライド 39

補足資料

スライド 40

立命館のあゆみ

建学の精神
自由と清新

教育理念
平和と民主主義

- 1869年 (明治2年) 西園寺公望 (学祖) 私塾「立命館」を創始
- 1900年 (明治33年) 中川小十郎「私立京都法政学校」を創立
▶「立命館学園」の創設
- 1904年 (明治37年) 専門学校令により「私立京都法政大学」へ改称
- 1913年 (大正2年) 大学を「私立立命館大学」と改称
- 1981年 (昭和56年) 広小路より金部が衣笠キャンパスへ移転 (衣笠一拠点化)
- 1994年 (平成6年) びわこ・くさつキャンパス (BKC) を開設
- 2000年 (平成12年) 「立命館アジア太平洋大学 (APU)」を創立
- 2015年 (平成27年) 大阪いばらきキャンパス (OIC) を開設

スライド 41

学園ビジョンR2030

R2030 2030年に向けて立命館学園が描く未来社会のあるべき姿とその実現に向けた学園ビジョン

挑戦をもっと自由に
Challenge your mind Change our future

「立命館大学」としてのアクションを具現化

立命館大学チャレンジ・デザイン

2030年に向けた立命館大学全体のチャレンジ・デザインと各学部・研究科の将来計画の方向性、各キャンパス・部門の「基本課題」を示す

2つの柱

- 新たな価値を創造する 次世代研究大学
- イノベーション・創発性人材を 生み出す大学

社会共生協働の創造を志向し、多様なネットワークとのつながりに開かれた大学

社会共生協働の創造を志向する オープンで創造的な知的生産者

スライド 42

「ソーシャルインパクトを創出する学園」とは？

「ソーシャルインパクト」を創出する総合学園 Ritsumeikan for Social Impact

次世代研究大学・次世代探究学園への過渡点として125周年事業期間に「立命館」が目指す姿

「ソーシャルインパクト」という言葉が曖昧さを持つ中、「大学のエゴ」で終わらせないために、どのように伝えるか広域的に翻訳

立命館の目指す姿 広域的言い換え

- 取り組む事業テーマが世の中にとって必要となる社会課題を起点に設定されている
- 育成した人材と立命館を離立った後も繋がりが、広く「立命館ファミリー」として共創
- 研究・探究を手段とし課題解決を目指しており、それが立命館の強みとなり得る
- 研究・探究の成果が社会実装、ブランディング、人材育成、ネットワークにつながっている

社会に夢を授け、共感を呼ぶことができる

学生・父母・校友など多様なステークホルダーの「携載する意思」をドライブさせるフィールド

構想を妄想で終わらせないための動きの具体化(ファクト)と、ストーリーの必然性がある

研究や主要事業を皮切りに、様々な波及効果やストーリーが学内外に広がっていく状態

「ソーシャルインパクト」＝「世の中に、夢を、みせる」という輪のもと「それを実現してくれよう」と感じさせる事実、動きを広報

社会に与えたい立命館像と広報フェーズ

宣言 従来の大学像にとらわれない、立命館

拡大 社会価値の創出に積極的な立命館

発展 新領域へ果敢に挑戦する、立命館

資料のイメージ参照

スライド 43

■ プレスリリースの例

2025.6.2
125周年記念 ユニテッドアローズとの協業で記念グッズを発売

2025.6.2
株式会社近鉄百貨店と学校法人立命館 連携・協力に関する協定を締結

PR会社分析

共有リリースですが、内容がコンパクトでわかりやすい。共同通信・時事通信の2通信社が配信したにも関わらず、地方紙の掲載が少なかつたため、掲載された理由をヒアリングするとよい。引き続きリリースの掲載にも力を入れるべき。

PR会社等とも連携し、月次でプレスリリース分析・パブリシティ調査を実施。他大学の動向も含めて定期的に評価しながらPDCAを回し、より効果的なプレスリリースを実現。

スライド 44

■ 「shIRUto」チャンネル別PV数 (2024年度)

順位	記事名	公開日	総PV	YouTube	Twitter	Facebook	Instagram	LINE
1	安楽死が認められている国は？ 合法化から5年、カナダの現状を専門家が解説	2024/3/29	253,400	188,969	59,371	839	1,328	2,793
2	なぜAIがPOP化しているのか？ 若者世代こそ注目すべきAI-POPの独自性と魅力	2024/5/30	183,968	177,271	5,119	88	797	693
3	野郎の軽薄なアップを怒る方々の特徴が明らかに	2024/4/25	149,910	137,544	10,646	131	876	713
4	プレイブランチに「居住しトレーニング」プレイのアイデア「口喧嘩」に載れる？	2022/11/10	90,910	89,281	1,235	1	62	331
5	人間にはネット情報を通じてまらくクセがある エコエチューバ-効果を中心する学習者が解説	2024/2/8	87,517	82,608	4,281	32	123	473
6	ゼロリ・バセリの成分が不安な中にも強くなる？ 運動系「アビリティ」が実現するSelf-beingな未来	2023/10/12	50,529	48,862	1,322	14	99	232
7	「ゴジラ-1.0 (マウスワン)」はなぜアメリカを熱狂させたのか？	2024/5/16	35,931	161	32,559	66	1,789	1,361
8	村上春樹のおすすめの読み方は？ 最新刊「国とこの世界のなまじり」を100年わう文学部教授の方法	2023/7/20	30,110	27,914	2,027	8	51	110
9	ファストファッションを徹底して解説 50歳からの「足元の美」を掴む最新情報	2021/7/6	23,595	22,864	604	39	40	248
10	ヒルトンなど外資系チェーンが撤退・大撤退に続くオープンビジネス戦略と影響は何？	2024/11/21	22,883	22,075	121	4	560	103

スライド 45

■ 近年の立命館学園の動き

2023年度: AFU (第20回発表)、OC(東洋館) 発表、新校舎完成、学術研究推進センター ESEC開館、IMPACT MAKERS DAY、新学舎竣工式、1000回特展発表に貢献

2024年度: OC(東洋館) 発表、大規模なリノベーション、OC(東洋館)スタート、新校舎完成、学術研究推進センター ESEC開館、MBA 新校舎 観光マシナリスタート、BKC30周年、立命館大学研究推進センター ESEC開館、MBA 新校舎 観光マシナリスタート、BKC30周年、立命館大学研究推進センター ESEC開館

2025年度: 学術研究推進センター ESEC開館、MBA 新校舎 観光マシナリスタート、BKC30周年、立命館大学研究推進センター ESEC開館

2026年度: 学術研究推進センター ESEC開館、MBA 新校舎 観光マシナリスタート、BKC30周年、立命館大学研究推進センター ESEC開館

スライド 46

■ 125周年事業とその関連広報展開

2024年: 11月 学術研究推進センター ESEC開館、12月 学術研究推進センター ESEC開館、1月 学術研究推進センター ESEC開館、2月 学術研究推進センター ESEC開館、3月 学術研究推進センター ESEC開館、4月 学術研究推進センター ESEC開館、5月 学術研究推進センター ESEC開館、6月 学術研究推進センター ESEC開館、7月 学術研究推進センター ESEC開館、8月 学術研究推進センター ESEC開館、9月 学術研究推進センター ESEC開館、10月 学術研究推進センター ESEC開館、11月 学術研究推進センター ESEC開館、12月 学術研究推進センター ESEC開館

2025年: 1月 学術研究推進センター ESEC開館、2月 学術研究推進センター ESEC開館、3月 学術研究推進センター ESEC開館、4月 学術研究推進センター ESEC開館、5月 学術研究推進センター ESEC開館、6月 学術研究推進センター ESEC開館、7月 学術研究推進センター ESEC開館、8月 学術研究推進センター ESEC開館、9月 学術研究推進センター ESEC開館、10月 学術研究推進センター ESEC開館、11月 学術研究推進センター ESEC開館、12月 学術研究推進センター ESEC開館

2026年: 1月 学術研究推進センター ESEC開館、2月 学術研究推進センター ESEC開館、3月 学術研究推進センター ESEC開館、4月 学術研究推進センター ESEC開館、5月 学術研究推進センター ESEC開館、6月 学術研究推進センター ESEC開館、7月 学術研究推進センター ESEC開館、8月 学術研究推進センター ESEC開館、9月 学術研究推進センター ESEC開館、10月 学術研究推進センター ESEC開館、11月 学術研究推進センター ESEC開館、12月 学術研究推進センター ESEC開館

スライド 47

■ 125周年事業とその関連広報展開

2025年 1月: 新年に周年YEARのスタートを学内外に力強く宣言。トッパメッセージを年頭所感の発信、年頭所感の発信、年頭所感の発信

2025年 4月: 新年度のタイミングで全キャンパスを周年モードに。PRアンバサダーの任命、PRアンバサダーの任命、PRアンバサダーの任命

トッパメッセージ・年頭所感の発信、年頭所感の発信、年頭所感の発信、年頭所感の発信、年頭所感の発信、年頭所感の発信、年頭所感の発信、年頭所感の発信

スライド 48

■ 125周年事業とその関連広報展開

2025年 5-6月: 5月19日創立記念日をピークとする広報コミュニケーション。PRアンバサダーの任命、PRアンバサダーの任命、PRアンバサダーの任命

2025年 10月: 周年記念イベントで立命館が目指す未来を社会に発信。PRアンバサダーの任命、PRアンバサダーの任命、PRアンバサダーの任命

PRアンバサダーの任命、PRアンバサダーの任命、PRアンバサダーの任命、PRアンバサダーの任命、PRアンバサダーの任命、PRアンバサダーの任命、PRアンバサダーの任命、PRアンバサダーの任命

スライド 49

大阪・関西万博への参画と広報展開

オール立命館で挑んだ大阪・関西万博

2025年4月13日から184日間にわたり大阪・豊洲で開催される2025年大阪・関西万博。立命館大学は立命館大学・APU・附属機関が一体となり、「オール立命館」体制で万博を盛り上げる役割を担い、立命館大学では「万博学芸委員会」による学芸委員の企画などを実施するなど、学園全体での参画を実現。専ら「R」のロゴを軸としたデザイン・アート・メディアの活用により、万博会場での参画を実現。専ら「R」のロゴを軸としたデザイン・アート・メディアの活用により、万博会場での参画を実現。

広報戦略と取り組み

- 早期の万博特設サイト開設
 - ▶ 開幕前2年前の2023年8月に立ち上げ
- 首都圏・関西メディアへの訪問
- メディア向けプレスセミナーの開催
 - ▶ 開幕前、開幕後の実施で全国5大会合（16名が参加）
- 全国向けの月次プレスリリース発信
 - ▶ 全国にわたる月次での発信とし、情報発信をコントロール
- メディアとの定期的なコミュニケーション
- メディア広告展開

実施・参画した企画数

実施・参画した企画数	67
参画期間	61日間
実施・参画した学生・教職員数	2400名+

スライド 50

デザイン・アート構想 広報展開のタイムライン

2026年4月開設 立命館大学デザイン・アート学部
立命館大学大学院
デザイン・アート学研究所

構想概要

立命館大学京浜キャンパスに2026年4月に設置する「デザイン・アート学部」デザイン・アート学研究所、総合大学である立命館が、まち全体をランニングプレイスとして、美的感性に磨きかける機会を創出し、デザイン・アートを軸とした学びを追求。多様で確かな社会貢献に新たな視点で取り組む人材を育成。

広報としての役割

デザイン・アート学部、研究科の新設構想の意を明確にし、受験生をはじめとして社会向けに翻訳する基盤づくりを広報からサポートする。

スライド 51

「宇宙」を軸とした研究・学術の広報展開

ESEC概要

R2030で掲げる「次世代研究大学」の中核となる研究拠点として2023年7月に創設した「宇宙科学推進センター(ESEC)」は、月や惑星における人間の生存可能性、居住・生活環境構築に貢献する先進的な宇宙研究・開発の推進、JAXAとの連携強化、宇宙科学研究（JAXA宇宙科学推進センター）への連携強化、月・火星探査機搭載機材の開発と宇宙人材の育成に貢献。

広報としての役割

「宇宙」を中心とした研究・学術の広報展開、研究力や学術的に社会へ発信。研究を通じた次世代研究大学のイメージ形成をはかる。

スライド 52

デザイン・アート構想の広報展開

KINUGASA Redesign Project / 衣笠アートヴィレッジフェスティバル

構想概要

立命館大学京浜キャンパスに2026年4月に設置する「デザイン・アート学部」デザイン・アート学研究所、総合大学である立命館が、まち全体をランニングプレイスとして、美的感性に磨きかける機会を創出し、デザイン・アートを軸とした学びを追求。多様で確かな社会貢献に新たな視点で取り組む人材を育成。

広報としての役割

デザイン・アート学部、研究科の新設構想の意を明確にし、受験生をはじめとして社会向けに翻訳する基盤づくりを広報からサポートする。

スライド 53

SNS | Instagram戦略

フォロワー

- 重点キーワードに中心を絞る
- 産学連携したい企業 起業に関心のある学生 など

大学として伝えたいこと

- 「次世代研究大学」「創発性人材」「社会共生価値」に関連する情報

ターゲットが興味のあること

- 進路に関する情報
- 日常生活に関連する情報
- 知識を得られる情報 など

現状と課題

- 風量投稿などのシリーズものを中心にエンゲージメント率は高く、自校KPIまであと一歩の状況
- 重点キーワード関連投稿のエンゲージメント率は高く、マーケティングゴールに繋がっていない可能性

方針

- エンゲージメント率の高い投稿は維持しつつ派生する新企画を検証
- フォロー外に浸透しやすいコンテンツに落とし込めない
- より浸透しやすいSNSライクなコンテンツを投稿していく
- フォロー外により関心を持ってくれる層がいる
- 関心を持ちうる層に対してKW関連投稿を広告で配信し認知度と関心を高める

スライド 54

SNS | Instagram戦略

投稿カレンダー

時期や「〇〇の日」本学のイベント・スポーツなどを参考に年間計画（月次単位の運用で微調整）

コンサルティングによる助言の反映

エンゲージメント率を高める工夫
・文面での「いいね」やコメントを誘導
・「後で見返したい情報」を含める → 「保存」につなげる

投稿に際しての工夫

時間帯：11~12時頃（お昼休み前）→ ランチ時間に見られる
16~17時頃（夕方）→ 授業や仕事後に見られる

シリーズ・鉄板ネタ

「Rの風景」「月つめいだり」などのシリーズネタや、「〇〇の日」などの鉄板ネタはフォロー獲得に直結

日付	曜日	記念日	イベント	Instagram	ストーリー
11月6日	水			新設プロジェクト 京浜キャンパス	新設プロジェクト 京浜キャンパス
11月7日	木	立冬		新設プロジェクト 京浜キャンパス	新設プロジェクト 京浜キャンパス
11月8日	金			新設プロジェクト 京浜キャンパス	新設プロジェクト 京浜キャンパス
11月9日	土	いいねの日		新設プロジェクト 京浜キャンパス	新設プロジェクト 京浜キャンパス
11月10日	月			新設プロジェクト 京浜キャンパス	新設プロジェクト 京浜キャンパス
11月11日	火	ポッキーの日		新設プロジェクト 京浜キャンパス	新設プロジェクト 京浜キャンパス
11月12日	水			新設プロジェクト 京浜キャンパス	新設プロジェクト 京浜キャンパス
11月13日	木			新設プロジェクト 京浜キャンパス	新設プロジェクト 京浜キャンパス
11月14日	金	アンチエイジングの日		新設プロジェクト 京浜キャンパス	新設プロジェクト 京浜キャンパス
11月15日	土	まきの日		新設プロジェクト 京浜キャンパス	新設プロジェクト 京浜キャンパス
11月16日	日	いいねの日		新設プロジェクト 京浜キャンパス	新設プロジェクト 京浜キャンパス
11月17日	月	初詣の日		新設プロジェクト 京浜キャンパス	新設プロジェクト 京浜キャンパス

■ SNS | Instagram戦略

Futurezen

PRコンサルティングなどを活用し、投稿や動画の分析を実施

- ▶ フォロワー獲得の状況やエンゲージメントを獲得する投稿の特徴を分析しつつ、低調なものの理由を分析
- ▶ 他大学など競合アカウントも分析しながら、ゴールとするファン獲得や、KPIであるフォロワー数・エンゲージメント獲得に向けて、より効果的・効率的な運用をするための詳細な分析を実施し、ネクストアクションにつなげる

例) Instagram 2025年7-9月投稿ランキング エンゲージメント率TOP5

順位	投稿日時	投稿内容	フォロワー数	いいね数	コメント数	エンゲージメント率
1位	7/15
2位	7/22
3位	8/5
4位	8/19
5位	9/2

例) 投稿分析のイメージ

PR会社分析

「キャンパスの建物をレゴで再現」や「創立記念日」など、立派な歴史を誇るコンチンツがイチ目を伸ばし、レゴ投稿は、遊び心のある企画がリアルな再現度で興味を惹きつけた。SNSで話題になりやすい仕掛けができた。

PR会社分析

「秋のふみ等一歩も、記念日の実態」はエンゲージメント率が低調に、「秋のふみ」シリーズの中でもキャンパスの風景など一般的なテーマと比較して、興味を持つ層が限定的であったと判断。担当の反応に驚かす。「9」を贈る学生の熱量や魅力が伝わることも効果的と考える。

第6分科会

EdTech で推進する個別化教育

報告者

- 小城 擁二 氏 atama plus 株式会社
大学・予備校支援事業部 高大接続チームオーナー
- 新井 昌明 氏 立命館大学 入学センター 入学課 課長
- 柏木 崇 氏 株式会社ベネッセコーポレーション
VIEW next 編集部 統括責任者
- 宿久 洋 氏 同志社大学 同志社データサイエンス・
AI 教育プログラム運営委員会 委員長
／文化情報学部 教授

コーディネーター

- 山本 康友 氏 同志社女子大学 薬学部 教授



EdTech で推進する個別化教育

コーディネーター

同志社女子大学 薬学部 教授 山本 康友

○本分科会のねらい

AIを始めとする科学技術の進化、急速な少子高齢化の進行など、大きく変動する日本社会において、学修者一人一人の可能性を最大限伸ばす教育が求められている。教育 (Education) × 科学技術 (Technology) が EdTech であり、学生一人一人の特性に合った教育を、「きめ細かく」かつ「深く」提供できる可能性を秘めている。本分科会では、教育産業界および大学から講師を迎え、AI等の Technology が個々の学生の可能性をどのように伸ばすことができるのか、具体例をご紹介いただくと共に、参加者間の意見交換を通じて、今後の「個別化教育」について考える契機となることをねらいとした。

○報告の概要

講演1：AIによる個別最適学習と高等教育における活用事例

atama plus 株式会社 大学・予備校支援事業部 高大接続チームオーナー

小城 擁二 氏

小城氏には、AI教材を利用した入試用学習プログラム、入学前教育 / 初年次教育プログラムについてご講演いただいた。atama plus 社の AI教材で数学の入学前教育プログラムを利用した高校生のデータ解析によると、年内入試で大学進学を決めた高校生のうち、理系学生では約8割が、文系学生では約9割が中学数学まで遡って学習をしている結果であった。高校3年生でも中学数学の理解度が一部不十分であるという状況を意味しており、また遡り学習の単元も多岐に渡ることから、個別化教育の重要性が示された。atama plus 社の AI教材は、学習者一人ひとりの理解度を診断し、瞬時に個別最適学習カリキュラムを提示することができる教材である。大学入試や入学前教育での本教材を活用したプログラム事例についてもご紹介いただいた。

講演2：EdTech を活用した新しい総合型選抜の在り方

立命館大学 入学センター入学課 課長

新井 昌明 氏

新井氏には、atama plus 社の AI教材を活用した立命館大学の総合型選抜 (AO 選抜) についてご講演いただいた。学部ごとにもつアドミッション・ポリシーを、入学後に求められる特に重要な学力素養を「単元」単位で具体的に指定し、それを EdTech 教材で個別学習、修得することを出願要件として設定する総合型選抜 (AO 選抜) を、立命館大学では 2023 年度入試より導入している。これにより、高等学校での履修の有無を問わず誰でも平等にチャレンジできる機会を生徒へ提供することで、多様な学習歴を持つ志願者も集まった。「学部指定単元 AI 学習プログラム (通称: UNITE Program[®])」の受講→総合型選抜、と連携させることで、受験生は高い学習意欲を持って学部が指定した科目の単元を EdTech で学習し、入学後の学びにスムーズに接続出来ていることが紹介された。

講演3：生成 AI と高校教育

株式会社ベネッセコーポレーション VIEW next 編集部 統括責任者

柏木 崇 氏

柏木氏には、高等学校における生成 AI の活用事例と、次期学習指導要領における AI の位置づけに関してご講演いただいた。教育現場では当初は生成 AI を警戒する向きがあったものの、最近では国のガイドラインが示され、小中高での利用も普及してきたことが示された。高校生における生成 AI の使用割合は年々高まっており、生成 AI 使用に対する高校教師の不安も近年は減少傾向にあるが、一方で課題やレポー

トに生成 AI を不正に利用することに対する懸念は増加している状況が示された。高校における生成 AI の取り組みはまだまだ発展途上だが、その中で積極的に活用している事例についてご紹介いただいた。ご講演の後半では高等学校の学習指導要領について紹介があり、次期改訂では生成 AI の使用を前提として議論が進んでいるということが示された。

講演 4：大規模私立大学における生成 AI と電子教科書を援用したデータサイエンス・AI 教育
同志社大学 同志社データサイエンス・AI 教育プログラム運営委員会 委員長 / 文化情報学部 教授
宿久 洋氏

宿久氏には同志社大学の同志社データサイエンス・AI 教育プログラム (DDASH) における、NTT 西日本と連携した生成 AI 活用型学習支援システム (DAIB) の開発・運用および授業実践についてご講演いただいた。講演では、AI への質問機能のほか、授業資料や授業動画の要約、設問作成、資料および動画のキーワード検索、さらに動画については検索結果に基づき必要な箇所のみを視聴できる機能など、受講生の学習を効果的に支援する多様な機能を備えたシステムについてご紹介いただいた。今後はメタ認知チェックや理解度確認問題を組み込んだ個別最適化学習へと展開していく予定であることが示され、生成 AI を活用した先進的な取り組みについて、分かりやすくご紹介いただいた。

○報告に対する質疑ならびに全体討議の内容

Q1：DAIB で授業要約を利用することで、授業中の学習への動機づけが下がる懸念はないか。また、DAIB の導入前と導入後で、学習効果にはどのような差が見られるか。

(宿久氏)：主観的な評価として、アンケートではポジティブな意見が多い。学習効果に関しては、プログラムを最後まで受講する人がほとんどであり、ドロップアウトする学生は少ない。また、元々「やらされている」感が強い学生に対しては、学習しやすい機能を搭載することで、学習意欲を喚起している。

Q2：入試のプロセスに atama plus 社の AI 教材を組み込んだ場合、受験生本人以外が (替え玉で) プログラムを受講している懸念はないか。

(小城氏)：詳細まではお答えできないが、写真と学習データを解析することで、他人のなりすましを防止することが可能。

Q3：一般入試で入ってきた学生と比較して、UNITE Program で入学した学生の特徴は。

(新井氏)：ゼミ等ではリード役として他の学生をけん引する学生が多い。受け入れ学部の教員からは、入学後の学習意欲が高く、目的意識も具体的であるという声を伺うことも多い。

Q4：合格後に入学前教育を実施するのと、入試プロセスの中で UNITE Program を実践するのとでは、どのような違いがあるか。

(新井氏)：atama plus 社の AI 教材を入試プロセスに組み込むことにより、各学部で必要とされる単元を明確化することができ、入試プロセスの中でアドミッション・ポリシーのさらなる可視化につながったと考えている。また、入学後の学びとの一体性も高まり、各学部における学びの内容を高校生に伝えやすくなった。

Q5：「生成 AI の使用が疑われる不正な提出レポート」に関して問題が生じていると回答した教員の割合は、2024 年と 2025 年を比較すると、中学・高校教諭では増加している一方、大学教員では低下している。このような差が生じた理由は何か。

(柏木氏)：確かに大学教員では割合は低下しているが、この点に対する懸念が減少したというよりも、むしろ問題意識の所在が変化した結果であると考えられる。具体的には、「生成 AI に関する教員自身の知識不足」や、「生成 AI のどのような利用が不正行為に該当するのかという判断基準」に関心が移行していることが背景にあると考えられる。

Q6：レポートの不正行為の定義とは。また、AI時代にレポートで学習の定着を図ることは可能なのか。

(柏木氏)：生成 AI を使用した場合には、レポートの中でどの部分で使ったのかを明記させるほか、生成 AI に入力する前のドラフトを提出させる。また、生成 AI の回答をどのように検証したのか、あるいはそこからどのようにアイデアを発展させたのかについても記述させる。こうした観点を評価基準に組み込むことで、生成 AI を活用した場合であっても適切な評価が可能であるとする事例が示されている。

(宿久氏)：turnitin 社と tyton 社の合同調査では、生成 AI を利用している学生は 2023 年では 43% であったのが、2024 年では 59% と増加している。また、学生の 50% が、学内で禁止されている場合でも授業や課題で生成 AI を利用したいと考えている。そういう状況において、今後の方向性としては「過程を記録させる」という考え方が出てきている。レポート作成において、どのくらいの時間をかけたか、外部からのどのような情報を入力したか、どの段階で AI を使ったのか、そのログごと提出させて評価する、という考え方である。Turnitin 社の Feedback Studio というソフトウェアに、それらを検査する機能が搭載されている。

Q7：ご紹介いただいた生成 AI は有料版か。

(宿久氏)：講演で紹介したものは有料版。

(柏木氏)：講演で紹介した事例の多くは、生徒は無料版を使用していると思われる。

スライド1

atama+

AIによる個別最適学習と
 高等教育における活用事例

atama plus株式会社

スライド2

弊社概要

会社紹介
 社名 : atama plus株式会社
 Mission : 教育に、人に、社会に、次の可能性を。
 事業内容 : AI教材の開発
 塾・予備校および大学での活用支援
 正社員数 : 120人 (25/4時点、プロダクト関連が中心)
 AI教材の導入/活用実績 :
 ・全国の塾・予備校4,500教室以上で利用
 ・駿台予備学校と共同で提供しているオンライン模試で1100校以上、累計50万人以上が受験

高大接続プログラム導入実績
 立命館大学様で23年度入試から活用が始まり、
入試用学習、入学前教育、初年次教育を全国に展開中
 ※ご導入大学の一部抜粋

受賞歴
 2020年度 日本e-Learning大賞 受賞
 (後援：文科省、経産省他)

スライド3

本日の内容

本日は以下の内容を具体事例を交えてご紹介します。

- ・ 学習データで探る学生の実態
- ・ 個別最適学習の仕組み
- ・ 大学教育における基礎学力の担保・補完の事例
- ・ 学習データの活用可能性

© atama plus Inc. 3

スライド4

学習データで探る学生の実態

スライド5

高校生が抱える”つまずき” - 高1生の数学の学習

データ1 高1生の3人に2人が中学以前の範囲につまずき

弊社AI教材で高校数学を学習した高1生のユーザー約10,000人を対象とした調査結果

出所 : atama + EdTech研究所調べ [https://edtech-research.com/data/21edtech/] 5

スライド6

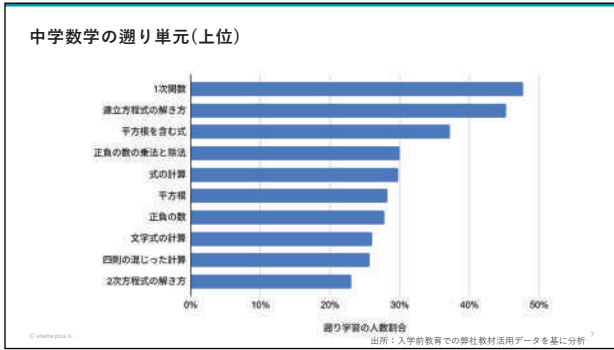
年内入試生のつまずき - 入学前教育での通り学習 (理系：数学)

データ2 理系学生のうち8割以上が中学数学、2割弱が算数に通り

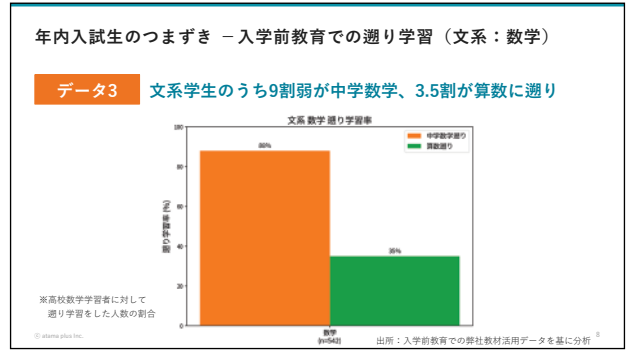
学習範囲	通り学習率 (%)
中学数学	84%
算数	16%

※高校数学学習者に対して通り学習をした人数の割合
 出所 : 入学前教育での弊社教材活用データを基に分析 5

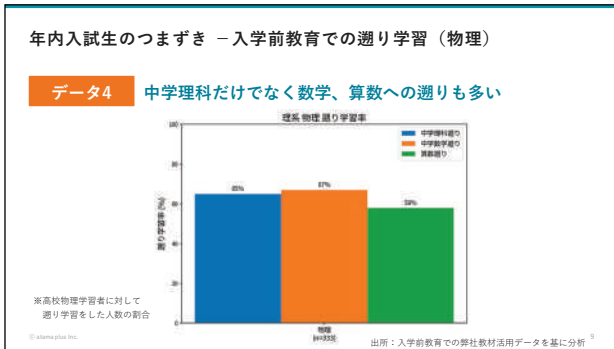
スライド7



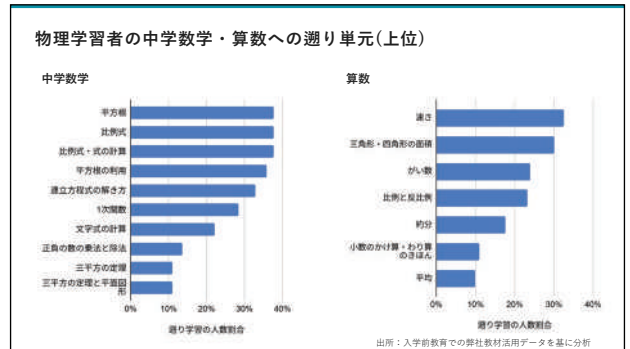
スライド8



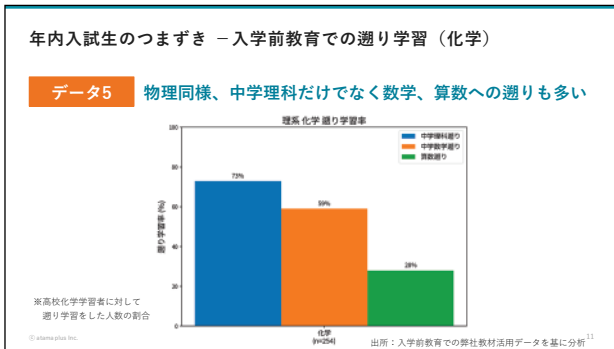
スライド9



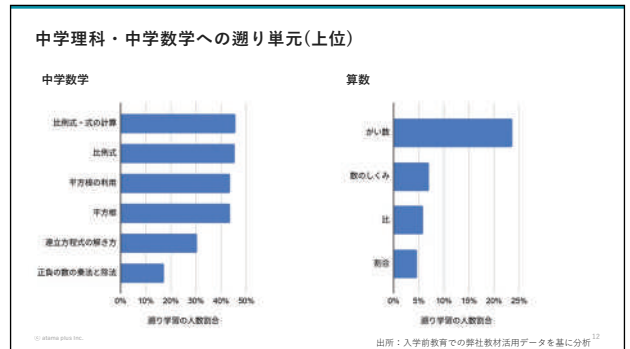
スライド10



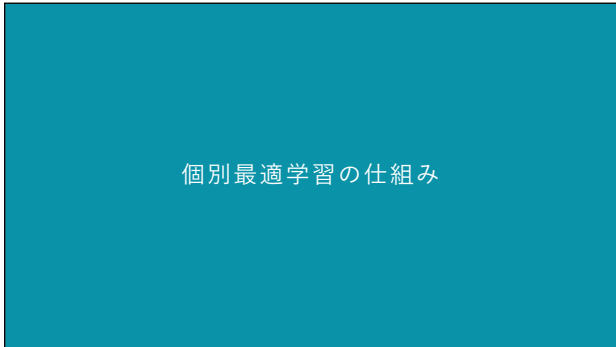
スライド11



スライド12



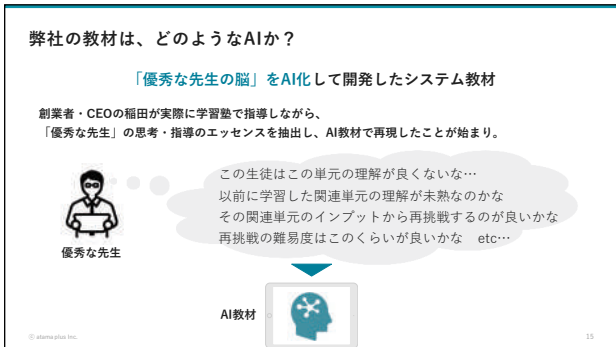
スライド 13



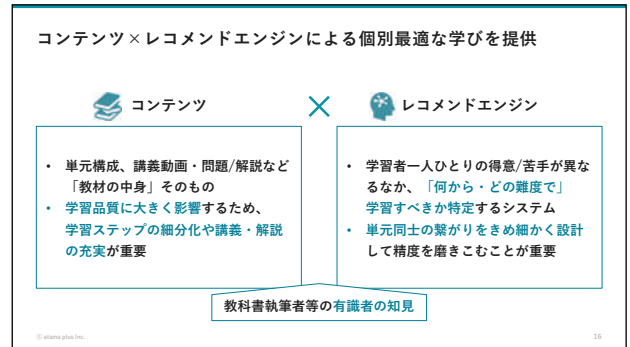
スライド 14



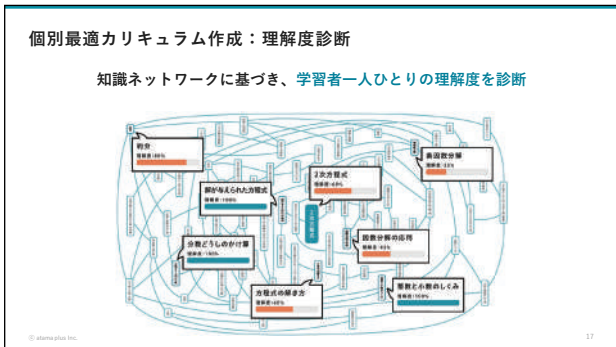
スライド 15



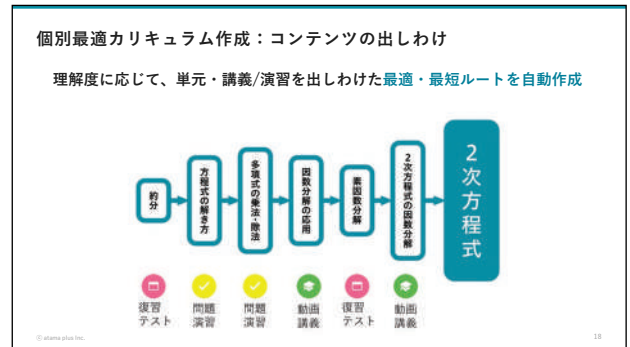
スライド 16



スライド 17



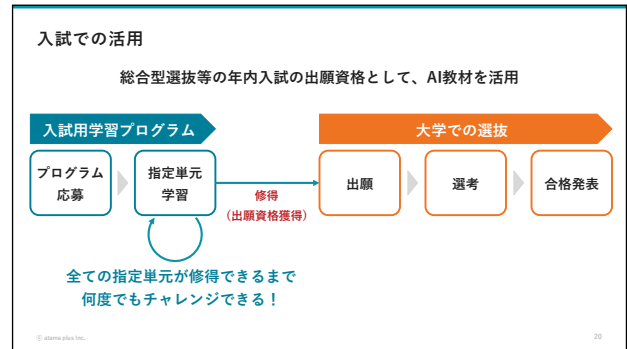
スライド 18



スライド 19

大学教育における基礎学力の担保・補完の事例

スライド 20



スライド 21

入試プロセスで活用する価値

- 既存の入試形式だとチャレンジできなかった受験生に間口を広げられる
- 過去の履修歴によらず、大学の学びに直接必要となる単元粒度での理解を担保できる
- 学習データに基づき、プログラム内容を改善できる

スライド 22

入学前教育、初年次教育での活用

よくお伺いする課題感

- 入学生の学力の幅が以前よりも大きくなり、教員がフォローしきれない/負担が大きくなっている
- 入試で問えていないが、入学後の学習で必要な学力を補完したい
- 学部学科の学びに必要な数学II/Bを高校で履修していない入学生が一定数いる
- 入学前教育の結果を大学の教育に活かしていない

スライド 23

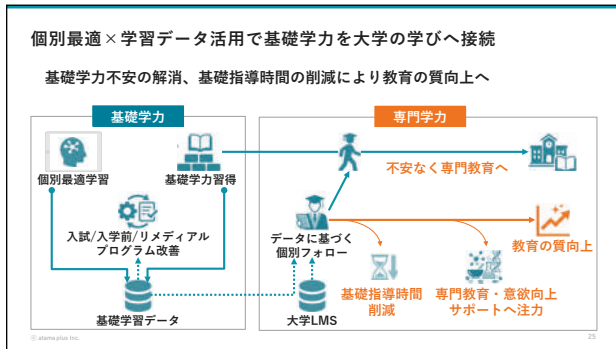
入学前教育、初年次教育で活用する価値

- 年内入試生の基礎学力不安を解消して入学を迎えられる
- 基礎学力不足により大学の講義についていけず退学に繋がるリスクを下げられる
- 学習データにより、プログラム内容の改善、入学後の学習支援を可能とする

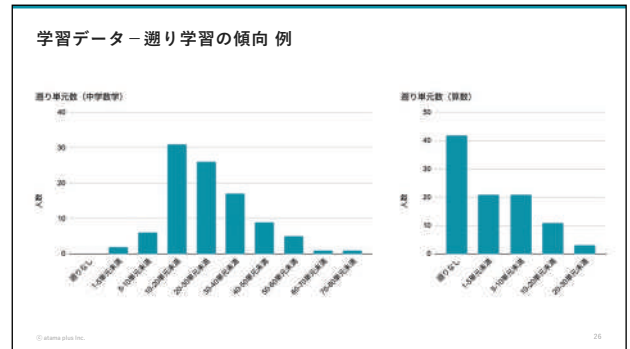
スライド 24

学習データの活用可能性

スライド 25



スライド 26

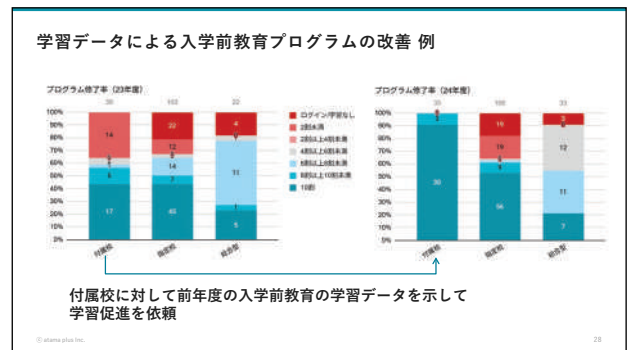


スライド 27

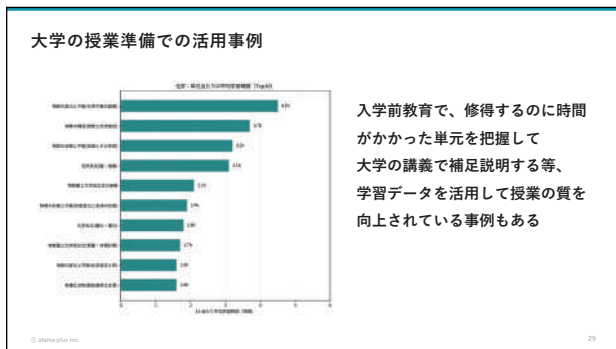
学習データ - 学生個別データ例

基本情報	登録学年合格率	学習時間	履修単位数	学習単位数	学習総数					
ユーザーID	入試形態	達成率	合計学習分数	学びの項目	割合	算数	中学数学	高校数学	合計	日数
XXXXXXXX	指定校推薦	100%	3,560	220	8%	5	29	1	35	49
XXXXXXXX	指定校推薦	100%	834	33	5%	0	8	1	9	11
XXXXXXXX	指定校推薦	16%	90	9	12%	0	4	0	4	4
XXXXXXXX	指定校推薦	100%	571	20	4%	0	5	0	5	9
XXXXXXXX	総合型選抜入試	8%	292	56	20%	0	9	0	9	7
XXXXXXXX	総合型選抜入試	100%	1,902	245	14%	0	25	1	26	20
XXXXXXXX	総合型選抜入試	61%	928	86	11%	0	18	0	18	16
XXXXXXXX	総合型選抜入試	100%	1,909	413	22%	0	38	1	39	37
XXXXXXXX	総合型選抜入試	100%	1,625	103	6%	0	23	1	24	19
XXXXXXXX	総合型選抜入試	0%	123	118	100%	1	2	0	3	2
XXXXXXXX	付属校推薦	100%	892	246	31%	4	44	0	48	17
XXXXXXXX	付属校推薦	100%	789	112	15%	0	11	1	12	10

スライド 28



スライド 29



スライド 30

ご導入大学 ※公表許可を頂いている大学の抜粋

スライド 31

ご清聴ありがとうございました。

登壇内容のお問い合わせについては、下記からお願いします



「atama+ 高大接続」で検索するとトップに出ています

URL : <https://corp.atama.plus/service/for-universities/>

© atama.plus Inc.

31

スライド 32

atama+

AIで、一人ひとりに、最短で「わかる！」を。

スライド1

**EdTechを活用した
新しい総合型選抜の在り方**

立命館大学入学センター 入学課 新井 昌明

スライド2

① UNITE Program導入の背景

② UNITE ProgramおよびAO選抜について

③ UNITE Program実施結果および到達点について

スライド3

問題意識

- 基礎学力が意欲・ビジョンかではなく、どちらも重要
- 大学の学びと高校の教科学習のつながりをもっと明確化できないか (その学部でやりたいことを実現するためには、教科、科目の中でも特にここが重要)
- 本気でやりたいことを見つけて、本気のやる気になってからでもチャレンジできる入試の有り様とは？
- 履修主義でなく、修得していることを一般選抜以外で測ることができないか
- 総合型選抜、学校推薦型選抜の学生自身が持つ不安**
- 子供たちの学習歴を踏まえた新たな入試形態の検討 (入試そのもののDX)

この他にも複数の問題意識を抱えながら、解決できる方法を模索していた

スライド4

atama plus社との共同研究会の設置と設定テーマ

2020年12月22日 学校法人立命館と atama plus株式会社が、AI や学習データを活用し、「新しい高大接続と入試の在り方を考える共同研究会」を設立。まず研究テーマとして3つの柱を設定。

- 附属校生の学内推薦合格後の基礎学力定着モデル構築**
立命館大学に内部進学する附属校生 (特に理系進学者) を対象とした基礎学力定着への実践 **範囲を大きくし、入学前教育の在り様についての検討を強化**
- 学習歴を踏まえた新たな入試企画の検討**
探究型の学びを行ってきた生徒の基礎学力と学習歴を踏まえた入試企画
学部のアドミッションポリシーに合致する基礎学力の確かな修得と意欲や活動を評価する **具体施策として学部指定単元AI学習プログラム (UNITE Program) を実施**
- オンライン入試のプラットフォームの開発**
地域によらず受験機会を提供できる形の検討

スライド5

プログラム受講～入学までの流れ

- 01 プログラム出願** (9-8月)
学習に必要な atama+ のIDを取得
- 02 指定単元の学習** (5-8月)
atama+ で学部が指定する単元を学習・単元ごとに修得認定試験を受ける
- 03 AO入試出願** (9月)
指定単元の修得認定試験をすべて合格した方 (終了者) のみ出願可能
- 04 入試備考** (10月)
出願学部が指定する第1次・第2次選考を実施
- 05 合格発表** (11月)
入試選考後、合格発表
- 06 入学前教育** (12月-入学)
合格者を対象に、atama+ において、入学後に必要な単元をさらに学習

UNITE Programの受講 → 総合型選抜 (AO入試) の受験 → 継続した学習で入学後の学びへスムーズに接続

スライド6

UNITE Program 採用学部の変遷

2023年度 入試	2024年度 入試	2025年度 入試	2026年度 入試	2027年度 入試
経済学部	薬学部	政策科学部		産業社会学部
スポーツ健康科学部		総合心理学部		デザイン・アート学部
食マネジメント学部		生命科学部		
		情報理工学部		

スライド7

UNITE ProgramからAO選抜入試までの流れ

■概要
2023年度総合型選抜 AO選抜入学試験（2023年4月入学）から開始。
「学部指定単元AI学習プログラム（通称：UNITE Program）」で各学部が指定する数学の単元を学習し、プログラムを修了することが、対象のAO選抜への出願要件として設定している。

■実施学部
（文系）
政策科学部、総合心理学部、経済学部、スポーツ健康科学部、良マネジメント学部、デザイン・アート学部（理系）
情報理工学部、生命科学部、薬学部

■対象
実施年度末の3月31日までに高等学校等を卒業・卒業見込みの者

入試までの流れ
UNITE Programの修了からAO選抜入試までの流れを示すフローチャート。UNITE Programの修了後、AO選抜入試の準備期間に入り、AO選抜入試の申し込み、AO選抜入試の受験、AO選抜合格発表、入学準備の順に進みます。

スライド8

UNITE Program 学習指定単元と学部の学びとの関連性（例：経済学部）

数学型	学習指定単元(分)	学習所要時間のめやす
数学I	データの分析(データの帰属)	④43~53分程度
数学A	場合の数と確率(場合の数・確率の基本的性質)	
数学B	場合の数と確率(独立な試行・復元試行の確率)	
数学C	指数と対数(指数・対数の応用)	
数学D	多項式の除法(剰余法と剰余)	
数学E	数列(等差数列)	
数学F	数列(いろいろな数列)	
数学G	統計的推論(母集団と標本)	
数学H	統計的推論(推定と信頼区間)	

学部ごとの学びに役立ちます！
●経済統計 ●計算経済学 ●社会経済論 ●行動経済学 ●環境経済学 ●ファイナンスとリスク

スライド9

UNITE Program 学習指定単元と学部の学びとの関連性（例：情報理工学部）

指定単元と学習所要時間のめやす	学習所要時間(分)
④45~55分程度	

科目	単元内容
数学I	図形と方程式(直線と二次関数)
数学II	指数と対数(指数関数)
数学III	指数と対数(対数関数)
数学IV	三角関数(三角関数の応用)
数学V	三角関数(三角関数の合成)
数学VI	数列(漸化式と数列)
数学VII	数列(数学的帰納法)

学部ごとの学びに役立ちます！
●情報経済 ●データサイエンスとAI ●通信工学 ●マルチメディア ●CG/VR ●ロボティクス ●機械学習/AI応用

スライド10

UNITE Program;2025年度入試 実施結果概要

学部・学科	AIプログラム受講生数	AIプログラム修了者数	AO選抜応募者数	AO選抜合格者数	AO選抜入学人数
経済科学部	86名	57名	49名	12名(24%)	10名
総合心理学部	90名	43名	39名	6名(15%)	14名(15.7%程度) ※AO選抜枠内での合計
経済学部	42名	23名	20名	5名(25%)	12名
スポーツ健康科学部	71名	19名	15名	6名(40%)	
良マネジメント学部	79名	54名	52名	11名(21%)	15名(15.1%程度) ※AO選抜枠内での合計
デザイン・アート学部	89名	41名	35名	13名(37%)	
情報理工学部	116名	66名	57名	23名(40%)	20名
生命科学部 応用化学科	9名	3名	3名	1名(33%)	6名(15.8%程度) ※AO選抜枠内での合計
生命科学部 生体工学科	4名	3名	3名	3名	5名(17.6%程度) ※AO選抜枠内での合計
生命科学部 生命情報科学科	4名	3名	3名	1名(33%)	5名(17.6%程度) ※AO選抜枠内での合計
薬学部	89名	37名	22名	1名(4.5%)	4名
合計	621名	339名	327名	94名	147名(UNITE Program修了者の集計合計)


AIプログラム受講生数 約60%
学習指定単元AO選抜合格者数 約90%

スライド11

AO選抜入試の概要（2025年度入試）

学部・学科	UNITE Program修了者の割合	AI選抜方式名称	AO選抜方式方法
経済科学部	数学	UNITE Program® (数学)形式II方式	第1次選考：書類選考 第2次選考：面接
総合心理学部	数学	総合型総合型 (UNITE Program®) データサイエンス型	第1次選考：書類選考 第2次選考：面接
経済学部	経済学 経済学	UNITE Program® (経済学)形式I方式	第1次選考：書類選考 第2次選考：プレゼンテーション、面接
スポーツ健康科学部	情報	CREA方式 (情報系・総合UNITE Program®)	第1次選考：書類選考 第2次選考：プレゼンテーション、面接
良マネジメント学部	数学AI情報	AI選抜方式I形式 (UNITE Program®)	第1次選考：書類選考 第2次選考：プレゼンテーション、面接
情報理工学部	数学	UNITE Program®方式	第1次選考：書類選考 第2次選考：プレゼンテーション、面接
生命科学部 応用化学科	化学・物理	UNITE Program®方式(化学物理型)	第1次選考：書類選考 第2次選考：面接
生命科学部 生体工学科	数学・物理	UNITE Program®方式(化学物理型)	第1次選考：書類選考 第2次選考：面接
生命科学部 生命情報科学科	数学・情報	UNITE Program®方式(化学物理型)	第1次選考：書類選考 第2次選考：面接
薬学部	薬学 薬学	UNITE Program® (薬学)形式I方式	第1次選考：書類選考 第2次選考：面接

スライド1




2025年度 第31回FD・SDフォーラム
 第6分科会「EdTechで推進する個別化教育」
生成AIと高校教育

株式会社ベネッセコーポレーション
 学校カンパニー 教育情報センター
 VIEW next編集部 統括責任者
 柏木 崇

スライド2

1 自己紹介



VIEW next編集部 統括責任者
 柏木 崇

1999年ベネッセコーポレーション入社。
 進研ゼミ高校講座の事業を行う部署に配属され、
 大学受験生向けの国語教材の企画・編集に携わる。

その後、高校1・2年生向け国語教材、数学教材の企画・編集を経て、
 2012年、ベネッセ教育研究開発センター（現・ベネッセ教育総合研究所）に異動し、
 高校教師向けの教育情報誌「VIEW21」高校版の企画・編集を担当。

2013年7月より、「VIEW21」高校版編集長。
 2018年4月より、「VIEW21」高校版、教育委員会版を統括するVIEW21編集部統括責任者。
 2021年4月より、現職。

年間100名以上の高校教師を取材し、現場の実践を始めとする教育情報と、
 これからの学校教育のあり方を問うメッセージを発信している。

公益社団法人 全国工業高等学校長協会「工業高校生の専門的職業人として必要な資質・
 能力の評価手法の実践研究」運営委員（2018年～2022年）。

経済・金融教育にも関心があり、プライベートではその普及活動にも力を入れる。
 1級ファイナンシャル・プランニング技能士、CFP®認定者。

スライド3

2 ベネッセの教育情報メディア VIEWnext のご紹介

学校教育情報誌

「VIEW next」高校版
（高校教師対象・年5本発刊）

「VIEW next」教育委員会版
（教育委員会対象・年3本発刊）

【コンセプト】
 先生方と共に創る
 教育情報＆オピニオン誌

【コンセプト】
 学校の今に寄り添い、教育
 委員会とともに未来を描く

教育情報ウェブサイト

VIEWnext ONLINE
（学校関係者・保護者・教育に関心のある一般の方対象）

教育ニュースexpress
 教育オピニオン
 教育なんでも相談室
 教育イベント検索
 学校教育情報誌「VIEW next」

3つのメディアを通じて**教育情報・オピニオンを発信**

スライド4

3 本日、お話しさせていただく内容

- 高校における生成AI活用の現状と課題
- 高校における生成AI活用の事例
- 生成AIと次期学習指導要領

弊誌で取り上げた、高校における生成AIの活用事例などをご紹介しながら、上記の3点を通じて、
 生成AIが高校現場や次期学習指導要領にどのような影響をもたらしているのかを、
 ご報告申し上げます。

スライド5

4

高校における生成AI活用の現状と課題

スライド6

5 生成AIにかかわる教育動向

時期	生成AIにかかわる教育動向
2022年11月	OpenAIがChatGPTを公開
2023年1月	アメリカ・ニューヨーク市の公立学校がカンニングの懸念から、ChatGPTの利用を禁止する
2023年2月	アメリカ等の大学で学内AIポリシーが急速に作成され、高等教育でのガイドライン整備が始まる
2023年5月	東京大学が授業でのAIツール利用に関する方針を公表。「一律禁止はせず、授業ごとに扱いを決める」「AI生成テキストはそのまま提出することは不正」などを明示する
2023年5月	ニューヨーク市の公立学校が生成AIの利用禁止措置を撤回
2023年7月	文部科学省が初等中等教育向けの暫定的ガイドラインを公表
2024年12月	文部科学省が初等中等教育向けの暫定的ガイドラインを改訂
2025年5月	東京都が全都立学校で生成AIを活用した学習を開始することを公表

生成AI普及の契機

↓

教育への利用に対する懸念

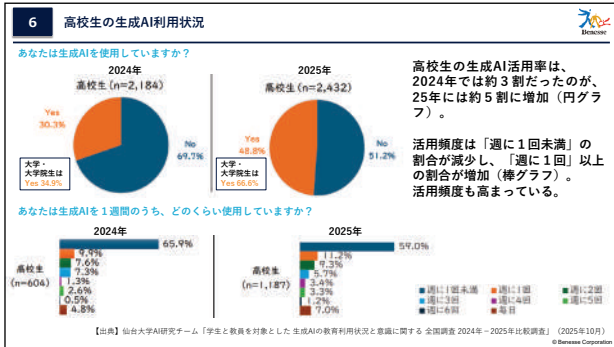
↓

大学がガイドラインを作成し、
利用制限が緩和

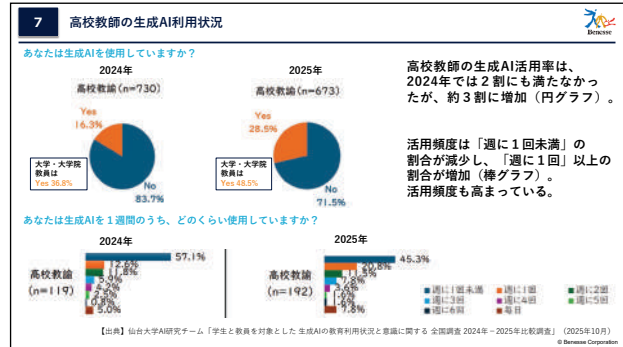
↓

国のガイドラインが公表され、
小中高での利用が普及

スライド7



スライド8



スライド9

8 高校生の生成AI利用目的

項目	学生		高校教員		大学・大学院教員	
	2024年	2025年	2024年	2025年	2024年	2025年
授業の課題やレポートの作成	57.6%	58.3%	57.1%	56.5%	57.7%	61.8%
暗号学習	22.7%	22.1%	24.8%	23.5%	20.5%	21.5%
テスト問題の解答	14.9%	16.3%	15.1%	17.0%	13.8%	15.2%
情報の収集	33.7%	35.0%	34.1%	34.0%	34.1%	37.4%
外国語の翻訳	27.6%	28.6%	31.3%	30.9%	24.1%	27.4%
データ分析・数値計算	16.1%	17.6%	16.4%	17.2%	16.8%	18.2%
画像・グラフの作成	11.9%	10.6%	13.7%	11.6%	6.7%	9.2%
プログラム・コードの作成・デバッグ	11.1%	10.0%	9.8%	7.3%	12.2%	11.8%
動画・動画・音声の生成	12.8%	13.9%	15.2%	14.4%	9.8%	10.7%
研究論文の執筆	6.8%	6.0%	5.3%	5.8%	7.0%	6.4%
Web記事の作成	4.4%	4.2%	5.1%	4.7%	3.7%	3.4%
ソーシャル・メディアへの投稿文作成	3.9%	4.0%	4.1%	4.0%	3.6%	4.4%
詩、物語、小説などの作成	6.2%	8.2%	7.8%	10.0%	3.9%	5.5%
その他	3.1%	4.7%	2.6%	6.4%	3.2%	3.6%

2024年・25年ともに、高校生の生成AIの利用目的は「授業の課題やレポートの作成」が約6割と最も多く、次いで「情報の収集」「外国語の翻訳」（ともに約3割）となっている。

【出典】 山台大学AI研究チーム「学生と教員を対象とした生成AIの教育利用状況と意識に関する全国調査 2024年～2025年比較調査」（2025年10月） © Benesse Corporation

スライド10

9 高校教師の生成AI利用目的

項目	教員		中学校教員		高校教員		大学・大学院教員	
	2024年	2025年	2024年	2025年	2024年	2025年	2024年	2025年
授業資料や教材の作成	37.7%	40.3%	46.2%	39.7%	49.3%	43.8%	27.1%	35.4%
テスト問題・設問の作成	20.8%	22.0%	22.6%	26.2%	27.7%	30.2%	13.6%	13.9%
学生の質問への回答	10.1%	12.7%	7.5%	13.5%	10.1%	16.1%	3.8%	10.4%
生徒・学生への評価・コメントの作成	10.3%	12.9%	9.7%	12.8%	10.9%	14.8%	6.3%	8.3%
授業計画の作成	11.6%	14.6%	9.7%	13.5%	14.3%	12.0%	9.8%	13.0%
課題の収集	38.1%	37.6%	37.6%	29.8%	39.5%	41.1%	51.1%	44.6%
外国語の翻訳	28.2%	28.3%	19.4%	19.9%	21.8%	23.4%	42.1%	39.1%
部分の学習ツールとしての活用	24.2%	22.1%	15.1%	19.9%	27.7%	19.2%	31.6%	27.1%
データ分析・数値計算	12.6%	16.7%	5.4%	16.3%	14.3%	15.6%	15.8%	15.1%
画像・グラフの作成	8.1%	10.3%	6.5%	5.0%	10.1%	11.5%	6.0%	10.4%
プログラム・コードの作成・デバッグ	11.9%	12.0%	6.4%	6.5%	13.8%	14.1%	16.5%	14.6%
動画・動画・音声の生成	11.8%	13.0%	10.8%	15.6%	13.4%	12.0%	9.0%	6.3%
研究論文の執筆	9.9%	10.9%	6.5%	9.9%	10.9%	9.0%	12.8%	4.2%
Web記事の作成	9.9%	17.3%	7.5%	16.3%	10.9%	19.6%	11.3%	19.8%
ソーシャル・メディアへの投稿文作成	6.6%	7.7%	1.1%	3.5%	3.9%	5.2%	11.5%	14.6%
授業に関する書籍・記事・お便りの作成	16.1%	24.6%	19.4%	30.5%	24.4%	27.6%	9.8%	10.9%
授業の修正	29.2%	28.7%	21.5%	24.8%	26.2%	27.6%	27.1%	37.0%
その他	4.6%	1.7%	4.3%	3.5%	4.2%	2.1%	3.0%	0.5%

2024年・25年ともに、高校教師の生成AIの利用目的のトップ3は「授業資料や教材の作成」「情報の収集」「テスト問題・設問の作成」となっている。ただ、他の利用目的も軒並み増加しており、より多様な目的で生成AIが利用されていることが分かる。

【出典】 山台大学AI研究チーム「学生と教員を対象とした生成AIの教育利用状況と意識に関する全国調査 2024年～2025年比較調査」（2025年10月） © Benesse Corporation

スライド11

10 学校現場で生じていると高校教師が認識している、生成AIに関連する問題

あなたの勤務する教育現場において、生成AIに関連してどのような問題が生じていますか？

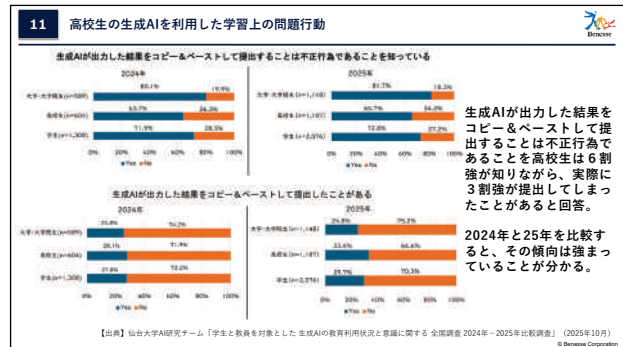
項目	教員		中学校教員		高校教員		大学・大学院教員	
	2024年	2025年	2024年	2025年	2024年	2025年	2024年	2025年
生成AIの使用が疑われる不正な提出レポート	26.3%	43.9%	22.3%	44.9%	27.5%	44.0%	44.3%	29.3%
生成AIに対する教員の知識不足	40.9%	18.5%	42.6%	17.3%	43.8%	19.8%	42.4%	21.0%
生成AIのどのような使用が、不正行為となるかの判断	25.3%	13.9%	22.7%	14.3%	25.7%	13.1%	36.8%	17.2%
生成AIを効果的に授業に組み込む方法	23.5%	9.7%	23.6%	8.1%	22.6%	9.5%	29.9%	11.4%
生徒・学生が生成AIを容易に使ってしまっていること	21.8%	5.4%	19.9%	7.3%	22.6%	5.2%	33.2%	6.8%
生徒・学生が生成AIに頼っていること	18.1%	3.6%	18.6%	2.5%	18.2%	2.7%	24.1%	8.1%
学校における生成AI利用ガイドラインがない	30.7%	2.3%	35.1%	1.9%	23.0%	2.8%	22.4%	2.8%
教員の生成AIに対する抵抗感	28.2%	2.8%	32.3%	1.2%	23.2%	3.0%	19.1%	3.3%
その他	6.3%	0.0%	4.7%	0.2%	0.1%	0.0%	1.9%	0.3%

2024年・25年ともに、学校現場で生じていると高校教師が認識している、生成AIに関連する問題のトップ2は「生成AIの使用が疑われる不正な提出レポート」と「生成AIに対する教員の知識不足」。

ただ、多くの問題が24年よりも25年が減少している中で、「生成AIの使用が疑われる不正な提出レポート」の問題が大幅に増加している。

【出典】 山台大学AI研究チーム「学生と教員を対象とした生成AIの教育利用状況と意識に関する全国調査 2024年～2025年比較調査」（2025年10月） © Benesse Corporation

スライド12



スライド 19

18 【生成AI活用事例】 教科学習（英語） - 私立東北文科大学山形城北高校 Joshua Pako 先生

【対象】 2年生
【教科・科目】 英語・英語コミュニケーションⅡ
【趣旨】 読解力の向上（読解力）におけるクラスの出し物企画立案（AIが作成した導入）※1

●提案書のルーブリックをChatGPTで作成
提案書のルーブリック（図2）を、次のプロンプトをChatGPTに入力して作成。

私はCEFRのA2レベルの生徒に英語を教えています。次のような活動の計画を立てたいです。以下の課題は、1）生徒の興味を引くように、2）生徒のレベルに合わせた課題を、3）生徒の学習スタイルに合わせて作成してください。以下の基準で評価されます。

1) 課題の明確さ
2) 課題の達成可能性
3) 課題の学習効果
4) 課題の学習意欲
5) 課題の学習成果

●授業で扱う素材のレベルの修正やテストの作成、学習評価などChatGPTを活用し、業務の効率化を図っています。

●課題解答もChatGPTで作成
課題解答は、生徒が作成した提案書をGoogle レンズを撮影して文字データに変換し、それを基にChatGPTでCEFRのA2レベルの英文を作成。生徒はプロ先生の添削とともに、自分が作成した提案書を基にした課題解答を受け取った。そのフィードバックの方法は、「自分が作成した英文をより具体的に振り返ることができる」と、生徒から好評。

【出典】ベネッセコーポレーション【VIEW note】高校版2024年4月号 © Benesse Corporation

スライド 20

19 【生成AI活用事例】 教科学習（英語） - 私立東北文科大学山形城北高校 Joshua Pako 先生

●素材文を生徒の英語のレベルに応じて書き直す
リーディングの素材文として扱った「1日に見る広告の競」はChatGPTで作成。テーマに合った素材文があったが、同様の生徒にとっては少し難い英文だったため、ChatGPTを活用しながらCEFRのA2レベルの英文に書き直した。

●生徒の英語のレベルに合わせて作成
リーディングの問題は、ChatGPTに以下のプロンプトを入力して作成。生徒の英語のレベルに合った問題ができた。

●課題の明確さ
●課題の達成可能性
●課題の学習効果
●課題の学習意欲
●課題の学習成果

●生徒が作成したルーブリックや模範解答などは必ず内容を確認して、プロンプトを修正して作り直したり、自分で修正したりした上で活用しています。それでも、自分でゼロから作成するよりも、労力は大幅に軽減されます。

●ChatGPTは進化途中のもので、あくまでもツールの一つです。

●ChatGPTの活用によって捻出できた時間は、生徒とのコミュニケーションや教材研究などに充てています。

【出典】ベネッセコーポレーション【VIEW note】高校版2024年4月号 © Benesse Corporation

スライド 21

20 【生成AI活用事例】 教科学習（英語） - 広島県立三原高校 山本大輔 先生

山本先生は、生成AIに英作文を添削させるための指示文を作成し、生徒に生成AIによる添削を経験させている。

●英作文の添削で使った生成AIのプロンプト

●生徒が使える英語のレベルを適切に設定し、「学習者を助ますように」というプロンプト（例）を加えることで、生成AIは生徒にとって信頼できる添削者、そしてコミュニケーションの相手となると考えています。

●生徒の誤りに際しては、文法のみを指摘することができず、生成AIの使い方も分かった。

●生成AIは受け手としては学習者の感情にもつながり、情緒的な反応も思いました。

●生成AIは非常にすごいと思う。これからの時代があれほどすごいと思っています。

【出典】ベネッセコーポレーション【VIEW note】高校版2024年10月号 © Benesse Corporation

スライド 22

21 【生成AI活用事例】 探究学習 - 三重県立名張青峰高校

生徒が安心して生成AIを使えるよう、作成した「生成AIを使うための大切な心得」

●生成AIを使うための大切な心得

●生徒の興味・関心は多岐にわたるため、探究するテーマによっては教師が専門的な助言をできない場合も

●そのような時に生成AIを活用し、生徒は取り組む課題に関する情報や、自分が持っていない情報が手に入る情報を得ている。

●生成AIはあくまでも補助的に使うものであり、何らかの情報を得たとしても、生成AIの活用によって得た情報を判断する必要があることを強調して生徒に伝えています。

【出典】ベネッセコーポレーション【VIEW note】高校版2023年9月号 © Benesse Corporation

スライド 23

22 【生成AI活用事例】 探究学習 - 岡山県立瀬戸高校

＜同校が探究学習において抱えている課題＞

●生徒が設定する課題が食品ロスや犬猫の殺処分、アフリカの貧困など、多岐にわたり、大半が教師の専門外。

●深い課題設定にとりまがら、

●発表では提案の根拠となるデータの提示を重視しているが、教師だけでは十分な支援ができていない。

●自校で育成を目指す資質・能力と探究学習の各過程で育む資質・能力を結びつけた上で、各工程で生成AIを活用するためのプロンプトを開発。

●生成AIを、「使うもの」でも「任せるもの」でもなく、新しい価値や知識を生徒と「共創するもの」と位置づける。

●FR TICサイクル理論

●探究学習の過程

●生成AIの役割

●同校が育成を目指す「瀬戸高6つの力」

【出典】ベネッセコーポレーション【VIEW note】高校版2024年10月号 © Benesse Corporation

スライド 24

23 【生成AI活用事例】 進路指導 - 私立九州国際大学付属高校 桑野健太郎 先生

●生成AIを活用した志望理由書・小論文指導

●桑野先生は生徒が作成した志望理由書や小論文などを、生成AIを活用して時評、添削し、生徒にフィードバックしている（左図）。

●具体的にはまず、生徒が作成した志望理由書や小論文を生成AIに添削させる。生成AIが添削した文章は冗長だったり、裏づけのデータが古かったりして、そのまま使えないこともあり、そうした場合は、桑野先生が具体的な指示を添え、生成AIにやり直りをさせる。そのようにして生成AIと対話を繰り返して進捗する。

●返却時には、生成AIが作成した文章をそのまま受け入れるのではなく、根拠となるデータが正しいものであるかどうか、自分が伝えていることがしっかりと盛り込まれているか、生徒自身が検証できるよう、桑野先生は生徒と対話するようにしている。

●複数の教師で何日もかけてチェックしなくても、生成AIを活用することで、客観性の高いフィードバックが短期間で可能になった。生成AIの活用を間違った生徒との対話に開いていく。

【出典】ベネッセコーポレーション【VIEW note】高校版2023年12月号 © Benesse Corporation

スライド 25

24 【生成AI活用事例】会議—私立静岡サレジオ中学校・高校 神谷隼基 先生

会議の議論を生成AIでロールプレイ

●神谷先生が ChatGPT に入力したプロンプト (抜粋)

●ChatGPT が作成したロールプレイ (抜粋)

自分では想定が難しい貴なる立場からの意見を事前に知っておくことで、実際の会議で思わぬ提案ができます。

【出典】ベネッセコーポレーション「VIEW next」掲載2023年12月号 © Benesse Corporation

スライド 26

25 【生成AI活用事例】教師の指導力向上支援—東京都狛江市教育委員会 ※小・中学校事例

狛江市教育委員会は、企業との対話を通して、企業ではデジタルによる情報共有や生成AIの活用を推進し、効果的・効率的に業務を進めていることを知り、公教育と民間とのICT活用の差を痛感。教育現場でも早急にICT環境を整えなければならないと考え、協定企業も含め、複数の企業と連携したDXの推進に動き出した。

その具体策の1つが、教員の間に生成AIを活用して回答するシステムの運用 (下図)。

●教員の間に生成AIとRAGを活用して回答するシステム

文科科学省
学習指導要領、学習指導要領解説、学習評価に関する資料等

教育委員会
指導資料、教科書調査研究資料等

生成AI RAG

プロンプトを入力

大量のデータの中から必要な情報を漏れなく回答

学校・教育委員会
授業づくりなどに活用できる情報を質問/例: マット運動が苦手な子どもにどのような指導をすればよいか。
教科書の内容について知りたい事項を質問。資料を数週間かけて読み込まなくても、知りたい事項が分かる。

本システムは、教員が質問を入力すると、引用元を示した上で回答してくれます。前々も、以前は数週間かかっていたことが数時間で済むようになりました。

東京都狛江市教育委員会 担持型 教育委員

※ RAGは Retrieval Augmented Generationの略。外部の最新情報や社内データなど、検索となる情報を参照して回答を生成する技術。

【出典】ベネッセコーポレーション「VIEW next」教育委員会版2023年Vol.2 © Benesse Corporation

スライド 27

26 【まとめ】ケース・シーン別の生成AIの活用場面

教師による生成AIの活用

校務

- テスト問題の作成
- 小論文等の課題の添削
- 進路指導のシミュレーション
- 学年通信、学級通信、保護者通信等の作成
- 指導要録・調査書の作成 (所見欄の素案の作成)
- 職員会議等の会議の議事録の作成
- メールの文面の作成
- 情報の収集
- サマリー (要約) の作成
- データの分析

授業

- 指導案の作成
- 教師の説明の補充
- ワークシート等の教材の作成
- 教育的に有用な語文の作成
- 1つの考えとして示す回答・解答の作成
- 授業アンケートの作成と回答結果の分析

【出典】ベネッセコーポレーション © Benesse Corporation

スライド 28

27 【まとめ】ケース・シーン別の生成AIの活用場面

生徒による生成AIの活用

- 情報の収集
- 自分の意見・考えの整理
- 記述問題の解答や英語のライティング、小論文等の添削
- 音声チャット機能を使った英会話、面接・プレゼン練習
- 探究学習 (課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現)
- 発展問題・類似問題の出現

【生徒の生成AI活用にあたっての留意点】

- 生成AIは答えを得るためのツールではなく、思考を深めるための学習パートナーとして位置づける
- 生徒の思考力や表現力、創造力の育成の観点からも、最初のアウトプットは生徒が自力で行わせるようにしたい。そのアウトプットの助言役として生成AIを活用
- 生成AIが生成する情報や回答にはハルシネーションや偏りがある可能性があることから、生成された情報や回答をうのみにせず、批判的に見て、出典の確認や複数の情報源の参照など、ファクトチェックを徹底させる

【出典】ベネッセコーポレーション © Benesse Corporation

スライド 29

28 【参考】生成AIパイロット校

生成AIパイロット校について

生成AIが急速に普及する中、文科科学省では令和5年7月に「初等中等教育段階における生成AIの利用に関する暫定的なガイドライン」(以下、「ガイドライン」という。下記にリンク掲載) を公表しました。当ガイドラインを踏まえ、文科科学省としてのパイロット的な取組として、教育活動や校務において生成AIの活用に取り組む生成AIパイロット校を指定し、「効果的な教育実践の創出」を行うことで、今後の必要な議論に資するよう、知見の蓄積をすすめることとしています。

●令和5年度生成AIパイロット校の事例
リーディングDXスクール生成AIパイロット校 | 令和5年度 | リーディングDXスクール

●令和6年度生成AIパイロット校の事例
リーディングDXスクール生成AIパイロット校 | リーディングDXスクール

【出典】文科科学省「リーディングDXスクール」サイト © Benesse Corporation

スライド 30

29

生成AIと次期学習指導要領

【出典】ベネッセコーポレーション © Benesse Corporation

スライド 31

30 一昨年末、文部科学大臣から中央教育審議会へ、2つの諮問が行われた

学習指導要領自体に関する諮問

初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について
⇒ 学習指導要領の次期改訂

学習指導要領の実現の担い手である教師に関する諮問

多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成を加速するための方策について
⇒ 教師の量的・質的確保

2つの諮問は連携しながら現在、中央教育審議会で検討が行われている

スライド 32

31 学習指導要領の次期改訂に関するスケジュールの見直し

	令和6年度 (2024年)	令和7年度 (2025年)	令和8年度 (2026年)	令和9年度 (2027年)	令和10年度 (2028年)	令和11年度 (2029年)	令和12年度 (2030年)	令和13年度 (2031年)	令和14年度 (2032年)
小学校		中教審諮問	24・12・25	25・9・10	26・8・8	27・3末	28・3末	29・3末	30・3末
中学校									
高校									

2030年～全面実施
2031年～全面実施
2032年～先次発行で実施

スライド 33

32 諮問文に見られる生成AIに関する記述

社会状況 (抜粋)

生成AIなどデジタル技術の発展は、変化に伴う困難や負荷を個人や社会に負わせるだけでなく、多様な個人の思いや願い、意志を具現化し得るチャンスを生み出している側面もあります。生産年齢人口が急減する中、テクノロジーを含むあらゆる責務を担い手として、全ての子どもが多様な責務を担い手となるようにすることが、我が国の未来のために不可欠です。

課題 (抜粋)

二点目として、習得した知識を現実の事象と関連付けて理解すること、生成AIには扱えない概念としての知識の習得や深い意味理解をすること、自分の考えを持ち、根拠に基づいて他者に明確に説明すること、自律的に学ぶ自信がある生徒が少ないこと等に依然として課題が見られます。

審議事項 (抜粋)

生成AIが飛躍的に発展する状況の下、個別の知識の集積に止まらない概念としての習得や深い意味理解を促すとともに、学ぶ興味、社会やキャリアとのつながりを意識した指導が一層重要となる中、そうした授業改善に直結する学習指導要領とするためにどのような方策が考えられるか。

(中略)

生成AIをはじめデジタル技術が飛躍的に発展する中、中小高等学校を通じた情報活用能力の抜本的向上を図る方策についてどのように考えるか。

(中略)

生成AI等の先端技術等に関する教育内容の充実のほか、情報モラルやメディアリテラシーの育成強化について教科等間の役割分担を含めどのように考えるか。

(中略)

外国語教育について、小学校高学年の外国語科を導入する等、小学校から高等学校まで大幅に充実がなされた中、生成AIの活用を含め、今後の在り方をどのように考えるか。また、手軽に質の高い翻訳も可能となる中、外国語を学ぶ意義をどのように考えるか。生成AIの高額なコストを考慮した外国語教育のあり方、学ぶ意義

スライド 34

33 2025年9月末、学習指導要領の次期改訂に関する「論点整理」が取りまとめられた

本日は本「論点整理」と各ワーキンググループの議論の内容を基に、次期学習指導要領の検討状況(中でも生成AIがかわる点)についてお伝えします

スライド 35

34 次期学習指導要領は3つの方向性の下で検討

現在の学習指導要領で目指していることの一層の具現化・深化を図る

次期学習指導要領に向けた検討の基盤となる考え方

- 1. 深い学びの実現 (Deep Learning)
- 2. 多様性の包摂 (Inclusiveness)
- 3. 実現可能性の確保 (Feasibility)

多様な個性や特性、背景を有する子どもが多くなっている実態に向き合う

教育課程の実施に伴い、教師に過度な負担・負担感が生じないようあり方を追求する

多様な子どもたちの「深い学び」を確かなものに

自らの人生を担い手として生きていくことのできる 意志的で持続可能な社会の創り手 ともに育む

現在の学習指導要領を内容面・運用面においてアップデートする

スライド 36

35 概念習得や深い意味理解を促す学習指導要領にするための方策

- 1) 各教科等の「**中核的な概念等**」を中心に、学習指導要領の**目標・内容の一層の構造化**を図る
- 2) 目標・内容の構造を学習指導要領で示す際は、**表形式や簡条書きを積極的に活用**する

スライド 37

36 「中核的な概念」とは？

中核的な概念 単元などの、一定の内容のまとまりを通じて理解する主要な概念等

【例】化学
個別の知識、概念が統合・結果
酸化
燃焼 錆の発生 老化
木片は燃やすと軽くなる 鉄は燃やすと重くなる
広範囲の出来事・現象の理解や予測に役立つ(転移が可能)

【例】日本史
個別の知識、概念が統合・結果
近代化
日本の近代化(明治維新) 西洋の近代化
廃藩置県 徴兵令 地租改正

スライド 38

37 なぜ、「中核的な概念等」を中心に目標・内容の構造化を図るのか？

生きて働く学力 (Top)

生きて働かない学力 (Bottom)

学力的3層構造

- 知識の有意味な使用と創造(使える)
- 知識の意味理解と洗練(分かる)
- 知識の獲得と定着(知っている・できる)

「中核的な概念等」の理解

個別の知識の習得

学習指導要領で育成を目指す資質・能力は、「中核的な概念等」の理解によって生きて働くものとなる

スライド 39

38 「中核的な概念」等と「見方・考え方」

各教科等の学びの深まり
学習指導要領の内容の構造化で、学びの深まりを一層具体的に示す

学びの意義
よりよい社会 幸福な人生

学びの成果
資質・能力

見方・考え方

各教科等を学ぶ本質的な意義の中核
各教科等の資質・能力が身につくと、どのような世の中を見る視点や考え方が育ち、よりよい社会や幸福な人生に繋がっていきけるのかを示す

学ぶ過程
主体的・対話的で深い学び
「見方・考え方」の側面の1つである「各教科等の学びの深まり」を「中核的な概念等」として示す

【出典】令和7年4月25日教育課程企画特別部会資料1

スライド 40

39 次期学習指導要領における目標・内容の構造化のイメージ

【現行学習指導要領】

【次期学習指導要領】

改題イメージ

【出典】令和7年9月25日中央教育審議会教育課程企画特別部会「論点整理」

スライド 41

40 概念習得や深い意味理解を促す学習指導要領にするための方策(再掲)

- 各教科等の「中核的な概念等」を中心に、学習指導要領の目標・内容の一層の構造化を図る
- 目標・内容の構造を学習指導要領で示す際は、表形式や箇条書きを積極的に活用する

【出典】令和7年10月14日前期・評価特別部会資料1-1

スライド 42

41 目標・内容の構造は表形式で学習指導要領に掲載

「知・技」の内容のまとまりに対応した固有の「部・科・表」が指定できる教科(地理・数学・理科など)

「知・技」が主体として「部・科・表」の深まりを支える教科(国語・英語など)

【出典】令和7年10月14日前期・評価特別部会資料1-1

スライド 43

42 目標・内容の構造は表形式で学習指導要領に掲載

【出典】令和7年12月2日資料WG資料

スライド 44

43 現行の学習指導要領の記載

第5部 理科

5-1 基礎 基礎

【出典】「高等学校学習指導要領（平成30年告示）」

スライド 45

44 「中核的な概念の深い理解」や「中核的な概念等」は別の言葉に置き換わることに

【出典】令和7年10月14日総則・評価特別部会資料 1 - 1

スライド 46

45 次期学習指導要領における「情報活用能力」の定義（構成要素）

【出典】令和7年9月25日中央教育審議会教育課程企画特別部会「論点整理」

スライド 47

46 情報活用能力の抜本的向上の方向性イメージ（教育課程の改善）

【出典】令和7年9月25日中央教育審議会教育課程企画特別部会「論点整理」

スライド 48

47 情報活用能力の育成に係る各教科等の関係

【出典】令和7年12月8日教育課程部会「情報・技術WG資料1」

スライド 49

48 情報活用能力の抜本的向上を目指す

1. 教育課程の充実を通じた「情報活用能力の抜本的向上」(イメージ)

2. 育成する人材の規模 (イメージ)

【出典】令和7年12月8日 教育課程部会 情報・技術WG資料1

文理の枠を超え、高校卒業生全員に対し、**数理・データサイエンス・AIを「日常の生活や仕事等の場で使いこなす」**ことができる「リテラシーレベル」の学習を保障する枠組みを構築

スライド 50

49 教育課程における「メディアリテラシー」の位置づけ

生成AIによるハルシネーションや、人間の認知特性を踏まえたアルゴリズムによる情報の取捨選択や提示の最適化が進む中、真偽不明なものも含めて情報があふれるデジタル社会においては、真に必要な情報を吟味し、適切に取り扱う力の重要性が高まっており教育課程においてもその整理が必要

「メディアリテラシー」は、情報を社会的・文化的背景の中で多岐に渡って行ったり、発信したりして、社会参加する考え方や態度であり、情報活用能力の構成要素と捉える

【出典】令和8年2月13日 教育課程部会 情報・技術WG資料1

スライド 51

50 「メディアリテラシー」に関する内容の考え方

【出典】令和8年2月13日 教育課程部会 情報・技術WG資料1

スライド 52

51 AIを使いこなす力の育成に向けた2つのアプローチ-AI自体を学ぶ

【出典】令和8年2月13日 教育課程部会 情報・技術WG資料1

スライド 53

52 AIを使いこなす力の育成に向けた2つのアプローチ-AIを活用して学ぶ

【出典】令和8年2月13日 教育課程部会 情報・技術WG資料1

スライド 54

53 教科ワーキング・グループにおける、生成AIが関連する議論の一例

【出典】令和7年12月22日 算数・数学WG資料1

スライド 55

54 教科ワーキング・グループにおける、生成AIが関連する議論の一例

数学 算数・数学ワーキンググループでの議論

2. 生徒の多様なニーズに対応する科目構成の在り方

- 現行、全ての高校生が履修する「数学Ⅰ」については、高等学校卒業時点で身に付けておくべき**数学的素養の修得のために必要となる内容に整理したうえで、引き継ぎ、必修科目として位置づけてはどうか**、「数学Ⅰ」の学習内容の見直し
- 現行、履修の順序が規定されている選択科目「数学Ⅰ—数学Ⅱ—数学Ⅲ」については、**履修事項を基に新しい事項を学習すべき内容であることから、引き継ぎ、必修の順序を規定することは妥当と考えるかどうか**、各科目の学習内容に見直すべき点はあるか、「数学Ⅰ」の学習内容の見直し
- 現行の「数学A」「数学B」「数学C」については、以下の実態が生じていることから、生徒が自らの進路希望等に合わせ、**必要な学習内容を選択履修しやすくなるよう、各学校が柔軟にカリキュラムを編成・実施できる方向で見直しはどうか**、「数学A」「数学B」「数学C」の区分けをなくす
 - ✓ 高等教育段階での数学・データサイエンス・AI教育に繋がる学習内容を含め、重要度の高い内容が、数学A・B・Cに散在し、私大文系志望者に十分履修されていない実態
 - ✓ 社会生活・職業生活、人生設計における合理的判断に必要な内容について、全員が学んでいない実態
- 以上の検討を行うに当たり、論点整理で提言された、「高等学校における科目の柔軟な組み合わせを可能とする仕組み」の積極的な活用促進について、生じうる課題とその対応策を含めてどのように考えるか。

【出典】令和7年12月22日 算数・数学WG資料
© Benesse Corporation

スライド 56

55 教科ワーキング・グループにおける、生成AIが関連する議論の一例

数学 算数・数学ワーキンググループでの議論

高等学校数学科の科目構成の見直しイメージ（仮定案）

【科目構成案】

- 必修科目「数学Ⅰ」に新たな分野として「数学ガイダンス（仮）」を配置
「社会を読み解く数学（仮）」を設置
- 「数学A」「数学B」「数学C」の区分けをなくし、必要な学習内容（分野）の選択を容易に
- 「行列」の復活
「社会を読み解く数学（仮）」は、「数列」「行列」「統計的な推測」場合の数と確率」から基礎的素養を抽出し、構成

【出典】令和7年12月22日 算数・数学WG資料
© Benesse Corporation

スライド 57

56 教科ワーキング・グループにおける、生成AIが関連する議論の一例

数学 算数・数学ワーキンググループでの議論

【「数学ガイダンス（仮）」に含まれる要素のイメージ】

【出典】令和7年12月22日 算数・数学WG資料
© Benesse Corporation

スライド 58

57 教科ワーキング・グループにおける、生成AIが関連する議論の一例

数学 算数・数学ワーキンググループでの議論

【「社会を読み解く数学（仮）」で扱う内容のイメージ】

【出典】令和7年12月22日 算数・数学WG資料
© Benesse Corporation

スライド 59

58 教科ワーキング・グループにおける、生成AIが関連する議論の一例

数学 算数・数学ワーキンググループでの議論

【「行列」に含まれる内容のイメージ】

【出典】令和7年12月22日 算数・数学WG資料
© Benesse Corporation

スライド 60

59 教科ワーキング・グループにおける、生成AIが関連する議論の一例

外国語 外国語ワーキンググループでの議論

AI時代に外国語を必修とする本質的意義の再整理 (Ver. 3)


人間同士のリアルなコミュニケーションにより、細やかな介介する機会と比べて得られる情報格段に広がり、多面的視野に繋がる

AIにより手軽に翻訳・通訳が可能となる中であっても、出力の正確性・適切性を術的に検討したり、ツールの力も使いつつも、リアルなコミュニケーションを行ったりするためには相応の英語力が必要という視点や、外国語によるコミュニケーションのためにAI技術を効果的に活用する必要があるという視点もある

【出典】令和7年12月24日 教育課程部会 外国語ワーキンググループ資料
© Benesse Corporation


スライド 1

2月28日(土)
2025年度第31会FD・SDフォーラム
第6分科会: EdTech で推進する個別化教育



大規模私立大学における生成AIと電子教科書を援用したデータサイエンス・AI教育

DDASH
同志社大学 高等研究教育院 所長
同志社データサイエンス・AI運営委員会 委員長
宿久 洋
(同志社大学 文化情報学部)



スライド 2

目次 1

- 数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定事業
- 同志社大学での取組
 - DDASHの概要・評価
- DDASHの学習環境
 - 生成AI(DAIB)の活用、電子教科書の活用
- 今後の展開
 - 個別最適化学習システム

スライド 3

自己紹介: 宿久 洋 2

- 現職: 同志社大学 文化情報学部 教授
同志社大学 高等研究教育院 所長
- 専門: 統計科学
- 学位: 博士(工学)
- 経歴: 九州大学理学部数学科卒
九州大学大学院総合理工学研究科修士
鹿児島大学理学部助手、助教授を経て現職
- 学会活動
 - CIEC(コンピュータ利用教育学会) 理事、元副会長
 - 統計関連学会連合 監事、前理事長
 - 日本分類学会 評議員、前会長
 - 日本計算機統計学会 理事、評議員、前副会長
 - International Statistical Institute, Elected Member
 - International Federation of Classification Societies, Council Member

スライド 4

社会の動き: 2040年の就業構造推計(1) 3

2040年の就業構造推計(改訂版)の概要

- 2040年に十分な国内投資や産業構造転換が実現する場合は、人口減少により総労働者は約6700万人(うち6300万人)となるが、AI・ロボット等の利活用やリスキリング等により労働需要が効率化され、全体で大不足は生じない。
- 一方で、陸地・学歴・地域間では地域ミスマッチが生じリスクがあり、**事務職(約60万人)**や**文系系人材(約60万人)**が余剰、**AI・ロボット等利活用人材(約50万人)**や**高度の専門職や現場人材(約50万人)**、**職業人材(約120万人)**が不足する可能性がある。



2022年 6700万人
2040年 6300万人
労働需要 6300万人
労働供給 6700万人

職種	2022年	2040年	増減
事務職	437万人	260万人	-177万人 (-40%)
文系系人材	260万人	120万人	-140万人 (-54%)
AI・ロボット等利活用人材	31万人	91万人	+60万人 (+194%)
高度の専門職	91万人	15万人	-76万人 (-83%)
職業人材	15万人	76万人	+61万人 (+406%)

経済産業省 2040年の就業構造推計について
https://www.met.go.jp/content/20250127_mext-kansels01-000046070_6.pdf

スライド 5

社会の動き: 2040年の就業構造推計(2) 4

推計結果を踏まえた今後の更なる検討課題

(理工系人材の抜本的な拡大に向けた対応)

- 将来的な産業構造転換に向けて、100万人規模の理工系人材の不足は死活的な課題。成長戦略における地域分野の動向も踏まえ、年間数万人規模での質的・量的充実に向けた取組の促進が必要ではないか。
- 1. 理系転換・文理融合、新設・再編、広域連携等に積極的な大学・高校等の安定的な財務・経営基盤の確保
- 2. 地域の実情に即した産学連携案件の盛り起こしに向けた制度面を含む環境整備の検討
- 3. 産業界のスキル需要の可視化、職務給等の処遇改善による理工系を志望する人材の拡大

(地方を中心とした現場人材の育成)

- 地方では製造現場やエッセンシャル産業を支える現場人材が大幅に不足。専門学校や短大等の教育機関における人材育成の充実に加え、社会人のリスキリングも含めた対応が必要ではないか。

(AI・ロボット時代に即した教育・人材育成)

- 今後、生成AI・ロボットによるスキル代替が急速に進展。現場人材の不足を補い、専門職の価値創造、生産性向上にも貢献する。あらゆる教育段階において、AI・ロボットと協働する人材の育成を目指すべきではないか。

経済産業省 2040年の就業構造推計について
https://www.met.go.jp/content/20250127_mext-kansels01-000046070_6.pdf

スライド 6

社会の動き: 数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度 5

数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度



認定制度の概要

- 認定対象: 数理・データサイエンス・AI教育プログラム
- 認定要件: 1. 認定申請 2. 認定審査 3. 認定結果
- 認定結果: 認定合格 (認定期間 5年)

認定制度のメリット

- 認定合格プログラムは、認定機関から認定を受けることができる。
- 認定合格プログラムは、認定機関から認定を受けることができる。

認定制度のデメリット

- 認定合格プログラムは、認定機関から認定を受けることができる。
- 認定合格プログラムは、認定機関から認定を受けることができる。

文部科学省 数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度
https://www.met.go.jp/s_mext/koutou/suisi_data-science_ai/00001.htm

スライド7

同志社データサイエンス・AI教育プログラム(DDASH) 6

Doshisha Approved Program for Data science and AI Smart Higher Education (DDASH)プログラム

DDASH-L(修了要件6単位以上)
文部科学省の「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度(リテラシーレベル)」に準拠した認定プログラム

DDASH-A(修了要件12単位以上)
文部科学省の「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度(応用基礎レベル)」に準拠

DDASH副専攻(修了要件20単位以上)
DDASH-LとDDASH-Aを包含した教育プログラム

必修科目
「データサイエンス概論」

必修科目
「データサイエンス基礎」
「データエンジニアリング基礎」
「AI基礎」

同志社データサイエンス・AI教育プログラム
<https://doshisha-risom2025.jp/ddash/>

スライド8

同志社データサイエンス・AI教育プログラム(DDASH) 7

DDASH-Lは、**数理・データサイエンス・AIのリテラシー学習のスタートダッシュをアシスト!**

- 文系・理系を問わずすべての学生が履修可能な教育プログラム
- 10数年におよぶデータサイエンス教育の実績に立脚
- 必修科目には様々な分野の外部講師を起用(単以下、様不同)

More points

- ・プログラムに於ける必修科目はフルオンラインで履修
- ・履修学生の出身地も多岐に、国際的視野を育む機会
- ・卒業後進路の幅を拡大して資格を取得
- ・早稲田大学等から履修が可能なオープンコースプログラムも提供
- ・履修履歴も履歴書に記述可能(同志社大学履修履歴取得が前提)

同志社データサイエンス・AI教育プログラム
<https://doshisha-risom2025.jp/ddash/>

スライド9

同志社データサイエンス・AI教育プログラム(DDASH) 8

DDASH-L

・科目構成

- 必修科目: (2単位)
「データサイエンス概論」
- 選択科目: (各2単位)
「数学」「自然科学特論」
「データサイエンス1」「データサイエンス2」
「データサイエンス・AI演習」「サイバーセキュリティ入門」
「論理的思考の基礎(1)」「論理的思考の基礎(2)」
「論理的思考の応用(1)」「論理的思考の応用(2)」
「Statistics for the Social Sciences and Humanities」

認定有効期限: 2028(令和10)年3月31日

自然・人間科学系科目
人文科学系科目
国際教養科目

・修了要件
➢必修科目2単位, 選択科目4単位以上, 計6単位以上を修得

スライド10

同志社データサイエンス・AI教育プログラム(DDASH) 9

DDASH-A

・科目構成

- 必修科目: (8単位)
「データサイエンス概論」「データサイエンス基礎」
「データエンジニアリング基礎」「AI基礎」
- 選択科目: (各2単位)
「数学」「自然科学特論」
「データサイエンス1」「データサイエンス2」
「データサイエンス・AI演習」「サイバーセキュリティ入門」
「論理的思考の基礎(1)」「論理的思考の基礎(2)」
「論理的思考の応用(1)」「論理的思考の応用(2)」
「Statistics for the Social Sciences and Humanities」

認定有効期限: 2029(令和11)年3月31日

自然・人間科学系科目
人文科学系科目
国際教養科目

・修了要件
➢必修科目8単位, 選択科目4単位以上, 計12単位以上を修得

スライド11

同志社データサイエンス・AI教育プログラム(DDASH) 10

DDASH副専攻
同志社データサイエンス・AI教育プログラム + 学部専門科目

データサイエンス・AI副専攻 計20単位

＜全学共通教養教育科目＞	＜学部専門科目＞
DDASH-A(応用基礎) 計7単位	理学部 応用基礎(1)(2)(3)
データサイエンス・AI演習(2単位)	文学部 応用基礎(1)(2)(3)
サイバーセキュリティ入門(2単位)	経済学部 応用基礎(1)(2)(3)
AI基礎(2単位)	法学部 応用基礎(1)(2)(3)
DDASH-L(リテラシー) 計13単位	経営学部 応用基礎(1)(2)(3)
データサイエンス・AI演習(2単位)	教育学部 応用基礎(1)(2)(3)
サイバーセキュリティ入門(2単位)	文化情報学部 応用基礎(1)(2)(3)
AI基礎(2単位)	健康学部 応用基礎(1)(2)(3)
データサイエンス1(2単位)	国際学部 応用基礎(1)(2)(3)
データサイエンス2(2単位)	グローバルコミュニケーション学部 応用基礎(1)(2)(3)
データサイエンス・AI演習(2単位)	
サイバーセキュリティ入門(2単位)	
AI基礎(2単位)	
Statistics for the Social Sciences and Humanities(2単位)	

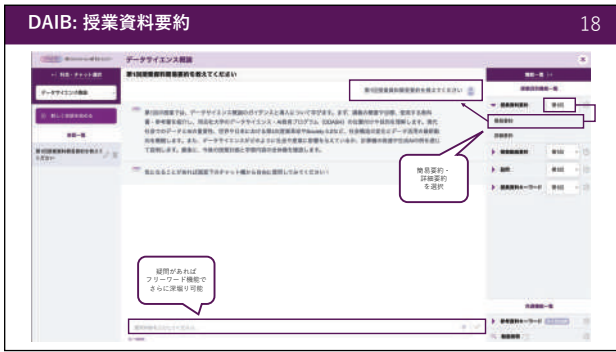
Introduction to Quantitative Data Analysis(2単位)
Mathematical Probability(2単位)

スライド12

DDASHプログラムの受講・単位取得状況 11

- ・2025年度からの受講開始学生
 - DDASH-Lを履修開始した学生は**3,190名**
 - DDASH-Aは299名
 - DDASH副専攻は80名
- ・2025年度現在のDDASHの履修者数は**7,736名(在籍者26,853人中)**
 - 全学の3割の学生が履修
 - 1,304名がすでにDDASH-L修了要件を満たしている
 - 2026年度に5,000名を目標に進めていたが2024年度に前倒して目標を達成

スライド 19



スライド 20



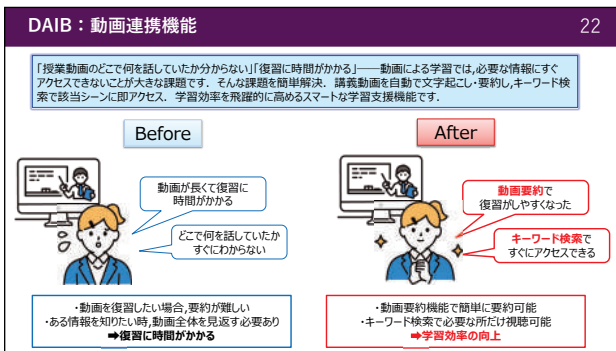
スライド 21



スライド 22



スライド 23



スライド 24



スライド 25

DAIB: 動画検索機能 24

スライド 26

DAIB <数式表示> 25

スライド 27

DAIB <グラフ表示> 26

スライド 28

電子教科書の利用 27

- 著作権に特に留意を必要とする資料の参照には注意が必要
 - 特に教科書はダウンロードできてしまうことは避けたい

スライド 29

電子教科書の利用 28

- EDX UniText (NTT EDX) を利用
 - 各回の講義資料スライド、教科書をEDX UniTextで参照可能に

スライド 30

電子教科書の利用 29

- EDX UniText (NTT EDX) を利用
 - 各回の講義資料スライドから教科書への参照リンクも用意
 - 講義スライドと教科書を関連づけて学習してもらう

スライド 31

今後の展開: 個別最適化学習システム <目的と背景> 31

- 高等教育における課題に対し、メタ認知的気づきや自主的な学習調整による個別最適化学習の導入を目指す
- 従来教育の課題
 - ✓ 一律教育では学習者の個別ニーズに対応困難
 - ✓ 教員の個別指導負担が高い
 - ✓ 学習者が自発的に学習する習慣が確立している
 - ✓ 学習者の自己認知精度が低い
- 解決へのアプローチ
 - 学習者理解度に応じた個別最適化
 - AIによる効率的な学習支援
 - 自主的な学習調整による自律的な学習習慣や振りの定着
 - メタ認知的気づきによる自己認知向上

メタ認知的気づきの導入の背景
メタ認知的気づきは「自分の学習について考える力」であり、「何がわかっていて、何がわからないか」を正確に把握する能力
メタ認知的気づきのスコアが高いとGPAが優位に高く、学習への満足度向上にもつながるという研究報告がある
学習者は自身の理解度を適切に把握でき、AIシステムは個々の学習状況を正確に把握し、最適な難易度の問題やコンテンツを提供可能

スライド 32

今後の展開: 個別最適化学習システム <システム概要> 32

- メタ認知的気づきを活用したシステム
 - 自主的な学習調整による一連のサイクルを通した学生一人一人の理解度に合わせた学習のフォロー
 - AIからのフィードバックを受けることで自身の理解度状況を把握することができ、自発的な学習意欲を高める

①メタ認知チェック・理解度確認問題実施
自分の理解度の認識
主観的な自己認知

②個別問題生成・出題・解答
実際の学習活動

③採点・AIの個別FB
結果からの自己評価
他学生比較からの他社評価

④チェックポイント確認
他学生比較による高難化
自己認知修正

⑤次回目標設定
自律的な学習に向けた方向性
「一度目標」

自己評価
自分の理解度を中心とした主観的な自己認知を促進

成功体験
小さな成功体験を積み重ねることで成功体験につながる

手ごたえ
自分の学習ペースを掴みやすくなる

自分の位置づけ
他学生との比較による自分の位置を把握できる

自己立案
自分で学習の進捗を管理

スライド 33

今後の展開: 個別最適化学習システム <システム概要> 33

- システム全体の流れ(予定)

①講義終了
本システム上で受講者は受講済み講義から、振返り対象とする講義単位を選択

②メタ認知チェック
講義キーワードに対する理解度を自己認識に基づいて判定する「3段階のメタ認知チェック」を受講者が実施

③理解度確認問題
受講者が選択したトピックに応じたAIが生成した確認問題に回答

④メタ認知評価
自己評価と正答状況をAIが比較・分析し、解説と評価を行うことで、受講者のメタ認知を促す

⑤個別問題生成
説明ツールから受講者の理解度に応じて、適切な難易度の問題を出題

⑥説明回答・チャット機能
受講者は個別生成された選択問題に回答。回答中にはチャット機能を用いて複数Q&Aが可能

⑦AI自動採点・フィードバック
AIが学生の説明回答を自動採点し、結果を学習者に通知。採点結果には個別フィードバックが添えられる

⑧学習結果ダッシュボード(予定)
受講者向けに、受講回を通じた自分の学習結果や進捗、他学生と比較した自分の位置を可視化できるダッシュボードが自動生成

⑨次回目標(予定)
設定されたチームごとに、学生がこれまでの成績と次回回の授業に向けた一度目標を入力

⑩教員用分析ダッシュボード(予定)
教員向けに、アンケート・説明回答データを基にした講義全体の理解度推移等を可視化するダッシュボードが提供

スライド 34

今後の展開: 個別最適化学習システム <主要機能要件> 34

- 主要な機能の要件概要

機能	要件
メタ認知チェック・理解度確認問題	・講義ごとのトピックに対し3段階の自己評価 ・受講者が選択した講義回ごとのトピック×2問出題に回答し、理解度を確認する ・メタ認知/理解度チェックの結果から自己評価のずれがあるかどうかをAIが判断し表示
個別問題生成・採点	・問題自体はDAIBで作成した問題の感想ツールから生成 ・難易度: 3段階、出題形式: 選択問題で、AIが個別ツールから自動で出題 ・回答中、出題内容や問題の解説は、正誤に応じて、難易度レベル(定額)を自動で上下させる ・回答結果はAIが採点し、解説付きで表示する(解説しなくても可)
学習結果ダッシュボード(予定)	・メタ認知/理解度チェック、個別問題回答の結果をもとに、AIからの評価、自己評価、同じ授業の受講生の平均(個人・全中央値)を表示
次回目標(予定)	・1カ月単位もしくは授業4回ごとをチームとし、学習結果ダッシュボードの結果の振り返りと次回目標の目標を記載する
教員用分析ダッシュボード(予定)	・メタ認知や問題を回答した受講者の学習状況への評価や、メタ認知チェック/理解度確認、個別問題回答の提出率や理解度の推移をグラフで表示 ・講義トピックごとの理解度レベルマップやAIによる相関分析結果の表示

スライド 35

今後の展開: 個別最適化学習システム <想定される構成> 35

- 本機能は3つのエージェントと1つのオーケストレーターによって制御する想定

オーケストレーター
・学習セッション全体の進行管理
・エージェント間の調整
・学習状態の管理(復元(中断・再開機能)
・終了条件の判定

①アセスメントエージェント(評価・診断)
・メタ認知
・確認問題
・採点・評価
・理解度診断

②ラーニングエージェント(学習進行・適応)
・振返り学習
・二輪調整
・問題出題
・学習パス最適化

③フィードバックエージェント(フィードバック)
・個別フィードバック生成
・学習まとめ
・メタ認知分析

データストア
・事前準備データ(トピック・説明文)
・学習状態データ(中断・再開用)

スライド 36

今後の展開: 個別最適化学習システム <画面構成> 36

- 本システムは受講者用画面、教員用画面をそれぞれ用意する想定
- UIイメージは次ページ以降を参照

- 学生用画面構成
 - メタ認知チェック・理解度確認問題
↳選択式の理解度自己評価画面/確認問題
 - 個別問題
↳メタ認知/理解度確認問題の結果に応じた個別の問題出題画面
 - 採点結果
↳AIによる採点と解説画面
 - ダッシュボード(予定)
↳通知、理解度や回答状況のグラフ、他学生との比較分析、次回目標記入、等
- 教員用画面構成
 - 教員ダッシュボード(予定)
↳概要、キーワード理解度分析、学生管理、講義分析のタブで構成
 - 講義トピック管理
↳AIが作成したトピックの確認、登録、編集
 - 個別問題管理
↳AIが作成した個別問題の確認、新規追加、難易度設定

スライド 37

今後の展開: 個別最適化学習システム <学生用画面イメージ> 37

• ダッシュボード

The screenshot shows a student dashboard with a purple header. It features several data visualization components: a line graph at the top right, a donut chart in the middle, and several bar charts at the bottom. The interface is clean and modern, with a sidebar on the left for navigation.

スライド 38

今後の展開: 個別最適化学習システム <教員用画面イメージ> 38

• 教員ダッシュボード

The screenshot shows a teacher dashboard with a purple header. It features several data visualization components: a line graph at the top left, a bar chart at the top right, and several smaller line graphs at the bottom. The interface is clean and modern, with a sidebar on the left for navigation.

スライド 39

今後の展開: 個別最適化学習システム <教員用画面イメージ> 39

• 教員ダッシュボード (つづき)

The screenshot shows a continuation of the teacher dashboard. It features a large table with colored cells (green, orange, red) in the center, and several smaller charts and data points around it. The interface is clean and modern, with a sidebar on the left for navigation.

スライド 40

学生に期待される学びの形 40

- 生成AIの有効活用：学習のパートナーとしてのAI
 - AIの基礎的な知識やリスク、プライバシー問題を把握した上で、AIの出力を鵜呑みにせず、学生自身の考察や編集を加えるなど「使いながらも主体的に考える」
- ICT機器の有効活用：AI時代の学習基盤
 - AIを活用した個別最適化学習システムやアダプティブラーニングなど学生一人ひとりの理解度に応じた学習
 - VR（仮想現実）やAR（拡張現実）技術を利用したメタバース（3次元仮想空間）での学習
- 教室以外の環境での学び：多様な学習環境
 - 時間や場所にとらわれない対面授業とオンライン授業を組み合わせたハイブリッド型授業
 - 実社会と連携した探究型・プロジェクト型授業（PBL）

第7分科会

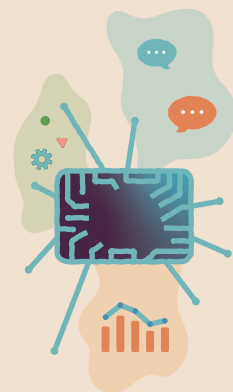
京都地区における大学の防災対策

報告者

- 丹波 史紀 氏 立命館大学 産業社会学部 教授
／災害危機レジリエンス研究センター長
- 山本 克彦 氏 日本福祉大学 福祉経営学部 教授

コーディネーター

- 疋田 浩一 氏 京都外国語大学 外国語学部 准教授



〈第7分科会〉

京都地区における大学の防災対策タイトル

コーディネーター

京都外国語大学 外国語学部 准教授 疋田 浩一

○本分科会のねらい

FSDS フォーラム京都において、「大規模災害対策」をテーマに分科会を開くのは初めてのこととなります。私の前任校は神戸にあり現在も神戸在住です。神戸では阪神淡路大震災の経験から、防災関連の授業、市民講座やボランティア活動が盛んに行われ、先日も117追悼式が各地で開催されました。私自身もボランティアや防災士資格講座に参加してきました。今年度より京都外国語大学に職を得て、京都へ通うようになって、防災に対する雰囲気の違いを感じています。近年京都地区では、幸いにして大規模な地震災害をあまり身近に経験しておらず、喫緊の課題として認識されることはあまりないようです。

しかしながら、大学をはじめ多くの学校施設が京都市の「指定避難所」として登録されており、災害発生時には被災者の避難場所となります。東日本震災時の例から見ても、発災直後から教職の別なく緊急の対応が求められ、状況によってはかなりの期間にわたって避難所が置かれる可能性があります。特に京都は外国人観光客が多いという特殊性があり、地域住民だけでなく観光客等一時訪問者が多数集まることで、より大きな混乱が予想されます。言葉に不安を持つ観光客が情報を求め、言語上のサポートや情報インフラを期待して特に大学に向かうのは自然な動きでしょう。

本分科会では、立命館大学 産業社会学部教授・災害危機レジリエンス研究センター長 丹波史紀先生からは「災害時における大学の役割 - 立命館大学から」というテーマで、日本福祉大学 福祉経営学部教授 山本克彦先生からは「災害時に大学はどう動くことになるか 副題：地域資源としてのキャンパスと人材を活かすフェーズフリー戦略」というテーマでそれぞれ講演をいただきます。大規模災害発生時に大学として必要になると予想される対応、それに向けて準備しておくことなどを専門家の方にお話を伺うことで、頭と心の準備の一助となることを期待します。

○報告の概要

京都の災害リスクとして特に地震への備えが重要である。京都では水害への認識は比較的高いものの、地震については「大きな地震が少ない」という認識が根強い。しかし、歴史資料を確認すると、京都ではおおむね100～200年程度の周期で大規模地震が発生しており、1830年の文政京都地震からすでに約200年が経過していることから、将来的な発生可能性を考慮した備えが必要である。

また、京都は観光都市であり、1日あたり約15万人の観光客が訪れるとされる。このため災害時には帰宅困難者や外国人観光客が多数発生する可能性が高く、大学が指定避難所として重要な役割を担うことが想定される。特に外国人への多言語情報提供や情報インフラの確保など、観光都市特有の課題への対応が求められる。

本分科会では、過去の災害経験を踏まえた大学の対応事例も共有された。新潟県中越地震では、大学教員と学生が現地で物資仕分けや避難所支援を行い、子どもの居場所づくりや学習支援を通じて地域住民との信頼関係を構築した。また、東日本大震災では、学生の安否確認に約3週間を要したほか、留学生の帰国、帰宅支援バスの運行、大学体育館での避難所運営など、大学が地域支援拠点として機能した事例が報告された。

これらの経験から、大学が災害時に果たすべき役割として、第一に学生・教職員の安全確保、第二に授業再開による日常生活の回復、第三に地域社会への支援が挙げられる。また、大学には広い施設や専門知識を持つ教員などの資源があり、避難所運営や情報提供、ボランティア活動の拠点として機能する可能性が高い。

一方で、防災対応を実効的なものとするためには、平常時からの準備が不可欠である。具体的には、安否確認手段の多重化、数日分の備蓄確保、施設の安全点検、BCP（事業継続計画）の整備などが必要である。また、大学が保有する人的・物的資源を整理し、地域・行政・大学間の連携体制を構築することが、災害時の対応力向上につながると考えられる。

以上より、京都地区の大学は、地域社会の防災拠点としての役割を自覚し、観光都市特有の課題を踏まえた防災体制の整備と大学間連携の強化を進めていくことが重要である。

○報告に対する質疑ならびに全体討議の内容

Q. 最低限どんなことを準備しておくべきか。

A.

(山本) まずは何が起こるかを考えておくこと。想定被害を描いてからになるでしょう。

(丹波) 安否確認に非常に苦勞したので、まずは複数チャンネルを用意して共有しておくべき。それと、支援をしつつ支援を受け入れる側にもなる、二重の役割を期待されることになるという想定をしておく。その際、外部の支援者をつなぐことが大事。その後は日常業務にどう戻していくかを考える。

Q. 2次災害（学生の心、放射線漏洩、アスベスト等）の問題にはどう備えるか。

A.

(山本) 学生のケアは専門家をつないでおく。アスベストなどは難しいが、事前情報を集めておくこと。

(丹波) 東日本震災の時、余震と放射線の懸念がある中、福島でボランティア団体の人から学生をそんなところに連れて行っていいのかとか批判もありました。最大限にリスク管理をしながら慎重に安全に進めることが原則です。あとは現場の各自の責任の下、自分で自分の身を守るよう判断していくことになるでしょう。

Q. 被災現場での治安状況についてはどうでしょうか。

A.

(山本) 被災直後は全国からボランティアさんたちが一斉に駆けつけてくれますが、一緒にそれを装った悪い人たちも集まってくるのが実際のところ。自主的にパトロールするなどの対策をしていました。残念ですが起こりうるので想定しておく必要はある。

(丹波) 関東大震災での朝鮮人虐殺の例もあるように、何が起こるかわからない。女性に対する性被害もあるので、その対策が必要だった。ユニバーサルに避難環境を作ることが大事だと思う。あと、避難所にいる人だけが被災者じゃなくて、食料を配るとなると周辺の在宅の人が集まってくるのである程度開かれている必要はある。ただ、そうすると窃盗なども起きてしまうので、結局状況に応じて対応するしかありません。

(山本) 最後に、たくさんの方が避難してきたらどうしよう、と不安を感じるだけじゃなくて、私はその人たちも何かができる力、マンパワーなんだと思っています。備蓄が足りなければ、持っている人をお願いする。そういう発想が大事だと思います。

(以上)

第7分科会テーマ：「京都地区における大学の防災対策」

京都地区における大学防災対策に関する報告

京都の災害リスクとして特に地震への備えが重要である。京都では水害への認識は比較的高いものの、地震については「大きな地震が少ない」という認識が根強い。しかし、歴史資料を確認すると、京都ではおおむね100～200年程度の周期で大規模地震が発生しており、1830年の文政京都地震からすでに約200年が経過していることから、将来的な発生可能性を考慮した備えが必要である。

また、京都は観光都市であり、1日あたり約15万人の観光客が訪れるとされる。このため災害時には帰宅困難者や外国人観光客が多数発生する可能性が高く、大学が指定避難所として重要な役割を担うことが想定される。特に外国人への多言語情報提供や情報インフラの確保など、観光都市特有の課題への対応が求められる。

本分科会では、過去の災害経験を踏まえた大学の対応事例も共有された。新潟県中越地震では、大学教員と学生が現地で物資仕分けや避難所支援を行い、子どもの居場所づくりや学習支援を通じて地域住民との信頼関係を構築した。また、東日本大震災では、学生の安否確認に約3週間を要したほか、留学生の帰国、帰宅支援バスの運行、大学体育館での避難所運営など、大学が地域支援拠点として機能した事例が報告された。

これらの経験から、大学が災害時に果たすべき役割として、第一に学生・教職員の安全確保、第二に授業再開による日常生活の回復、第三に地域社会への支援が挙げられる。また、大学には広い施設や専門知識を持つ教員などの資源があり、避難所運営や情報提供、ボランティア活動の拠点として機能する可能性が高い。

一方で、防災対応を実効的なものとするためには、平常時からの準備が不可欠である。具体的には、安否確認手段の多重化、数日分の備蓄確保、施設の安全点検、BCP（事業継続計画）の整備などが必要である。また、大学が保有する人的・物的資源を整理し、地域・行政・大学間の連携体制を構築することが、災害時の対応力向上につながると考えられる。

以上より、京都地区の大学は、地域社会の防災拠点としての役割を自覚し、観光都市特有の課題を踏まえた防災体制の整備と大学間連携の強化を進めていくことが重要である。

コーディネーター 京都外国語大学外国語学部准教授 疋田浩一

スライド1

第7分科会

「京都地区における大学の防災対策」

コーディネーター：京都外国語大学准教授 足田浩一

スライド2

分科会の概要

- 近年京都地区では、幸いにして大規模な地震災害をあまり身近に経験していません。
- 一方で、東日本震災時の例を見ても、災害発生時には大学キャンパスが地域住民や観光客等一時訪問者の避難場所となることが多く、教職の別なく対応が求められます。特に京都は外国人観光客が多いという特殊性があり、より大きな混乱が予想されます。
- 大規模災害発生時に大学として必要になると予想される対応、それに向けて準備しておくことなど、専門家の方にお話を伺います。

スライド3

「その時」を想像し、備える

- 「その時」、好きと嫌いとはかわらず、全ての人が、当事者になります。
- 「その時」、何が起きて、何が必要になるのか。
- 「その時」、ああしておけばよかった、と思うことは何なのか。

「その時」を、我が事として、想像してみる機会としましょう。

スライド4

平安時代以降の京都府の主な地震履歴

間隔

- 60 827年(平安) 平安の大地震：家屋倒壊。
- 51 887年(平安) 南海トラフに伴う地震：圧死者多数。
- 38 938年(平安) 天慶大地震：宮中で4名死亡。
- 209 976年(平安) 貞元地震：M6.7以上、京都府南部や滋賀県で死者50名以上。
- 132 1185年7~8月(平安) 文治地震：鴨長明「方丈記」に記録。(4月に壇ノ浦の戦いで平家滅亡)
- 132 1317年(鎌倉) 鎌倉の大地震：清水寺でも出火
- 147 1449年(室町) 室町の大地震：洛中にも大きな被害
- 66 1596年9月5日(安土桃山) 慶長伏見地震：M7.5程、伏見城天守閣が大破し、石垣崩壊で500人以上の圧死者。城下町でも家屋倒壊し、1000人余りの死者。
- 168 1662年(江戸) 寛文近江・若狭地震：M7.2~7.6、京都市内でも建物倒壊被害、圧死者多数。浅井了意「かなめいし」に記録。
- 1830年(江戸) 文政京都地震：M6.5程、江戸時代末期京都市内で家屋倒壊・死傷者発生。
- 1927年3月7日(昭和) 北丹後地震 M7.3：丹後半島を震源とする地震。死者約3,000人
- 1995年1月17日(平成) 阪神淡路大震災 M7.3：京都市内で震度5を観測。
- 2018年~2025年(平成~令和) 南部地震：2024年2月、2022年5月・3月などに震度4の地震が発生。
- (199) 2020年~2024年(令和) 北部地震：2021年12月、2023年11月など、マグニチュード3~4クラスの地震が散発。

※新幹線における最後の「大地震」

スライド5

大地震の記録



1596年 慶長伏見地震



1662年 寛文近江・若狭地震



1830年 京都地震 (文政京都地震)

スライド6

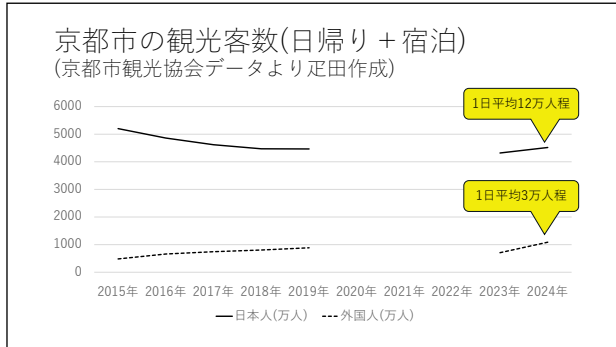
京都周辺の特徴

- 活断層が多く内陸直下型になる
 - 花折断層帯
 - 三峠断層帯
 - 丹後半島周辺の断層群
- 余震が数か月の長期にわたる




出典：京都市Webサイト
地震用マイ・タイムライン「京都市周辺の活断層」

スライド7



スライド8

大災害時指定避難所



- 京都市防災ポータルサイト
 - 指定避難所一覧, <https://www.bousai.city.kyoto.lg.jp/0000000311.html>
 - 「指定避難所とは、災害の危険性があり避難した方を災害の危険性がなくなるまで必要な間滞在させ、または災害により家に戻れなくなった方を一時的に滞在させるための施設であり、災害対策基本法に基づき指定しています。指定避難所は、大規模地震等により、長期の避難が必要な場合に開設します。」
- あなたの大学も登録されています！

スライド9

検討すべき項目

- 支援内容
 - トイレ(T)
 - キッチン(K)
 - 水・食料
 - ベッド(B)
 - 情報
 - 予備電源
- 運営体制の構築
 - 衛生・治安維持
 - Business Continuity Plan
- 支援対象
 - 一般避難者
 - 地元住民
 - 観光・ビジネス等域外からの訪問者
 - 要配慮者
 - 傷病者・高齢者等用医療支援
 - 外国人等要言語支援
- etc...

スライド10

登壇者紹介

- 「災害時における大学の役割-立命館大学から」
立命館大学 産業社会学部教授・災害危機レジリエンス研究センター長 丹波史紀先生
- 「災害時に大学はどう動くことになるか
～地域資源としてのキャンパスと人材を活かすフェーズフリー戦略」
日本福祉大学 福祉経営学部教授 山本克彦先生

スライド1

災害時、大学の教職員はど んな行動ができるか


-ごく個人的な経験から-

立命館大学 丹波史紀

スライド2

プロフィール

- ・名前：丹波 史紀（たんば ふみのり）
- ・生年：1973年生まれ（愛知県）
- ・現職：立命館大学産業社会学部 教授



第25回SOMPO福祉財団賞
(2024)を受賞

経歴

- 1998年 日本福祉大学大学院社会学部福祉学専攻博士前期課程修了（社会学修士）
- 1999年 名古屋市あけぼの学園（知的障害児施設）児童指導員 採用
- 2001年 名古屋文化学園医療福祉専門学校専任講師 採用
- 2002年 姫路日ノ本短期大学専任講師 採用
- 2003年 日本福祉大学大学院社会学部福祉学専攻博士後期課程中退
- 2004年 福島大学行政社会学部助教授 採用
- 2017年 立命館大学産業社会学部 准教授 採用
- 2020年 同 教授
- 現在に至る

主な社会的活動

- 福島県男女共同参画審議会 副会長
- 福島市子どもの貧困対策検討委員会 座長
- 伊達市地域福祉計画 座長
- 浪江町・双葉町 復興計画策定委員、大熊町 復興計画策定委員
- ふくしま連携復興センター 代表理事 など兼任

著作等

- 単著『原子力災害からの複線型復興——被災者の生活再建への道』明石書店、2023年

スライド3

大学が災害時に果たす役割

- ・大学は学生の教育に責任をもつ。
 - ・災害時に学生・教職員の「いのち」をまもる
- ・一方で、災害という非常時から、できるだけ日常に戻していく
 - ・授業が再開できるようにする
- ・一方で、大学というのはそれだけではない機能を発揮できるのではないか。
 - ・京都の人口のおよそ1割は学生
 - ・大学は公共施設とあわせて、地域防災の拠点
 - ・地域貢献・教育・研究としても

スライド4

福島大学に赴任して

- ・1年目に新潟県中越地震。発災後3日目に学生たちと長岡市へ。
- ・山古志村民の避難所支援によって震災復興の取り組みを。
- ・その後も新潟県中越沖地震による柏崎市、宮城岩手内陸地震など。
- ・元々は、学生時代の阪神淡路大震災がきっかけ

スライド5



被災直後からボランティア活動がスタート

スライド6



スライド7



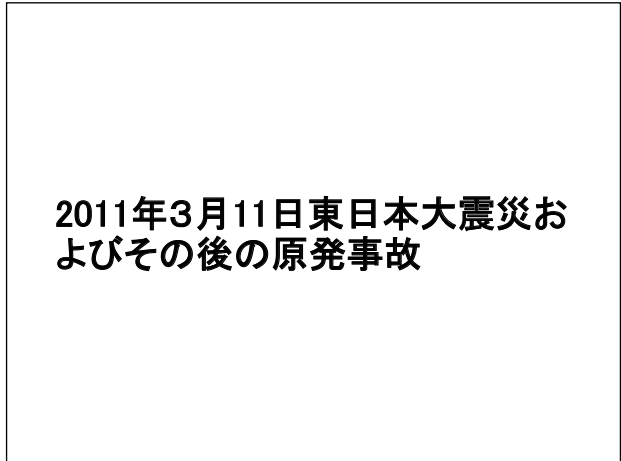
スライド8



スライド9



スライド10



スライド11



スライド12



スライド 13



スライド 14

東日本大震災の直後に対応したこと

- 3月12日に国立大学の後期試験を予定→中止。
- 学生の安否確認
- 学内に、広域避難する被災者の避難所開設
- 一方で、実家などに帰省できない寮生などが孤立（食料が確保できない）。
- アメリカ政府が、東京電力福島第一原子力発電所から半径50マイル（約80キロ）圏内の自国民に対し、避難もしくは屋内待避を勧告。中国の留学生なども本国からの勧告で一斉に避難
- 日本は、半径20キロ圏内を避難指示、20～30キロ圏内を屋内待避
- 「帰宅バス」と称し県内のバス会社のバスを確保し、公共交通機関が再開をしていた那須塩原や新潟方面へ輸送

スライド 15

2. 災害から地域再生に教育機関として関わって

■ 地域貢献・支援

- 新潟県中越地震の際のボランティア活動を財産にして、福島大学災害ボランティアセンターを活動。毎年200人から500人ほどの学生（福島大学の学生数約4000人）がボランティア登録し活動。15年を経て今後も継続して活動。
 - 体育館での避難所開設
 - 仮設住宅「いるだけ支援」

■ 研究

- 原発周辺自治体の双葉郡、約8万人（約25000世帯）の全てを対象にした「双葉郡住民実態調査」（2011年・2017年・2021年の3回）
- 双葉郡の自治体を始め被災地支援に大学として取り組み、「うつくしまふくしま未来支援センター」（FURE）など復興支援組織を学内に立ち上げ

■ 教育

- 2013年度からCOC事業実施「原子力災害からの地域再生をめざす『ふくしま未来学』の展開」
 - あるゼミ生の就活経験から
 - 「ふくしま未来学入門」など広く学生に震災から地域再生のあゆみを学ぶ講義形式の授業（1年間で400名が1学生が受講）
 - 「むらの大学」とする実践学習のプログラムを実施
- 2015年度からはCOCに加え、COC+事業にも着手「ふくしまの未来を担う地域循環型人材育成の展開」
 - 県内に多くの卒業生が就職している現状をふまえ、県内企業約100社で働く卒業生（若手職員）をメンター役としてインターンシップ事業

スライド 16

福島大学において「うつくしまふくしま未来支援センター」（FURE）を設立。

- 原発周辺自治体と連携して地域支援をしてきたグループ
- 県内を中心に空間放射線量の計測を行っていた理工の教員
- 農地の再生をめざし、土壌汚染MAPをつくった農業系のグループ

など学内でそれぞれが福島県内で研究・地域支援などをしてきた組織を統合。



スライド 17

原発周辺の双葉郡で生活していた住民の3度にわたる大規模調査から

- 2011年・2017年・2021年と3度「双葉郡住民実態調査」にとり組んできた
 - 広域避難・家族離散による生活再建の長期化
 - 長期にわたりリスクにさらされる現象
 - 家族離散・仕事の再建に障壁、精神的健康度の低下

スライド 18

伊達市霊山小国地区による地域住民自身がすすめる「小国地区復興プラン」



スライド 25



大学祭での取り組み

スライド 26



立命館校友大会で「チャレンジふくしま塾」の取り組みを同窓生などに紹介

スライド 27

本プログラムの参加以降も継続した地域での取り組み

本プログラムに参加した学生が、その後、福島県浜通りでの継続的な関わりの中で、新たな活動をスタートする事例も生まれている。

- ・浜通り地域への移住・就職
 - ・浪江町主催のインターンシップへの参加
 - ・福島県での米作りプロジェクトの開始
- などプログラム終了後も福島県での取り組みが継続



昨年度の米作りプロジェクトの様子



つくったお米を使って福島の郷土料理をつくるワークショップ

スライド 28



2019年の台風19号による被災地ふくしまでの救援活動

スライド 29



2024年1月能登地震

スライド 30

3. 課題

- ・災害時のボランティア派遣など「支援する側」という発想は多いが、自らが被災する側にもなる
- ・性善説にたつて教職員は原則的な行動をしようと思いがちであるが（パンデミックも原発事故も大規模災害など判断することが困難な事態におかれると予定通りの行動にならない）
- ・「安全を優先するために大学をむやみに再開すべきでない」vs「できるだけ早く日常生活を取りもどすために、通常の生活や授業にできるだけ戻していくべき」
- ・ちなみに2011年の原子力発電所事故の際は、まだ放射線量の測定もままならない中で、初等中等教育の学校は通常通り4月6日から入学式や始業式を行った
- ・大学は、2週間から1ヶ月程度遅れて再開
- ・2018年 大阪府北部地震
 - ・立命館大学も被災（OICキャンパスの被害、衣笠キャンパスの施設の一部を開放し受け入れ。ただし限定的）
 - ・大阪府北部地震の経験からも、大学のBCP（Business Continuity Plan：事業継続計画）が不十分
- ・大学は授業時間内および授業機関内の数日の対応のみを想定（新型コロナウイルスのパンデミックで前提が崩れる）
- ・職員サイドは緊急時のマニュアルがあるものの、教員サイドは、どのような行動を取るのか明確な指針が周知されているのかどうか



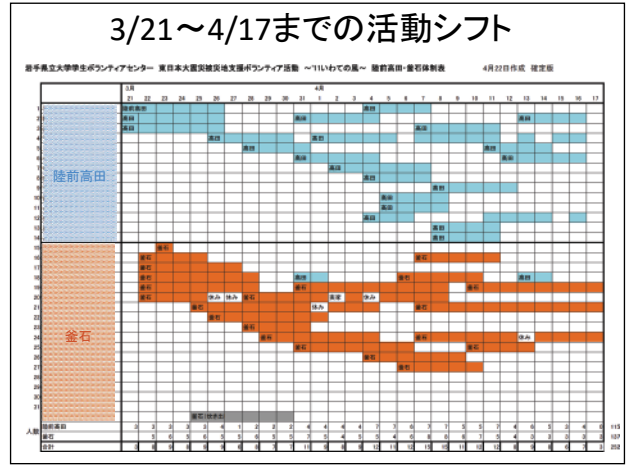
2025年災害危機レジリエンス研究センター設置 レジリエンスをテーマに人びとの「回復」を考える

- レジリエンス (resilience)・・・困難をしなやかに乗り越え回復する力
 - 災害や病気あるいは様々な社会的リスクに直面した時にも、個人が立ち直る力を備えている。あるいはしなやかに回復する力、という意味で用いられる。
 - PTG (Posttraumatic Growth)
 - 一方で、個人だけでなく、組織やビジネスにおいても、用いられる場合もある。
- リスクにさらされた人でも、必ず困難を乗り越え、再生していることとする力がある
 - それは個人や地域、あるいは企業（大学）においてもあてはまる。
- こうした事例に学ぶことは、組織やビジネスにおいても応用可能ではないか。
 - フジテレビ問題
 - 船場吉井事件・・・大阪の高級料亭として名高い船場吉井が、震災期間の偽装や地蔵の産地偽装などの不件事が発覚したことが原因で2008年5月28日に廃業。

スライド7



スライド8



スライド9

学生による 災害ボランティアセンター運営支援

2011年 3月11日

4月

5月

6月

7月

8月

9月

10月

11月

12月

窓口流れづくりからのスタート

炊き出しのアナウンスをする学生

災害ボランティアセンター

○ボランティアの受付と、「避難所」⇔「炊き出し」のマッチング
○避難所状況、ニーズの把握に動いた1ヵ月間

スライド10



スライド11

災害関連著書

図解でわかる
災害福祉
山本克彦

図解でわかる
災害福祉
山本克彦

【編著者】
山本 克彦 (日本福祉大学福祉学部)

【著者】 山本 克彦
後藤 聖功 (専修大学専門職キャリアサポートセンター)
新井 利規 (立正大学社会福祉学部)
藤原 麗二 (一般社団法人 Web&Design)
白神 晃子 (立正大学社会福祉学部)
新美 綾子 (日本福祉大学福祉学部)
岡本 正 (独立行政法人NPOセンター)

スライド12

(1) 災害発生時のリアル 何がどこどのように起こるかを

豪雨水害

九州北部豪雨災害2017.07.08 (山本克彦撮影)

地震

熊本地震2016.04.16 (山本克彦撮影)

※ 災害支援の特性に鑑み、個人が写る写真等はプライバシー保護の観点から当日のみ提示し、事前公開資料には含めておりません。
※ あわせて、当該「場面」に関する解説は、正確な理解のため当日に行います。

スライド 13



スライド 14



スライド 15



スライド 16



スライド 17



スライド 18



スライド 19



スライド 20



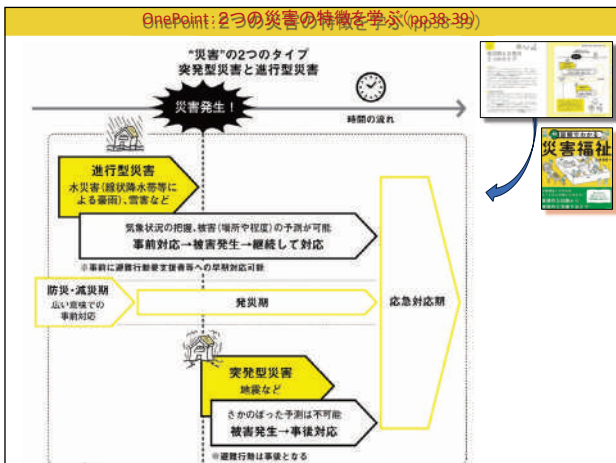
スライド 21



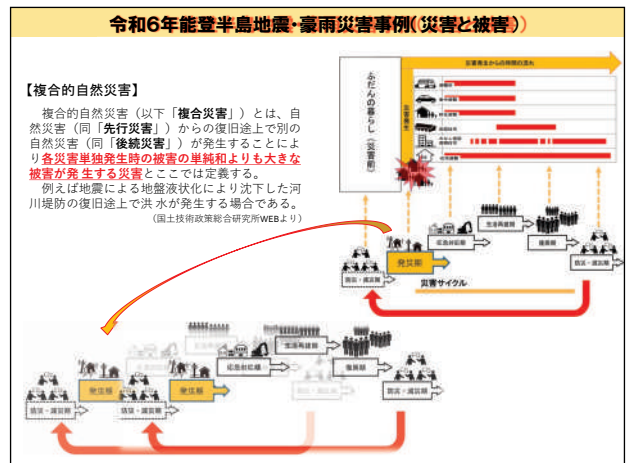
スライド 22



スライド 23



スライド 24



スライド 25

知っておきたいこと ※必要以上にこわがらない

災害とは…

「暴風、竜巻、豪雨、豪雪、洪水、崖崩れ、土石流、高潮、地震、津波、地盤の液状化※、噴火、地滑りその他の異常な自然現象又は大規模な火事若しくは爆発その他その及ぼす被害の程度においてこれらに類する政令で定める原因により生ずる被害をいう」(災害対策基本法第2条第1号)
※令和7年(2025年)6月4日公布の改正で追加

もう一つの定義をあげてみます

「突然発生した異常な自然現象や人為的な原因により人間の社会的な生活や生命と健康に受ける被害とする。災害で生じた対応必要量(Needs)の増加が通常の対応能力(Resource)を上回った状態である」
 (DMAT標準テキスト[改訂第2版])

スライド 26

観光都市「京都」のリスク ※大学への影響は…?

1. 観光客の大量滞留・帰宅困難
2. 文化財・世界遺産の損壊
3. 古い建物密集地での火災延焼リスク
4. 鴨川・桂川・宇治川などの河川氾濫
5. 山麓部や北部での土砂災害
6. 公共交通の麻痺
7. 宿泊施設・観光施設の避難体制不足
8. 外国人観光客への情報伝達不足
9. 交通渋滞・救急搬送の遅延
10. 観光産業への長期的打撃

大学に影響するコト、大学がチカラになれるコトを描く

スライド 27

OnePoint: 2つの災害の特徴を学ぶ(pp.4-5)

これらの写真から災害によって変化する環境
 そこに生じる課題を考える

<p>物理的な側面</p> <p>建物が壊れる・水道や電気、ガスなどのライフラインが使用できなくなる・大切な書類が傷つくなど</p>	<p>経済的な側面</p> <p>仕事ができなくなり収入が途絶える・生活費がかさむ・お店が被害を受け買い物に困るなど</p>
<p>身体的な側面</p> <p>自分自身や家族がケガをしたり、体調を崩したり、重傷や死傷を受けられず最悪の場合は命を落とすなど</p>	<p>社会関係の側面</p> <p>家族や近隣住民が離散する・社会活動が停止しよりどころを失う・移動手段が途絶え、社会へのアクセスが阻くなるなど</p>
<p>精神的な側面</p> <p>不安や恐怖が募る・眠れない、思いがけず悲泣してしまう(フラッシュバック)、音や振れなどに敏感になるなど</p>	<p>情報に関する側面</p> <p>情報の入手が困難になる・誤情報やデマが増える・被災証明や税金免除申請などの申請手続きが多くなるなど</p>

スライド 28

(2) 大学はどのように動き出すか(動かざるを得ないか)
被災地(支援側)となるか、周辺(支援側)となるか...ネットワークはあるか

信頼のないところには何も起こらない。信頼があるから僕たちは動き出せるのだ

スライド 29



スライド 30



スライド 31



スライド 32

令和6年能登半島地震・豪雨災害事例(支援スキーム)

応急対応期 ~ 生活再建期(DWASスキームの確立)

【継続的活動の条件】
 A: 移動
 ・被災地までの移動手段 (ハイエース×必要台数)
 ・現地での移動手段 (四輪)
 B: 拠点づくり
 ・活動中の滞在場所 (拠点：ライオン記念館、奥能登VC)
 ・拠点での確保と入浴
 ・地域資源の活用(炊事)
 (スーパード、コンビニ、入浴施設等)
 C: 活動資金の確保 (助成団体への申請、同窓会他)
 【災害ボランティア入門】 2018より

DWAS(ディワズ)Disaster Welfare Assistance Studentの略
災害時の福祉支援に寄り進む学生たちという意味

ソ敵連災害対応部会
現場コアメンバー
 ※ 金沢市内日曜日を中心とする北陸学院大学
 ※ 前入り型移動移動開始の他陸大学
 ※ 移動、拠点と生活、活動資金など
 ※ 現地ニーズ把握、学生ボランティアとのマッチング
 ※ 地域住民と学生らの関係構築 などなど

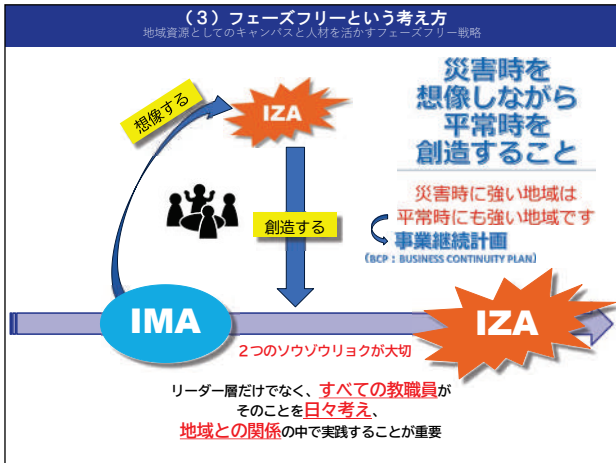
現場情報、ニーズ、マッチング、連携、組織する団体活動との調整などをソ敵連や各DWASで実施

DWAS-JAPAN CSWorkCamp第3期 → 第6.7.8期(北陸学院大学 × ソ敵連)

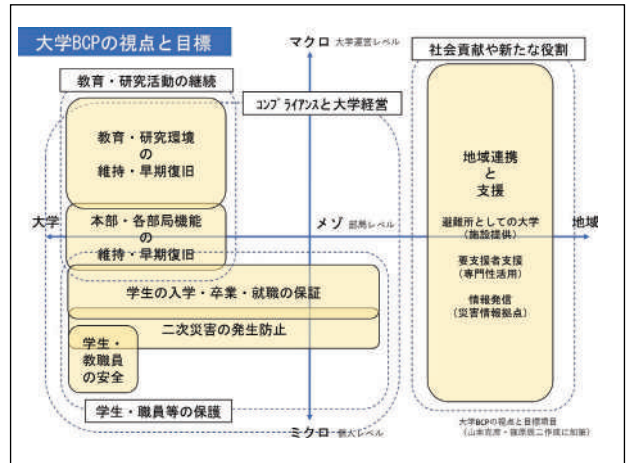
例)第6期

ソ敵連(一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟)とは、※全国のソーシャルワーク教育学校(社会福祉士、精神保健福祉士、社会福祉教育を行っている学校)で組織するネットワーク

スライド 33



スライド 34



第8分科会

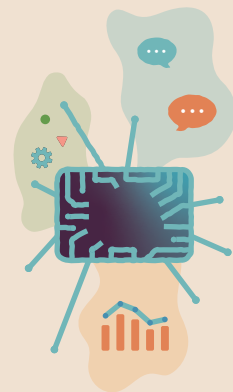
産学連携の新たな可能性

報告者

- 小林 敬志 氏 特定非営利活動法人 SET 交流部副部長
- 勝山 鉄矢 氏 京都府立丹後緑風高校網野学舎 教諭
- 八島 潤子 氏 株式会社コギト デザイナー・イラストレーター

コーディネーター

- 野村 実 氏 大谷大学 社会学部 講師



産学連携の新たな可能性

コーディネーター

大谷大学 社会学部 講師 野村 実

○本分科会のねらい

第8分科会では、大学と多様なアクターとの連携について、地域連携活動の事例をもとに論点整理を図りながら、産学連携の新たな可能性について考えていくことをねらいとした。特に、全国でさまざまなPBL (Project Based Learning) 型授業が展開される中で、自治体や企業等とどのように手を携えながら企画・運営を行っていくべきか、大学以外の外部アクターの視点を交えながら議論を図った。

具体的には、大学連携に主体的かつ積極的に関わっているNPO、高校、民間企業という三者から話題提供をいただき、ワークショップ形式で大学が（に）できること／できないこと、外部アクターとの連携の余地とイノベーションの可能性について議論した。大学教育においてPBLに取り組む上で、担当コーディネーター自身の経験にはなるが、たとえばプロジェクトでの学生のチームビルディングや、対象地域の普段の生活状況の把握など、担当教員の専門性や業務の範疇にはとどまらないところでさまざまなスキルや力が求められる局面がある。こうした課題に対し、本分科会では、大学以外の外部アクターと積極的に連携することによる効果や、他大学の連携事例もふまえた産学連携の新たな可能性を見据えた知見の共有を図った。

○報告の概要

第一報告では、特定非営利活動法人SET 交流部副部長の小林敬志氏から「PBLにおけるチームビルディングの支援」の題で話題提供をいただいた。SETは、岩手県陸前高田市で大学生とともにまちづくり活動を行う団体であり、「人づくり・まちづくり・社会づくり」をコンセプトとしている。小林氏は、大谷大学の地域連携プロジェクト「モビリティデザインプロジェクト」の活動にあたって、3年間にわたってチーム形成の支援に携わっている。こうした観点から、チームとしての共通言語の獲得や理想の設定、現状分析など、実際のチーム形成支援の実施内容の紹介のち、PBLへの貢献として次の点が提示された。第1に授業へのモチベーションの向上、第2にアウトプットの成果の質向上、第3に人間的な成長の支援という3点であり、いずれも大学教育において本質的かつ補完的な内容であった。

第二報告では、京都府立丹後緑風高校網野学舎教諭の勝山鉄矢氏から、「高校における『総合的な探究』と大学との連携」の題で話題提供をいただいた。勝山氏は、「丹後の未来をソウゾウ（想像・創造）する」をコンセプトとする、総合的な探究の時間「SOU-TAN」の取り組みを進める中で、京都市内の大学と連携した活動を実施している。特に京丹後市を含めた京都府北部地域は（2024年度の分科会テーマの一つでもあったが）、いわゆる「大学空白地」であり、高校生という視点からも大学の学びや大学生と触れ合う機会は決して多くはない。こうした背景から、SOU-TANでは丹後地域をフィールドに高校生たちが探究学習を実施しているが、テーマに応じて大学のゼミ活動等と連携することで、高校生が大学生と触れ合う機会の創出につながり、大学での学びを現地で体験することが可能となっている。以上のことから、勝山氏からは大学と高校の連携の有効性として、①探究のノウハウの享受（大学から高校へ）、②遠隔地の実態把握への協力（高校から大学へ）、③互いの学習意欲の刺激、という3点が提示された。加えて、高等教育の「発信と受信」についても言及があり、高校にとっては探究学習における旧態依然の授業展開のブレイクスルーとして、あるいは大学にとっても遠隔地との連携活動で日常的な実態把握をするための新たな策として、それぞれ位置付けられうるものと考えられる。

第三報告では、株式会社コギト・デザイナーの八島潤子氏より、「地図アプリの開発とデザインを通じた産学連携」の題で話題提供いただいた。コギトは、1990年に設立された地図やイラストマップアプリを手がける企業であり、これまでも京都市内外の大学の、かつ多様な学部と連携した事業に取り組んできた。こうした観点から八島氏からは、イラストマップと「大学×地域」との相性の良さとして、①どの学部でも扱える、②PBLにつながる、③地域とつながることができる、という3点が示された。事例では、大谷大学や早稲田大学、嵯峨美術大学などとの連携が紹介され、そのテーマは地域交通や商店街、観光など多岐にわたっている。八島氏からはまた、企業はあくまで「外側の箱」であり、アイデアを出して議論し、アプリやマップを使用してブラッシュアップするのはあくまで学生である点が強調された。最後にまとめ

として、産学連携は「イベントではなく、育つコンテンツ」であると締めくくりの言葉があり、イベントや商品開発だけでなく、継続的な産学連携に向けた「循環」の重要性が提起された。

○報告に対する質疑ならびに全体討議の内容

講演後に休憩を挟み、後半では6グループに分かれてワークショップを実施した。ワークショップでは、前半の話題提供をふまえた気づきの共有や、参加者自身が所属先で取り組んでいる情報の共有、さらに大学にできること／できないことを改めて考えることをねらいとして実施した。

また、ワークショップの間には登壇者への質疑応答も実施し、産学連携を進める上でのリソース（資源）のあり方に主眼を置いた議論が展開された。特に各大学において、連携を進める上での予算をどう獲得するか、あるいは教員と職員による教職協働の重要性などが提起された。さらに、学生や地域、企業などの「相手のペイン（痛み）」にどう寄り添うか、という視点もグループワークで提示され、高度化・複雑化する地域／社会課題への応答の可能性が模索された。

ワークショップ後に行われた各グループからの発表では、たとえば「同じ地域に関わっている複数のゼミ・研究室の活動プログラムをマッピングする」という具体的なアイデアが出されたほか、いわゆる「人材バンク」のように、課題を抱える地域や住民、企業と、それを解決したい／できる大学とをマッチングする仕組みの有用性の議論にもつながった。

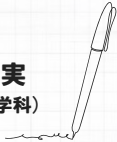
以上をふまえて、本分科会では産学連携を主題として、各大学等での取り組み事例の共有とともに、教職員それぞれが産学連携を図る上での「悩み」を抱えている現状を共有する場にもなった。あらためて登壇者3名の皆様と、（文字通り北海道から沖縄までの）全国各地からご参加いただいた皆様に感謝申し上げます。

スライド1

第31回FD・SDフォーラム 第8分科会
2026年2月28日(土) @同志社大学今出川キャンパス

産学連携の 新たな可能性

担当コーディネーター：野村 実
(大谷大学社会学部コミュニティデザイン学科)



Be Real 大谷大学

スライド2

01

ワークショップの趣旨説明

スライド3

第8分科会の「問い」

全国各地でさまざまな
PBL型授業が展開される中で、自治体や企業等どのように
手を携えながら企画・運営を行っていくべきか？

↓

大学が(に)できること／できないこと、
外部アクターとの連携の余地とイノベーションの可能性
についてワークショップ形式で考えていきます。

スライド4

大学コンソーシアム京都 第6ステージプラン (2024-2028)

「産官学民連携による地方創生」

地域連携・地域活性化事業

大学コンソーシアム京都では、第5ステージまで「学まちコラボ事業」等により、大学・学生と地域が連携する活動を支援するとともに、「都市政策研究推進事業」においては、様々な都市課題の研究成果を地域・行政・大学等へ還元することで、地域課題の解決に反映する仕組みの構築に取り組みできました。一方、行政や産業界と連携し、画策案で生み出された知識・アイデアを社会に実践するには至っていません。

第6ステージでは、学生・地域・行政・産業界をつなぐ「コーディネーター」としての機能を強化するとともに、行政や産業界との連携をより一層強め、京都地域の活性化を目指します。また、一定役割を終えた「学まち連携大学」促進事業を廃止するなど、限られたリソースを効果的に投入できるよう第6ステージ中においても積極的に事業の取捨選択を行います。

出典 大学コンソーシアム京都 第6ステージプラン (2024-2028)

スライド5

このテーマ設定の背景①

2024年度のFDSDフォーラム・ワークショップ4
「大学空白地における域学連携と地域活性化」
において提示された課題

↓

高度化・複雑化する地域課題に対して
大学に／大学ができることはなにか？

スライド6

このテーマ設定の背景②

コーディネーター自身が大学で地域連携・PBL活動を
進めていくにあたって直面した3つの課題

① チーム ビルディング <small>研究者としてのトレーニングに ぞく等の「チーム形成」は含まれていない...? ※講義資料やシラバスの作り方に開する 院生向けのワークショップ等は存在するが...</small>	② 連携地域の 日常的な状況 <small>地域連携を進めていく上で、フィールドワーク 以外での連携先の地域の状況はよくわからない 一特に遠方地域となると、訪問した際の 「取り取られた情報」のみしか得られない</small>	③ 民間企業の 知恵やアイデア <small>面白そうを取り組みたいと思っても マネタイズや事業化の観点から (実務家教員以外には)ほとんどない...?</small>
--	--	--

スライド7

私たちが（試験的に）取り組んできたこと
※大谷大学社会学部コミュニティデザイン学科・モビリティデザインプロジェクトの例

①チーム ビルディング	②連携地域の 日常的な状況	③民間企業の 知恵やアイデア
		
<small>学生のチーム形成を専門とする NPOへの外部委託</small>	<small>地元の高校生の 「総合的な探究」との連携</small>	<small>民間企業と連携したゲーム開発 地域での実践と改良</small>

スライド8

02
登壇者の紹介

スライド9

**第8分科会
登壇者のご紹介**

大学とさまざまな形で連携いただいているみなさま

NPO法人	<small>特定非営利活動法人SET 交流部副部長</small> 小林 敬志 氏
高校	<small>京都府立丹後緑風高校網野学舎 教諭</small> 勝山 鉄矢 氏
民間企業	<small>株式会社コギト デザイナー・イラストレーター</small> 八島 潤子 氏

スライド10

03
**今日の流れの説明
+ 導入**

スライド11

第8分科会 の流れ	<p>【前半】 14:30～15:40</p> <ul style="list-style-type: none"> ・分科会の趣旨説明 ・講演1 「PBLにおけるチームビルディングの支援」 特定非営利活動法人SET 交流部副部長 小林 敬志 氏 ・講演2 「高校における『総合的な探究』と大学との連携」 京都府立丹後緑風高校網野学舎 教諭 勝山 鉄矢 氏 ・講演3 「地図アプリの開発とデザインを通じた産学連携」 株式会社コギト デザイナー・イラストレーター 八島 潤子 氏 <p style="text-align: center;">—— 休憩 ——</p> <p>【後半】 15:50～16:50 <small>※ワークショップ内容は仮のものです。</small></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワークショップ①各連携先に分かれてのふりかえり テーマ：「NPO」「企業」「高校」との連携 ・ワークショップ②今後に向けて テーマ：持続可能な産学/産官学民連携に向けて <p>・総括</p> <p style="text-align: center;">—— 終了 ——</p>
----------------------	---

スライド 1

PBLにおける
 チームビルディングの支援

特定非営利活動法人SET / Copyright© All Right Reserved SET 認定NPO法人

スライド 2

目次

- 01 自己紹介・団体紹介
- 02 実施内容-チームビルディングの支援-
- 03 大学生の気づき・学び
- 04 結果・考察

特定非営利活動法人SET / Copyright© All Right Reserved SET 認定NPO法人

スライド 3

自己紹介・団体紹介

小林 敬志 (こばやし たかし)
 認定NPO法人SET 交流部副部長
 社会人研修講師 / 大学生関係人口案内人・研究員

青山学院大学 国際政治経済学部 国際政治学科 卒業
 宮城大学大学院 事業構想学研究所 卒業
 特定非営利活動法人SET 所属
 横浜出身、陸前高田在住

略歴:
 2014年 Table For Two 青山学院大学支部代表
 2015年 NPO法人SETの大学生向けインターンシッププログラム Change Maker Study Program参加、その後、学生スタッフ
 2016年 青山学院大学 国際政治経済学部 卒業
 東北学院大学 大学院 入学
 Change Maker Study Program プログラムマネージャー
 2019年 東京外国語大学 中退
 陸前高田市広田町へ移住
 NPO法人SETに所属 (CMSP事業部・経済事業部)
 広田小学校 地域コーディネーターに就任
 2020年 復興庁クラウドファンディング支援事業
 地域コーディネーター 兼務
 2021年~
 NPO法人SET内でシニアスタッフ業務のため研究部に配属
 交流部として自治体職員・企業社員向け研修担当
 高田東中学校 地域コーディネーターに就任
 宮城大学大学院 事業構想学研究所 入学
 2023年~
 宮城大学大学院 事業構想学研究所 卒業

特定非営利活動法人SET / Copyright© All Right Reserved SET 認定NPO法人

スライド 4

自己紹介・団体紹介

認定特定非営利活動法人 SET
 (法人番号:7402705000384)

発足: 2011年3月13日
 設立認証年月日: 2013年6月10日
 法人設立: 2013年6月18日
 認定法人格取得: 2025年10月18日
 認定期間: 令和7年10月16日~令和12年10月15日)

理事長: 三井 俊介
 副理事長: 石渡 博之
 理事: 大橋 剛/藤田 謙太/加藤 遼/安達 亮
 監事: 江口 一樹 (Cert.法務会計事務所)

会員数合計: 113名 (2025年10月時点)
 正会員 (8名): 23人
 賛助会員 (E組): 55人
 ボランティア会員 (T組): 35人

受賞歴

- ・ オーライ！ニッポン次世代内閣総理大臣賞受賞 (2025年)
- ・ 「フューチャースター」2024 産青 (2025年)
- ・ ふるさと創づくり賞助成金賞受賞 (2022年)
- ・ とうほくSDGsアワード優秀賞受賞 (2022年)
- ・ 東北建設局「デズカバ」岩手県産品の定どビジネス部門入賞 (2020年)
- ・ 第1回学生地域づくり交流大会 最優秀賞受賞 (2020年)
- ・ 令和元年度あしたのまちづくり活動賞内閣総理大臣賞受賞 (2018年)
- ・ 日本マニフェスト大賞シニアシニアシニア推進賞最優秀賞受賞 (2018年)
- ・ 復興庁主催新しい東北復興創生優秀賞 (2018年)
- ・ 第7回「東北未来賞」受賞 (2018年)
- ・ 復興大臣感謝状受賞 (2018年)

特定非営利活動法人SET / Copyright© All Right Reserved SET 認定NPO法人

スライド 5

自己紹介・団体紹介

2011年3月11日 - 始まりは震災ボランティア

2013-2016年 CMSP+民泊 主要交流事業開始

2022年 - デンマークなど11ヶ国と連携

2013年 - 任意団体からNPO法人へ

2020年 - 新型コロナで交流事業が停止

2025年 - 岩手、全国、世界と共に

特定非営利活動法人SET / Copyright© All Right Reserved SET 認定NPO法人

スライド 6

自己紹介・団体紹介

人づくり
 まちづくり
 社会づくり

特定非営利活動法人SET / Copyright© All Right Reserved SET 認定NPO法人

スライド7

自己紹介・団体紹介

岩手県内の中高生 岩手県内唯一の認定NPOとして 1270人	都市部の大学生 上級大学 都市部の大学を卒業し、 1371人
岩手県自治体の 若手～中堅職員 自治体職員として活躍する 若手～中堅職員を 66人	日本全国の 修学旅行生 修学旅行生として 14000人

特定非営利活動法人SET / Copyright © All Right Reserved SET 認定NPO法人

スライド8

自己紹介・団体紹介

関東の大学生、SETで活動。
卒業後、岩手の教員に。

SETの活動をきっかけに、
岩手県に移住した若者の数
80名以上

SETの活動をきっかけに、
岩手県に移住した若者の数
30名以上

岩手県出身・県外からの修学旅行生の活躍
被災地支援を機に岩手の教員に

特定非営利活動法人SET / Copyright © All Right Reserved SET 認定NPO法人

スライド9

自己紹介・団体紹介

人づくり
まちづくり
社会づくり

特定非営利活動法人SET / Copyright © All Right Reserved SET 認定NPO法人

スライド10

自己紹介・団体紹介

岩手県内唯一の認定NPOとして
3500人

岩手県内唯一の認定NPOとして
11/33

特定非営利活動法人SET / Copyright © All Right Reserved SET 認定NPO法人

スライド11

自己紹介・団体紹介

人づくり
まちづくり
社会づくり

特定非営利活動法人SET / Copyright © All Right Reserved SET 認定NPO法人

スライド12

自己紹介・団体紹介

論文の投稿や書籍の発行

実践をまとめ、
より確かな活動づくりと、
課題の認知拡大に励んでいます。

特定非営利活動法人SET / Copyright © All Right Reserved SET 認定NPO法人

スライド 13

自己紹介・団体紹介

交流事業

大分県立総合文化センター
Change Market Study Program 実施

地域の人と、個人とが交流する機会を創出し、400名の参加者から、地域を活性化させる。

高橋地区

高橋地区のまちづくりを推進するため、高橋地区のまちづくりを推進するため、高橋地区のまちづくりを推進するため。

暮らし本業

1ヶ月間の暮らし本業
Change Market Study Program

高橋地区のまちづくりを推進するため、高橋地区のまちづくりを推進するため、高橋地区のまちづくりを推進するため。

特定非営利活動法人SET / Copyright © All Right Reserved

スライド 14

実施内容-チームビルディングの支援-

1年間で、月1回1時間程度、1チーム5人程度に実施

**1 チームについて
インプット**

共通言語の獲得

何気なく触れている「チーム」とは何かからインプットします。

**2 理想のチームと
個人の果たしたい役割**

理想の設定

どんなチームにしたいか、理想のチームを話し合い、個人の果たしたい役割を決めます。

**3 振り返りと
本音が飛び交うづくり**

現状分析と他者視点

理想のチームや果たしたい役割に対して、個人と他者からの視点を変えて振り返ります。

特定非営利活動法人SET / Copyright © All Right Reserved

スライド 15

実施内容-チームビルディングの支援-

今年度スケジュール、R7は2チーム実施(各チーム5人)
※R5-6は11チーム(5-6人)の実施

2025年 4月~5月	大学・教員側と年間実施内容とスケジュールを確認
2025年 6月	各チーム講義「チームとは？チームビルディングとは？を知る・チームメンバーを知る」
2025年 7月	各チーム講義「理想のチーム・果たしたい役割の作成」
2025年 10月	PEL全体講義「チームってなんだろう？チーム形成とは何か？チームの現在地を知る」
2025年 11月	各チーム講義「理想のチーム・果たしたい役割の振り返り・他者視点の活用（ジョウリの型）」
2025年 1月	各チーム講義「1年間の振り返り・気づき/学びの言語化・可視化」

特定非営利活動法人SET / Copyright © All Right Reserved

スライド 16

実施内容-①チームについてのインプット

**1 チームについて
インプット**

共通言語の獲得

そもそも何気なく触れている「チーム」は何かからインプットします。

特定非営利活動法人SET / Copyright © All Right Reserved

スライド 17

実施内容-②理想のチームと個人の果たしたい役割

**2 理想のチームと
個人の果たしたい役割**

理想の設定

どんなチームにしたいか？理想のチームを話し合い、個人の果たしたい役割を決めます。

特定非営利活動法人SET / Copyright © All Right Reserved

スライド 18

実施内容-③振り返りと本音が飛び交う場づくり

**3 振り返りと
本音が飛び交うづくり**

現状分析と他者視点

理想のチームや果たしたい役割に対して、個人と他者からの視点を変えて振り返ります。

特定非営利活動法人SET / Copyright © All Right Reserved

スライド 19

大学生の気づき・学び

「他人は変えられないが、自分の伝え方や関わり方は変えられる」
「良い時も、次に良くなるために必要な時間」

1 チームの「衝突」も必要なこと

多くの学生が、意見の食い違いや「混乱期」を本がチームなものではなく、「いいチームになるために必要なプロセス」であると再認識していました。

「理解をせずスムーズに進む方が良い」と考えていたが、意見の食い違いこそがチームを深める機会になった。

自分たちが「形成期」や「混乱期」のどこにいるのかという現在地を把握し、矛盾や違和感を踏まえて進むべき方向性を認識した。

2 伝わらない、は伝え方の伸び代

コミュニケーションの不備を相手のせいにして、「自責(自分から変わること)」として捉え直す姿勢が多く、感想に見られました。

相手に聞いてくれない、あるいは理解してくれない時、それは自分の立ち回りや伝え方に課題があるのではないかと反省を促した。

言葉の背景にある意見や価値観(冰山モデル)を想像し、受容的にさらけ出すコミュニケーションの態度を養うことが重要だった。

3 得意・不得意の共有と役割分担

単に作業を等分するのではなく、メンバー個々の特性(強み・弱み)を理解した上で、「補充期後」がチームの質を高めるという気づきが見られました。

得意のメンバーに負担が偏る原因は、役割分担の曖昧さや、お互いの得意・不得意を把握できていないことによるものだった。

自分の苦手なことは素直に頼り、相手に苦手なことは自分が得意、そのためにも、得意や特性について深く知るための「積極的質問」が重要であると学んだ。

※2025年10月29日の対面講義のリアクションシートより

※初年度受講生として参加し、その後 TAとして関わってくれた大学生は、「チームの成長曲線は今でも印象に残っている」「チームを学ぶ、という機会がなかった」「気づきをファシリテートしてもらったので普段話さないことを話せた」

特定非営利活動法人SET / Copyright © All Right Reserved

スライド 20

結果・考察

年間の授業を通して、「チーム&コミュニケーションへの理解・意識」が積み重なり向上しPBLへの効果へ

向上への要素

(1)チームへのインプット
(2)定期的な振り返りの場
(3)外部講師との非日常

▷

2つの理解・意識が向上

①チームへの理解・意識
+
②コミュニケーションへの理解・意識

▷

PBLへの効果

i 授業のモチベーション上昇
例) 進捗減少など
ii プロジェクトの成果向上
例) 研究発表会での質向上など
iii 人間的な成長の支援

特定非営利活動法人SET / Copyright © All Right Reserved

スライド 21



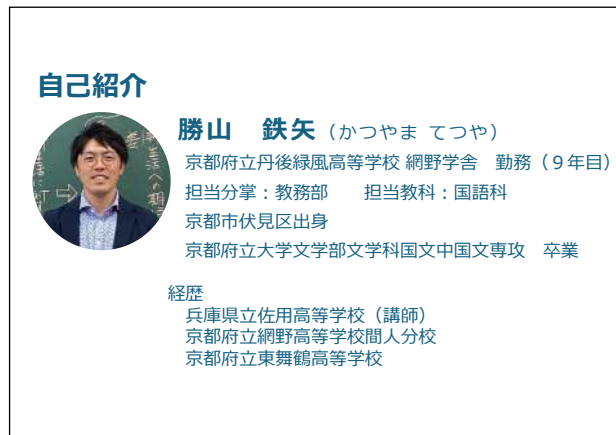
おわり

特定非営利活動法人SET / Copyright © All Right Reserved

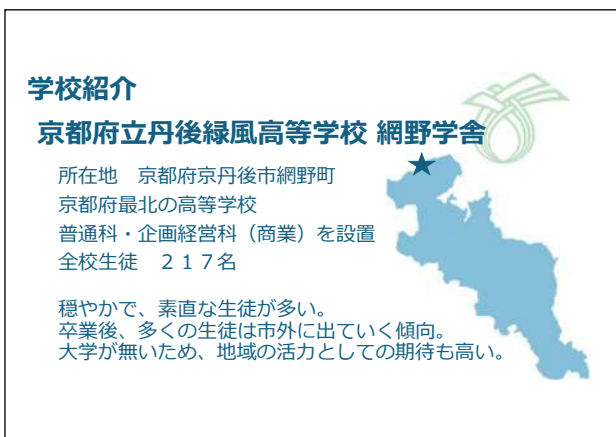
スライド1



スライド2



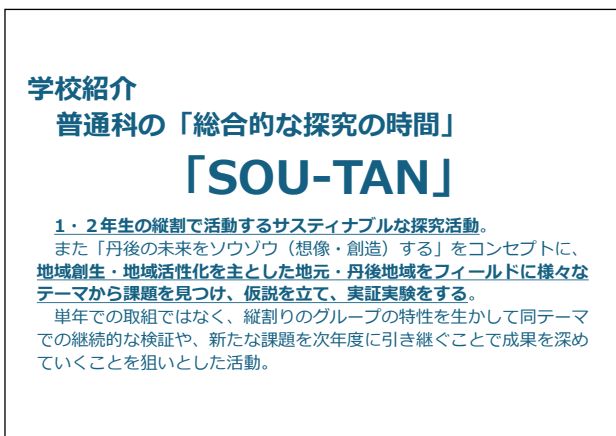
スライド3



スライド4



スライド5



スライド6



スライド7

● コミュニティゼミ×大谷大学社会学部

町の公共交通を考える

～mobiを広めよう！プロジェクト～



スライド8

● コミュニティゼミ×大谷大学社会学部

町の公共交通を考える

～Mobiの課題について考える～



スライド9

大学と高校の連携の有効性


- ① 探究のノウハウの享受（大学→高校）
- ② 遠隔地の実態把握への協力（高校→大学）
- ③ 互いの学習意欲の刺激

+α 高等教育の発信と受信

高校教育において探究学習の重要性は認識されてきているが、どうしても旧態依然とした授業展開が多く、探究活動のノウハウは乏しい。一方で、大学にとっては遠隔地についての研究について、実態把握やテーマによっては高校生の意見が有効的な場面がある。その両者の課題を解消することに、連携の意義があると考え、またそれに付随する相乗効果的なメリットも感じられている。

スライド10

ご清聴ありがとうございました。
次年度の以降の大学連携先も募集中です！



スライド1

第31回FD・SDフォーラム第8分科会
「産学連携の新たな可能性」
地図アプリの開発とデザインを通じた産学連携



株式会社コギト デザイナー
八島 潤子

スライド2

自己紹介

八島 潤子(やしま じゅんこ)
イラストとデザインでまちを元気にするひと
岡山県岡山市出身

株式会社コギト でデザイナーやっています。
1990年6月設立(35歳ぐらい)のIT会社
京都市に本社があります

2018年8月 リリース “イラスト・マップ アプリ”
ambula
のメインデザイナーです。




スライド3

産学連携は、なぜ続かないのか

産学連携でよく聞く言葉…

**「産学連携はいい取り組みだけど、
学生が卒業すると終わってしまう」**



スライド4

鍵は「成果物を資産に変える」こと


産学連携が続かない理由

「何が残るか」が設計されていない

イベント終了 学生 卒業

使える成果物 = 資産が残れば、次の年に引き継げる！

「残る成果物」
地域のイラストマップを作る





スライド5

なぜ“地図”なのか

イラストマップは大学×地域と相性が良い！

- ★どの学部でも扱える
- ★PBLになる
- ★地域とつながれる

 **地図がない まち はありません** 

スライド6

ambula map という“装置”

イラストマップをそのままデジタル化できる！

学生が作ったマップをデジタルで公開
“歩く”をさらに後押しする機能「デジタルスタンプラリー」
クイズを動機付けとしてDX地域学習機能「クイズラリー」

重要なのは「デジタルで便利」ということより、
学生の成果物が「使われ続けること」

↓

「続かない」を「続く」に変える



スライド7

事例1 大谷大学 社会学部 京丹後の事例

「京丹後市の公共交通を、すごくにしたら面白いのでは？」

京丹後市での『モビリティロゲイニング』という地域イベントに！

行政 住民 企業

これはもはや地域の事業！

スライド8

事例2 大谷大学 北大路ロゲイニング

大谷大学地域連携室
地球によりそプロジェクト(ちいプロ)
北大路ロゲイニング

北大路周辺を周遊しロゲイニングで得点を競うイベントを2025年12月に開催。地域の企業に協賛いただき、ゴールを地域の老人ホームイベント会場にし、大成功いたしました。

老人ホーム 商店街 企業

今日の様子

スライド9

事例3 大谷大学 幼児教育マップ

大谷大学 教育学部 幼児教育コース
北大路周辺子ども・子育てマップ

大谷大学幼児教育コース(西村ゼミ)の学生が大学近辺をお散歩しながら、子供と遊ぶと楽しい場所(公園・広場)を探し、マップを作成いたしました。

Webでご覧いただけます

学生が卒業しても、**地域に残る！**

スライド10

他大学でも回る！

早稲田大学 創造理工学研究所
「商店街の輪」～高田馬場西イラストマップ2025～

ベースの日本語マップを様々な活用！

多言語マップの作成

同じ内容を日本語/英語/中国語の3か国語に翻訳。

嵯峨美術大学 デザイン学部 観光学科

学生たちが取材して地域のマップ制作
作成したマップを3年継続して情報更新、
企業案件のコラボを実現！

どの大学でも、**このモデルは回る**

スライド11

私たちの立ち位置

「私たちは外側の箱である」を常に意識
アイデアを出し、議論し、使用してブラッシュアップ
していくのはあくまで学生

教育の主導権は大学にある
学生たちのアイデアをどのようにスムーズに具現化していくかを考えるのが我々の役目

スライド12

産学連携を“観光産業”につなぐ

持続の仕組み

学生(若者)/ 大学

観光産業/ 旅行代理店 ホテル

学生が作ったマップが、

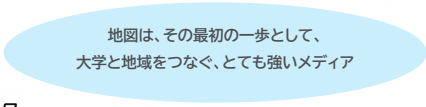
- ★ホテルの周辺散策マップになる
- ★旅行会社のツアーになる
- ★商店街の集客ツールになる…など

大学外で 商品として世に出せるレベルまで内容を高める



= 産学連携は“循環”

まとめ

**産学連携は
イベントではなく、育つコンテンツ**



地図は、その最初の一步として、
大学と地域をつなぐ、とても強いメディア



以上、ありがとうございました！

